
遊戯王デュエルモンスターズGX ~ 転生者による転生記 ~

ZET

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王デュエルモンスターズGX〜転生者による転生記〜

【Nコード】

N7952S

【作者名】

ZET

【あらすじ】

この物語の主人公 天空^{あまぞら} 優^{ゆう}は現代に住んでいる何処にでもいる極普通の人間。

ある日、彼は住んでいた世界を管理すると言う神（一応）の手違いによって、他界する事となる。

神の計らいで彼は第2の人生を再スタート出来る権利を得た。

だが、神とて万能ではなく、住んでいた夢も希望もなければ、面白味もない現実の世界ではなく、

夢までに見たゲーム・漫画・アニメ…俗に言う二次元世界の住人と

して転生する事となる。

彼が選んだのは生前時、長年遊んでいたカードゲームの原作、「遊戯王シリーズ」の世界へ行く事を選ぶ。

その先で彼を待つのは……？

登場人物紹介（前書き）

このお話で登場するオリジナルキャラクターを紹介します。
またオリジナルキャラクターが登場する度にここに書き加えて行く
予定であります。

登場人物紹介

あまぞら
天空 優

年齢：21歳（生前） 15歳（転生後）

所属：オシリス・レッド1年

前の世界で神の手違いによって、他界してしまう（神曰く「自分の上司Wが死ぬ筈だったらしい。」）

生前時は機械関係の会社で働いていた事もあり、工具さえあればデュエルディスクなど多少の機械などは朝飯前の如く修理・改造が可能と言う無駄に遊星やブルーノスキル持ち。

性格はとても落ち着いてたりクールな印象があるが、根は思いやりがあり心優しく、面倒見等が良い。

仲間や友達を大切にし、それを傷つける輩は誰であろうと容赦しないという熱い部分も内に秘めている。

なお、逆鱗に触れるなど本気で怒らせた場合、誰の手にも負えなくなってしまう。

そして、三度の飯よりカップラーメンという位、無類のカップラーメン好きであり、彼の前でカップラーメンを侮辱・冒瀆する行為は自殺行為に等しい。

十代や三沢の「E・HERO」と翔の「ビークロイド」は彼の手によって改良され、並大抵のデッキでは歯が立たない位になっている。生前の世界では普通の日本人だったが、転生して容姿が変わってしまった。

（外見に関しては、機動戦士ガンダムSEED DESTINYのシン・アスカをイメージして頂ければ幸いです。）

使用デッキ

既に使用しているデッキ

【シユールティングノヴァ】：シユールティング・スター・ドラゴン、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの2体をシンクロ召喚する事に特化されたデッキ。

使用話 第1話

【獣軸極星獣】：優の生前時からのメインデッキ。シナジীরの合う極星獣と獣族で固められたシンクロ召喚に特化したデッキ。極星チユーナーには極星獣グルファクシの他に極星天ヴァナデイスを採用しているため、ツールだけでなく、ロキやオーディンのシンクロ召喚も可能。獣族のチユーナーの他にもゾンビ・キャリアやグローアツプ・バルブ等を採用しているため、多彩なシンクロが可能。

転生後にはレスキューキャットが3積みされており、生前に比べて凶悪度が桁違いに上がる。

使用話 第6話

シンクロ召喚詞

スターダスト・ドラゴン

「8つの星々が集う時、全ての破壊を無に帰す龍がその地へ優しき翼と共に舞い降りる。シンクロ召喚！舞い降りよ、スターダスト・ドラゴン！」

フォーミュラ・シンクロン

「2つの星々が混じり合う時、更なる希望が舞い降りる。シンクロ召喚！来い、シンクロチユーナー！フォーミュラ・シンクロン！」
シユールティング・スター・ドラゴン

「星屑の竜よ。光を超えた速さを得て、更なる限界の境地へ達せよ。シンクロ召喚！生来せよ、シユールティング・スター・ドラゴン！」
極神皇ツール

「10の星々が揃う時、この世と星界を繋ぐ扉が開かれる。古の武神よ、大いなる魔槌を携え、轟く轟雷と共にその姿を世に知らしめせ。シンクロ召喚！出でよ、星界の三極神の1体、極神皇ツール！」

極神聖帝オーディン

「10の星々が揃う時、星界の神々を束ねし王よ。今こそ、その全知全能なる力を示せ。シンクロ召喚！出でよ、星界の三極神を束ねる最高神、極神聖帝オーディン！」

ブラック・ローズ・ドラゴン

「7つの星々が揃う時、美しき黒き薔薇が放たれる。シンクロ召喚！現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

交友関係（呼び方：呼ばれ方）

友人：十代（十代：優）、翔（翔：優君）、隼人（隼人：優）、三沢（大地：優）、明日香（明日香：優）、神楽坂（鏡：優）、万丈目（サンダー：優）

顔見知り：亮（カイザー：優）、海馬（海馬社長：天空優）、ペガサス（ペガサス会長：ユウボーイ）

気になる存在：有栖（有栖：優）

神崎 かんざき 有栖 ありす

年齢：15歳

所属：オベリスク・ブルー1年

中等部からの編入で内部進学者で明日香、ジュンコ、ももえとは中等部からの付き合いでもある友達。

女性であるのだが、1人称が「ボク」であり、言葉遣いも男っぽい印象を持つ。

性格は明るく、誰とでも人付き合いを出来る人物で卑怯や不正、差別などは人一倍敏感で気にし易い。

実力は明日香に一步劣るが、かなりの実力者で強引なプレイングやタクティクスで相手を圧倒するデュエルセンスを持つ。

優を自分の気持ちを含めた告白の言葉（優曰く「痛い人」）で告白し、玉砕するが、へこたれずに優へのアプローチを日々奮闘している。

素行などからでは分らないが、実家は大金持ちでそのご令嬢でもあるとの事。

（外見に関しては、獣装機攻ダンクーガノヴァの飛鷹葵をイメージして頂ければ幸いです。）

【使用デッキ】

【ガジェット】：レッド、グリーン、イエロー、三種類のガジェットによるビートダウンを行うデッキ。OCGでは【代償ガジェット】に近いデッキである。

交友関係（呼び方：呼ばれ方）

親友：明日香（明日香：有栖）、ももえ（ももえ：有栖さん）、ジユンコ（ジユンコ：有栖）

友人：十代（十代君：有栖）、翔（翔君：有栖さん）、三沢（三沢君：神崎君）

顔見知り：亮（丸藤先輩：神崎有栖）、万丈目（万丈目君：神崎君）
好きな人：優（優：有栖）

番外編

あまぞら
天空 有里

年齢：10歳

突然、デュエル・アカデミアに現れた少女で正体は優と有栖の間に産まれた子供である。

未来の両親である優と有栖に大切に育てられたのか、誰に対しても心優しい少女。

無邪気故に偶に実年齢が若い人間をおじさん・おばさんと呼んでしまうのが欠点。

外見イメージは有栖が黒髪になったイメージ。

お気に入りのカードは父から譲り受けたレッド・デーモンズ・ドラゴンとスターダスト・ドラゴン。

シンクロ召喚時の口上の大半は父親譲りである。

エースモンスターはスカーレット・ノヴァ・ドラゴン

【使用デッキ】

【マシナーズ・シンクロン】：シンクロンにマシナーズのギミックを組み込んだデッキ。

一見、シナジーが薄く見えるが、チューニング・サポーターやボルト・ヘッジホッグなどを墓地に送ることで墓地アドバンテージを稼ぐ事が出来る。

シンクロ口上

レッド・デーモンズ・ドラゴン

「8の星が集う時、全てを破壊する魔龍が放たれる！シンクロ召喚、全てを薙ぎ払って！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

ジャンク・デストロイヤー

「8の星が集う時、全てを破壊する破壊神が飛来する。シンクロ召喚！来て、ジャンク・デストロイヤー！！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

「魔龍と邪神。その姿を一つに！業火の中からその姿を見せて！シンクロ召喚、燃え盛って！スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！！」

交友関係（呼び方：呼ばれ方）

家族：優（パパ：有里）、有栖（ママ：有里）

知人：明日香（明日香お姉さん：有里ちゃん）、ももえ（ももえお姉さん：有里ちゃん）、ジュンコ（ジュンコお姉さん：有里ちゃん）

、十代（十代おじさん（後にお兄さん）：有里ちゃん）、翔おじさ

ん（後にお兄さん）：有里ちゃん：有栖さん）、三沢（大地おじさ

ん（後にお兄さん）：有里ちゃん）、万丈目（万丈目おじさん（後

にお兄さん）：有里ちゃん）、亮（亮おじさん（後にお兄さん）：

有里ちゃん）

プロローグ く死から転生へ……く

自分の名前は、あまてりひめ天空 優ゆい

この現代の何処にでもいる極普通の人間です。

年齢的に言えば、大人…社会人だけど、ゲームとかは幾つになってもやめられないよね？

そんな自分は何時ものように会社から自宅へ帰る途中のことです。

後、数分で自宅へ着こうとした時です。

突然、眼の目蓋が重くなって閉じかけて、体も徐々に重くなり、視界がブラックアウトしてしまいました。

後、何か聞こえますけど……もう限界です。

「なるほどなるほど……つまり、お……じゃなかった、自分はあなたの手違いで死んだ…そういう事ですね。」

「まあ、分かりやすく言うとその通りだ。」

意識がブラックアウトした後、目の前にいたのは杖を持ったおっちゃん（本人曰く「神様」らしい）がいて、これまでの経緯を説明してくれた。

しかし、このおっちゃん。自分が週末に顔を出しに行くカードショップの店長にそっくりだな……

それに本来なら自分ではなく、自分の会社の上司Wが死ぬ筈だったらしい。

あの上司、会社じゃ自分より立場が下の人間には威張り散らすわ、怒鳴り散らすわ、理不尽な発言をするわで碌な上司じゃなかった。

「本当にすまないと思っている。」

「まあ、過ぎた事をとやかく言っても仕方ないですから自分はこれからどうなるのかを教えて下さい。」

本当に申し訳ないと思っているのかおっちゃんはそんな表情をする。

自分としては、これからどうなってしまうのかが気になって仕方ない。

それにあの鬱陶しい上司や自分で言うのもなんだが夢も希望もなければ、面白味のない現実から離れられたから清々する。

「君が元いた世界では君が死んだと言う事に既になってしまっているからもう戻す事が出来ないのだ。」

「そりゃあ、そうでしょうね。突然、死んだ人間が生き返ったなんて事は現実的にありえない事でありまして、そんな事が起きたら大騒ぎになります。」

「ところで二次元の世界は興味はあるか？」

「二次元……アニメや漫画の世界ですか？」

はつきり言えば、自分はアニメ、ゲーム、漫画等は大が付くほど好きでもある。

暇な時間をつまらない連中とつるんで、無駄に消費するよりは一人でそういうのを見たり読んだりしていた方が楽しかったりする。

社会人の自分がこんなことを言うのは正直に言って駄目なのだろうが、実際言つと働かないで遊んでいたいと言つ意識が強かった。

「君の世界の言葉を借りれば、その類である。現実には世界には戻せないのだが君が望む二次元世界に転生させるつもりだ。」

「どんな世界でも良いんですか？」

「ああ、構わんよ。」

自分は黙りこみ考えることとする。さて、どの世界に行こうとしようか？

自分の第2の人生となる以上は、本当に気を付けなければならない。後になって、ゲームみたいにやり直しが効かないからでもある。

ガンダムやISと言ったSF系……その系統は好きだが、行ったのは良いが、だけど戦闘に巻き込まれてそのまま、途中でまた死ぬのは勘弁………却下。

ギャルゲー作品……先ほどの系統とは違って安全だが、気が付いたら空気扱いされたり、好きなヒロインがその作品の主人公といちゃつく様を見たくはない………却下。

リリなの………却下。理由として、自分の気に入らない事には問答無用で力でねじ伏せようとする魔砲女や管理局と言う下種集団組織が気に食わない。あの自分達は正義の味方ですとか言っているような某ガンダムの某ピンクな電波女が牛耳ってるテロリスト集団みたいだからである。

あれもダメ、これもダメと消去法で作品を削って行くと、おのずと行く作品が見えてきた。

それは、「遊戯王」シリーズである、何よりも主人公はこの作品もチート持ちだからであり、困ったら主人公に任せればどうにかなる。

それにこつちなら生前みたいに鬱陶しいロックデツキとか召喚？奈落、攻撃？幽閉、シンクロ？エクシース？特殊？神警みたいな面白味にかける戦法を使う連中が少ない。何より手札を常時パチパチしているようなプレイヤーが皆無なのが良い。

何よりソリッドヴィジョンを生で見たいし、主人公の劣性時の
デステイニードローを見られるのも良しとする。

数刻……

「遊戯王シリーズの世界をお願いします。」

「ふむ、確かその二次元世界は複数の時空が存在するがどの時空を
選ぶ？」

「じゃあ……GXをお願いします。」

「了承した。何か生前の世界から持って行きたい物はあるかね？そ
の世界ならば小さい紙を束ねた物が必要であろう。…無論だが、生
物とかは不可能だと言っておく。」

「（小さい紙を束ねた物？……デッキの事を言っているのか。）じ

「やあ、生前に自分が使っていたOCGのデッキ全部とその予備カード多数……後、カップヌードルのレギュラーサイズを5箱分。」

「分かった……しかし、最後の即席麺は……」

「生前では自分の好物だからですよ。それ位なら大丈夫でしょう？」

「まあ、生物ではないから問題はないだろう……他に希望はないか？」

「……希望？はて、生前からカードをも持参したし、好物のカップラーメンは送れるかどうかは分からないが、送って貰えるように頼んだし、何かあったか？」

「希望と言いましても、何かありますか？」

「たとえば、異性に異常に好意を持たれるようになる能力とか……君の世界の言葉を借りれば、確か。チート……とか、最強系の能力とかだな。」

「ああ、そういう類か。」

「俺TUEEE」とかハーレム願望が強い輩はそういうのを欲しがるだろうな。」

「ただ、そういう能力を貰うと何かしらのリスクを伴うから……」

「特に後者は下手をすれば「ぶすり」と刺されて「NICE BOAT」なんてことになったらシャレにならない。」

「それに生憎自分は、そこまで欲は強くない………等。」

しかし、GXの世界にシンクロやエクシーズとかあの時代にはないモノを持って行こうなんて考えている時点で「矛盾している」と言われてしまえば、そこまでの気もするが……

ただでさえ、望んだ世界へ転生して貰える上に生前の世界からの物を持って行ける時点で既に自分は満足である。

これ以上何かを望んだら寧ろ、それこそ罰当たりになり兼ねない。

「そういうのは結構です。自分は正義の味方を気取るつもりもなければ、ハーレムとか下種染みた願望もありませんので……」

「他には何かないか？たとえば、時間や日付の指定などだ。」

時間か……

理想としては試験当日で自分の試験開始直前が理想的なんだが……大丈夫か。

「では……転生先の日付を入学試験開始当日で時間は試験直前をお願いできますか？」

「分かった……忘れる所だった転生先の君の名前はどつする。」

「考えるのが面倒なので……生前の世界と同じ名前で良いです。」

「天空 優……だったな。」

「はい。」

「では、君の第2の人生に幸がある事を願う。」

その神の言葉が終わると自分の視界は光に包まれる。

プロローグ 　く死から転生へ……く（後書き）

初めまして、作者のZETと申します。

本作品は処女作品という事もあり、誤字脱字に極力気を付けながら書いていこうと思います。

次回は、異世界での初デュエルです。相手はノーネとか言うあの入です。

後、GXの方の主人公との邂逅もあります。

第1話 入学試験 VS クロノス

まぶゆい光から解放されると周りの風景が以前の何も無い真っ白な空間とは異なり、人や建物が数多く存在する都会の風景となる。

更に自分の服装も学ランになっていて、背中にはリュックと左手には受験票が握られていた。

「今一実感が無いけど、本当に来たみたいだな。」

その証拠に目の前には受験会場でもある海馬ドームが見える。

俺、本当に遊戯王の世界にやって来たようだ。

言葉使いが違うって？だって、あのおっちゃんが神だって言うからそれなりの礼儀は必要だからな。

だけど、第1期の連中には不要だな……多分。

「実際に見るとやっぱり大きいな……海馬ドーム。」

「ちょっとそこの君。」

声をかけられたので向くとサングラスをかけ、スーツを着た男性と

試験受付担当と思われるの2人の女性がいた。

「君はデュエルアカデミア本校、実技試験の受験生だね？」

「ええと……はい、そうです。」

「ならば、急いだ方が良いでしょう。先ほど一人の男子生徒も入って行ったばかりだ。」

その男子生徒って恐らくは、十代だろう。

原作でもギリギリだったからな。

「はい、すみません。」

「では、受験番号と名前は？」

左手にあった受験票を見るとその番号は「111番」と書いてあった。

「受験番号111番、天空 優です。」

「受験番号111番…天空 優。はい、確認できました。試験会場へどうぞ。」

俺は大急ぎで会場へ入って行った。

111番って…原作じゃ、110番が十代だから……あいつの後か。
と言うよりも111番って俺は、どれだけ馬鹿だったんだ？

まあ、学生時代は学力は低くて、実際に馬鹿だから否定はできない。

「スカイスクレイパー・シュートオオオオオ！！！！！！」

「ペペロンチーノオオオオ！！！！」

試験会場へつくと十代が原作通りにクロノスを効果ダメージで締め
るシーンを生で見る。

そういえば、シンクロモンスターって、ディスクに反応するよな？
反応しないと使えないってことだから困るぞ。

「ガツチャッ！！楽しいデュエルだったぜ！先生。」

「マンマミーア。」

その光景に周りが騒然とし出していた。

そして、「あのクロノス教諭が負けた?」「良いぞ!1110番!!」
と言う声が聞こえて来た。

「次、111番!」

「俺か、はい!今行きます!」

俺はリュックを目立つ所へ置くとその中からデュエルディスクを取り出す。

デュエルディスクのモデルは原作では一般市場に出回っているタイプだった。

デッキホルダー部には既にデッキが装着されていたため、そのまま行く事にする。

デュエルフィールドへ向かう途中でGXの主人公であり、先ほどクロノスを倒した十代とすれ違う。

「頑張れよ!」

「ああ……」

軽く激励されたので、軽い挨拶をし、クロノスの前に立つ。

「111番、天空 優：よろしく願いします。」

「次のドロップアウトには負けないノーネ（負けた鬱憤をこいつで晴らしてやるノーネ。）」

「言うておくが、俺は憂さ晴らしてデュエルするような輩には負けるつもりはない。」

「ぐぬぬぬ……生意気なドロップアウトボーイナノーネ。」

「デュエル!!」

優

LP：4000

クロノス

LP：4000

「先行はあげるノーネ。」

「いや、俺は後攻で結構、先行はそちらに譲る。後攻でも俺は勝てるからな。」

「ここに来てまでそんな減らず口を叩けるとは大した度胸ナノーネ。ドロップアウトボーイ！私に先行を譲った事を後悔するノーネ。私のターン、ドローニョ!!」

G Xの原作を見ていてずっと思っていたが、あのデュエルディスク…動きにくそうだな。

移動用の補助としてなのか、下部にローラーがついているし…

何であんな変な作りにしたのかわからん。

あんなモデルより、未来で遊星が使っているタイプとか時代的には古いかもしれないが、バトルシテイモデルの方がカッコイイ気がする。

クロノス

手札：6

「私はカードを2枚伏せ。」

クロノス

手札：4

魔法・罫：2

「更に魔法カード、大嵐を発動するノーネ！」

クロノス

手札：3

魔法・罫：0

そういえば、この時代の禁止・制限リストを確認しておこう。

セット状態で破壊される事でアドバンテージを得られるカード……
原作通りならば、黄金の邪神像辺りだろう。

「この瞬間、セットされた黄金の邪神像の効果が発動するノーネ。
無知なドロップアウトボーイのために説明しますが、このカードは
……」

「説明は不要だ。セットされたそのカードが破壊され墓地に送られ
た時、自分フィールド上に「邪神トークン」を1体特殊召喚する。」

俺はクロノスの説明に割り込むように効果を説明する。

俺の行動が気に入らなかつたのか、クロノスはムツとするような表
情をする。

「……その通りなノーネ。セットされた黄金の邪神像は2枚、よって
2体の邪神トークンを特殊召喚するノーネ。」

邪神トークン

ATK 1000

クロノス

魔法・罫：0

モンスター：2

「そして、2体のトークンを生贄に古代の巨人アンティーク・ギアゴレムを召喚するノーネ。」

クロノス

手札：2

モンスター：1

アンティーク・ギアゴレム
古代の巨人

ATK 3000

「（同じだな、原作とほとんど変わらんな……）」

「更にカードを1枚伏せ、ターンエンドなノーネ。（このカードは聖なるバリア ミラーフォース これで返り討ちにしてやるノーネ。」

クロノス

手札：1

モンスター：1

魔法・罫：1

「（ここは変わってるな、伏せが1枚か…多分、攻撃反応型の何かだろうな。）」

周囲や観客席からは「可哀想に…」「ありゃあ、終わったな……」「とか聞こえるが俺のシンクロモンスターのデビュー戦にはちょうど

良いか。

「俺のターン、ドロー！」

優

手札：6

手札を見ると、生前使っていたデッキの1つであのカードを出す事に特化したデッキだった。

「バイス・ドラゴンを特殊召喚。」

「見たことないカードなノーネ、しかし、何故レベル5で特殊召喚できるノーネ？」

「このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札より特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚した場合、攻撃力と守備力は元々の数値の半分になる。」

バイス・ドラゴン

ATK 2000 1000

優

手札：5

モンスター：1

「更に魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。」

「ワン・フォー・ワン?...また聞いた事のないカードなノーネ。」

「手札からモンスターカードを墓地へ送る事で発動、デッキ・手札からレベル1モンスターを特殊召喚、デッキからレベル・ステイラーを特殊召喚。」

レベル・ステイラー

ATK 600

優

手札：3

モンスター：2

さて、準備は整った。

「よし...チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを通常召喚。」

ジャンク・シンクロン

ATK 1300

優

手札：2

モンスター：3

「……ちゅ、チューナーモンスター!?」「……」

俺がジャンク・シンクロンを召喚すると観客席がざわめき出す。

それもそうか…その時代はエクシーズやシンクロはおろか、チューナーすら存在してないからな。

でも、この程度で驚かれたらこれから先の展開について行けないぞ。

「チューナーモンスター!? なんなノーネ、それは!?!」

一番吃驚しているのは俺と対峙しているクロノスであった。

「追々わかると言っておく、ジャンク・シンクロンが召喚に成功した時、墓地に存在するレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する。しかし、その効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。墓地よりアタック・ゲイナーを特殊召喚。」

アタック・ゲイナー

DEF 0

優

モンスター：4

「しかし、そんなに雑魚を並べても私の古代の巨人の前では蟻アンティーク・ギアゴーレムん
こ当然なノーネ。」

「それはこれを見ても言えるかな？レベル5、バイス・ドラゴンにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！」

「……………チューニング！！！！？」
「……………」

「ちゅ、チューニングってなんなノーネ！？」

俺の言葉と共にジャンク・シンクロンとバイス・ドラゴンが空へ舞いあがる。

5D'sの時同様にジャンク・シンクロンが3つの輪に変わり、その輪の中にバイス・ドラゴンが入って行く演出が起こる、やっぱり、時空は変わっても演出は同じなのか。

「何？何が起きてるの？」

「これは……………」

「何だ何だ！何が起こるのか。すげえワクワクするぜ。」

バルコニーや観客席にいる観戦者やクロノスは目の前の光景に目を奪われていた。

「8つの星々が集う時、全ての破壊を無に帰す龍がその地へ優しき翼と共に舞い降りる。」

俺の召喚詞が終わると2体は光に包まれる。

余談だが、生前俺のOCGをやっていた周囲では独自にシンクロ召喚時に言う、召喚詞を独自に考えていた事が流行っていた。俺もその一人…

でも、転生してそれを言う事になるとは思いもよらなかったが……

3 + 5 = 8

「シンクロ召喚！舞い降りよ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

優

モンスター：3

ディスクには反応するらしいな。

チューナーが反応するんだから大丈夫か。

光の中からのデッキのエースの1体、スターダスト・ドラゴンが舞い降りた。

「ななななな、なんですの！？そのモンスターは！？それにその召喚方法はなんなのネ」

クロノスは驚きのあまり、開いた口がふさがらない状態になっている。

「チューナーと分類されるモンスターとそれ以外のモンスターを自分のフィールド上から墓地へ送り、送ったモンスターのレベルを合計した数字と同じレベルのモンスターをエク…じゃなかった…融合デッキから特殊召喚する。それが」

クロノスにスターダスト・ドラゴンのカードを見せつけるように見せる。

「シンクロ召喚によって、呼び出されるモンスター…シンクロモンスターだ。」

「シンクロ召喚…?」

「何だ、その召喚方法?」

「知ってるか?」

「いや、全然知らないぞ?」

伝わったかどうかかわからないが、俺の説明が終わるとデュエルを観戦していた面々が騒ぎ出す。

「な、なるほど、しかし、攻撃力が足りないノーネ。」

「確かにな…レベル1レベルステイラーにレベル1のアタック・ゲイナーをチューニング!」

「またシンクロ召喚でスーカ!?!」

1 + 1 = 2

「2つの星々が混じり合う時、更なる希望が舞い降りる…シンクロ召喚!来い、シンクロチューナー!フォーミュラ・シンクロン!」

フォーミュラ・シンクロン

ATK 200

優

モンスター:2

「フォーミュラ・シンクロンがシンクロ召喚に成功した事によりデッキからカードを1枚ドロ!」

優

手札:3

モンスター:2

「そんな雑魚を出した所で私の古代の巨人アンティーク・ギアゴレムの攻撃力3000には…」

「攻撃力3000?その眼は節穴か?」

「?????」

アンティーク・ギアゴレム
古代の巨人

ATK 3000 2000

「ななな、何故、アンティーク・ギアゴレム古代の巨人の攻撃力が下がっているノーネ!?」

「シンクロ素材となったアタック・ゲイナーの効果でこのカードがシンクロ召喚の素材として墓地に送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイント下げる。」

「な、なるほど、そういうことなノーネ。」

俺の説明によりクロノスはようやく状況が理解できたらしい。

「俺の真価は、これからだ。」

「?????」

「レベル8、シンクロモンスター…スターダスト・ドラゴンにレベル2、シンクロチューナー…フォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

「レベル8とレベル2ですかーら…レベル10!?!」

「こ名答…星屑の竜よ。光を超えた速さを得て、更なる限界の境地

へ達せよ！！シンクロ召喚！生来せよ、シューティング・スター・ドラゴン！！」

流石にDホイールには乗ってないから、消える演出はないか。

シンクロ召喚と同じく、フォーミュラ・シンクロンが2つの輪となつてスターダストと共に星になる。

2 + 8 = 10

シューティング・スター・ドラゴン

ATK 3300

優

モンスター：1

アニメと同じように1回転の宙返りをし、くるくると何回転も周り、ポーズを決める。

しかし、綺麗だな。スターダストも綺麗だが、シューティング・スターも中々綺麗だ。

観客席から色々な声が聞こえてきた。

「綺麗……」「すげえ……」「ふつくしい……」と様々な声が聞こえてくる。

「こ、攻撃力3300!？」

クロノスが驚いていた。

そんなクロノスは放っておいて、俺はこの後の行動に悩んでいる。

シューティング・スター・ドラゴンの複数回攻撃効果を使うべきか。上手く行けば、一気に決着をつけることは可能だろう。

それとも効果を使わずに普通に攻撃するべきか……

まずはこのカードを使ってドローしてから考えるか。

「更に魔法カード、貪欲な壺を発動、墓地のモンスターカードを5枚戻し、デッキに加えてシャッフルし、2枚ドローする。俺が戻すのは、フォーミュラ・シンクロン、スターダスト・ドラゴン、ジャンク・シンクロン、アタック・ゲイナー、バイス・ドラゴンの5体……デッキに戻し、2枚ドロー!」

優

手札：4

引いたのは、速攻魔法の突進と同じく速攻魔法の収縮。

このデッキを組む際に投入したチューナーは全て、デッキの中に眠っている……

ここまで来たらやるしかないか：分の悪い賭けはあまり好きじゃないけど。

「シューティング・スター・ドラゴンの効果を発動！シューティング・スター・ドラゴンは自分のデッキの上からカードを5枚めくり、このターン。このカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃することができる。」

「複数回の攻撃！？しかし、そんな事が現実にはありえないなノーネ。」

「ああ、現実にはそうだろうな。だが、そんなのやってみないとわからない。」

「……………」

「……………」

「……………」

場は、時間が止まったようにシンと静まり返る。

「……………まず、1枚目…チューナーモンスター、デブリ・ドラゴン！」
「……………まずは1枚……………」

「……………2枚目…チューナーモンスター、ジャンク・シンクロン！」

2枚目もチューナー……よし。

「3枚目！チューナーモンスター、グロリアップ・バルブ！」

3枚目もチューナー……良い感じだ。

「4枚目！チューナーモンスター、アタック・ゲイナー！」

4枚目もチューナー……まさかな……まさかそんな事は……

「5枚目！チューナーモンスター、クリエイト・リゾネーター！」

……あれ？

「なななな……そんな馬鹿なノーネっ！！合計5回の攻撃なノーネ！？」

本当に出来た……俺も驚いている。

多分、1回か2回だろうなと思っていたら5回攻撃とか何て事故だ……俺は不正はしてないぞ？何もしてないぞ。

観客席の方からも「マジかよ……」「攻撃力3300の5回攻撃ってそんなのありかよ。」とかそういう声が聞こえてきた。

「バトルフェイズ開始前に速攻魔法、収縮！更に突進を発動。突進の処理でシューティング・スター・ドラゴンの攻撃力を700ポイ

ント上昇させる。」

優

手札：2

シユールディング・スター・ドラゴン

ATK 3300 4000

「収縮の処理で古代の巨人《アンティーク・ギアゴーレム》の元々の攻撃力は3000へ戻り、そこから半分の1500ポイントに下がる！」

アンティーク・ギアゴーレム
古代の巨人

ATK 2000 3000 1500

「シユールディング・スター・ドラゴンで古代の巨人を攻撃！スターダスト・ミラージュ！！！」

シユールディング・スターが原作同様、5体に分身して、1体目が古代の巨人へ突っ込んで行く。

「フフフフ、甘いノーネ！畏発動！聖なるバリア ミラーフォー
ス 相手の攻撃表示モンスターをすべて破壊するノーネ！所詮はド
ロップアウトボーイなノーネ」

やっば、案の定、ミラフォか…

アンティーク・ギアゴレム

古代の巨人を守るバリアのようなものがシューティング・スター・ドラゴンにぶつかる。

「ふ……それはどうかな？」

「どうということなノーネ？」

「シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！1ターンに1度、フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果は無効にし破壊する事ができる。よって、聖なるバリア ミラーフォースの効果は無効となって破壊される！」

「いくつ効果を持っているノーネ!？」

3つです。

ミラーフォースは不発に終わり、シューティング・スター・ドラゴンはそのバリアを貫き、アンティーク・ギアゴレム古代の巨人へ向かう。

シューティング・スター・ドラゴン

ATK 4000

アンティーク・ギアゴレム

古代の巨人

ATK 1500

「スターダスト・ミラージュー!!」

アンティーク・ギアゴレム
古代の巨人が爆発し、その超過ダメージがクロノスを襲う。

クロノス

LP：4000 1500

モンスター：0

「まだだ、スターダスト・ミラージュ！4連発！！」

「さつきより悲惨なノーネエエエ！！！！」

2体目、3体目、4体目、5体目のシューティング・スター・ドラ
ゴンの分身がクロノスへ襲いかかる。

クロノス

LP：1500 - 14500

WIN：優

「ペペロンチーノオオオ！！！！」

勝ったか……

それは良いけど…転生して、最初のデュエルが後攻ワンキルで14
500のオーバーキルって何だ？

良いんだか悪いんだか……

「俺の勝ちだな。」

「この2度も私が負けるなんて…ありえないノーネ…」

観客のほづがざわめいていた。

「あのクロノス教諭が2度も負けた!？」「後攻1ターンキルで14500のオーバーキルだ?」「あのドラゴンカツコよかったよなあ!」

などと聞こえて来た。

今更遅いけど、やっぱりやり過ぎた気がする……

その証拠にクロノスの口から何か白いものが出ている気がするけど気にしない。

今回の最強カード

優「今回の最強カードはシューティング・スター・ドラゴン。」

シューティング・スター・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル10 風属性 ドラゴン族 ATK 3300 DEF 2

500

シンクロ素材：シンクロモンスターのチューナー1体＋「スターダスト・ドラゴン」

効果：以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。

フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。

相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

主な収録パック：「STARSTRIKE BLAST」

優「スターダスト・ドラゴンとシンクロチューナーでシンクロできるシンクロモンスターだ。除外することで相手のモンスター1体の攻撃無効と破壊耐性に複数回攻撃が可能なモンスターだ。チューナーを多めに入れたデッキなら遊星のように合計5回の攻撃で相手にどや顔もかます事ができる。」

??「攻撃名はスターダスト・ミラーージュだよ！」

優「…お前、誰だ？」

??「たぶん、後々登場するよ。」

第1話 入学試験 VS クロノス（後書き）

第1話終了です。

因みに主人公のデッキは複数設定です。

今回は俗に言う、流星と紅星を出すに特化した【シューティングノヴァ】というものです。

今回は入学式〜某青からの挑戦状の予定で進めます。

第2話 デュエルアカデミア入学

それから数日後、持っていた端末に実技試験の試験合格の通知が届く。

その数日間はどうやって過ごしていたと？

勿論、行く宛もないから都内に存在していたカプセルホテルで自分の今の持ち物を確認しながら過ごしていたと言っておく……

「なんてこった……」

調べた結果…リュックの中身にはデュエルディスクが1つに、自分が生前時に持っていたカードの一部と使っていたデッキが入ったキヤリングケースにカップラーメン6つが入っていた。

それは良いとする。

デッキを確認していると自分が試験で使った【シューティングノヴァ】と持ち合わせていたデッキの殆どは無事だった、それも良い。

しかし、その中に持ち合わせていた【ZEROEND】と【Sin

マシンナーズ】と【光デュアル】は一部のカードが抜けていた。

「ふむ、この3つは崩さなければならぬか……参ったとしか言いようがない。」

確認してみると、【ZEROEND】のメインからドグマガイとBlood-Dと超融合がエクストラからはD-ENDが消えている。

【Sinマシンナーズ】からはメインのサイドラ3枚とツヴァイ3枚にSinサイバー・エンドやエクストラのサイバー・エンド、フオートレスやオーバーが消えていた。これはカイザーのカードだからしょうがないのか……

ん？ちよつと待て、何でSinサイバー・エンドが消えていて、Sinスターダストは残ってるんだ？

【光デュアル】からはアナザー・ネオス3枚にサイドラ2枚と超融合2枚とオネスト1枚が消えている。

恐らくネオス絡みと言う理由で消えたのだろうな。

サイバー・ドラゴン、D・HERO、ネオス、超融合、オネスト……いずれも遊戯王のメインキャラしか持ってないカード、三幻魔や三邪神を初めとした。

青眼、宝玉獣、N等やその関連のカード全般等は消えていると見て間違いないだろう。

他には賃金が大体一週間位は宿泊施設に泊まれる程度は入っていた。

おっちゃん、随分と用意周到だな……流石、神を名乗るだけある。

「……これは酷いと言えないな。」

デッキの事を切り上げて、カプセルホテル内に備え付けてあったパソコンを立ち上げ、この世界の禁止・制限改定を見ていた。

見終わって一言……酷いと言っ言葉しか出ない。

生前の世界での禁止改定と見比べてももう緩いというレベルではなかった。

強欲な壺や天使の施し、レスキューキャットも使えたと来た。しかも、後者は無制限。

生前のデッキが全てとんでもない事になりかねないな。

後、エクストラデッキの方も枚数の上限がなくなったから各デッキに出せるシンクロモンスターは積めるだけ積んでおくか。

ゴヨウ・ガーディアンや滅多に使わないだろうがダーク・ダイブ・ボンバーも入れて置こう。

「とりあえず、デッキを弄る作業から始めるか。」

生前の時に調整した後にもやっていた仮想の相手でデッキ回し等をやって、合格通知が届くまで時間を潰していた。

試験合格通知が届いた後、俺は実技試験合格者のみが搭乗を許されるデュエル・アカデミア行きフェリーへに乗り込む。

フェリーは港を離れ、凡そ数時間の時間が経過し、デュエル・アカデミアがある孤島が見えてくる。

「あれが…デュエル・アカデミアか。」

デュエルアカデミア本校がある島の港へ到着し、下船するとそこに

は何人のもの教師達が待っていた。

俺を初めとした、入学試験通過者達はそこで制服を渡される。

着替えると俺の制服の色は赤であったため、必然的にオシリス・レツドだという事が分かった。

案の定、レツドか…まあ、イエローやブルーの連中のプライドを押し折るには丁度良いか。

そう思っていると赤い制服と黄色い制服を着た男子生徒が近付いて来た。

「よ！お前、俺の後に受験した奴だよな？俺、遊城十代。よろしくな。」

「丸藤翔ツス！よろしくね。」

「俺は三沢大地だ。よろしく頼む。」

「天空優だ。こちらこそよろしく。」

俺は初めて、原作組と交流する。

G Xを見ていた時から知ってるが、十代と翔、それに三沢は本当に良い奴だって知っているから仲良くできればいいと思っ限りだ。

後、何で三沢は空気になったんだ？こんな良い奴が空気になるのは

おかしい。

俺達、新入生一同は先生の引率でデュエル・アカデミアの講堂へと案内される。

そこで待っていたのは鮫島校長に各寮の担当の教諭達である。

勿論、俺が入学試験の時に後攻ワンキル+14500のオーバーキルをかましてやったクロノスもいた。

「……………以上で私の話は終りとさせていただきます。え、以上で入学式を閉会致します。」

本当に長いな……………やっぱり、世界が変わっても校長の話が長いのはデフォルトなのか。

生前は学生を卒業したら長い話を聞く事はないとは思っていたけど、転生してまた同じように学生に戻って長い校長の話を聞く事になるとは……………

見ると十代の奴は普通に立ちながら寝ているし……………見ていて思うけど本当に器用な奴だ。

いや、アニメとかマンガだからできるだけだよな？

そして、閉会が宣言されると生徒達は周囲の人達とざわざわと騒ぎ始める。

「ん、やっと終わったか。」

「遊城、お前。寝ていたのか？丸藤、隣にいたなら突っついて起こしておけよ。」

会ったばかりなのに名前ですべて呼ぶのは馴れ馴れしいだろうな、だから名字で呼ぶ事にする。

「起こそうにも起きなかつたんスよ。後、僕の事は翔で良いよ。」

「堅苦しいのは無しで行こうぜ？俺も十代で良いぜ。」

「俺もそうというのは苦手だからな、大地で構わない。」

「それなら俺の事も優で構わない。じゃあ、改めてよろしくな、十代、翔、大地。」

「ああ。」

「よろしくッス！」

「よろしくな、優。」

この3人とは無事に仲良くなれて、ファーストコンタクトとしては上々か。

俺、十代、翔はオシリス・レッド。大地はラー・イエローの方へ向

かう。

俺達を案内してくれたのはオシリス・レッドの寮長でもあり、錬金術を担当項目にしている大徳寺教諭。

でも、なんでデュエルを専攻するところで錬金術…？

「……………」

「……………」

「……………」

俺達3人はレッド寮の古さに言葉が出ない。

見ると寮のあちらこちらの壁に補修の後が見える。

「結構、年期経っているな。」

「そっすね。」

「この建物ってアカデミアより前から立ってないか？」

「それはないだろう。アカデミアの方は多分、定期的に改修工事を行っているんだろうな。」

あの社長、金持ちなんだからブルーに回す金があるならレッド寮も改築しろと言っのにそれに原作の神のランクだとラー>オシリス〃オベリスクだろう。

それにバトルシティの持ち主の順位で言うとオシリス>ラー>オベリスクだぞ？

あんだ、そんなんだから何時まで経っても初代主人公に勝てない万年2位なんだよと言ってやりたいな……

「俺の部屋はお前達の隣か。」

「荷物置いたらデュエルしようぜ！」

「ちょっと荷物整理とかさせる。それに歓迎会とかもあるだろう。」

「分かったよ。じゃあ、後で呼びに来るからな〜！」

その後は大徳寺教諭に案内されて、部屋番号を確認する事となる。

俺の部屋は十代達の部屋のすぐ隣だ。

十代と翔は部屋へ入って行くのを確認すると俺も自分の宛がわれた部屋に入って行く。

入ると目についたのは段ボール箱5つと5段に重なった箱があった。

「何だ、この荷物は？」

1つの段ボール箱の上に1通の紙が添えられていた。

中身を見ると、それはあのおっちゃんからの手紙だった。

段ボール箱の中を見るとそれはカードだらけで自分の生前の時の物だろう……となると、この重なった箱を見ると、自分が頼んだカツプヌードル（5箱分）であろう。………と言うか、本当に持ってこれたんだ………

手紙には要望の物は全部、あの箱に入っているとの事である。

後、自分がこの世界に入り込んだ事で少し異なる事があるとの事らしい………要するに本来とは違う展開があるかも知れないという事か。

IF要素が混じっているという事か。まあ、GXは全話見通して、内容も粗方覚えている俺としてはそちらの方が好きだ。

俺は段ボール箱の中に入っているカードを確認する作業から始めた。

……疲れた…流石に段ボール箱5箱分の中に入ってるカードを確認するだけでも疲れるとは…

分かった事は案の定、原作で特定の者しか所持していないカードが消えている。

でも、シンクロモンスターや地縛神や機皇帝は消えてない。……あれは5D'sのカードだからか？

大丈夫なのか？特に地縛神は、5D'sのダークシグナー編みたいになったら責任取れんぞ。

Sinの方もWorld、スターダスト、真紅眼、ギア、トゥールース、パラドクス・ドラゴン以外は全部消えている。確かにSin青眼とかレインボー・ドラゴンとか見られたら不味いよな。

その変わり、シンクロモンスターの枚数が結構増えていた。生前では枚数に不足していたブリューナクやゴヨウ・ガーディアンの枚数

が増えていた。

生前のカードも全部確認し終えたからデッキを本格的に調整する事にした。

持っているデッキ全部の調整が粗方完了し、デッキ回しをしようとした時……

ドンドンドン。

「優君、入るッスか？」

翔が俺の部屋の扉を叩く音が響くので、出る事にした。

「翔、何か用か？」

「大徳寺先生が歓迎会をやるんで集まられて言われたんすけど、優君が来ないんで呼びに来たッス。」

「ああ、悪い悪い。」

俺は翔に連れられ、レッド寮の食堂へ移動する。

歓迎会中に俺は色々なレッド寮のメンバーと交流し、十代と翔の部

屋の住人でもある隼人ととも知り合いとなる。

「アニキ、不味いッスよ。」

「そうか？美味いと思うぜ。」

「そういう意味じゃ無いッスよ。」

「翔、何が不味いんだ？」

「優君、実はッスね……」

翔は不味いと言う意味を話してくれた。

話によると歓迎会が始まる前にアカデミア内を散策していたら、オベリスク・ブルーの「万丈目 準」と名乗る男子生徒とその取り巻き達に絡まれたらしい。

だが、同じくオベリスク・ブルーの天上院 明日香と言う女子生徒が仲裁して大事にはならなかったらしい。

「なるほど、つまり…因縁をつけられるとかそう言う話か。」

「そうッス。」

「デュエルだったら俺は行くぜ！」

そっぴゃ、この頃の万丈目って、本当に嫌な奴だったからな。

翔の言葉が正しいと今夜あたりに呼び出しが来るだろうな……今のうちにできる事をして置くとするか。

「十代、翔。歓迎会が終わったらすぐに俺の部屋に来てくれ。」

「？」

「分かったッス。」

やがて、歓迎会は終りを迎え。

俺の部屋に十代と翔で集まっていた。

「優君、何か用ッスか？」

「とりあえず、お前らのデッキを見直しておく、調整が必要なら調整をする。」

「それに何でデッキを弄るんスか？」

「さつきお前が言っていた。その千丈目、百丈目だか知らんが、そういう奴はデュエルしろと今夜あたりに呼び出して来るだろうな。何もなければそれに越した事はないが……」

「でもよ、俺達カード持ってないぜ。」

「大丈夫だ、俺の余りのカードで2人のデッキ強化をする。」

「いいんスか？」

「ああ、俺もここまで多くのカードの面倒は見きれないからな。」

「わりいな、助かるぜ。」

「これ位ならお安い御用だ。さつさと部屋に戻って、デッキを取って来てくれ。」

そこから十代と翔のデッキ強化が始まった。

十代はアニメ版E・HERO、翔はビークロイド。

その原型を残しつつ、安定したデッキに仕上げる。

何しろ、遅かれ早かれ2人のデッキを強化しなければならないんだからな。

時間はかかったものもデッキは原作当初のデッキとは比べ物にならないほどに強化された。

そして、十代と翔のデッキ強化が完了し、慣らし程度にデッキを回しプレイングを確認し、不味い所を指摘すると言う作業に入った。

そんなこんなで時計を見ると時間は10時半を回っていた。時間的に言つとそろそろだな……

「デッキは2人とも良い感じに仕上がったと俺は思う。」

「ああ〜！早く、デュエルしたいぜ〜！早く連絡こねえかな〜！！」

「アニキ……来ないん方が良いと思うんすけど。」

「まあ、俺は来るかもとは俺は言ったけど。」

ピピピ　ピピピ　ピピピ……

そんな話をしていると電子音が鳴り響く。

それは十代のPDAだった。

第2話 デュエルアカデミア入学（後書き）

今回は原作通り、十代vs万丈目でお送りいたします。

今回で十代と翔のデッキが大幅に強化されました。

後に万丈目や明日香や三沢など主要メンバーのデッキも改良される予定です。

第3話 呼び出しデュエル 十代VS万丈目

俺達3人が呼び出し通り、決闘場へ行くとそこには万丈目とその取り巻き達がいる。

あいつらもご苦労なこった。あんな奴の使いっぱしりになってよ。

「よく来たなドロップアウトボーイ諸君。指定時間には早いがまあ良いだろう。さて、ガードマンが来る前に……」

「あなた達、こんな時間に何やっているの!？」

「んぬ?」

この場にいる誰もいない女性のような声が聞こえる。

振り向くとオベリスク・ブルーの女子生徒がいた。

思ったよりも早い登場だな、なんちゃってヒロインの天上院明日香。

「やあ、天上院君。ちょうどこのドロップアウトボーイ達に格の違いを見せつける所さ、君もどうだい。」

「あなた達もこんな事に付き合っていないで寮に戻った方が良くわよ。」

「デュエルに誘われたらどんなデュエルでも受けるのが真のデュエリストだぜ。」

「だな、売られた喧嘩は買うのが礼儀だしな。」

「いやいや。優君、喧嘩じゃなくてデュエルッスよ。」

「ふん。まあいい、格の違いを教えてやろう。決闘場にながれ、遊城 十代！」

「おう！」

十代は決闘場へ上がる。

「アニキ！頑張れ！！」

「ああ、任せとけ！！」

「デュエル！！！！」

十代

LP：4000

万丈目

LP：4000

始まったか……さて、十代がああデッキをどこまで回せるかが気になる所だ。

「俺のターン！ドロー！」

万丈目

手札：6

「リボーン・ゾンビを召喚！カードを伏せ、ターンエンド！」

リボーン・ゾンビ

ATK 1000

万丈目

手札：4

モンスター：1

魔法・罫：1

モンスター1体と伏せが1枚。

原作だと1体リリースして、融合モンスターのコントロールを得るヘル・ポリマーだが…

「俺のターン！ドロー！」

十代

手札：6

さて、注目の十代のターンだが、どう出てくる。

「手札からサイクロン発動！フィールド上の魔法・罠カードを一枚破壊する！万丈目のその伏せカードを破壊する！」

「ちいつー!!」

十代

手札：5

万丈目

魔法・罠：0

おお、サイクロンを引き当てて来たか。流石十代だ。

で万丈目が伏せていたのはヘル・ポリマーか……原作のまんまだな。

十代達のデッキを弄る提案をしておいて正解だったな。

「手札からE・HERO エアーマンを召喚！エアーマンの効果、自分のデッキからHEROと名のついたモンスターを1体手札に加える！俺が加えるのはE・HERO バブルマン！」

E・HERO エアーマン

ATK 1800

十代

モンスター：：1

エアーマンをエマーゼンシーなしで引き当てたか。

十代の持つ、引き運の賜物だな。

バブルマンか……理想ならそのまま、Zeroへ融合へ融合。

相手の場はリボーン・ゾンビスさえ退かせれば、どうにでもなるからな。

「手札から沼地の魔神王の効果発動、このカードを手札から捨てる事でデッキから融合の魔法カードを手札に加える！」

生前の話だけど沼地はグングニールが出てから本当に価値が上がったよな

デブリで釣り上げて、シンクロ。グングニールが出る前ならブラック・ローズ・ドラゴンで強制リセットでも良い気がする。

しかもグングニールはHEROデッキには少ない除去が行えるからな。

「融合発動！手札のスパークマンとバブルマンを融合！現れる！氷のHERO、E・HERO アブソルトZero！」

E・HERO アブソルートZero
ATK 2500

十代

手札：2

モンスター：2

「く、攻撃力2500!？」

「バトル!エアーマンでリボーン・ゾンビを攻撃!エアースhoot
!」

E・HERO エアーマン

ATK 1800

リボーン・ゾンビ

ATK 1000

エアーマンの翼のファンのようなところから竜巻が吹き出し、リボーン・ゾンビがそれに巻き込まれて消滅する。

その超過ダメージが万丈目を襲う。

「うぬうううう!?!?!?!」

万丈目

LP : 4000 3200

「続けて、E・HERO アブソルートZeroでダイレクトアタック！瞬間氷結《Freezing at moment》」

「ぬあああああつっ！！！！！」

万丈目

LP : 3200 700

「ククククククツハツハツハツハツハツ！！！！！」

突然、万丈目が笑い出したが、何だ？何がおかしいんだ？

……どうも嫌な予感しかしないな。

「何がおかしいんだよ？」

「お前は今、俺のフィールドが何もない状態でダイレクトアタックしたな？」

モンスターと魔法・罠ゾーンがなしでダメージを受ける……

おいおい、あれを手札に握っているのか？

ってか、万丈目があれを所有してるのに俺が驚いてる。

「まさか、奴の手札には……！？」

「ほう、そっちのドロップアウトには分かっただらしいな、俺の言葉の意味が。」

「どつ言つ事ッスか。」

「…何も無いフィールドでダメージを受けた時に手札から効果を発動するモンスターがいる。」

「そうだ。冥府より出でよ、冥府の使者 ゴーズ！ハツハツハツハツハツハツハツハツハ！……！」

冥府の使者 ゴーズ

ATK 2700

万丈目

手札：3

モンスター：1

「このカードは、自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。更にこの効果で特殊召喚に成功した場合、相手が与えた戦闘ダメージと同じ攻撃力と守備力を持つ、冥府の使者 カイエントークンを特殊召喚する！出でよ、冥府の使者 カイエン！」

冥府の使者 カイエントークン

ATK 2500

万丈目

モンスター：2

「ハツハツハツハツハツハ！！次のターンに貴様ご自慢のHERO軍団を一掃してやる！」

「へ、次のターンがあつたらな。」

「何を戯言を…貴様のモンスターは全部攻撃は終了した。高らかにエンドを宣言しろ。」

「だけど、まだバトルフェイズ中だぜ！俺は手札から速攻魔法発動！マスク・チェンジ！」

「…マスク・チェンジ!?」

「って、握っていたのかよ。」

「十代のドロ率は相変わらず半端ないな……これが遊戯王シリーズの主要キャラクターだけが持つ力か。」

「って、十代でこれなんだからな、カイザーはその上を行くんだよな。」

「俺はこいつが本当に恐ろしく思えて来たぞ。」

「このカードは、自分のフィールド上に存在するHEROと名のついたモンスター1体を選択して発動、選択したモンスターを墓地に

送って、選択したモンスターと同じ属性のM・HEROと名のついたモンスター1体を融合デッキから特殊召喚するぜ！」

「ま、M・HEROだと!？」

しかし、あのモンスター勢のカテゴリの元ネタってどこをどう見ても、仮面ライダーにしか見えないんだよな。

「俺は、E・HERO アブソルートZeroを墓地へ送る!そして、E・HERO アブソルートZeroの属性は水!よって水属性のM・HERO ヴェイパーを特殊召喚!」

M・HERO ヴェイパー

ATK 2400

十代

手札：1

モンスター：2

「だが、そんな雑魚を出してどうなる?攻撃力は2400、ゴーズ所か、カイエンの足元にも及ばないぞ?」

「だったら、自分のフィールドを見て見ろよ?」

「何……!?!?」

そう、万丈目の場にいた、ゴーズとカイエンは徐々に凍り付いていき、凍りついたと同時に破壊された。

万丈目

モンスター：0

「馬鹿な！何故、俺のモンスターが破壊される！！」

「E・HERO アブソルトZeroの効果が発動した。ただ、それだけだ。」

「効果だと！？」

しょうがないから俺が解説する事にした。

「E・HERO アブソルトZeroはフィールドを離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。ぶっちゃけた話、サンダー・ボルトを内蔵していると言えば分りやすいだろう。」

「フィールドが離れたら、今は禁止カードともなっているサンダー・ボルトと同等の効果を持つモンスター……」

「何て、恐ろしいカードなんスか……」

「まあ、Zeroが出ている時点でお前はもう詰んでいるんだよ。千丈目。」

「「万」丈目だ！いい加減に「十代」、さっさと終わらせてやれ。」
つて、貴様あ、レッドの分際で無視するな！！」

「おう、行くぜ！M・HERO ヴェイパーでダイレクトアタック！
！フリアティクエクスプロージョン！」

「うわあああああああ！……！」

万丈目

LP：700

- 1700

あれ？後攻ワンキル？どっかで見たような光景な気がするけど気にしない。

「ガツチャツ！楽しいデュエ！まずいわ！ガードマンが来るわ！」
んえ！？」

随分と早い登場だな。まあ、十代が勝ったから良いか。

早く逃げなければ、捕まるか。

あのクロノスの事だからレッドと言う理由で問答無用で退学とか言いかねん。

「十代、逃げるぞ！」

「おう！」

「ち……」

「万丈目さん、不味いつすよ！」

「早く行きましよう！」

「…遊城 十代！この屈辱は忘れんぞ！そして、そのレッド！」
の俺を侮辱した落とし前は必ず付ける！引き上げるぞ！！！」

と捨て台詞を吐き捨てて、逃げて行く万丈目とその取り巻き達。

この頃、万丈目って本当にやられ役って感じだな。

俺達もすぐに決闘場を後にする。

「ここまで来れば大丈夫だろ。」

「何とか捕まらずに済んだな。」

「もう、こんな事はこりこりッスよ。」

「万丈目君の挑発に乗ったあなた達が悪いのよ。」

「ま、俺はデュエルに勝ったから良いや。」

「それでどうだ。十代、改造したデッキの感想は。」

十代にデッキの感想を聞いてみた、回ったんだから感想は聞く必要

もないが、念のために尋ねる。

返ってきた答えは俺の予想通り、「強い」の一言で改造した甲斐があったものだ。

そういえば、まだ明日香の名前は知らないってことになっているから促しておくか。

「十代、その女子生徒は知り合いか？」

「ああ、こいつは……」

「私は天上院明日香。所属は見ての通り、オベリスク・ブルーよ。よろしくね。」

「俺は名前は天空優だ。よろしく頼む。天上院。」

「明日香で構わないわ。」

「なら俺は優でも天空でも好きに呼んでくれて構わない。」

「分かったわ。優、よろしくね。」

「ああ、さてと……明日から本格的な講義が始まるようだし、さっさと帰って寝るとするか。十代、翔。」

「そうッスね。」

「またな、明日香。」

「また明日ッス！」

「お休みね、3人とも。」

俺達はその場で明日香と別れるとレッド寮へ戻って行く。

さて、明日からは講義か。

学生生活なんて高校のとき以来だから、本当に楽しみだ。

今回の最強カード

優「今回の最強カードはE・HERO アブソルトZero」

E・HERO アブソルトZero
融合モンスター

レベル8 水属性 戦士族 ATK 2500 DEF 2000

融合素材：「HERO」と名のついたモンスター+水属性モンスター
効果：このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO アブソルトZero」以外の水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

主な収録パック：「コミックス「遊戯王GX」 第4巻 書籍付属カード」

優「水属性とHEROと名のついたモンスターと融合する事で召喚できる融合モンスター。フィールドを離れるだけでサンダー・ボルトと同じ効果が発動するという強力な効果を持ったモンスターだ。自分で効果を使うと考えるなら亜空間物質転送装置、パラドックス・フュージョン、ワームホールを使ったり、E・HERO ジ・アースの効果でリリースするのも良い。因みにE・HERO ジ・ア

スの融合素材であるE・HERO オーシャンとE・HERO フ
オレストマンでこれとE・HERO ガイアの3種類の融合HER
Oが出せる。状況によっては使い分けられるから覚えておいても損
はない。」

??「文字通り、最強のE・HEROだね。技名は瞬間氷結《Fr
eezing at moment》だよ。」

優「だからお前は誰だ？」

??「近いうちに登場するからお楽しみにね。」

第3話 呼び出しデュエル 十代VS万丈目（後書き）

はい、何かまた後攻ワンキルになってしまいましたわ。

優「おい、もうちょっと真面目に書け。」（ゲストとして登場）
悪い、反省はしてる。

優「それで次回は？」

授業と翔誘拐事件基偽ラブレター事件だけど……

優「だけど何だ？」

デュエルがちょっと変わる予定だよ。

第4話 偽ラブレター事件！？ 三沢VS明日香

万丈目の呼び出しデュエルから翌日。

本格的に講義が始まった訳だが、正直言ってつまらない。

デュエル関係の講義なのだから寝ていても問題がないくらい簡単な内容の講義だ。

寧ろ、始めたばかりの初心者が聞く様な初歩中の初歩だろう。

「では、セニョール天空、罨カードについて答えるノーネ」

「罨カードは通常罨、永続罨、カウンター罨の3つに分類されます。発動するには一度伏せる必要があり、伏せたターン以降であれば、発動ができません。魔法カードとの相違点は相手ターンにも発動できることで主に相手の攻撃や行動を妨害出来ると言うのが特徴です。代表的なものは死のデツキ破壊ウィルス、聖なるバリア ミラーフォースです。永続罨は永続魔法同様発動後も場に残り続けます。代表的なものとして、墓地からモンスターを蘇生できるリビングデッドの呼び声。他の罨効果を無効化する王宮のお触れ。発動後、罨モンスターとなるアポピスの化神があります。カウンター罨は基本的にカードの発動に対して発動する罨カードでそのカードの発動そのものを無効にする能力などを持っています。通常魔法や通常罨など、効果を妨害されにくいカードにも有効ですが、発動するためにコストが必要となる場合があります。代表的なカードはモンスター1体の攻撃を無効化し、バトルフェイズを強制終了させる攻撃の無力化効果発動を無効の天罰、魔法無効のマジック・ジャマー、罨無効の盗賊の七つ道具、召喚・特殊召喚・反転召喚、罨・魔法の発動を無

効の神の宣告などがあります。またカウンター罠の発動を止められるのは、カウンター罠だけであり、それ故に……」

「せ、セニョール天空。もう良いのね。ストップするノーネー!」

クロノスは止める事を忘れたのか静止の言葉を上げる。

周りの連中も啞然としていた。

これ位は常識だと思っただが……

その後は原作通り、クロノスが翔を指名し、翔がフィールド魔法について必要最低限の事を答えて終了する。

そして、デュエル関係の講義終了後。

「優。君は随分と膨大に知識を持っているようだね……」

大地が寄って来る。その顔が随分と引き攣っていた。

「そつでもないと思うけどな。」

「いや、ああまで細かく説明できるのも凄いと思う。」

そして、本日の講義が終了した。

「十代、翔。俺は寮に戻るけど、お前らはどうする？」

「じゃあ、俺も帰るぜ。翔は？」

「悪いッス。僕ちよつと別行動で寮に戻るのが遅くなりそうッスから先に帰ってほしいッス。」

「分かったけど、あんま遅くなんなよ？」

「分かってるッスよ。」

翔はそう言つと俺と十代の前から去って行く。

その表情はにやけていた。

「十代、翔の奴は一体どうしたんだ？」

大地は翔の表情を見て、気になっていた。

「それがわかんねえんだよ。翔の奴、朝っぱらからなんかにやけた表情していてさ。」

「面倒事に巻き込まれなければ良いんだけどな……」

「優、少し頼みごとがあるんだが、良いか？」

「お前が俺に頼み事？」

大地が俺に頼み事とは珍しかった。

大地は成績優秀者である筈だから勉強関係ではない筈。

「まあ、ここで立ち話するのもなんだし、レッド寮で話って事で良
いか？」

「ああ、俺はそれで構わない。」

場所はアカデミア公舎から俺の部屋へと映る。

部屋には俺と大地と十代の3人がいた。

「それで大地、話って何だ？」

「君が入学試験の時に出したモンスターなんだが。」

「入学試験……シンクロモンスターの事か？」

「ああ、それに関係する話なんだが……」

「？」

「俺にシンクロモンスターとその召喚に必要なチューナーと言うモンスターを少し譲ってくれないか？」

「それでお前のデッキにもシンクロ召喚のギミックを入れたいと？」

「その通りだ、頼む。」

「まあ、まずお前のデッキを見てからだな。」

それで俺は大地のデッキを見て驚いた。

そう、大地のデッキは十代と同じ、HEROデッキだった。

つて、この大地はまさか、生前のTF3では伝説ともなったヒーロー三沢大地。

大地のデッキは十代とは逆に十代がアニメ版HEROと言う言葉で表すなら大地のデッキは漫画版HEROと言える。

「お前もHEROデッキだったのか。」

「ああ、俺も驚いたんだけどな。」

おいおい、これで2年目でエドの奴が出てきたらHERO使いは事実3人いるようなものだぞ。

「融合とシンクロの混合か……うん。」

「やっぱり難しいのか？」

「出来ないわけじゃない。幸い沼地の魔神王が入っているから大丈夫だろう。その分、HEROデッキに比べて、プレイングが難しくなるが、大丈夫か？」

「大丈夫だ。俺も簡単に行けるとは思っていないからな。」

そして、大地の漫画HEROを改良する事から始まる。

「HEROのデッキに相性いいチューナーとなるとデブリ・ドラゴン位しかないか。」

「「デブリ・ドラゴン？」」「」

「このカードだ。」

俺は十代と大地にそのカードを見せる。

「こいつの効果で墓地から攻撃力500以下のモンスターが引ってこれる。このデッキには沼地の魔神王が投入されているから条件は満たしている。」

「なるほど、そこからシンクロ召喚へ繋ぐって訳か。」

「こいつのレベルは4、沼地の魔神王のレベルは3……4と3だからレベル7のシンクロモンスターが出せるって訳か。」

「だけど、こいつは効果の特性上、ドラゴン族のシンクロモンスターのシンクロにしか使用できない。」

「レベル7で種族はドラゴン族のシンクロか…随分と範囲が狭いな。」

「でも、出せないよりはマシだろう?。」

「でもあるのか?レベル7のドラゴン族のシンクロモンスターは。」

「俺が持っているのはこの3種類だけだ。」

俺は大地と十代にブラック・ローズ・ドラゴン、氷結界の龍 グングニール、エンシェント・フェアリー・ドラゴンを見せる。

「どれも強力な効果を持っているな。」

「素材が共通しているから状況によっては使い分けられるのも利点だ。例えば、こちらの劣勢の時はブラック・ローズ・ドラゴンで場を掃除してしまえば問題はない。それにブラック・ローズ・ドラゴンは炎属性だ。そこからミラクル・フュージョンでE・HEROノヴァマスターへ繋ぐ事もできる。氷結界の龍 グングニールだったら、手札の余分なHEROを墓地へ送って相手の邪魔なカードを破壊。そして、送ったHEROを素材にしてミラクル・フュージョンで融合体を更に展開できる。エンシェント・フェアリー・ドラゴンは他の2体に比べれば見劣りするけど、フィールド魔法を破壊して、ライフを回復できる効果を持つてるから入れて置いても損はない筈だ。」

「優、おかげで新しい戦術が見えて来た。ありがとう。」

「それならデッキの調整を始めようか、必要なカードがないなら俺

の余りのカードを使っても良い。」

「良いのか？…そこまでして貰って。」

「大地、俺はこう見えても、仲間や友達は大事にしている身だ。でも、大切に扱ってくれ。」

「当たり前だ。友達から持った貴重なカードなんだ。それにどんなカードも大切にしなかったら、デュエリストとして失格だ。」

「その通りさ！どんなカードも大切に使ってこそ、真のデュエリストだぜ。」

「なら、始めるとするか。」

「「おー！！」」

そこから俺、十代、大地の3人で色々な意見を交じ合わせながら大地のデッキ調整を行っていた。

使うのは大地だから彼の意見を尊重しつつ、デッキを仕上げて行く。

「このカードはどうする？」

「いや、このカードはバランス的にも少し崩れそうな気がする。」

「なら大地、このカードは？」

「このカードは、ちょっと難しいな。」

「試に回してみても、不要なら抜いて他のカードを入れるという感じでやってみたらどうだ。俺はいつもそうやっているけど。」

「ならそうしてみるか。」

そんなこんなで俺達は時間が経つのも忘れて、大地のデッキ構築に付き合っていた。

そして、ついに……

「よし、出来た。」

大地のデッキがついに完成した。

「やったな、三沢！」

「優と十代のおかげだ、ありがとう。」

「俺達はお前の手伝いをただけだよ。なあ、十代。」

「おう！」

と盛り上がっていたその時……

ピピピ……ピピピ……ピピピ……とPDAの電子音が鳴り響いた。

「誰のPDAだ？」

「十代のじゃないのか？」

十代は自分のPDAを取り出して、開いてみている。

「はあ?!」

「どうした?」

「『丸藤翔は預かった。返して欲しければ女子寮まで来い。』って書いてある。」

「女子寮?」

翔が誘拐されたって……クロノスの差し金で勃発した偽ラブレター事件か。

嫌な予感がするとは思っていたが、確かその事件も入学した直後だったな。すっかり忘れていた。

「行くしかないだろう?十代。」

「当たり前だろ。」

「ならば、俺も行くぞ。」

「三沢も?これは俺達の問題だし……」

「そんな事はない!俺から見れば十代も翔も優も俺の大事な友達だ。」

原作じゃわからなかったけど。大地ってこんなに熱い奴だったんだな。

「翔がどんな酷い目に遭わされているか分からない！人数も多い方が早く助けられる筈だ。」

大地…それは本人達の前で絶対言うなよ。何言われるか分からんかならな。

特にどんな酷い目に遭わされているとか……

「ならさっさと女子寮まで乗り込むぞ。」

「おう！」

「待っている翔！俺達が必ず助け出してやる！！」

大地。頼むから自重してくれ……

俺達はオベリスク・ブルーの女子寮へと向かう。

オベリスク・ブルー女子寮の入り口では翔と明日香と他女子生徒2名がいた。

「アニキ〜！優君〜！」

「翔、無事か！？」

「来たわね、十代、優……って、あなたはラー・イエローの……」

「三沢大地だ。翔が誘拐されたと聞いた時、偶々一緒にいたからな同行させてもらった。」

「誘拐だなんて、人聞きの悪い事を言わないで欲しいですわ。」

「翔は、何で捕まっているんだ？」

「こいつが女子寮の周りをウロウロしていたからよ！！」

明日香の傍らにいた女子生徒の1人が声を上げる。

「翔、お前。何でそんな事を…まさか、の？」

「アニキ！！断じて違うッス！僕は手紙で呼び出されたからここに来ただけッス、それはアニキと神様とお兄さんに誓っても良いッス。」

「その手紙は持っているか？」

「これッス。」

翔は手紙を取り出し、明日香はそれを見る。

「私の字じゃないし、見覚えがないわ。」

「誰かが翔を嵌めようとした罠と言う訳か。」

俺は原作を見るから知ってるけど。犯人はクロノスの野郎だったな。

あの野郎を還付無きに叩き潰して、締め上げられないのが悔しいが…

「翔は何もしてはいないんだろう？ならば、彼を解放しては貰えないだろうか？」

「良いわよ。ほら行きなさい。」

「アニキ、優君」

翔は明日香達の元から離れて、俺達と合流する。

「翔、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。アニキ、三沢君もありがとう。」

「このアホ。」

コツンと翔の頭を軽く叩く。

「あいたっ！何するのさ！優君。」

「全く俺や十代に心配かけんなよ…まあ、無事だったから良いけど。」

「ああ、本当に無事で何よりだよ。」

「さて、一件落ち着いたことだし、寮に帰って飯にでもするか、腹減っちゃまったよ。」

「ちょっと待って。」

帰ろうとする俺達を明日香が引き止める

「何だよ？」

「何か、呆気なく終わっちゃったからさ、折角デュエルしない？」

「お、デュエルか。良いぜ。」

「誰が行く。」

「十代、優、翔。悪いが俺にやらせてくれないか？俺の新しいデッキを試してみたい。」

「え、俺にやらせてくれよ。」

「頼む、十代。俺にやらせてくれ。」

「ちえ。」

「回しはほとんどしていないが、大丈夫か？」

「大丈夫さ、このデュエルで掴む。」

話し合った結果。

俺達は大地がやることになった。

まあ、向こうは実力的に明日香が出るだろうな。

「こちらからは俺が出る。」

「意外ね、てつきり十代が出るのかと思ったわ…じゃあ、ラー・イエロー主席の実力を見せて貰うわよ。」

「デュエル!!!」

三沢

LP:4000

明日香

LP:4000

「俺のターン!ドロー!」

三沢

手札:6

「魔法カード、E・エマージェンシー・コールを発動!デッキからE・HEROと名のついたモンスターを1体手札へ加える。俺が加えるのはE・HERO エアーマン。」

大地のターンから始まったが、最初にエアーマンサーチはE・HEROの基本だな。

「更に手札から沼地の魔神王を捨て、デッキから融合を加える。」

更に融合……大地も十代に負けない引き運だな。

HERO使いはみんな引き運強いのか？

「手札より融合を発動！手札のオーシャンとフォレストマンを融合！来い、プラネットシリーズの1枚、E・HERO ジ・アース！」

E・HERO ジ・アース

ATK 2500

三沢

手札：3

モンスター：1

いきなり出たか、漫画の世界では世界に1枚しか存在しないプラネットシリーズの1枚……

「え、E・HERO ジ・アース!？」

「世界に1枚しか存在しないと言われているプラネットシリーズ……」

「なんであいつがそんなカードを持つてるの!？」

彼女達の反応を見る限り、こっちの世界でもプラネットシリーズのモンスターは1枚しかないみたいだな。

「更にE・HERO エアーマンを召喚！エアーマンの召喚に成功した時、デッキからHEROを手札に加える。俺はE・HERO オーシャンを加える！」

E・HERO エアーマン

ATK 1800

三沢

モンスター：2

「そして、カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

三沢

手札：2

「私のターン、ドロー！エトワール・サイバーを召喚！」

エトワール・サイバー

ATK 1200

明日香

手札：5

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

「俺のターンだ！」

三沢

手札：3

「（この手札なら行ける！）俺はチューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚！」

デブリ・ドラゴン

ATK 1000

三沢

手札：2

モンスター：3

「「チューナーモンスター!?!」」

「な、何であなたがそのカードを!？」

「優が俺に少し譲ってくれたからな。デブリ・ドラゴンの召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。しかし、この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化される。墓地より沼地の魔神王を特殊召喚!」

沼地の魔神王

ATK 500

三沢

モンスター：4

「レベル3、沼地の魔神王にレベル4、デブリ・ドラゴンをチュウニング!全てを貫く槍の名を持ちし龍よ、その名と共に全てを貫け!シンクロ召喚!出でよ、氷結界の龍 グングニール!」

氷結界の龍 グングニール

ATK 2500

三沢

モンスター：3

「これが…シンクロ召喚。」

「グングニールの効果発動、1ターンに1度、手札を2枚まで捨て

る事で捨てた枚数分だけフィールド上のカードを破壊する。」

「何ですって!?!」

「何よ!?!そのインチキ効果は!」

それでインチキとか言ったら、シンクロはやって行けないぞ。

グングニールでもまだ優しい方だぞ?

それでインチキだったらBFとかダーク・ダイブ・ボンバーとかブリユーナクとかゴヨウやトリシューラはどうなる?

「俺は君のフィールドの伏せカードとエトワール・サイバーを破壊する!ブリザード・ファング!」

「くっ!」

明日香

モンスター:0

魔法・罫:0

「更にE・HERO ジ・アースの効果発動する!ジ・アースは自分のフィールドに存在するE・HEROと名のついたモンスターを1体、生贄に捧げる事でその攻撃力をジ・アースの攻撃力に加算する!俺はエアーマンを生贄に捧げ、その攻撃力1800ポイントをジ・アースへ加算する!地球灼熱^{ジ・アースマゲマ}」

E・HERO ジ・アース
ATK 2500 4300

三沢

モンスター：2

「これで決めにさせて貰う！E・HERO ジ・アース！ダイレク
トアタック！地球灼熱斬！！！！」
アース・マグナ・スラッシュ

「きゃあああああああ！！！！！！」

明日香

LP：4000 - 300

「俺の勝ちだ。」

「ええ、私の完敗よ。」

「そんな…明日香様が手も足も出せずに負けるなんて……」

横の方で明日香の取り巻き達がなんか、呆然としているな。

「よっ、やったな。三沢！」

「凄かったッスよ！三沢君もシンクロ召喚ができたんすね。」

「優が手伝ってくれたからありがとう。」

「気にするな。俺はお前に助力しただけだ。それでシンクロ召喚を使った感想は？」

「ああ、凄まじい能力とパワーだ。シンクロ召喚に特化したデッキならデッキに上級・最上級レベルのモンスターを積む必要がなく、簡単に上級レベルのモンスターが出せるな。」

流石、大地だな。1回回しただけでそこに気付くとは……

って、誰でも分かるかそんな事は…

「さて、デュエルの決着も付いたことだし、帰って飯にでもするか。」

「そうだな、三沢のデッキ調整に付き合っていたらつい、飯を食い忘れっちまったしな。」

「優、十代、翔。ここからならラー・イエローの寮の方が近い。デッキの調整を手伝ってくれた礼にご馳走をしたい。」

「え？良いのか？」

「ああ、特に優には腹いっぱい食って貰いたいからな。」

「でも、僕手伝って無いツスよ？」

「この際、2人も3人も変わらないからな。遠慮するなよ。」

「それじゃ、ごちになります。」

俺達は大地の案内でラー・イエローの寮へ行き。

彼からラー・イエローの寮で遅めの夕食をご馳走になる。

今回の最強カード

優「今回の最強カードは氷結界の龍 グングニール！」

氷結界の龍 グングニール

シンクロモンスター

レベル7 水属性 ドラゴン族 ATK 2500 DEF 17

00

シンクロ素材：チューナー+チューナー以外の水属性モンスター1体以上

効果：手札を2枚まで墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールド上に存在するカードを選択して発動する。選択したカードを破壊する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

主な収録パック：「DUEL TERMINAL - 混沌の覇者！」

優「チューナー以外の素材で水属性をシンクロ素材にしなければならぬシンクロモンスターだ。1ターンに1度手札を2枚まで捨てる事で捨てた枚数分、フィールド上のカードを破壊する効果を持つ。シンクロ素材が水属性と指定がかかっているため、水属性以外では召喚が難しいシンクロモンスターだ。」

?? 「効果名はブリザード・ファング。攻撃名はエターナル・フォース・ブリザードだよ。」

優「違う。……どこのネタだ？」

第4話 偽ラブレター事件!? 三沢VS明日香(後書き)

はい、ようやくアニメで言う所の第3話が終了しました。

この三沢はTF3ではもはやネタの域を超えた存在、ヒーロー三沢だ!!

優「いつそのこと、ヒーロー三沢じゃなくて、シンクロヒーロー三沢で良いんじゃないのか？」
それも一興だな。

優「で、次回は？原作通りなら月一テストだろ？」

次回は…「邪魔だよ!!」ぐわっ!

??「次回は、月一テストじゃなくて、期待されて待ちに待った僕の登場だよ!」

優「いや、誰も期待してないぞ。」

あ、後、以下の項目を募集中です。

- ・三沢の三龍(黒薔薇龍、古代妖精龍、グングニール)の召喚台詞
- ・グングニールの効果名と技名

応募したら、優ちゃんがゲストとしてかけつく

優「死ね!!(ガス)「ぐはっ!!」」

第5話 神？ 有栖

?? Side

初めはただのオシリス・レッドの生徒：ボクはその程度にしか思っ
ていなかった。

でも、クロノス教諭のデュエル講義の後、その印象は大きく変化し
た。

それはデュエル講義の授業中の事である。

「では、セニョール天空、罨カードについて答えるノーネ。」

「罨カードは通常罨、永続罨、カウンター罨の3つに分類されます。
発動するには一度伏せる必要があり、伏せたターン以降であれば、
発動ができます。魔法カードとの相違点は相手ターンにも発動でき
ることで主に相手の攻撃や行動を妨害出来ると言うのが特徴です。
代表的なものは死のデック破壊ウィルス、聖なるバリア ミラーフ
ォースです。永続罨は永続魔法同様発動後も場に残り続けます。代
表的なものとして、墓地からモンスターを蘇生できるリビングデッ
ドの呼び声。他の罨効果を無効化する王宮のお触れ。発動後、罨モ
ンスターとなるアポピスの化神があります。カウンター罨は基本的

にカードの発動に対して発動する畏カードでそのカードの発動そのものを無効にする能力などを持っています。通常魔法や通常畏など、効果を妨害されにくいカードにも有効ですが、発動するためにコストが必要となる場合があります。代表的なカードはモンスター1体の攻撃を無効化し、バトルフェイズを強制終了させる攻撃の無力化、効果発動を無効の天罰、魔法無効のマジック・ジャマー、畏無効の盗賊の七つ道具、召喚・特殊召喚・反転召喚、畏・魔法の発動を無効の神の宣告などがあります。またカウンター畏の発動を止められるのは、カウンター畏だけであり、それ故に……」

「せ、セニョール天空。もう良いのね。ストップするノーネー!!」

クロノス先生の静止でようやく彼も言葉を止める。

彼の回答に周りの生徒達は啞然としていた、ボクもその中の一人に入っていた。

畏カードの事について、ここまで正確に答えられる人物が何故、オシリス・レッドなのが信じられなかった。

その後知った事だけど、噂では彼は実技試験の時、誰も見た事のない特殊な召喚方法で召喚したモンスターを使いこなす人物らしい。

刹那　　彼を見た瞬間、ボクの中に電撃のようなモノが迸る。

それだけではない、生まれて15年、今まで感じた事がないような感覚がボクの中から抜けない。

彼を見ればみるほど、それは大きなモノとなり、ボクの中の大半が彼で占められてしまう。

ボク…神？かんさき 有栖ありすが、彼…天空 優君に恋心を抱いた瞬間でもあった。

自覚したのはボクとは中等部からの友達でもある明日香、ももえ、ジュンコに言われた時である。

その時のボクは……恥ずかしさの余り、部屋の中をゴロゴロ回っていた。

しかも、3人に静止されてもしばらく続いていたから……

有栖 Side 終了

Side Change 優 Side

優 Side

翔の偽ラブレター事件から数日が経過した。

このまま、何事もなければ、来週頭にある月一テストが行われて、それを乗り切るだけだ。

そこでクロノスの差し金で万丈目が十代とデュエルして逆転負けして大恥かくわけだが、今回どうなるんだ？

アンティは取ってないが、十代は既に勝っている。

まあ、そうなって今度は十代が一方的に勝つだろうな、この時期は本人曰くエースのおジャマ3兄弟もアームド・ドラゴンも持っていないし。

「スーパービークロイド・ジャンボドリルでE・HEROアブソルトZeroを攻撃!!」

「E・HEROアブソルトZeroの効果が発動!」

「残念ツスけど、ビークロイド・コネクション・ゾーンで融合したモンスターは、魔法・罠・モンスター効果じゃ破壊され無いツス!」

「つて、ああー、そうだったああ!!」

十代のアホ……真のデュエリストを目指すなら相手の使ったカード1枚1枚のテキスト覚えておけよ……

それで現在、俺達は本日の授業が全て終わり、レッド寮の前では十代と翔のデュエルを始めている。

翔の融合召喚したスーパービークロイド・ジャンボドリルがフィニッシュチャーとなつて勝負を決め、翔の勝ちでデュエルが終了する。

翔もあのデッキを使いこなせるようになり始めていた。

「やったー！ー！！やっとアニキに勝てたー！ー！！！！」

「へへ、それでもまだ6勝1敗で俺の方が勝ち越しだぜ？」

「むー！ー！ならもう一回ツス！この調子でアニキを勝ち越してやるツスよ！」

「へへ！なら来い！」

「デュエル！！！！」

また始めたな…翔の奴、十代のデュエル馬鹿がつつつたのか。最近十代や大地…他のレッド寮の連中とデュエルばかりしているな。

翔と言えば、最初はプレイングの酷さが目立ち始めていたがデュエルの回数を重ねるうちにプレイングのミスも徐々に無くなりつつあった。それは良い傾向にある。

これなら月一テストやその後に発生するであろう制裁デュエルでも大丈夫だろう。

「（あのデッキの纏まり具合なら十代はNやネオス、翔はイエローへの昇格試験頃までは大丈夫だろうな。後の調整はあいつらの自由

に任せるか。」

俺も自分の各デッキも本格的な調整作業に入るか、まだこっちの世界の制限規制に対応してないデッキがまだ多数ある。

最近は一十代、翔、大地のデッキ調整にかかりつきりだったから自分のデッキを碌に調整してなかった。

俺は部屋へ戻り、デッキの本格的な調整を開始する。

「何だこれ…?」

その翌日、デュエルアカデミアの1年の教室にある俺の座席になっている椅子の上に1通の手紙があった。

開封の所にはハートマークのシールが張られていた。誰かの置き忘れ物か?

それを見て、一十代、翔、大地が集まって来た。

「優、どうしたんだそれ?」

「知らん。椅子の上に置いてあった。誰かの置き忘れ物だと思う。」

「いや、君の座席に置いてあったんだから君宛だと思うぞ。」

「て、手紙……」

翔はあの偽ラブレター事件が引き金で手紙と言う存在に対して一種の拒絶反応を起こし始めていた。

そんな事は原作では、全然触れられなかったから意外だ。

「優君！気を付けた方が良いッス！きつと毘ッスよ！」

「まあ、俺が気に食わないと言う、挑戦状だろうな。」

「無視に限るッスよ！」

「落ち着けよ、翔。」

「友達が危険な目に遭いそうだったらそうなる前に止めるのが友達ッスよ！」

「挑戦状だったら問答無用で返り討ちにするだけだけどな。」

「…君のその自信はどこから来るんだ？」

その日も面白みのない初歩的なデュエルの講義が一日中続き、

時は流れて、放課後……

俺達4人はアカデミアの正面玄関の近くで集まっていた。

周りにはそれぞれの寮に戻ろうとする生徒達でこった返している。

「早く見てみようぜ？」

「で、アニキが何でそんなに興奮してるんスか？」

「だって、挑戦状ってことはデュエルって事だろ？」

「いや、まだ挑戦状とは決まってるぞ？或いは間違えて置かれたという可能性もあるからな。」

「俺もそうであることを祈りたい。」

俺は手紙を開封し、中を開く。

拝啓、親愛なる天空 優君様殿へ

今晚の8時にアカデミア島の灯台でお待ちしております。

あなたと2人つきりでお話したい事がありますので是非来てください。

手紙の内容はシンプルに時間と場所だけが書いてあり、字は綺麗で

丁寧に書かれていた。

明らかに差出人は認めたくないけど。俺が名指しになってる。

しかし、君様殿ってどんな言葉使いだ？

明らかに間違っているだろう……

「……………」

「明らかに優、君に名指しだな。」

「じゃあ、そこに行けば、デュエルできるんだよな？」

「それに呼び出されたのは、アニキじゃなくて優君ッスよ。」

「ちえ〜。」

「優、どうするんだ？」

「行くしかないだろう。余り気は乗らないけど……………まあ、悪戯だったらさっさと帰って……………」

「……………帰って？」「……………」

「その時は、十代、翔。憂……………デュエルしろ。」

「今、憂さ晴らして言いかけたッスよね！？」

「……………気のせいだ。」

「いや、絶対に憂さを晴らしと言おうとしたよな。」

「…空耳に決まっているだろう。」

「？デュエルだったらやるぜ。」

時間は約束の午後8時付近になろうとしていた。

俺は冗談で言った挑戦状が本当だったりした場合の事を考えて、デイスクとデッキも持参している。

現在、その場所へ向かっている途中だ。

「……………」

正直に言えば、怪しすぎる。

何故、こんな夜の時間帯で島の外れとも言える場所に呼び出したのかさえも。

これは悪戯の可能性が濃くなって来たな。

足を進めると夜の海を照らす灯台が見えて来た。

そして、その灯台の下で暗くて見えない1人の人影がいた。

あれが呼び出し人か……

「……………」

「来てくれたんだね。」

「…あなたか？この手紙の送り主は。」

「うん。そうだよ。」

待っていたのは1人のオベリスク・ブルーの制服を着た女子生徒だ。

そもそも、この学園にはオベリスク・ブルーしか女子生徒はいない。

後の話だが、約1名、例外はいるが……

女子生徒の特徴は、赤みがかかった桃色の髪で長さは腰ぐらいまである。

瞳の色は髪色とは違って、純粋な赤い瞳をしていた。

容姿は、整っており、可愛いという部類には入るだろう。スタイルは女性としては平均よりやや上位であると思う。

俺は生前でも女性とは余り無縁の学校・職場にいたため、会う機会

もなければ縁もない。悲しい話である。

「初めまして、ボクは神^{かんざき}？ 有栖^{ありす}。所属はオベリスク・ブルーの1年生だよ。」

「俺は……名乗る必要もないか。」

「まあね、ボクはキミの事を知っているし。」

「知っているのはあくまで名前だけだろう？」

「うっ……」

図星だったのか、神？は自己紹介する時のような明るい笑顔は消えていた。

まるで苦虫を噛み潰したような表情になる。顔に出やすいから分かりやすい奴。

「で、でもこれから一つずつ知って行くつもりだから良いよ。」

「何をとは突っ込まないが……こんな場所へ呼び出した要件は？」

「……ボクは……」

「？」

「ボクはキミの存在に心奪われた女だよ！」

「……は？」

「この気持ち、まさしく愛だよ！」

「……………」

「ボクはキミと出会えた事に運命を感じずにはいられないよ。やはり、ボクとキミは運命の赤い糸で結ばれていたみたいだね。」

こいつが今、言った言葉に対しては絶対に突っ込まんぞ。^{神？}

突っ込んだら負けな気がする。

何だ、この痛い人ともとれるような電波発言の数々は。

「……………悪いが、もうちょっと分かりやすく行って欲しい。」

「つまり、ボクはキミが好きなんだ！ボクと付き合ってくれ！」

「ふむふむ。なるほど……………何！？」

「そんなに意外だったかな？ボクはボクの持っている気持ちをキミにぶつけたに過ぎない。」

俺は一瞬、神？の言葉に耳を疑う。

俺の耳が正しければ、付き合って欲しいと言われた。

転生してから、言葉使いはともかく、女性から告白を受けたのは初めてだ。

「……ってか、何でだ？」

「簡単に言つと一目惚れだよ。ボクはキミを見た瞬間！電撃のようなモノが体中を駆け巡った。その思いはキミを見れば見るほど日に強くなっていた。」

「……………」

「それでキミの答えを聞かせて貰いたい。」

とは言つが、俺は神？の事を何一つ知らない。

それで「はい、付き合いますよ。」と言つのも危険だ。

或いは、俺の持っているシンクロモンスター目的に近付いて来ただけなのかもしれない。

彼女が^{神？}どういふ人間かと言つのを見極めてから返答する。

「しかし、俺はあなたがどういふ人物かと言つのを知らない。」

「……………」

「すみませんが、あなたの気持ちには答えられない。」

「つまり、キミはボクがどう言う人間かと言うのを知らないから答える事は出来ない。そういう事だね？」

「ああ……」

「ボクとて、そう簡単にキミをモノにできるとは思っていない。だけど、ボクはこれで諦めたりはしないよ。キミを絶対にボクだけのモノにしてみせる！！」

最早、物扱いか……

もう俺は何も突っ込まない。

いや、突っ込みを入れる気力すら失せた。

「……………」

「こんな夜遅くにボクなんかの私情のためにキミの貴重な時間を割いてしまって、ごめんね。」

「いや、こちらこそこちらの期待に添える事が出来なくて申し訳ないと思う。」

「では、レッド寮への夜道を気を付けてね。」

「それは此方の台詞だ。女性なんだから気を付けた方が良い。それに睡眠不足は健康に悪影響を及ぼす。」

「気を使ってくれるのかい？ありがとう。」

「こんな夜分に出ていると見つかったら何を言われるか分からんぞ？神？」

「有栖で構わないよ、優。それにそれはキミとて同じじゃないのかい？」

「こっちは大丈夫だ、大徳寺教諭は余り口煩くは言わないからな。」

それから数回言葉を交えると俺はレッド寮へ神？…有栖は女子ブル
ー寮へ戻って行く、その日はそのままベッドに入り込み眠りにつく。
しかし、あのようなキャラは原作にはいなかったな…おそらく、俺
が介入したことでアイツみたいな要因が入り込んでいるんだろう……

優 Side 終了

Side Change 有栖 Side

有栖 Side

フラれてしまった。

望む所だよ。

キミの口の言葉から出た優しさもあり、優しさもボクがキミに惚れ込むスパイスでしかない。

その証拠に益々、キミの虜となり、惚れてしまったよ。

優。ボクは諦めが悪い女だよ。だから、キミの視線を釘付けにする
!!

第5話 神？ 有栖（後書き）

はい、今回でヒロインが登場しました。

優「あんな変な奴がヒロインか……しかもボクっ娘か。」

有栖「変とは何さ！あれはボクなりのキミへ対しての愛情表現だよ。

┌

優「あの発言に関しては俺は何も言わんぞ。」

有栖「夫婦漫才をできるのはまだ（ガスッ！）」 優に殴られる

優「何が夫婦漫才だ。」

有栖「ゆ、優。ボクはキミからの愛を感じたよ……」

お二方、そろそろよろしいですか？

優「ああ……で、次回はどうなるんだ？」

次回は原作に戻り、月1テストの予定になる。

第6話 月一テスト VS カイザー

今日は月に一度行われるテストの当日であるが、俺、十代、翔の三人はアカデミアへの道を全力疾走で走っていた。

理由は簡単。十代の奴が寝坊し、俺と翔はそれを起こすのを奮闘していた為、遅刻する羽目になる。

更にいえば、レッド寮はイエロー寮やブルー寮よりも遠い為、余計に時間がかかってしまう。

「畜生、こんな日に寝坊するなんて!!」

レッド寮からアカデミア公舎へ向かう道の途中で荷台に荷物を積んだ軽トラックを押している一人の小母さんの姿があった。

あの人は確か、トメさんか。

原作では十代が助けているけど、見て見ぬ振りするのは後味が悪い。しかし、現実にはかなり時間が惜しい。

「翔！優！先に行つててくれ、あの人を助けてくる。」

「ええ！？でも、時間が……」

「困つてる人を放つては置けないだろ。俺も手伝う。人数が多い方

が早く行けるだろう。」

「アニキがやるなら僕も手伝うツスよ！」

俺達三人は軽トラックを押しているトメさんに駆け寄る。

「おばちゃん、大丈夫か！？手を貸すぜ。」

「ありがとうよ、坊や達。でも、遅刻しちゃうよ。今日はテストなんだろ？」

「遅刻がなんだ、困ってる人は放って置けない。」

「十代！翔とそっちに回って押してくれ！俺はこっちからこの人と押す。」

「分かった、行くぜ！翔」

「了解ツス！」

そして、約十数分後。軽トラックは上り坂を上り切り、無事に平坦な道まで押し切る。

「ここまで来れば大丈夫だ。ありがとうよ、坊や達。おかげで助かったよ。」

「大丈夫だって、困った時はお互い様って奴さ。」

「そっツスよ。」

「十代！翔！遅刻かも知れないが、これ以上遅刻すると不味いぞ！」

「って、あああ！！そうだった！じゃあ、またね！おばちゃん！」

俺達はトメさんと別れると一目散に教室へと駆け込んで行く。

教室の入り口では筆記試験の試験監督であるのか大徳寺先生が待っていた。

「十代君、翔君、優君。三人とも一五分の遅刻だにや〜。」

「すみませんでした。」

「早く席について試験を受けるのだにや〜。」

教室につくと大徳寺先生に急かされながら席に着く。

遅刻はしてしまっただが、テストの内容はどの科目も簡単であったため、すんなりと終了する。

「それでは、これで筆記試験は終了だにや。実技の試験は午後から体育館で午後2時から始まるのにや〜」

全ての筆記の試験が終了し、午後から実技の試験に移るのであるが、その間に昼食を挟んだ昼休みがある。

その昼休みの中で大地が話しかけて来る。話の内容は大方、試験辺りの事だろうな。

「優、十代や翔と遅刻したみたいだが、何かあったのか？」

「いや、十代の奴が寝坊してそれを翔と起こすのに手間取ってたら遅刻した。その途中で人助けもしていたからな。」

「人助け？」

「こつちの事だ、気にするな。それでお前の方は大丈夫なのか？」

「それなりに手ごたえはあったな。優は大丈夫なんだろう？」

「俺は向上心がないって訳じゃないが、必要最低限の点数が取れれば良いさ。」

「それよりもだ。午後の実技試験に備えて購買で新しいパックが販売されるみたいだが、優は行かないのか？十代と翔は一目散に行つたみたいだが……」

原作じゃ、確かクロノスの奴が生徒に化けてパックを買い占めて、買えなかった筈だ。

それを万丈目とその取巻共に渡して、それでも万丈目は十代に負けたからな。

「俺は大丈夫。それに負けても退学になるわけじゃないからな。」

「そうか、じゃあ、俺は午後に備えてデッキをもつ一度見直す事にする。またな。」

「ああ。」

大地がその場から去ると今度は入れ替わりで有栖が俺に近づいて来た。

「やあ、優。おはよう。」

「もう昼過ぎだけだな……」

「ふふふ。やはり、キミは手厳しいね。…でも、どうしたんだい？今日は遅刻したみたいだけど。」

「お前もそれか。」

「「も」とは、先ほどラー・イエローの友人と話していたようだけど……」

「その事と筆記試験の事で話していただけだ。」

俺は先ほど、大地に話したように有栖にも遅刻した理由を話す。

「キミらしいね。それでこそ、ボクの心を奪った人間だよ。」

「それでお前は良いのか？昼には新しいパックが発売されるみたいだけど。」

「ボクは昨夜、念入りに調整したから大丈夫だよ。そのデッキを信

じて戦うだけだよ。」

「そうかい。」

「ところで優。キミはもうお昼ご飯は食べたのかな？」

「いや…食べていないが何だ？」

「キミさえ良かったら、ボクと一緒に食べないかい？」

「そうだな…ならば、お言葉に甘えるところだよ。」

俺と有栖は見晴らしの良いアカデミアの屋上（原作では十代が昼寝などに利用する場所）にいる。

有栖が持参したランチボックスを開けるとそこには色取り取りで綺麗に纏まったサンドイッチが入っていた。

「随分と綺麗に入っているな…失礼だが、手作りか？」

「そうだよ。ボクお手製のサンドイッチだよ。」

「なら、一つ。頂くとするけど良いか？」

「どうぞどうぞ、召し上がれ。」

俺はボックスに入ったサンドイッチを一つ手に取り、

一口、パクリと口に含む。

「大丈夫？口に合うかな？」

有栖は俺の顔を見て、不安そうな視線を向ける。

「うん。悪くはない。寧ろ、美味しい。」

「本当に？」

「俺は基本的に冗談も嘘は言わないつもりだ。」

「良かった。キミのために早起きして作った甲斐があったよ。」

「もし、俺が拒否していたらどうするつもりだったんだ？」

「その時はその時だよ。」

相変わらず、良くわからない奴だ。

その後、俺と有栖はサンドイッチを食べながら雑談を交えての昼食を済ませる。

傍から見たら俺達って、仲の良い友達なのか、それとも恋人同士なのか。分からないな。

そして、昼休みが終了し、午後の実技試験が始まる時間帯となる。

生憎、俺はまだ呼ばれていないので体育館の近くで暇をつぶしていた。

「E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマンでダイレクトアタック！シャイニング・シュート！！！！」

「ぬわあああああ！！」

十代が予想通りに万丈目をあっさりと叩きのめして、勝負が決まる。

「ガツチャツ！楽しいデュエルだったぜ。」

「くそう…エリートであるオベリスク・ブルーの俺がドロップアウトボーイ如きに……」

「スーパービークロイド・ジャンボドリルでダイレクトアタック！」

「これで決まりだ。E・HERO アブソルートZeroでダイレクトアタック！瞬間氷結《Freezing at moment
》」

「イエロー・ガジェット！レッド・ガジェット！グリーン・ガジェットでダイレクトアタックを仕掛けるよ！」

翔や大地や有栖もあっさりと相手のライフを0にして勝利を収める。

大地はともかく、翔がここまで強くなれば、退学デュエルもそれなりに安定して勝てると思いたい。

初めて見たが、有栖はガジェットデッキか。あのタイプのデッキはアドバンテージを稼ぎやすいタイプのデッキだ。

後で有栖が許可を出したらデッキを弄らせて貰いたい。

「十代、翔、大地、お疲れさん。」

「おう、楽勝だったぜ。」

「優はまだ出番がないのか？」

「実技試験を受けてない生徒も少なくなってきたツスからそろそろじゃないの？」

俺達4人が戯れて話している所へ珍客が訪れてくる。

明日香と…有栖だった。

「お、明日香。」

「実技試験見てたけど、随分とあっさり勝っちゃったわね。3人も。しかも、十代はオベリスク・ブルーの万丈目君に勝っちゃったじゃない。」

「いや、優が最初にデッキを弄ってくれたからな。」

「後はお前らの自由で少し試行錯誤で組み替えて見るよ?。」

「分かってるっすよ、あのデッキにしてから僕もデュエルが楽しくなってきたっす。」

「優、ボクのデュエル見てくれた?。」

「ああ、見させて貰った。悪くはないと思う。」

「優、そっちの女子生徒は?。」

大地の言葉で十代、翔の視線が有栖に集まる…

「自己紹介はまだだったね。初めましてだね。ボクはオベリスク・ブルーの1年、神? 有栖だよ。」

「俺は遊城 十代だ。よろしくな。」

「僕は丸藤 翔っす。」

「俺は三沢 大地だ。よろしく頼む。」

「うん。よろしく。」

十代、翔、大地、有栖がそれぞれ自己紹介を兼ねた挨拶を交わしていると……

『オシリス・レッドの天空 優君。オシリス・レッドの天空 優君、

実技試験が始まりますので会場に来てください。オシリス・レッドの……』

どうやらようやく俺の番が回って来たらしい。

「お、いよいよ。優の番じゃねえのか？」

「優、君の腕前を見せて貰うよ。」

「ボク達は観客席でキミを応援してるから頑張ってね。」

「ああ、行ってくる。」

十代達と別れると俺は実技試験が開始される試験会場へと向かう。

相手は誰なのかは分からないが…俺は十代みたいに目立つ事はしていないから恐らくは一般のレッド生だと思う。

実技試験が行われる体育館で待っていたのはレッド生ではなく、青…オベリスク・ブルーの制服を着た男子生徒だ。

しかも、生前の時から良く見慣れた人物でもある。

「…クロノス教諭、何故、自分の相手がカイザー亮なのでしょうか

？」

翔の実の兄でサイバー流と言う名のチートドロで初手でサイドラ
x3 + 融合 or パワー・ボンドは珍しくもない。

更にゴオレンダア！は既に代名詞とも言える人物……カイザーこと、
丸藤 亮が俺の前で待っていた。

何でこいつが相手なんだ？俺はオシリス・レッド。オベリスク・ブ
ルーのカイザーと戦う理由がない。

「セニョールカイザーからの希望であなたを対戦相手に選んだノー
ネ。それにあなたは入学試験で優秀な成績を収めており、オシリス・
レッドの生徒では釣り合いがとれないノーネ。」

「天空 優だな。俺の名前は丸藤 亮。君の友人…丸藤 翔の兄だ。
君の事は翔から良く聞いている。遊城 十代と同じく、自分を変え
てくれた人間だと…」

「…なるほど。」

「あなたのようなドロップアウトボーイが学園最強と言えるカイザ
ーとデュエルできるなんて奇跡に近いノーネ。」

あの時の後攻1ターンキルのツケがここで来たか。それでカイザー
が相手か。

今、付いているデッキじゃ、厳しい…あの「デッキ」に交換する必
要がある。

「もしも、あなたがセニョールカイザーを破れたのならば、ラー・イエローを飛び越し、オベリスク・ブルーへの編入を認めますー。そんな事は100%ありえませぬーの。」

「……カイザー。実技試験のデュエル前にデッキを変えていいか？学園最強と言われたあなたが相手となれば俺もメインのデッキで手合せしなければならなくなる。」

「良いだろう。よろしいですか？クロノス教諭。」

「セニョールカイザーが良いのであれば、良いノーネ。精々、カイザー相手に頑張るノーネ。」

俺はディスクについているデッキを外し、ジャケットの中に置いてある生前からのメインデッキをディスクに装着する。

「君は複数のデッキを常に持ち歩いているのか？」

「そうだが、何か問題でもあるのか？」

「いや、気になっただけだ。」

「お兄さんが優君の相手なんスか。」

「優の奴いいなり、カイザーとデュエルできてさ。」

「だが、できるのか？別の寮の相手とのデュエルなんて……」

「先生に頼めばできるみたいよ？」

「へえ、ボク、全然知らなかったよ。」

「「デュエル！」」

優

LP：4000

亮

LP：4000

「先行は貰う。」

「良いだろう。」

「俺のターン、ドロー！」

優

手札：6

「俺は巨大ネズミを守備表示で召喚。」

巨大ネズミ

DEF：1450

優

手札：5

モンスター：1

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

優

手札：3

魔法・罫：2

「俺のターン、ドロ！」

亮

手札：6

「君の力を見せて貰おう。サイバー・ドラゴン・ツヴァイを攻撃表示で召喚。」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ

ATK 1500

亮

手札：5

モンスター：1

ツヴァイだと！？こっちのカイザーは既にツヴァイが既に入っている型か。

となれば……効果で名称を変えて来る筈だが、どう出てくる？

「サイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果、手札の魔法カードを1枚相手に公開する事でこのターンのエンドフェイズまでこのカードの名称をサイバー・ドラゴンとして扱う。俺は、魔法カード。融合を公開。よって、このターンのエンドフェイズまでサイバー・ドラゴンとして扱う。」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ サイバー・ドラゴン

やはり、名称を変えて来たか。

そして、融合を公開したという事は……来るか。

「俺は、手札より融合を発動。サイバー・ドラゴンとなったサイバー・ドラゴン・ツヴァイと手札のサイバー・ドラゴンを融合。いでよ、サイバー・ツイン・ドラゴン！！」

サイバー・ツイン・ドラゴン

ATK 2800

亮

手札：3

来たか。サイバー・ツイン・ドラゴン。

融合じゃなくて、パワー・ボンドで出されていたら、ワンターンキルされる所だったな。

「バトル！サイバー・ツイン・ドラゴンで巨大ネズミを攻撃！エヴオリューション・ツイン・バースト！！」

サイバー・ツイン・ドラゴン

ATK 2800

巨大ネズミ

DEF 1450

優

モンスター：0

「だが、巨大ネズミが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の地属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する。俺はデッキから2枚目の巨大ネズミを特殊召喚。」

巨大ネズミ

ATK 1400

優
モンスター：1

「しかし、サイバー・ツイン・ドラゴンは1度のバトルフェイズで2度の攻撃が可能。エヴォリユーション・ツイン・バースト!」

サイバー・ツイン・ドラゴン
ATK 2800

巨大ネズミ
ATK 1400

優

LP：4000 2600

「ちっ……っ」

Side Change Side 3人称

「優!……!」

「やはり、カイザーは強い。あの優でも防戦一方だ。」

「亮を相手にどこまでやれるのかしら…あの子。」

「大丈夫だよ。」

誰もがカイザーの有利と言う中、有栖は違う言葉を上げる。

「有栖？」

「優はまだ諦めてないよ。だって、あの顔はまだ勝負を捨てた顔じゃない。」

有栖は試験会場の優を直視している。

Side 3人称END

Side Change Side 優

「戦闘で破壊された巨大ネズミの効果にチェーンして、手札からモンスター効果を発動。」

流石に強い、この男相手では俺も本気で挑む必要があるか。

「このタイミングでモンスター効果？」

「このカードは自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊されて墓地に送られた時、手札から特殊召喚できる。極星獣タングニョーストを手札から特殊召喚。」

極星獣タングニョースト

DEF 1100

優

手札：2

モンスター：1

「更に巨大ネズミの効果で極星獣タングリスニを特殊召喚する。」

極星獣タングリスニ

ATK 1200

優

モンスター：2

「俺はこれでターンエンド。」

「俺のターン！」

優

手札：3

「俺は守備表示の極星獣タンゲニョーストを攻撃表示に変更。」

極星獣タンゲニョースト

DEF 1100 ATK 800

「（守備表示から攻撃表示にする？何を狙っている。）」

「この瞬間、極星獣タンゲニョーストの効果が発動、このカードが守備表示から攻撃表示へ表示変更がされた時、デッキからこのカード以外の極星獣と名のついたモンスターを1体を表側守備表示で特殊召喚する。チューナーモンスター、極星獣グルファクシを特殊召喚。」

極星獣グルファクシ

DEF 1000

優

モンスター：3

「チューナーモンスター……来るか。シンクロ召喚。」

「レベル3、極星獣タンゲリスニとレベル3、極星獣タンゲニョーストにレベル4、極星獣グルファクシをチューニング！」

3 + 3 + 4 = 10

グルファクシ、タングニョースト、タングリスニが天へ上がり、グルファクシは4つの緑の輪へと姿を変えて、タングニョーストとタングリスニはその輪の中へと入りこむ。

「10の星々が揃う時、この世と星界を繋ぐ扉が開かれる。古の武神よ、大いなる魔槌を携え、轟く轟雷と共にその姿を世に知らしめせ！シンクロ召喚、出でよ！星界の三極神の1体、極神皇トール！」

ディスクを使つて、こいつを呼んだのは初めてだが、本当にデカイ。原作のような出現の演出と来た。トールのデカさに比べるとサイバー・ツイン・ドラゴンが本当に小さく見える。

極神皇トール

ATK 3500

優

モンスター：1

「これがシンクロモンスターか…！」

「極神皇トールでサイバー・ツイン・ドラゴンを攻撃！サンダー・パイル！」

極神皇トール

ATK 3500

サイバー・ツイン・ドラゴン

ATK 2800

亮

LP:4000 3300

モンスター:0

「うう……やるな。」

「俺はターンエンドだ。」

「で、でええええ!!」

「極神皇ツール……!!」

「凄い……」

「…あれが優のメインデッキのエースカード。」

「す、凄い迫力ッス!」

「レベル10のシンクロモンスター…こんなモンスターまで居たとはな……」

「俺のターン!」

亮

手札：4

「俺はプロト・サイバー・ドラゴンを召喚。」

プロト・サイバー・ドラゴン

ATK 1100

亮

手札：3

モンスター：1

ツヴァイが入っていたからとは思ったが、やはりプロトも入っていたな。

「このカードはフィールド上で表側表示で存在する場合、サイバー・ドラゴンとして扱う。」

プロト・サイバー・ドラゴン

サイバー・ドラゴン

「融合発動！フィールド上のサイバー・ドラゴンとして扱うプロト・サイバー・ドラゴンと手札のサイバー・ドラゴン2体を融合。いだよ、サイバー・エンド・ドラゴン！！」

サイバー・エンド・ドラゴン

ATK 4000

亮

手札：0

モンスター：1

来たな…サイバー・エンド・ドラゴン。

「サイバー・エンド・ドラゴンで極神皇トールを攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

サイバー・エンド・ドラゴン

ATK 4000

極神皇トール

ATK 3500

「攻撃宣言時、リバーズカードオープン！」

「!?!?…このタイミングでは…攻撃反応型の罠か。」

「罠カード。神の柙楛グレイプニル。このカードは自分のデッキから極星と名のついたモンスターを1体手札に加える。俺が加えるのは、極星獣タングニョースト」

「そのカードは…！」

優

LP：2600

2100

手札：4

モンスター：0

魔法・罨：1

「俺はこれでターンエンド。（特殊召喚効果を使わなかった？何を狙っている。）」

「ぬふふふ、あのドロップアウトが出してきたカードには冷や冷やしましたが、流星はカイザーナーネ。もうすぐあのドロップアウトボーイをコテンパンなノーネ。」

「ほお、あれが噂に聞くシンクロモンスターと言うモンスターを使いこなす生徒ですね。」

「だが、このエンドフェイズに墓地の極神皇トールの効果が発動する。」

「!?!」

「このカードは破壊されたターンのエンドフェイズに墓地にある極星獣と名のついたチューナーをゲームから除外する事で墓地から特殊召喚できる。俺は墓地から極星獣グルファクシを除外する！冥界より再び蘇れ、極神皇トール!!」

極神皇トール

ATK 3500

「墓地に該当するモンスターが存在すれば、何度でも蘇るカード…
と言う訳か。」

「更にトールの効果が発動、このカードが自身の効果で墓地から特
殊召喚された時、相手に800ポイントのダメージを与える。」

亮

LP:3300 2500

「蘇生に加えて、効果ダメージか……！」

「俺のターン、ドロー！」

優

手札:5

「カードを2枚伏せてターンエンド。」

優

手札:3

魔法・罫:3

「俺のターン！ドロー！」

亮

手札：1

「サイバー・エンド・ドラゴンで極神皇トールを攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

サイバー・エンド・ドラゴン

ATK 4000

極神皇トール

ATK 3500

優

LP：2100 1600

モンスター：0

「ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー。」

優

手札：4

「（何とかして持ちこたえないとまずい……）カードを更に1枚伏せてターンエンド。」

優

手札：3

魔法・罠：4

「俺のターン！（これで終わりのようだな。）」

亮

手札：2

「サイバー・エンド・ドラゴンでダイレクトアタック！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「不味い！！この攻撃が通ったら…優は負ける！」

「優でもカイザーには勝てなかったか……」

「「優！」」

「リバースカードオープン！永続罠、ウィキッド・リボーン！このカードはライフを800ポイント支払う事で発動する。墓地に存在するシンクロモンスターを1体特殊召喚する！蘇れ、極神皇トール！」

極神皇トール

ATK 3500

優

LP : 1600
800
モンスター : 1

サイバー・エンド・ドラゴン
ATK 4000

極神皇トール
ATK 3500

優

LP : 800
300
モンスター : 0
魔法・罠 : 3

「自分のモンスターが破壊された時、極星獣タンゲニョーストを準備表示で特殊召喚する。」

極星獣タンゲニョースト
DEF 1100

優

手札 : 2
モンスター : 1

「カードを2枚伏せ、ターン…」

「エンドフェイズ前にリバースカードオープン。速攻魔法、サイクロンで…俺から見て右側のカードを破壊する。」

優

魔法・罫：2

亮

手札：1

魔法・罫：0

破壊されたのはリミッター解除：！？

何故発動しなかった、さっきのバトルフェイズのダメージ計算時に発動すれば、俺のLPは0になった筈：

「…………ターンエンドだ。」

だが、後1枚だ。カードが足りない。

あのカードが来れば、勝てる確率も上がる。

一か八か。ラストチャンス！！

「俺の…ターン…！！」

優

手札：3

「…………来た」

「！？（何を引いた…）」

「俺は、極星獣タングニョーストを守備表示から攻撃表示に変更。」

極星獣タングニョースト

DEF 1100 ATK 800

「そして、極星獣タングニョーストの効果が発動する。その効果でデッキから極星獣タングリスニを特殊召喚。」

極星獣タングリスニ

DEF 800

優

モンスター：2

「そして、通常召喚。チューナーモンスター、極星天ヴァナデイスを召喚！」

極星天ヴァナデイス

ATK1200

優

手札：2

モンスター：3

「来るか……ならば、リバーズカードオープン！！罨発動！無力の証明！」

「!?!」

「このカードは自分のフィールドにレベル7以上のモンスターがいる時発動できる。相手のレベル5以下のモンスターを全て破壊する。」

「

「なら、リバーズカードオープン！カウンター罨！神の宣告！ライフを半分にすることで相手の発動した魔法・罨、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚を無効にして破壊する!!」

「!?!」

無力の証明は神の宣告によって、無に帰される。

これで勝つ条件は全部そろった。

優

LP:300 150

魔法・罨:1

「レベル3、極星獣タンゲリスニとレベル3、極星獣タンゲニョー
ストにレベル4、極星天ヴァナデイスをチューニング！」

3 + 3 + 4 = 10

ヴァナデイスが手に持っている鎌を四振りすると、周囲に四つの輪が現れる。

その四つの輪にタンギリスニとタンゲニヨーストが吸い込まれて行くように入っていく。

「10の星々が揃う時、星界の神々を束ねし王よ。今こそ、その全知全能なる力を示せ！シンクロ召喚！出でよ、星界の三極神を束ねる最高神！極神聖帝オーデイン！！」

極神聖帝オーデイン

ATK 4000

予想はしていたけど。オーデインもデカイ……

トールの比じゃない位デカイ。

演出もとても神々しい演出と共に登場。

「極神聖帝オーデイン……！」

「うっひょー……、こいつもデケエな……」

「攻撃力4000……亮のサイバー・エンド・ドラゴンと互角。」

「極神聖帝オーデインでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！ヘブ
ンズ・ジャッジメント！！」

「サイバー・エンド・ドラゴン！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

オーデインから放たれた光の槍とサイバー・エンド・ドラゴンから放たれたエターナル・エヴォリューション・バーストが激突。

その光の余波でサイバー・エンド・ドラゴンとオーデインは消滅する。

戦闘は事実相打ちで終わる。

優

モンスター：0

亮

モンスター：0

「……………」

「相打ちか……………」

「いや、この勝負。俺の勝ちだ。」

「何?!」

「リバースカードオープン！永続罠、リビングゲットの呼び声を発動、墓地からモンスターを特殊召喚する。蘇れ！極神聖帝オーデイン！」

「カイザー、一つ聞きたい。…何故、リミッター解除を発動しなかった？発動していれば、あなたは俺に勝った筈だ。」

「俺は君の全力を見て見たかった。だからあえて使わなかった…が、その拘りが敗因になるとは思わなかったが……」

「……………」

「だが、負けは負けだ。潔く認めよう。」

「カイザー……………」

「俺は君に負けた。次のカイザーはキミと言う事になるだろうな。」

何を言っているんだ。この男は……………生憎だが、俺にはそこまでの器はない。

「その申し出は断らせて貰う。カイザーはあなたと言う……………丸藤亮と言う人間が持つ称号に相応しい。」

「……………次は俺が勝たせて貰うぞ。」

そう言い残すと、カイザーはその場から去って行った。

「優……………!!!!!!」

叫び声が聞こえたので振り向くと、十代、翔、大地に有栖が走って来た。

「すげえええよ！！優、カイザーに勝つちまうなんてさ！！」

「凄いッスよ！優君！お兄さんに勝つなんて。」

「まさかとは思ったが、逆転勝ちするとは…大したものだよ、君は。」

「優！」

有栖は勢いが余ったのか、俺に抱き着いて来た。

「あ、有栖！？」

「もう最高だよ！優、流石はボクが心から惚れた人だよ。もうキミ以外眼中に入らないよ。」

『天空優君、素晴らしいデュエルでした。』

「……………」

俺は有栖を引きはがしてから、校長が体育館の放送室から話し声が聞こえた。

横ではクロノスが真っ白になっている姿が見えていた。

よほど、ご自慢のカイザーが負けたのがショックだったのだろう。

『最初の約束通り、君をオシリス・レッドから異例のオベリスク・ブルーへの昇格を認めよう。』

「ちよつと待った。校長。」

俺は校長の言葉で遮る。

『何かな？』

「その申し出は断らせて貰う。」

俺の言葉に校長だけでなく、観客席の連中も耳を疑う

『何故かな？察が変われば施設も良くなる。悪くはない話だと思うのだが。』

「……俺はラー・イエローの連中もオベリスク・ブルーの連中も嫌いと言つのが最大の理由です。」

『！？』

「俺は差別と言つ言葉が一番大嫌いな言葉です。俺はこの学園から差別と言つ言葉・行為そのものが生徒全員・教師全員から無くなるまでオシリス・レッドに残留するつもりです。その代わりにこちらの要求を答えて貰いたいのですが……。」

『……我々に答えられる要求であれば。』

「こちらの要求はレッド寮の改築と増築。それに食事の改善。」

『……それ位ならば、了承しよう。』

そして、俺は大声を上げながら叫ぶ。

「オシリス・レッドのみんな！！聞こえてるか！！一番下の落ちこぼれなオシリス・レッドでも、努力すればまぐれでも奇跡でも何でも良い！！一番上のお山のお猿の大将気取りのエリート気取りのオベリスク・ブルーに勝てる事を俺と十代はここで証明した！！だから落ちこぼれだからと馬鹿にされても気に病むな！！言いたい奴に言わせて置けば良いんだ！！そうだろ！！オシリス・レッドのみんな！！！！」

『おおおおおおおおお！！！！！！！！！！』

俺の声に賛同したのか、オシリス・レッドの制服を着た生徒達が雄叫びあげ、その後。

『十代！十代！十代！十代！十代！』

『優！優！優！優！』

と俺と十代コールが続き、俺はさらに…

「俺に言った事に文句があるオベリスク・ブルーとラー・イエローの雑魚共！文句があるなら俺に挑戦して来い！その鼻っ柱を首元から片っ端から押し折って引導を渡してやるからな！！！！」

と宣戦布告をする。俺が引き起こした騒動の沈黙にかなりの時間を

要した。

その後、十代もラー・イエロー昇格だったのだが、辞退し、俺と十代はオシリス・レッド残留と言う形で月一テストは終了する。

その日はパーティとなりレッド寮では、寮生全員でどんちゃん騒ぎで大いに騒いだ。

後日、業者がやって来て、レッド寮の改築作業が開始され、食事も前より豪華な物となった。

俺は後で大徳寺先生に「公の場であんな行動は控えてほしいにや」と釘を刺される事となる。

それから数日の間、俺の行動が気に入らなかったのかオベリスク・ブルーヤラー・イエローの連中を軽く無双する仕事をしなければならなかった……

今回の最強カード

優「今回の最強カードは極神聖帝オーデイン」

極神聖帝オーデイン

シンクロモンスター

レベル10 光属性 天使族 ATK 4000 DEF 3500

シンクロ素材：「極星天」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

効果：1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。

このカードはエンドフェイズ時まで魔法・罠カードの効果を受けない。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、

そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する「極星天」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚
ドロウする事ができる。

主な収録パック：「STORM OF RAGNAROK」

優「星界の三極神を束ねる神と称されているカードだ、1ターンに
1度、全ての魔法・罫の効果を受けない効果を持つ。相手に破壊さ
れた時、墓地の極星天とついたチューナーを除外する事で墓地から
特殊召喚し、ドロウする効果を持つ。光属性のため、オネストにも
対応。更に天使族であるため、墮天使スペルビアやアテナの効果に
対応している。」

有栖「攻撃名はヘブンスジャッジメント、効果名はインフルエンス・
オブ・ルーンだよ。」

第6話 月一テスト VS カイザー（後書き）

今回も終了！

優「米版カード使って良いのか？」

オリカよりは幾分マシだと思っっているんだが、

有栖「今回の優のデッキは？」

その紹介をして、終了。

優「次回は制裁編か？」

次回は、その下準備で某若本さんが出ますのでご期待を…

それで今回優ちゃんが使用したデッキです。

【獣軸極星獣】…シナジীর合う極星獣とそれに対応した獣族で周りを固めたデッキ

更に極星獣グルファクシの他に極星天ヴァナデイスを採用しているため、トールだけでなく、ロキやオーディンのシンクロ召喚も可能。他にもゾンビ・キャリアやグローアップ・バルブを採用しているため、多彩なシンクロが可能。

第7話 闇のゲーム!? (前編)

「…廃寮探検？」

「ああ。この島に使われてない寮があるんだってさ、だからさ、今から探検しに行こうと思うんだ。優も一緒に行こうぜ。」

月一テストが終わって、オベリスク・ブルーヤラー・イエローの連中が乗り込んで来なくなり、数日後の晩。

寮の食事が終わり、部屋で暇を持て余していた俺の所へ十代が訪ねてきた。

後ろには一緒に行くのか、翔と隼人の姿もある。

これって確か…特待生のブルー寮へ行って、若m…じゃなかった、タイタンとデュエルするんだったか？

断って良いけど、どう見ても言い出しっぺは十代っぽい気がするからな。ごねられても面倒だからな……

「まあ……良いけど。」

「おし、そう来ないとな。」

そこから遠くに離れた特待生のブルー寮へ向けて足を運ぶ。

「でも、隼人が来たがるのは意外だぜ。普段は授業に出るのも面倒くさがるのによ。」

「俺は勉強が嫌いとかそういう訳じゃないんだな。ただ……」

「ただ？」

「ただ、デュエルで勝つ事だけの授業が嫌なんだな。」

「でも、デュエルで勝つ事以外に勉強する事なんてあるの？」

「えっと……あ、あるよ。きっと、例えば闇のゲームとか。」

「闇のゲームねえ……」

そんな雑談じみたやり取りをしていると例の特待生のブルー寮の前までやって来る。

「や、やっぱり怖そう……アニキ、やっぱり止めましょうよ。」

「何言っただよ、ここまで来て引き下がれるかよ。」

いざ入ろうとするが、十代を引き留めようとする翔。

やっぱり、無理やり誘われたって感じだな……

ガサツ……

次の瞬間、ガサツと言う物音がした瞬間。

「で、でたー！ー！！」

と隼人と翔が騒ぎ出し、十代が音がした方に懐中電灯を向けると……

「明日香さん!?!」

「明日香!?!」

「あなた達、こんな時間にどうしてここに。」

「へへ、ちよつと夜の探検にね。」

「止めて置いた方がよいよ。」

その場にいる誰もない声が響く。

俺はその方を向くと……

「またお前か。」

「やあ、こんばんは。優、今夜は良い夜だね。こつしてキミと会えたんだから。」

とても年頃の少女の口から出たとは思えない口説き染みた言葉を並べる有栖が懐中電灯を手に現れる。

「有栖！？どうしてあなたが？」

「ジュンコとももえから聞いたんだよ。キミが夜な夜な寮を抜け出しているって聞いたからね、ちょっと後をつけさせて貰ったよ。」

「……そう。」

「それで何でだよ？」

「キミ達も噂で聞いた事はないのかな？…この寮で行方不明者が何人も出ているって。」

「そんなの噂だろ？噂が怖くて探検が出来るかっての。」

「それにここは立ち入り禁止になっているよ。アカデミア側に知られたら騒ぎも大きくなるよ。これは冗談じゃなくて、忠告だよ？」

有栖と明日香はそう言い残すと去って行く。

「アニキ、やっぱり噂が本当ならやばいよ。」

「入ってみればわかるさ。行くぞ。」

「う、うん。」

「何もなかったら戻るだけだ。」

「翔はそこで待ってるか？」

「え……ま、待ってくれよー！ー！！僕も行くよー！ー！！」

翔はやはり怖いのか。俺達と共に入って行く。

行方不明者が出たという特待生のブルー寮へ……

「……埃だらけで長い間使われてなかったって感じだな。」

「でもオシリス・レッドの寮とは大違いだな。いつそ、俺達こつちに引っ越さねえか？」

「アニキ、僕は絶対に嫌だからねっつ！！！！」

「俺もなんだな……」

俺達は懐中電灯を当てながら壁を見ていた。壁には千年アイテムと思われる物の壁画が飾られていた。

しかし、こんなものを良く見つけられたと思う。

「千年アイテムってのは7つあったんだな……ん？」

「どうした？十代。」

「見るよ。あれ……」

十代が懐中電灯を壁にあてている先を見ると、そこには一枚のブル
ーの生徒の写真が飾られていたが、その写真は、GXの作中に幾度
とトラブルを引き起こした某人物の写真。

後に明日香も言っていたが、操られていた方が良かったんじゃない
かと思う。

その写真の右下の方にサインなのか、「FUBUKI 10 JO
IN」と書かれていた。

「どうしたのアニキ、優君。」

「ああ、ここの生徒っぽい写真なんだけどな……え〜と、何だこれ。」

「ふ……ぶ……き……10……ジョイン?」

「……10……TEN……ジョイン……天上院!？」

「天上院って……明日香さんと同じ苗字……」

刹那

遠くの方から悲鳴が聞こえる。

「「「「「!」」」」」

「アニキ、今の声！」

「行ってみよう！」

俺達は悲鳴が聞こえた方向へ走って行く。

通路を抜けると、広い場所に出る。所々にはこの寮の備品があり、それにはシーツが被せられていた。

「！」

十代は階段を駆け下りて行く、その先には1枚のカードが落ちていた。

「アニキ、そのカードは……」

「ああ、明日香のエトワール・サイバーだ。」

「十代、何かを引き摺ったような跡があつちに。」

引き摺った後を辿るとまた通路に入り、壁はまるで即席で作ったようなトンネルのような荒い作りとなっていた。

走ってそこを抜けると、また広い場所に出る。そこはまるで遺跡のような場所だ。

「明日香っ……！」

「……有栖っ……！」

明日香と有栖が棺桶のようなものに収まっている。

って、原作では明日香だけの筈が有栖まで捕まっていた。

「ふっふっふっふっふっふ……くおの者達の魂は、深き闇へと沈んでいる。」

「誰だ！」

この若本声は……

そして、煙の中から仮面をかぶった一人の男があられてきた。

「いようこそ。我が名は、タイタン。闇のデュウエリスト。」

若本キター……！！！！！！

って、何で俺は、こんなにテンションが上がってるんだ？

「貴様、明日香と有栖に何をした！！！」

「わあたしは闇のゲームを操る闇のデュウエリストよ。」

「闇のゲーム！？」

「ふざけるな、闇のゲームなんてある訳ないだろう！！！」

「ふふふ、試してみれば分かるだろうよ。小僧……ここは何人も入ってはならない禁断の領域い。そして、我はその誓いを破りし者に制裁を降す者なりい。」

「…有栖と明日香は返して貰う。」

「私に闇のゲームで勝てるならなあ、天空 優。」

何で俺の名前を？

恐らくはクロノスの野郎の差し金か？

「…十代、リュックに入ってるディスクを貸せ。」

「気をつけるよ。」

「ああ………」

最初はインチキだが、途中からマジで闇のゲームに突入するからな。

「後悔するなよ。小僧。」

「……………」

俺はポケットからデッキを取り出し、ディスクのホルダーに装着する。

「「デュエル！」」

優

LP:4000

タイタン

LP：4000

「先手は取らせて貰う。」

「勝手にしろ、若本。」

「わあたしは若本ではない。タイタンだ！ドロー。」

タイタン

手札：6

「私はインフェルノクインデーモンを攻撃表示で召喚っ！」

インフェルノクインデーモン

ATK 900

タイタン

手札：5

モンスター：1

やはり、デーモンデッキか。

「だけど、デーモンデッキはスタンバイフェイズ毎にライフを支払うというでっかい代償を持つ長期戦になれば、優の方が有利になるぜ。」

「代償だとお？ふふふ、そんなもの必要ない。このカードの前ではな。フィールド魔法発動、バンディモニウム万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 。

タイタン

手札：4

フィールド魔法：バンディモニウム万魔殿 - 悪魔の巣窟 -

「何だよ、このフィールドは…」

「場に存在するとき、デーモンモンスターの欠点であるスタンバイフェイズ毎に支払うライフコストを払わず済むと戦闘以外でデーモンと名のついたモンスターが破壊された時、破壊されたモンスターのレベル未満の「デーモン」と名のついたモンスターをデッキから手札に加える効果がある。」

「何!?!」

「ふふふ、詳しいではないか小僧お。私はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

タイタン

手札：2

魔法・罫：2

「俺のターン。」

優

手札：6

一気にシンクロ召喚で場を有利にするしかない。

今はイカサマの闇のゲームだけど、後から本気の闇のゲームになるからな……

「俺は手札からレスキューキャットを通常召喚。」

レスキューキャット

ATK 300

優

手札：5

モンスター：1

「レスキューキャットの効果でこのカードを墓地に送る事でデッキからレベル3以下の獣族モンスター2体を特殊召喚する。俺はデッキからX-セイバー エアベルンと極星獣タンギリスニを特殊召喚。」

X-セイバー エアベルン

ATK 1600

極星獣タンギリスニ

ATK 1200

優

モンスター：2

「バトル！極星獣タンギリスニでインフェルノクインデーモンを攻撃！」

極星獣タンギリスニ

ATK 1200

インフェルノクインデーモン

ATK 900

「甘いわあっ！リバーズカードオープン！畏発動、ヘイト・バスタ

ー！」

「!?!」

「このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。相手の攻撃モンスター1体と攻撃対象となった自分モンスター1体を破壊する。」

優

モンスター：1

タイタン

モンスター：0

魔法・罫：1

「そして、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手

ライフに与える。貴様のモンスターの攻撃力1200、よって、1200ポイントのダメージを受けるお。」

「ぬぐ……くっ……！」

優

LP:4000 2800

すると、タイタンは偽千年パズルを取り出す。

「ふふふふ……消えていくぞお……LPの減少と共にお前の体があ。徐々に消える。」

「！」

「優っ！」

「優君の体が……！」

見ると、俺の体の一部が消えている。

これはイカサマだけど、良く出来ていると褒めたいところだ。

「言った筈だぞ、小僧お。闇のゲームは始まっているとなあ。」

「……」

「発ち込めてきた黒い霧が……重く黒い霧が貴様達を包む。苦しいだろおっ？」

「何だ……この息苦しさは。」

「う……」

「これが闇のゲーム。」

「こおれが闇のゲームのプレッシャーだ。貴様達の足は動かず、誰もこのゲームから逃げる事は出来ない。」

「な、何でだよ。足が動かねえ。」

「体も動かないよ、アニキ。」

「ふふふ……もがけ、苦しめ……だが、その苦しみさえ、懐かしいと思う時が来る。闇のゲームの敗者に待ち受ける者は、永遠の闇だからなあ。」

「……………」

「さあ、小僧。まだ貴様のターンのバトルフェイズだ。だが、その前に万魔殿バンディモニアム-悪魔の巣窟-の効果を発動、デッキからデーモンと名のついたモンスターを手札に加える。破壊されたインフェルノクインデーモンのレベルは4よって、レベル3のデスルークデーモンを手札へ加える。」

タイタン

手札：3

「X・セイバーエアベルンでダイレクトアタック。」

X・セイバー エアベルン

ATK 1600

「じぶう……じぶう……」

タイタン

LP:4000 2400

条件は同じなのか、タイタンの体の体の一部も消えて行く現象が起こる。

「更にX・セイバー エアベルンの効果発動、このモンスターが直接攻撃で戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚捨てさせる。」

「ぬう……私の手札は3枚。さあ、選べ小僧。」

「……俺から見て、左側のカードを捨てる。」

タイタン

手札:2

「カードを1枚伏せ、ターンエンド。このエンドフェイズにレスキ
ューキヤットの効果で特殊召喚されたX・セイバーエアベルンは破
壊される。」

優

手札：4

魔法・罠：1

モンスター：0

「私のターン、ドローフェイズ前にリバーズカードオープン。永続
罠、リミット・リバーズ。このカードは攻撃力1000以下のモン
スターを墓地から特殊召喚する、私はインフェルノクインデーモン
を墓地から特殊召喚する。」

インフェルノクインデーモン

ATK 900

タイタン

モンスター：1

「そして、私のターン、ドロー。」

タイタン

手札：3

「そして、スタンバイフェイズ。インフェルノクインデーモンの効果でデーモン1体の攻撃力1体の攻撃力を1000ポイント上昇する。私はインフェルノクインデーモンを選択。」

インフェルノクインデーモン

ATK 900 1900

「更に墓地のプリズンクインデーモンの効果が発動、バンディモニアム万魔殿 - 悪魔の巣窟 - が表側表示で存在し、このカードが墓地に存在する時、自分のスタンバイフェイズ毎にフィールド上に存在するレベル4以下の悪魔族モンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。」

「な……何時の間に」

「貴様には感謝しているぞお。貴様のおかげでこのカードを墓地へ送る事が出来たのだからなあ。」

「……さっきのハンデス効果か。」

「そうだあ……私の手札を減らすつもりだったのだろうが……貴様は自分で自分の首を絞めたに過ぎない。私はその効果で同じく、インフェルノクインデーモンを選択。」

インフェルノクインデーモン

ATK 1900 2900

「攻撃力2900!？」

「不味いんだな。今の優の場はガラ空きなんだな！」

「更に私は手札からジェノサイドキングデーモンを召喚っ！」

ジェノサイドキングデーモン

ATK 2000

タイタン

手札：2

モンスター：2

「これで終わりだ。小僧！インフェルノクインデーモンでダイレクトアタック!!！」

「優っ!!！」

「優君っ!!!!！」

インフェルノクインデーモン

ATK 2900

「俺は手札からバトルフェーダーを特殊召喚！」

「ぬう!？」

バトルフェーダー

DEF 0

優

手札：3

モンスター：1

「このカードは相手がダイレクトアタックを宣言して来た時、手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる。」

「おのれえ…しぶとい小僧だ。だが、私の勝利に揺るぎはない。ターンエンドだ。」

「危なかった……」

「首の皮一枚で繋がったんだな。」

「冷や冷やさせんなよ。優。」

インフェルノクインデーモン

ATK 2900 900

「俺のターン。」

優

手札：4

だが、状況はどう見ても俺の方が劣勢だな。あれをどうにかしないとこつちに勝ち目はないか。

仕方ない……余りやりたくはないが、四の五の言っている余裕はない。

「アレ」を出すしかない……

「永続罨、リビングゲデッドの呼び声。墓地からモンスターを特殊召喚する。戻って来い、レスキューキャット。」

レスキューキャット

ATK 300

「更にレスキューキャットの効果でこのカードを墓地に送り、デッキからレベル3以下の獣族モンスター2体を特殊召喚。俺はデッキからX-セイバーエアベルンと極星獣タングニョーストを特殊召喚。」

X-セイバー エアベルン

ATK1600

極星獣タンゲニョースト

ATK 800

優

モンスター：3

「そんな雑魚モンスターをぞろぞろ並べても意味はないだろう。」

「これを見てもそんな口が叩けるかな？」

「何い？」

「レベル1、バトルフェーダーとレベル3、極星獣タンゲニョーストにレベル3、X・セイバーエアベルンをチューニング！」

「ち、チューニングだとお？」

1 + 3 + 3 = 7

「7つの星々が揃う時、美しき黒き薔薇が放たれる。」

「な、なんだなんだ？優の周りに沢山の花びらが舞っているんだな。」

「お、また違うシンクロ召喚か！」

「一体、優君ってシンクロモンスターって何体持つてるんだらうね

「？」

翔：その質問に対しては沢山とだけ言っておこう。

数が多すぎて、数えるのが面倒だ。

「シンクロ召喚！現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ブラック・ローズ・ドラゴン
ATK 2400

優

モンスター：1

今回の最強カード

優「今回の最強カードはブラック・ローズ・ドラゴン」

ブラック・ローズ・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル7 炎属性 ドラゴン族 ATK 2400 DEF 1800

シンクロ素材：チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上
効果：このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊することができる。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする。

主な収録パック：「CROSSROADS OF CHAOS」

優「レベル7の素材を選ばないシンクロモンスター。シンクロ召喚時に全ての場のカードを破壊する効果と墓地の植物族モンスターを

除外し、相手の守備モンスターを攻撃表示にし、その攻撃力を0にする効果を持つ。植物族以外だと第2の効果はあまり使われないな。一部のデッキだったらダンディライオンや効果を使った後のグロリアップ・バルブがコストにできる。」

有栖「攻撃名はブラック・ローズ・フレア、全体破壊効果名はブラック・ローズ・ガイル、攻撃力を0にする効果はローズ・リストリクションだよ。」

第7話 闇のゲーム!? (前編) (後書き)

ここで一旦区切りましょう。

優「おい、中途半端にくだくだなのにそれで良いのか。」

作中だつてデュエルが前編後編になつてゐるんだから良いだろう?

有栖「で、ボクと明日香はいつになったら助けてくれるの?」

優ちゃんと若本の決着がつくまで我慢しろ。

有栖「分かったよ。優、お願いだから早く助けて!」

第8話 闇のゲーム!? (後編) (前書き)

何人もの行方不明者が出ていると言われている廃寮へ探検に来た優達。

その最中、寮内に響き渡る悲鳴を頼りに向かった先に居たのは、「闇のデュエリスト タイタン」と名乗る謎の男。

彼は明日香と有栖を人質に闇(?)のデュエル仕掛けてきた。

デュエルに応じた優であるが、タイタンのデーモンデッキに思わぬ苦戦を強いられる。

反撃の糸口として、優が召喚したのはブラック・ローズ・ドラゴン

第8話 闇のゲーム!? (後編)

「レベル1、バトルフェーダー、レベル3、極星獣タングニョーストにレベル3、X-セイバーエアベルンをチューニング!」

「ち、チューニングだとお?」

1 + 3 + 3 = 7

「7つの星々が揃う時、美しき黒き薔薇が放たれる。シンクロ召喚! 現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン!」

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK 2400

優

モンスター: 1

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果、このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードを全て破壊する。」

「なあんだと!？」

「全てを飲み込め、ブラック・ローズ・ガイル！」

場は花卉が散り乱れて、それによりタイタンの場のモンスターと万魔殿《パンデモニウム》は破壊される。

「よしっ！！これで万魔殿とモンスターは全滅だ。」

パンデモニウム

「気張れ！気張るんだな、優。」

「ここから優君の反撃開始ッス！」

優

モンスター：0

タイタン

モンスター：0

魔法：罨：0

フィールド魔法：無

「おのれえ……しかし、ジェノサイドキングデーモンは手札のデスルークデーモンを墓地へ送る事で墓地から特殊召喚される。」

ジェノサイドキングデーモン

ATK 2000

タイタン

手札：1
モンスター：1

「せっかく、破壊したモンスターがまた復活しちまった。」

「（墓地のモンスターは……5枚なら。）魔法カード貪欲な壺を発動。墓地のモンスターを5枚デッキに戻してシャッフルし、その後デッキから2枚ドロウする。俺はブラック・ローズ・ドラゴン、極星獣タンゲリスニ、極星獣タンゲニヨースト、2枚のX-セイバーエアベルンをデッキに戻し、2枚ドロウする。」

「ここで手札増強カードだとお？」

転生後は、レスキューキャットが復帰しているので墓地にモンスターが溜まりやすくなったから貪欲な壺の発動がし易くなった。

こうして使うと本当にレスキューキャットが禁止カード入りしたのも納得する。

1枚がレベル4、5、6のシンクロモンスターやランク2、3のエクシーズモンスターになられたら叶わないな。

ブリューナク、ゴヨウになられたらそれこそ、手札に除去がなければ、相手はほぼ手詰まり状態になるな。

優

手札：5

こっちの手札は5枚、デッキに戻して、さっきのドロワーで再び、レスキューキャットは手札に来た。

だが、何を出すかだ。デーモンデッキには場にデーモンと名のついたモンスターがいる時、相手モンスターのコントロールを永続的に奪う装備魔法、フォーリン・タウン墮落がある。

あれがもし手札にあった場合、返しのターンにモンスターを引かれたら、確実にコントロールを取られる。

そうだったら、もう手も足も出ない。ここぞという時の防御カードのバトルフェーダーはもう使ってしまったからな。手札にサイクロンもモンスターを除去するカードはない。

どうすればいい……装備魔法……魔法？

「……俺はレスキューキャットを召喚。」

レスキューキャット

ATK 300

優

手札：4

モンスター：1

「またそいつか。いい加減に飽き飽きして来たぞ。その表情を見る

のはなあ……」

「黙れ、レスキューキャットの効果発動、このカードを墓地に送ってデッキからレベル3以下の獣族モンスターを特殊召喚する。俺は極星獣タンギリス二とエレファンを特殊召喚。」

極星獣タンギリス二

ATK 1200

エレファン

ATK 500

優

モンスター：2

「レベル3、極星獣タンギリス二にレベル2、エレファンをチューニング！」

3 + 2 || 5

エレファンとタンギリス二は天へと舞い上がり、エレファンは2つの輪へと変わる。

「5つの星々が輝く時、自然界を守護する白虎の怒りが木霊する。シンクロ召喚！いざ、吼えろ！ナチュラル・ビースト！」

ナチュル・ビースト
ATK 2200

優

モンスター：1

「ナチュル・ビーストでジェノサイドキングデーモンに攻撃。」

ナチュル・ビースト

ATK 2200

ジェノサイドキングデーモン

ATK 2000

「つぬうう……………」

タイタン

LP：2400 2200

モンスター：0

「ターンエンド。」

「私のターン、ドロー。」

タイタン

手札：2

「！……クククク、クアツハツハツハツハツハ。」

「！」

「な、何が可笑しいんだ！？」

「気味が悪いッス……」

「小僧お。ここまで私を追い込んだのは褒めてやる……しかしあし、それもここまでだ。私はデーモン・ソルジャーを召喚っ！」

デーモン・ソルジャー

ATK 1900

タイタン

モンスター：1

手札：1

「……………」

「更に装備魔法、フオーリン・ダウン墮落発動！このカードは場にデーモンと名のついたモンスターがいる時発動、相手のモンスター1体のコントロールを得る。貴様のモンスターは頂く。」

「何!?!」

「不味いんだな!これじゃ優の場にモンスターがいなくなってしまうんだな!」

「優君!」

「ふ、それはどうかな?」

「何いゝ?」

「吼える!ナチュル・ビースト!」

ナチュル・ビーストが吼えるとナチュル・ビーストに近寄って来た黒い影は消滅し、フォーリン・ダウンタイタンの場の墮落が破壊された。

タイタン

魔法・畏:0

手札:0

「馬鹿なあ……何故、フォーリン・ダウン墮落が破壊された?私の場にはデーモン・ソルジャーが存在するのに何故?」

「ナチュル・ビーストの効果、このカードが表側表示で存在する時、自分のデッキから2枚墓地へ送る事で魔法の発動を無効にして破壊する。」

「何だと!？」

「デッキから2枚墓地へ送る事で魔法を無効化…なんて恐ろしい効果なんだな。」

「うへえ……あのモンスターが出たら、俺何もできねえよ。」

十代、ビーストだけならまだマシだぞ。

これでパルキオンまで並んだら、もう魔法・罫が使えなくて事実モンスターだけで戦わなければなくなるからな。

「どうする?お前のターンはエンドか？」

「くそ……ええい!!！」

タイタンは懐からまた偽千年パズルを取り出す。

すると、偽千年パズルの紋章の部分から眩ゆい光が放たれる。

「な、何だこれ!？」

「ま、眩しい。」

光が収まった後にはタイタンの姿はどこにも存在していなかった

いかさまで消えていた俺の体も元に戻っていた。

恐らくは逃げて行ったか。

そして、明日香と有栖が入っていた棺桶はそのまま、置いてあった。

「あれ？あの男、何処へ行っちゃったんだろう。」

「恐らく、自分の状況が不利になったと思ったから目暗まして俺達の視界を一時的に奪って逃げたんだろうな。」

「デュエルなら最後まであきらめずにやれって言うんだよ……」

「さっさと明日香と有栖を連れて、ここから早く出るぞ。」

「そうなんだな。」

俺達は明日香と有栖を連れて、廃寮の外へ出る。

「おい、明日香。しっかりしろ。」

「明日香さん。有栖さん。」

「有栖、目を覚ませ。起きろ有栖。」

俺達の言葉が聞こえたのか、2人とも眼をあける。

「お、気が付いたか。」

「あなた達、どうしてここに……」

「ボク達は確か……」

「悪かったな2人とも、危ないめに遭わせて。」

「2人を襲った人は優君が追っ払ってくれたから大丈夫ツスよ。」

「え？」

「本当に？」

「ああ、自分の状況が不利だと分かったのか。デュエルを中断して逃げられたがな……。」

「優の奴、大変だったんだぞ？闇のゲームを持ち込まれて、急に体の一部が消えるし。」

「「闇のゲーム!?!」」

あれはほぼ、イカサマだったから何事もなかったけどな。

本来ならタイタンが闇にのまれて本物の闇のゲームに突入する筈だったんだが、

肝心のタイタンが逃げてしまったからな……

「でも、2人が無事で良かったツスよ。」

「優…ごめんね。ボク達のせいで危険なめに遭わせて…」

「もう過ぎた事だから気にするな。」

「早く寮に戻った方が良さそうね、もう時期夜が明けらわ。こんな所にいたら面倒事になりかねないわ。」

既に面倒事が今日の昼頃に起こっているかもしれないがな……

その後、十代はブルー寮内で見つけた某人物の写真を渡して、俺達4人はレッド寮へ、有栖と明日香は女子ブルー寮へ引き上げていく。

ドンドンドンドンドン

部屋に戻って、仮眠を取っていると、外が何やら騒がしい音が聞こえてきた。

それから間もなく、扉を何度も叩く音が聞こえて来た。

……とうとう来たな。

「開ける！天空優！いるのは分かっているんだ！早く開ける！さもなければ、この扉を爆破する！」

改築が始まったレッド寮の部屋を爆破されるのは少々困るため、大人しく扉を開ける。

そこには原作通り、緑色の制服を着たアカデミア倫理委員会の連中がいた。

「お前を査問委員会へ連行しごはっ！！」

「連行するのは構わないがもう少し静かにしろ。今、何時だと思ってるんだ周りの住人の迷惑も考える。この駄犬共が……」

俺の前において、部屋を爆破するなどと言ってきた女の顔面を思いっきりぶん殴り、ぶっ飛ばしてやった。

その女の鼻から鼻血が出ているが俺は気にしない、因果応報だ。

それから十代、翔、隼人の部屋へ押し入り俺と同じような感覚で一緒に連れて行かれることとなった。

今回の最強カード

優「今回の最強カードは、ナチュラル・ビースト。」

ナチュラル・ビースト

シンクロモンスター

レベル5 地属性 獣族 ATK 2200 DEF 1700

シンクロ素材：地属性チューナー+チューナー以外の地属性モンスター1体以上

効果：このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る事で、魔法カードの発動を無効にし破壊する。

主な収録パック：「DUEL TERMINAL -反撃のジャスティス!-」

優「地属性のチューナーと地属性のモンスターでシンクロできるシンクロモンスター。デッキの上から2枚墓地へ送ることで魔法の発動を無効にし、破壊できる。その効果は強力だが、ホルスの黒炎竜

Lv8と違い、デッキから2枚墓地へ送る必要があるため考えて効果を使わないと気が付けばデッキがない。と言つ事にもなり兼ねない。攻撃力が低いのが唯一の欠点でもある。」

第8話 闇のゲーム！？ (後編) (後書き)

やっとこさ、若本編が終了です。

優「デュエルシーンは前回で全部入れても良かったんじゃないのか？」

まあ、いいさいいさ。ためしに書いてみたかった前がきのコメントも見てみたいし

??「きゃあああああぁぁぁぁぁー！！！！！！！！」

有栖「！？誰か落ちて来たよ？」

??「あいたたたた……！」

今回のゲストとして、バラランシヤ様作、「遊戯王GX」蒼空を駆る女神」の主人公の芹沢神楽さんに来て頂きました。

神楽「芹沢神楽です、よろしくね！優君、有栖ちゃん。」

優「どうも。」

有栖「こちらこそよろしく。神楽さん。」

後、バラランシヤ様。こちらも何時でもお気軽に優ちゃんと有栖ちゃんはお貸ししますよ。

優・有栖「は(え)？」

そういう訳だから、優ちゃんはもっと友好的に。有栖ちゃんは何時でも問答無用で優ちゃんへの愛の言葉を叫ばないように。

優「お前…しばくぞ？」

神楽「そ、それで次回はどうなるの？」

制裁デュエルを突き付けられますが……

有栖「が、何？」

その続きは、次回にて。

第9話 制裁デュエル通告 優、暴走？

「ええええええ！！！？退学う~~~~！！！？？」

十代と翔は口を揃えて叫びだす。

俺達は校長室へと連行されて行き、そこには校長だけでなく、クロノスもいた。

それからしばらくして、明日香と有栖も連中に連行されてきた。

そして、俺にぶっ飛ばされた女が右頬を赤くし、鼻にティッシュを詰めながら口を開く。

はっきり言ってその顔は間抜けとしか言いようがない。

「本日未明、遊城十代以下6名は閉鎖されて、立ち入り禁止となっていた特別寮に入り込み、内部を荒らした。調べはついている。」

「な、何でもいう事を聞くからチャンスくれよ〜。」

そればかりは不味いのか十代は返答する。

それを見かねたクロノスが口を開いた。相変わらず不気味な顔だな。

「それならば別のペナルティの方法を提案すルーノ。それは制裁デ

ユエル。」

「制裁デュエル？」

「その通り、遊城十代、丸藤翔。君達がタッグを組み、天空優。あなたはシングルでデュエルするーノ。デュエルに勝てば無罪放免ナノーネ。」

「ちょっと待って下さい！私と有栖と隼人君はどうなるんですか？」

「セニョーラ明日香とセニョーラ有栖はオベリスク・ブルーであり、成績優秀者であるため。無罪放免なノーネ。そして、セニョール隼人は既に留年している身でもあるノーデ不本意であります、特別措置として、一週間の寮室謹慎処分とするノーネ。」

こいつは相変わらず、エリート鼻根な野郎だな。

「どうする？十代、翔。」

「へへ、面白そうじゃんか。」

「ええ？不味いツスよ、アニキ。」

「良いでしょう、その条件…引き受けましょう。」

「如何でしょう。校長、本人達も納得したようですが。」

「ううむ…ならば。仕方あるまい。」

「負けたら即退学、制裁デュエルの相手は追って私から発表すルー

「ね。」

「へへ、頑張ろうぜ。翔。」

「う、うん。」

それは良いが、こちらも思っていた事を返させて貰う。

「ならば、校長。こちらからも聞きたい事があります。」

「…何かね？」

「貴様、自分の立場が分かっているのか!？」

倫理委員会の女が口を開くが、俺は無視して、校長に視線を向ける。

「自分達はその閉鎖されていたと言う特別寮への侵入に関しては、事実であり否定はしません。ですが、閉鎖すると言うならば、そのまま寮を残して置かずに取り壊すのが普通ではないかと思うのですが？」

「……………」

だんまりか、なら……さらに追及してみるか。

「それともあの寮を調べられる、或いは徐になつては不味い秘密でもあるというんですか？噂ではかつて行方不明者が何人もあの寮で

出ているようですが？」

「……………」

「貴様！！いい加減にしないか！さもなければ問答無用で退学にさせるぞ！」

倫理委員会の女が俺の前に立ち、俺の胸ぐらを掴んでくる。

ブチイッ！！

…………俺、もう我慢の限界だ。
この女を^{ママ}ブチのめしてやる！

優 Side 終了

Side Change 三人称 Side

三人称 Side

「……………おい。」

「何だ、そのt」

倫理委員の言葉が途中で途切れて何も喋らなくなる。

それもその筈、優が査問委員に再び、正拳を放ち、倫理委員は諸に受ける。

「俺は校長に話を聞いてんだよ……てめえみてえな。上の命令にか聞けなくて、尻尾を振る事しか能のない駄犬に用はねえんだよっつ……！駄犬の分際で人の会話に割り込んだじゃねえ！駄犬は駄犬らしく、地面にへばり付いて、尻尾を振りながら地面でも舐めてろっつ……！」

「があっ……！」

ドガバキドカバキドカドカバシツ……！！

そこからはもう一方的と言わんばかりの猛攻。

入学してからの付き合いでもある十代、翔はもちろんの事。

隼人、明日香、有栖も優の変貌に啞然としていた。

「退学になるっつーならよ？てめえを徹底的にぶちのめしても文句

ねえよな？あぁっつ！！？」

「ゆ……る……」

「許せだぁ？てめえが俺をここまで怒らせたんだろぅが、だつたら自分自身を恨むんだなぁ？」

優は先ほど、自分がやられたように倫理委員の胸倉を掴む。

倫理委員の顔は見るも絶えない位、酷い有様になっていた。

「せ、セニョール天空。落ち着くノーネ。そして、暴力は止めるノーネ！」

「あぁっつ？！てめえもこの駄犬と同じ目に遭わせてやるぅか！？そんでそのおかつば頭を血で紅く染めてやるぅか？この野郎がっ！」

「ひiiiiiiii…ば、暴力反対なノーネ。」

クロノスは優を宥めようとするが、逆効果でしかなく。

ただでさえ、クロノスを嫌っている優にとっては火に油を注ぐ所か、ガソリンを注ぎ、更にその中にダイナマイトを放り込む行為に等しく、返って優を刺激しかねなかった。

「優、落ち着けよ！」

「優君、落ち着いてほしいッス！」

「そんな事をしたら益々、キミの罪が重くなってしまっ！そうなら、ボクは嫌だよ。」

「！」

十代や有栖達の言葉が効いたのか、優は倫理委員の胸倉を掴んでいた手を放す。

「チツ……こんな犬を叩きのめしても面白くねえ。」

「優……（良かった…これでボクの知っている優に戻ってくれる。）

」

「こいつはお釣りだ。取つとけ！！！」

ズガアアアンツツ！！！！

優は最後に倫理委員に向かって、踵落としを放つ。

倫理委員はその一撃を受けて、床に沈む。

「」「」「あ……………」

「おい、この程度で死ぬんじゃないぞ？てめえは泣く子も黙るアカデミア倫理委員会様だろ？」

「うう……………」

優の言葉に対して、倫理委員会は呻き声とも取れるような声で返す。
倫理委員はその後、保健室へ搬送される。

保健室では保険医の鮎川先生は倫理委員の状態を見ると、顔を引き
攣らせながら……

「いったい、何があったんですか？」

「うう………怖……い」

と何かに怯えていたらしい。

「……先程の自分の発言に関してですが、これは自分個人で思っ
ていた事ですので深くは気に留めなくて結構です。それに先ほどの倫
理委員会の委員への暴行行為に関しての処分も受けます。」

「ならば、君を制裁デュエル当日まで寮室での謹慎とする。」

「……分かりました。」

優は先ほどの優とはとても同一人物とは思えない位落ち着き、低姿
勢な態度で鮫島校長の辞令を受け取る。

倫理委員会を徹底的に叩きのめした事で優は一部ではこう呼ばれるようになった。

「オシリス・レッドの眠れる破壊神」

とそれは彼自身も知らない事実でもある。

三人称 Side 終了

Side Change 優 Side

優 Side

……やってしまった。なんという失態だ、万死に値しそう。

寮へ戻ってから俺は、大徳寺教諭からも自室謹慎を言い渡され、部屋に戻ってから、俺は激しい自己嫌悪に陥っている。

十代達からは「元番長か」って聞かれてしまう……その時の十代達の表情はとても引き攣っていた。

正直言つて、俺自身は短気ではないと思つているが、生前時の友人からしてみれば、「十分短気」らしい。

俺は、自分自身がどれだけ貶されようが馬鹿にされようが受け流せるが、自分の親しい人を貶す言葉・行為などを見る。

或いは、差別や誰がどう見ても理不尽と言える行為などを見れば、もう理性の歯止めが完全に効かなくなつてしまう。

そつなつたら、誰が相手だろうと徹底的に叩きのめす始末。

生前時であるなら相手の顔は原型を留めてないのは確實であり、下手をすれば自分の指の骨が折れるまで殴り続けていた記憶もある。

しばらくは収まらない筈なのだが、有栖達の言葉で何故か分からないが自然と落ち着きを取り戻せた。

「優、いるか？」

寮室謹慎とは言つが、風呂や食事等の時間以外に部屋から出るのを禁止されているだけでそれ以外は何も規制はない。

俺の謹慎を聞いたのか、大地が部屋へ訪ねてくる。

「大地、どうしたんだ？レッド寮まで来て。」

「いや、十代から優が謹慎になつたつて聞いたんだが、何をしたん

だ？」

「まあ、ちよつと色々とな……それよりもさ、十代と翔のタッグデュエルの特訓をしてやってくれないか？」

「タッグデュエル？」

そういえば、大地は制裁デュエルの事を知らないんだっとな。

俺は大地に大まかな説明をする。

「だから、頼む。あの2人をフォローしてやってほしい。多分、有栖や明日香も頼めばあの2人も協力はしてくれると思う。」

「分かった。だけど、お前の方は大丈夫なのか？」

「俺の方は大丈夫だ。もし、必要なカードがあると思ったら俺の部屋に来てくれれば、カードは渡す。俺は部屋から出られないからデッキ調整をするときは俺の部屋です……と言つ事で良いか？」

「分かった。じゃあ、また来るぞ。」

「ああ。」

その日から俺は昼間は部屋でデッキを調整しながら暇つぶし。夕方からは十代と翔のタッグデュエルの成果を大地、隼人、明日香、有栖から聞き、その改善案などを出していた。

途中から明日香や有栖がやっているなら自分達も手伝つと明日香と有栖の中等部からの友人でもある。枕田ジュンコや浜口ももえも加わる。

「だんだんお2人とも息があって来ましたわ。」

「うん、最初2人とも足を引っ張り合っていたけどね。」

「まあ、誰でも数さえ熟せば、できるようになる。」

「……………」

「どうしたんスか？有栖さん。」

「いや、あの時の優と本当に同一人物なのかなって……………」

有栖、それは俺自身もかなり気にしてるんだ。

「寧ろ、凄いなだなアカデミア倫理委員会相手に一步も引かないって……………」

「鮎川先生が凄い顔で引き撃っていたわよ。」

「そんなに凄かったのか？」

大地、ジュンコ、ももえは見ていないのか。十代達に尋ねる。

「凄いなんてもんじゃないわよ…………あれ、もう元不良とかってそういうレベルじゃないわ。」

「言っておくが、俺は不良じゃないぞ。逆に（生前時の）中学時代は学校中に不良を片っ端から全員叩きのめして、再起不能にさせた事もあったな。」

「無双したって訳ッスね。」

「売られた喧嘩は買う。そして、大幅な釣銭を貰って帰る。それが俺の流儀だったからな。」

まあ、その甲斐あって生前時の中学時代は根性無しが多かった生徒会の用心棒も務めていたからな。

「でも、あれはやり過ぎだと思っよ。」

「いや、まだマシだ。有栖達が止めてなければ、俺の指の骨が折れるまで殴り続けていたかもしれない。」

「……………え？」「……………」

「でも、基本は滅多な事じゃ怒らないから大丈夫だから安心しろ、少なくともお前らにはキレるつもりはない。」

俺の指の骨云々に関しては、本気と書いてマジと読む位真面目な話である。

話は俺の生前時の中学時代まで遡る。

俺の所属していた部活……剣道部なんだが、その部活に下級生達に嫌がらせをする先輩（一応、年上なので敬意は払う）が数人程いた。嫌がらせは徐々にエスカレートし、ついには竹刀で叩く行為にまでなった。

そこまで来たら、俺も我慢の限界になって、その先輩たちを全員ボコボコに叩き潰した。

途中で謝罪の言葉が出ていたが、俺はそれでも容赦なしに殴り続けた。

拳句の果てには、自分達がしていた行為の如く、竹刀で徹底的にぶっ叩き続ける。

その竹刀は直ぐに折れてしまったが、そうなたらまた拳で殴る行為に変わった。

騒動後、その先輩たちは部活内でやっていた行動が公になって、部活を強制退部後、病院へ搬送。

俺も数週間の謹慎の上、指の骨を数本折ってしまう事になり、事実痛み分けに等しかった。

そして、いよいよ。運命の日…制裁デュエルの当日を迎える。

俺もここで負けたら先が見えない第2の生活を送る羽目になってしまふ。

それだけは避けなければならない。

「よう！優、準備は出来たか？」

十代が扉を開けて訪ねてきた。後ろには翔と隼人の姿もある。

「ああ、十代と翔は。」

「勿論、僕達も準備完了ッス！」

「よし、行くか。」

「おう！」

「うん！」

「優、十代、翔。俺はお前達がこの寮へ戻って来るって信じてるぞ。」

俺も観客席で応援してるぞ。」

「ああ、頼んだぜ。」

「行ってくる。それで勝って、みんなでパーツとパーティーでもするか。」

「お、それは良いな。」

そして、俺達はレッド寮からアカデミアへと向かう。

十代と翔の相手は迷宮兄弟だと思っが、俺の相手は誰なんだろうな。

初代のキャラクターの誰かが出て来るのは確かだろうか……

優 Side 終了

Side Change 3人称 Side

3人称 Side

デュエルアカデミアを目指して、1台のヘリが海上を飛行していた。

そのヘリには操縦者の他にも後部座席には2人の男が乗っていた。

1人は日本人。茶色の髪が特徴的で白いマントのような物を羽織っている。

もう1人はアメリカ人。銀色の長い髪が特徴的で長さ故に片目が髪に隠れており、赤いスーツに身を包んでいた。

「もうじき、デュエルアカデミアです。」

「……分かった。」

操縦者の言葉に日本人の方の男が静かに答える。

「いよいよ、あなたが運営するというデュエルアカデミアにつくのですね。どのようなデュエリストが待っているのか、本当に楽しみデース。」

「貴様を乗せるのは不本意ではあったが、デュエルモンスターズ関係の事となれば、話は別だ。」

「噂に聞いていたシンクロモンスター、どのようなカードなのか、本当に楽しみで仕方ありません。」

日本人の方の男はアメリカ人の方の男を嫌そうな眼で見る。

アメリカ人の男はそれを全く気にしていない素振りを見せる。

へりは徐々にデュエルアカデミアへ向けて飛行して行く。

「ふうん、久々に心が騒ぐ。」

へりに搭乗していた日本人の方の男は小さな声でそう呟く。

第9話 制裁デュエル通告 優、暴走？（後書き）

次回は制裁デュエル、十代&翔編でお送りします。

優「しかし、デュエルシーンがないと本当に短いな…」

その代わり、優ちゃんにはキレて貰いました。

優「そんな理由でキレていたらこの先、やって行けない気がしてならないのは気のせいかな？」

第10話 制裁デュエル 十代&翔編

俺達3人はアカデミアのデュエル場に辿りつく。

俺達が到着していた時には既に観客席には何人もの生徒が大勢集まっていた。

「おー、集まってるな。」

「僕、こんな大勢の前でデュエルするの初めてだよ。」

「だから燃えるんだろ。」

十代は翔の頭をわしゃわしゃと掻く。

その様はまるで子犬同士がじゃれ合うような感じである。

「もうアニキったら〜。」

「まあ、平常心で行こう。」

俺達はゆっくりとデュエル場へ上がる。

「それでは、これよりデュエルを開始するノーネ。」

クロノスの声で観客席のギャラリーが湧き上がる。

「シングルとタッグ、どっちから始めるんだ？」

「まずは、タッグデュエルから始めるノーネ。」

最初にタッグとなれば、俺は後になるか。

「そして、タッグデュエルの相手は、あのデュエルキング、武藤遊戯と戦ったことのある伝説のデュエリストナノーネ。」

クロノスの声と共に上がって来たのは2人の男…

双方ともはg……墓、頭を丸めており、そして、頭部には黒字で「迷」と「宮」と書かれていた。

「我ら流浪の番人。」

「迷宮兄弟。」

「お主達に恨みはないが…」

「故あり、対戦する。」

「我らを倒さねば…」

「道は開けん！」

「いざ、勝負！」

クロノスが伝説と言っているけど、そこまで伝説じゃないと思うが

な。

遊戯と戦った事がある。伝説のデュエリストじゃ、小学生とかでも伝説のデュエリストって意味合いじゃないのか？

「では、両者。位置について。」

俺は邪魔になると思いデュエル場から降りて、見守る事にする。

原作とは違い、タッグデュエルの練習を山のようにしたし、十代と翔のデッキも十二分に強化されている。

少しは楽な戦いになるだろう。

「タッグパートナーへの助言は禁止なノーネ、パートナーのフィールドと墓地も自分のフィールドと墓地として扱えルーノ、両チームライフポイントは8000ノーネ、では!!!」

「『デュエル!!!』」

十代 & 翔

LP: 8000

迷宮兄弟

LP: 8000

「僕のターン、ドロー！」

翔

手札：6

「僕は永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動！」

翔

手札：5

魔法・罨：1

「自分の融合デッキから融合モンスターを選択して、その融合モンスターの融合素材をデッキから墓地へ送り、2ターンの自分のスタンバイフェイズに融合モンスターを特殊召喚する。僕は、極戦機王ヴァルバロイドを選択、このカードの融合素材は、「ロイド」と名のつくモンスター五体。よって、デッキからドリルロイド、ステルスロイド、スチームロイド、サブマリノロイド、トラックロイドを墓地へ送る。」

デッキ圧縮を行って来たか。それに呼び込むよりも墓地回収の方が手順的には早い。

「エクスペレスロイドを召喚！」

エクスペレスロイド

DEF 1600

翔

手札：4

モンスター：1

「エクスプレスロイドは召喚に成功した時、自分の墓地にあるこのカード以外のロイドと名のついたモンスターを手札へ加える。僕はドリルロイドとスチームロイドを手札に加える。更にカードを1枚伏せる。」

翔

手札：5

魔法・罫：1

「ターンエンド！（ルール上、最初の1ターン目は誰も攻撃ができない。次の僕のターンから攻撃が可能だ。）」

「私のターン、ドロー！」

迷

手札：6

「私は地雷蜘蛛を召喚。」

地雷蜘蛛

ATK 2200

迷

手札：5

モンスター：1

「私はこれでターンエンドだ。」

「行くぜ、俺のターン！ドロー！」

十代

手札：6

「俺はE・HERO エアーマンを召喚！」

E・HERO エアーマン

ATK 1800

十代

手札：5

モンスター：1

「エアーマンが召喚に成功した時、デッキからHEROと名のついたモンスターを手札に加える。俺はE・HERO フェザーマンを手札に加える。」

十代

手札：6

「更にカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

十代

手札：5

「私のターン、ドロー！」

宮

手札：6

「私はカイザー・シーホースを召喚。」

カイザー・シーホース

ATK 1700

宮

手札：5

モンスター：1

「更に魔法カード、生け贄人形を発動。自分の場のモンスター1体を生贄にすることで手札からレベル7のモンスターを特殊召喚する。私は兄者の場の地雷蜘蛛を生贄に手札から風魔神・ヒューガを特殊召喚。」

風魔神ヒューガ
ATK 2400

宮

手札：3

モンスター：2

迷

モンスター：0

「タッグパートナーのモンスターを利用して、最上級モンスターを呼び出した。」

「この連携、流石だわ。」

「それにタッグデュエルを前提としたデッキ構築にもなっている。」

「お二人は大丈夫でしょうか？」

「すまぬ、兄者。」

「いや、お前のためならば犠牲にともなるう。」

「だが、それでは私の気がすまない。私は兄者を対象に魔法カード、闇の使命者を発動。」

宮

手札：2

「カード名を1枚選択、そのカードが相手のデッキに入っていれば、相手はそのカードを手札に加える。私が選択するのは雷魔神・サンガ。」

「ふふふ、ありがたい。勿論、我がデッキに雷魔神・サンガは私のデッキに入っている。」

迷

手札：6

「私はこれでターンエンド。」

「僕のターン、ドロー！」

翔

手札：6

未来融合 - フューチャー・フュージョン (1ターン目)

「…僕は、融合を発動！手札のドリルロイド、スチームロイド、サブマリクロイドを融合！スーパービークロイド・ジャンボドリルを融合召喚！」

スーパービークロイド・ジャンボドリル

ATK 3000

翔

手札：2

モンスター：2

「(カイザー・シーホースは1体で2体分の生贄に出来るダブルコストモンスター。…残しておいたら、確実に雷魔神・サンガの生贄にされてしまう。今のうちに倒さないと行けない。でも、迷宮兄弟の兄の場合はガラ空き…ダイレクトアタックをできるチャンス。でもこれ以上上級モンスターを呼ばれたら僕とアニキは不利になる一方だ。…なら。)スーパービークロイド・ジャンボドリルでカイザー・シーホースを攻撃！」

スーパービークロイド・ジャンボドリル

ATK 3000

カイザー・シーホース

ATK 1700

「させん！風魔神・ヒューガの効果発動！」

「え！？」

「このカードは1度だけ、相手モンスターの攻撃力を0にする。ス
トーム・バリケード！」

「しまった！！」

「そうは行くか！風魔神・ヒューガの効果発動にチェインして、リ
バースカードオープン！」

「何！？」

「速攻魔法、禁じられた聖杯！このカードはフィールド上のモンス
ター1体を選択して発動する。そのモンスターの攻撃力を400ポ
イント上げる。俺が選択するのは風魔神・ヒューガだ！」

風魔神・ヒューガ		
ATK	2400	2800

「こちらのモンスターの攻撃力を上げてどうするつもりだ？」

「慌てんなよ、おっさん。禁じられた聖杯にはもう1つ効果がある。
それはこのターンのエンドフェイズまで指定したモンスターのモン
スター効果が無効化する！」

「何いいい!?!」

「よって、風魔神・ヒューガの効果は不発。よって、翔のスーパービークロイド・ジャンボドリルの攻撃力は3000のままだ。」

迷宮兄弟

LP:8000

6700

十代

魔法・畏:0

宮

モンスター:1

「うぬううう……」

「アニキ!」

「おっじゃあ、このまま。ガンガン行こうぜ!翔。」

「うん。僕はこれでターンエンド。」

「私のターン、ドロ!」

迷

手札:7

「魔法カード天使の施し、デッキから3枚ドロし、手札から2枚捨てる。」

「……！」

本来ならば上級モンスター…特に最上級モンスターは先ほどの生贄人形のようにサポートカードを利用するなど戦法や墓地からの特殊召喚などで最小限のリスクで出すのが基本的な戦術だ。

先ほどの翔の攻撃でカイザー・シーホースは破壊され、ダメージを受けた。次はどんな手を打って来る……

「私は魔法カード、死者蘇生。自分並びに相手の墓地よりモンスターを特殊召喚する。私は弟の墓地からカイザー・シーホースを選択する。蘇れ、カイザー・シーホース！」

カイザー・シーホース
ATK 1700

迷

手札：6

モンスター：1

「カイザー・シーホースは光属性モンスターを召喚するとき、1体で2体分の生贄とすることができる！カイザー・シーホースを生贄に出でよ！雷魔神・サンガ！」

雷魔神 - サンガ
ATK 2600

迷

手札：5

モンスター：1

「更に装備魔法、早すぎた埋葬を発動、ライフを800ポイント支払い。墓地からモンスターを特殊召喚する。蘇れ、水魔神 - スーガ！」

迷宮兄弟

LP：6700

5900

水魔神 - スーガ

ATK 2500

迷

手札：4

モンスター：2

魔法・罫：1

「そんな、何時の間に……」

「そうか、さっきの天使の施しで捨てて、そこから早すぎた埋葬に

よる蘇生か。」

「何て事だ、一気に3体のモンスターを……」

「いいえ、まだ終わりじゃない。」

「そして、我等兄弟の場には3体の魔神が揃った！」

「見せてやろう、究極のモンスターを……」

最上級モンスターを3体リリースの効果の持たない3750で蘇生もできないモンスターが究極なのか？

この時代だったらまだ、青眼の究極龍の方が強いと思うがね……

あつちは手札融合もできるし、サポートが多い、通常モンスターでもあるから素材も揃えやすい。

「究極の……ギョ!？」

「ほおー……」

「これは壮観ですよにゃー」

「校長、セニョール大徳寺、席に戻ってくださいー。」

「私達も近くでみたいのだよ。ねえ、大徳寺君。」

「そうですねにゃー、何よりうちが監督する生徒のデュエルを間近でみたいのにゃー」

「駄目でスーノ。」

「別に良いじゃないか、ここにも1人いるぞ。今更、1人、2人増えても問題はないだろう。」

「ドロッパアウトボーイの分ぞ。」「ああっ?」「……な、何でもありませんーノ。」

とりあえず、軽く威圧を込めたどの低い声でクロノスを黙らせた。

しかし、この程度で引つ込むなんて案外チキンだな。

「水魔神 - スーガ! 風魔神 - ヒューガ! 雷魔神 - サンガ! この3体が揃った時、3体を生贄にする事でこのカードは特殊召喚できる。出でよ! ゲート・ガーディアン!!!」

ゲート・ガーディアン

ATK 3750

迷

手札: 3

モンスター: 1

宮

モンスター: 0

「ゲート……」

「ガーディアン……」

「行けえ、ゲート・ガーディアン！スーパービークロイド・ジャンボドリルを攻撃！魔神衝撃波！」

ゲート・ガーディアン

ATK 3750

スーパービークロイド・ジャンボドリル

ATK 3000

十代&翔

LP:8000 7250

「うわあああああ！……！」

「翔！」

「彼らのデッキはタッグ用に組み上げられたデッキ、そう隙はない。」

「おまけに兄弟だけあって、息もぴったりだわ。」

「私はこれでターンエンドだ。」

「へへへ、ワクワクして来たぜ。俺のターンだ！ドロー！」

十代

手札:6

「俺は融合を発動！手札のE・HERO フェザーマンと場のE・HERO エアーマンを融合！E・HERO Great TORNADOを融合召喚！！」

E・HERO Great TORNADO
ATK 2800

十代

手札：4

「攻撃力2800か、我等のゲート・ガーディアンには遠く及ばない！！」

「それはどうかな？」

「何?!」

「E・HERO Great TORNADOの効果発動、このカードが融合召喚に成功した時に相手フィールド上に存在する全モンスターへの攻撃力と守備力を半分にする。タウン・バースト！」

「何だどっつ!!?!?!?!」

ゲート・ガーディアン

ATK 3750 1875

DEF 3400 1700

「攻撃力1875……」

ただでさえ中途半端な数値しかないゲート・ガーディアン
の攻撃力が更に中途半端になったな。

「行け！E・HERO Great TORNADO！ゲート・
ガーディアンを攻撃！スーパーセル！」

E・HERO Great TORNADO
ATK 2800

ゲート・ガーディアン
ATK 1875

迷宮兄弟

LP：5900 4975

『おおおおおおおおお！……！』

十代達がゲート・ガーディアンを破壊したら会場が歓声に包まれる。

そつえば、原作の時もそうだったな。

「あり得ないーノ、背中かイーノ伝説のデュエリストの最強モンス
ターが……」

「おかしな事はありませんよ。彼らもこのデュエルアカデミアの生徒なんだから。」

「俺はこれでターンエンドだ。」

「…少し油断していたようだ。」

「まさか、彼らにゲート・ガーディアンが敗れるとは…」

「「だが…！」」

「！？」」

「我等の本当の切り札を使う時のようだ、私のターン、ドロ―！」

宮

手札：3

「私は魔法カード、ダークエレメントを発動！！」

ダーク・エレメント（アニメオリジナル）

通常魔法

自分の墓地に「ゲート・ガーディアン」が存在する場合に発動する事ができる。

ライフを半分支払う事で自分のデッキから「闇の守護神 - ダーク・

「ガーディアン」を特殊召喚する。
このカードを発動する場合、このターン他のモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。

「来たか……」

「このカードはゲート・ガーディアンが墓地にある時、発動する！
ライフポイントを半分払いデッキから闇の守護神　ダーク・ガーディアンを特殊召喚する！」

闇の守護神　ダーク・ガーディアン
ATK 3800

迷宮兄弟

LP：4975 2487.5 2488

俺も初めて見たぞ。ライフポイントの小数点の切り上げとか。

こんな数値は転生前でも見たことない。

闇の守護神・ダーク・ガーディアン（アニメオリジナル）
効果モンスター

レベル11 闇属性 戦士族 ATK 3800 DEF 3500

このカードは通常召喚できない。
「ダーク・エレメント」の効果でのみ特殊召喚する。
このカードは戦闘では破壊されない

「行け！闇の守護神 - ダーク・ガーディアン！ E・HERO Gr
eat TORNADOを攻撃い！！ダーク・シヨック・ウェーブ
！！」

闇の守護神 ダーク・ガーディアン

ATK 3800

E・HERO Great TORNADO

ATK 2800

十代&翔

LP: 7250

6250

「くううううう！！！！」

「アニキ！」

「まだまだ、これからだ！そうだろ！翔！」

「私はこれでターンエンドだ。」

「僕のターン！ドロー！」

翔

手札：3

未来融合・フューチャー・フュージョン（2ターン目）

「この瞬間、フューチャー・フュージョンの効果が発動！その効果で極戦機王ヴァルバロイドを融合召喚！」

極戦機王ヴァルバロイド

ATK 4000

翔

モンスター：1

「攻撃力4000だと!？」

「僕は魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動!!フィールド・墓地に存在するモンスターを除外して、E・HEROと名のついた融合モンスターを特殊召喚する。アニキ!力を借りるよ!」

「おう!!お前に俺のHEROの力を託すぜ!」

「僕は墓地のドリルロイドとアニキの墓地にあるE・HERO エアーマンを除外する。E・HERO ガイアを融合召喚!!」

E・HERO ガイア

ATK 2200

翔

モンスター：2

手札：2

「だが、しかし。所詮は2200どまりだな。」

「E・HERO ギアの効果！このカードは融合召喚に成功した時、相手の場のモンスター1体の攻撃力を半分にして、その数値だけ攻撃力をこのカードに加える！！」

「何！？」

E・HERO ギア

ATK 2200 4100

闇の守護神・ダーク・ガーディアン

ATK 3800 1900

「更に魔法カード発動！パワー・ボンド！これは機械族専用の融合カード！手札のユーフォロイドと場のE・HEROギアを融合し、ユーフォロイド・ファイターを融合召喚！！」

ユーフォロイド・ファイター

ATK ?

DEF ?

翔

手札：0

モンスター：2

原作ではテンペスターがユーフロイドに乗っかっていたけど。

今回はガイアが乗っかっているな…

あんなデカくて、ユーフロイドが支えきれるのが不思議だな……

「馬鹿な、攻撃力と守備力が決まってるじゃない!？」

「ユーフロイド・ファイターの攻撃力と守備力は素材にしたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる! ユーフロイドの攻撃力1200、E・HERO ガイアの攻撃力は2200! よって、攻撃力は3400。」

ユーフロイド・ファイター

ATK ? 3400

DEF ? 3400

「更にパワー・ボンドの効果で攻撃力が2倍となる!」

ユーフロイド・ファイター

ATK 3400 6800

「攻撃力6800!?!」

「行け! ユーフォロイド・ファイター! 闇の守護神・ダーク・ガー
ディアンを攻撃! フォーチュン・コンチネンタルハンマー!?!」

ユーフォロイド・ファイター

ATK 6800

闇の守護神・ダーク・ガーディアン

ATK 1900

そんな技名で良いのか?

まあ、テンペスターはカオス・テンペストだし、良いのか………?

禿兄弟のライフも超過ダメージで0になる、これで決まりだな。

「がああああああ!?!?!?!」

迷宮兄弟

LP: 2488 - 2412

「やったあつつ!?!?!」

「これで2人の退学は取り消しだ。」

「良かった。これで彼らは学園に残れる。」

「強力なライバルになるの？」

「彼らはこのデュエルアカデミアできた。ライバルであり、友達でもあるからな。君の方はどうなんだ？」

「私は私のせいで退学になったら目覚めが悪い。ただ、それだけよ。」

「素晴らしいデュエルをありがとうございました。遊城君、丸藤君。」

「じゃあ……」

「君達2人の退学は取り消しとします。よろしいですね？クロノス教諭。」

「か、構いませんーノ。」

「やったな。十代、翔。」

「今度は優君の番だね。」

「頑張れよ、俺達。観客席で応援してるからな。」

俺は十代と翔と入れ替わりでデュエル場へ上がる。

禿兄弟は何時の間にか退場していた。

さて、俺の相手は一体誰になるんだろうな……

恐らく十代と翔の時と同じく初代組が出て来るんだろうが、問題は誰かと言う訳だが……

「俺の相手は？」

「そろそろ、到着する筈ナノーネ。」

『ふうん。その男の相手はこの俺が引き受けよう。』

今回の最強カード

優「今回の最強カードは、パワー・ボンド。」

パワー・ボンド

通常魔法

手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

このカードによって特殊召喚したモンスターは、元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。

発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

主な収録パック：「CYBERNETIC REVOLUTION」

優「機械族専用の融合カード。その効果で特殊召喚したモンスター

の攻撃力は永続的に2倍になる。召喚したモンスター次第ではゲームエンドに持ち込む事ができる。しかし、エンドフェイスに融合召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けるデメリットを持つが、その辺りは、レインボー・ライフなどでメリットに変える事が出来る。」

有栖「丸藤兄弟が信じる究極の融合カードだよ。……って、ボクの出番これだけ！？」

第10話 制裁デュエル 十代&翔編（後書き）

制裁編、前編終了。

有栖「まさかだとは思っけど、優の相手って…」

そう、誰もが知っている「あの人」です。

有栖「優は勝てるのかい？」

勝ってくれなきゃ困るんですよ。どんな手段を使っても…

第11話 制裁デュエル 優編

『ふうん。その男の相手はこの俺が引き受けよう。』

その時、デュエル場に声が響く。

恐らく、拡声器を使っているのか。とても大きく、会場全体に聞こえるだろう。

ん？………ちょっと待て。今の声……とても聞き覚えがある声だぞ。

そして、足音と共に現れたのはある1人の男である。

「お、オーナー！？」

「ふうん、久しいな。鮫島。」

デュエル場に現れたのはそう、初代デュエルモンスターの主人公、
武藤遊戯ライバルの好敵手

海馬コーポレーションの代表取締役社長で、デュエルアカデミアの
オーナー……海馬瀬人、その人である。

ざわざわ……

『伝説のデュエリスト…海馬瀬人!?!』

『何であの人がここにいるんだ!?!』

『この学園のオーナーってのは知っていたけど、何で?』

などと観客席にいる生徒達から声上がる。

本当に何でここに来たんだ? GX本編じゃ、片手で数える回数程度しか出ていないのに。

264

「何故、こちらに?」

「面白い趣向があると聞いたのでな。……おい。」

「は、はい! なんですノーネ?」

「あの男とのデュエル、俺にやらせる。」

「し、しかし…もうセニョール天空の相手は既に呼んでいるノーネ。」

「その男の相手となる者ならば、ここに来る前に遭遇したのでな、

「丁重に帰って貰った所だ。」

「…怪しいな、あの社長が「丁重」なんて言葉、絶対に使わないだろう。」

「絶対、何かしらの手を使ったのだろうな……」

「社長は校長やクロノスを横目にドカドカとデュエル場へ上がってくる。」

「貴様がシンクロモンスターというカードを操るデュエリストか。」

「そうですが、何か？」

「ふうん、この俺を相手に動じないとはな……随分と見上げた闘志だと褒めてやろう。」

「それはどうも。」

「俺とデュエルして貰おう。俺が勝ったら、貴様のシンクロモンスターを譲って貰おうか？……勿論、タダとは言わん。」

「それならばあなたは何を譲ってくれるのですか？自分とて、退学がかかっているので負けるつもりはないので……」

「ほう……この俺に勝つつもりでいるのか。良いだろう……貴様が勝ったなら俺の魂とも言える。この3枚の青眼の白龍をくれてやる。」

「

3枚の青眼か……欲しいと言えば、欲しい。

だが、自分はカイバーマンや白石を紛失している以上通常サポートだけでは使いこなす自身がない。

それにこの世界では青眼〓社長に等しいため、事情を知らない一般の連中からいちゃもんをつけられるのはまっぴらゴメンだ。

「それは丁重にお断りさせて貰います。青眼の白龍と言えば、海馬瀬人、海馬瀬人と言えば、青眼の白龍：そのイメージを壊したくはないので……」

やはり、俺のシンクロモンスター狙いでここに来たか。

そうでなければ、原作では片手に数える回数程度しか登場しない上、大企業の代表取締役社長がわざわざこんなところに来る筈もないか。

「ならば、デュエルに勝ち、手に入れるだけだ。」

「なるほど……でも、その方が手っ取り早くてシンプルな気もしますね。」

「デュエル……」

優

LP：4000

海馬

LP：4000

「え、えええ！？優の相手って、海馬社長！？」

「デュエルキング、武藤遊戯の好敵手……」

「そんな相手に優が叶う訳が……」

「……くくくく、ちょうど良い。……あの時、俺を侮辱した報いだ。海馬瀬人に叩き潰されてみんなの前で無様に負けるがいい。」

「俺の先行！ドロー！」

海馬

手札：6

「俺は永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動。」
未来融合？

社長のデッキは終盤はドラゴン族が多めに投入されたデッキだったな。

さしずめ、F・G・D辺りか？

「デッキから融合素材モンスターを墓地へ送り、発動後の2ターン目の俺のスタンバイフェイズにその融合モンスターを特殊召喚する。」

「

海馬

手札：5

魔法・罨：1

「行き成り!?!」

「海馬瀨人の融合モンスターとなれば……」

「俺はデッキから青眼の白龍を3体、エメラルド・ドラゴン、スピ
ア・ドラゴンを墓地へ送り、F・G・Dを選択する!!」

「(F・G・D!?!?! 殆ど、【未来龍】と殆ど同じ流れだな、これ
は……)」

「ふうん、まだ終わりではないぞ。魔法カード、龍の鏡。自分のフ
ィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決めら
れたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター
1体を融合デッキから特殊召喚する。俺は墓地から青眼の白龍を3
枚除外し、青眼の究極竜を特殊召喚する!」

青眼の究極竜

ATK 4500

海馬

手札：4

モンスター：1

「青眼の究極竜……」

「そつだ、光栄に思うが良い。最強にして、無敵のモンスターだ。」

「……」

「どうした？究極竜を前に声も出ないか？」

「さて……これをどう突破するかな……」

「貴様……俺の究極竜を倒すつもりか？」

「攻撃力4500!？」

「行き成りそんな攻撃力を……」

「流石は、デュエルキングの生涯の好敵手ライバルと呼ばれた男だ。」

「更に永続魔法、魔力儉約術を発動。」

海馬

手札：3

魔法・罨：2

「……魔法カードを発動するのに必要なライフコストがなくなるカー

ドか。」

「その通りだ。更に俺は魔法カード。次元融合を発動！本来なら2000ポイントのライフを支払わなければならないが、魔力節約術により払う必要がなくなる！お互いに除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する。」

「俺の除外ゾーンにモンスターはいない。どうぞ、ご自由に青眼の白龍を特殊召喚してはどうですか。」

「ふうん、言われずともしてやるわ。後悔するなよ？現れるがいい！！3体の青眼の白龍！フハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

あの高笑いもGXでは健在か。

そういえば、回想で十代が小学生ぐらいの時に見ていた放送で高笑いであつていたCMが流れていたな。

あんだ、オカルトとかそういうのは嫌いなくせに宇宙とかそういうものには目を向けるんだな。

青眼の白龍

ATK 3000

海馬

手札：2

モンスター：4

「更にジャイアントウィルスを召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

ジャイアントウィルス

ATK 1000

海馬

手札：0

モンスター：5

「青眼の白龍……！」

「伝説のデュエリスト、海馬瀬人の忠実なる僕……」

「無理無理無理！！！幾ら優君が強くて絶対勝てるわけ無いッスよ……！」

「青眼の白龍が3体に攻撃力4500の青眼の究極竜がいて、2ターン後には攻撃力5000のF・G・Dが出て来るのよ！？いくらアイツが凄くてもこればかりは……」

「優……」

「俺のターン。」

優

手札：6

「この瞬間、ジャイアントウィルスを生贄にリバースカードオープン！ 罠カード、死のデッキ破壊ウィルスを発動する。これから3ターンの間、貴様のフィールド上に存在するモンスター、貴様の手札、貴様がドローしたカードを全て確認し、その中の攻撃力1500以上のモンスターを破壊する。」

社長のデッキ破壊戦術コンボは相変わらずか。

まあ、デッキの中は無事だから良いけどな。

「さあ、貴様の手札を見せて貰おうか。」

「俺の手札には攻撃力1500以上のモンスターは入っていない。」

確認のため、手札を公開する。

手札はレスキューキャット、強欲な壺、極星天ヴァナデイス、グロ
ーアップ・バルブ、貪欲な壺、ゾンビ・キャリア。

どれも攻撃力は1500以下なのでウィルスの対象外である。

「ふうん、運が良かったな。……しかし、貴様には低級雑魚モンスターしかいないようだが、それでどう戦う？」

「十分戦えますよ？ この手札なら。」

「何……？（奴はこの状況を覆せる策でもあるというのか？）」

「それに俺にこれまでのデュエルモンスターの常識は通用しない
と思った方が良いでしょう?」

「(これまでのデュエルモンスターの常識は通用しない?...どう
いう意味だ、奴のハツタリか?)」

俺としては出来ればアレは出したくない。

だが、状況が状況だからな.....ここで出さなければ、100%負け
る。

負けてしまえば、退学確定だ。それだけは避けなければならない。

だから俺はあのカードを使う。生前時からエクストラデッキには投
入はしていたが、極力使用を控えていたあのカードを.....

せめて、目の前に並んでいる青眼3体と究極竜だけでもどうにかし
なければならぬ。

その後なら殴り倒されようが除去されようが構わない。

「俺はレスキューキャットを召喚。」

レスキューキャット

ATK 300

優

手札：5

モンスター：1

「レスキューキャットの効果発動、このカードを墓地に送る事でデッキからレベル3以下の獣族モンスターを2体特殊召喚する。俺はデッキからX-セイバー エアベルンと極星獣タンギリスニを特殊召喚。」

レスキューキャットが光に包まれると、その光の中から俺が選んだ2体が現われる。

X-セイバー エアベルン

ATK 1600

極星獣タンギリスニ

ATK 1200

優

モンスター：2

「ふうん、やはりハツタリか。そんな低級雑魚モンスターを並べて何になる？」

「これがさっきの言葉の答えですよ。レベル3、極星獣タンギリスニにレベル3、X-セイバー エアベルンをチューニング。」

3 + 3 = 6

エアベルンとタンギリスニが天へと舞い上がり、エアベルンの姿は3つの緑の輪へと変わり、タンギリスニがその輪を潜り抜ける。

「6つの星々輝く時、全てを凍てつかせる魔槍よ。その意志の元に全てを貫け。シンクロ召喚！全てを凍てつかせ！氷結界の龍 ブリユーナク！」

氷結界の龍 ブリユーナク

ATK 2300

優

モンスター：1

「これがシンクロモンスターか……だが、2300程度の攻撃力で俺の青眼の白龍を倒せると思っているのか？」

「倒す必要はありませんね。退いて貰うだけですから……」

「退いて貰う？」

「氷結界の龍 ブリユーナクの効果は、手札を任意の枚数を捨てる事で捨てた枚数分だけ。フィールド上のカードを持ち主の手札に戻

す効果があります。」

「何っ！？手札1枚を場のカードを1枚バウンスする効果だ！？」

「俺は効果を使用する前に魔法カード、強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドロー。」

優

手札：6

「ウィルス効果でドローしたカードを見せろ。」

「ドローしたのは攻撃力800の極星獣タンゲニョーストと攻撃力500のエレファン。」

「（また低攻撃力のモンスター……）」

「ここで氷結界の龍 ブリューナクの効果発動、手札を4枚捨てて、青眼の白龍3体と青眼の究極龍を持ち主の手札：つまり、あなたの手札へ戻します。更に青眼の究極龍は融合デッキへ戻ってもらいます。」

「くっ！」

優

手札：2

海馬

手札：3

モンスター：0

「氷結界の龍 ブリユーナクでダイレクトアタック。」

海馬

LP：4000

1700

「くっ…この程度、痛くも痒くもない。」

「更に魔法カード、貪欲な壺を発動、墓地からモンスターカードを5枚選択してデッキに戻し、シャッフルしその後カードを2枚ドロ。俺はレスキューキャット、X-セイバー エアベルン、極星獣タンゲリスニ、極星獣タンゲニョースト、エレファンをデッキに戻し、2枚ドロ。」

優

手札：4

「ウイルス効果でドロしたカードを見せる。」

「ドローカードは、攻撃力1100の素早いビッグハムスターと装備魔法カード、早すぎた埋葬。俺は他にやる事はないので。これでターンエンド。」

死のデッキ破壊ウイルス（１ターン目終了）

Side Change 有栖 Side

有栖 Side

海馬社長の場に召喚された青眼の白龍3体と青眼の究極龍が戻され、状況は完全に逆転する。

その光景に観客席にいた誰もが啞然としていた。ボクもその一人だ。周りの席に座っていた生徒達はみんな揃って、『嘘だろ……』『絶対終わったと思ったのにな……』と口々にしていた。

本当に奇跡を見ているようだった。シンクロモンスターは奇跡を起こすミラクルモンスターなのかもしれない。

それだけじゃない、そのモンスターを使いこなしている優だからこそ。出来る事なのだとボクは思っている。

いつも、カッコよく見えるけど。今の優は一段とカッコ良く見える。

「嘘……………」

「あの状況をモンスター1体でひっくり返した。」

「在り得ないツスよ……………」

「だけど、それが今、目の前で起こっているわ……………」

「すげえ……………すげえぜ！優！」

今、ボクには分かる。

ユウはオシリス・レッド……………ううん、デュエルアカデミアの生徒と
言うレベルで測定できるデュエリストじゃない……………

「優！！頑張つてっつ！！！！！！」

ボクは我を忘れて、大声で優を応援する。

優には絶対に勝ってほしい。キミはボクをここまで惚れさせた人であるのだから。

そして、学園に残って貰って、ボクはキミの事がもっと知りたい。

もっとじゃない……………全部……………キミの全てをボクは知りたい。

有栖 Side 終了

Side Change

優 Side

「美しい……」

「はい？」

社長はブリューナクを見上げると一言呟くのが聞こえた。

「美しい……ますます手にしたいカードだ……俺のターン！ドロー！」

海馬

手札：4

未来融合・フューチャー・フュージョン（1ターン目）

「……クククク……フハハハハハハハッ……！」

社長、良い歳して、その高笑いはどうにかならないのか？

GXでもほとんど変わらないな……

「覚悟しろ……俺は魔法カード、融合を発動。」

「融合……！」

手札にはさつき、ブリューナクで戻した。嫁じゃなかった……青眼が3体……ま、不味い。

また出て来るのか？

「ふふふ、再び見るがいい。幻想などではない、真の最強モンスター
の姿をな…青眼の究極竜！」

海馬

手札：0

モンスター：1

青眼の究極竜

ATK 4500

また出て来た……

折角、手札削ってバウンスした意味がまるでない。

それよりも手札が青眼3枚しかないと言うこの危機的状況で融合を
引き当てた社長が凄いと思う……

俺は初めて、チートドローなるものの片鱗を今、垣間見た。

「行けえ！青眼の究極竜！アルティメット・バーストっっ！！！」

青眼の究極竜

ATK 4500

氷結界の龍 ブリユーナク

ATK 2300

優

LP:4000 1800

「くっ……しかし、自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊された時、手札からモンスター効果を発動する。」

「何？戦闘で破壊された時に発動する効果だと…？」

「このカードは自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊された時、手札から特殊召喚できる。極星獣タンゲニョーストを特殊召喚！」

極星獣タンゲニョースト

DEF 1100

優

手札:3

モンスター:1

「ふうん、やられ専門の雑魚モンスターを並べても青眼の究極龍の敵ではないわ。ターンエンド（次のターンで未来融合の2ターン目によりF・G・Dが召喚される。それで終わりだ。）」

「俺のターン。」

優

手札：4

「ウイルスの効果で見せて貰おうか？」

「ドローしたのは罨カード、神の柹楛　グレイプニル。罨カードであるためウイルスの効果対象外。」

「だが、逆転するカードは引けなかったようだな。」

「いや、そうでもない。このターンで勝負をつけさせてもらう。俺の勝ちで。」

「何？」

「守備表示の極星獣タンゲニョーストを攻撃表示へ変更する。」

極星獣タンゲニョースト

DEF 1100 ATK 800

「この瞬間、極星獣タンゲニョーストの効果発動、このカードが守備表示から攻撃表示へ変更された時、デッキからこのカード以外の極星獣と名のついたモンスターを守備表示で特殊召喚する。俺はデッキから極星獣グルファクシを特殊召喚！」

極星獣グルファクシ

DEF 1000

優

モンスター：2

「レベル3、極星獣タンゲニョーストにレベル4、極星獣グルファクシをチューニング！」

3 + 4 〃 7

「7つの星々が揃う時、美しき黒き薔薇が放たれる。シンクロ召喚！現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK 2400

優

モンスター：1

「あれだけ、でかい口を叩いて置いて、出て来たのはたかが、攻撃力2400程度のモンスターか。」

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果！このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードを全て破壊する！」

「なんだと?」

「全てを焼き払え! ブラック・ローズ・ガイル!」

優

モンスター：0

海馬

モンスター：0

魔法・罠：0

ブラック・ローズ・ドラゴンの華吹雪により、全てのカードが破壊されていく。

「おのれえ……2度も俺の青眼の究極竜を……」

「更に装備魔法カード、早すぎた埋葬を発動。自分のLPを800支払い、墓地からモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する。俺が墓地から特殊召喚するのはブラック・ローズ・ドラゴン。」

優

LP：1800 1000

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK 2400

優

手札：3

モンスター：1

魔法・罠：1

「ぐっ……」

「これで決まりだ。ブラック・ローズ・ドラゴンでダイレクトアタック、ブラック・ローズ・フレア！」

「ぐああああああっっっ！！！！」

海馬

LP：1700 - 700

「勝った……のか。」

「優が…勝ったんだよー！！」

「やったあああああっっっ！！！！！」

デュエルが終了し、場は暫く静まり返ったが、有栖が叫び声をあげ、それが引き金となり。

観客席から歓声上がる。

『あ、ありえない。』

『デュエルキングと肩を並べる実力を持つ、あの海馬 瀬人が負けた？』

『夢でも見てるのか…悪夢と言う夢を？』

『嘘だ、あの海馬 瀬人がオシリス・レッドのような奴に……』

『って、あいつは前にまぐれでカイザーを破った奴じゃないか!?!』

『そのオベリスク・ブルーツ!!ボクの優を馬鹿にするなああああ!!!!』

『わあああ、有栖さん。落ち着いて下さいッス!』

『有栖!ただでさえ、人がいる所で暴れるのは止めなさい!!』

『いつてえええ、足踏まれたあつ!』

観客席では何が原因なのか分からないが有栖の奴が暴れ出しているな。何で暴れているんだ?

それは置いといて……どうにか、退学は避けられたな。

そうじゃないと、俺はこの先どうなるんだという話になる。

「この俺を倒すとはな………貴様の名前を聞いて置こう。」

「優……天空 優。」

「天空 優か……貴様は遊戯と同じくこの俺が認めた数少ない真のデュエリストだ。いつか必ず叩き潰す。それまで勝ちを預けて置くぞ。」

「分かった………鮫島校長。」

「……………」

歳で耳が遠いのか、それとも社長が負けた事に呆然としているのか。俺が声をかけても、無反応だった。

「鮫島校長！」

「あ、な、何かな？天空君。」

やっと反応した。校長のために言うておくが後者であると俺は思っている。

「これで俺の退学は取り消し。………と言う約束でしたな。」

「あ、ああ…そうだったね？クロノス教諭。」

「そ、そんなノーネ。…ありえないノーネ、あのドロップアウトボーイが伝説のデュエリスト、海馬 瀬人を破るなんておかしいノーネ。ありえないノーネ。ポテトチップスナノーネ。」

何でポテトチップス？

まあ、あれはカップラーメンの次位に俺は好きだったりするが…

「鮫島。」

「何でしょうか？オーナー。」

「この男を少し借りて行くぞ。」

「え、ええ…構いませんが…」

「そうか…ならば、付いて来い。天空 優。」

「何故です？」

「貴様に会いたがっている男がいる。俺はその男と共に来た。」

「分かりました……」

俺は社長の後を追うようにデュエル場を後にする。

聞きそびれてしまったが、俺が倫理委員をボコボコにした原因でな
ってしまった寮室謹慎は一体どうなったのだろうか？

今回の最強カード。

優「今回の最強カードは氷結界の龍 ブリューナク」

氷結界の龍 ブリューナク

シンクロモンスター

レベル6 水属性 海竜族 ATK 2300 DEF 1400

シンクロ素材：チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

効果：自分の手札を任意の枚数墓地に捨てて発動する。

その後、フィールド上に存在するカードを、墓地に送った枚数分だけ持ち主の手札に戻す。

主な収録パック：「DUEL TERMINAL -シンクロ覚醒
!!!-」

優「チューナーとシンクロ素材の指定がないシンクロモンスター、任意の枚数を捨てる事でフィールド上のカードを捨てた枚数分、持ち主の手札へ戻す効果を持つ。最大の強みはグングニール等と違い、発動回数に制限がないと言う事だ。融合、シンクロ、儀式、エクシーズや特殊召喚モンスターには絶大な効果を発揮する。更に捨てる効果なので捨てられた事で効果を発動する魔轟神や暗黒界等と組み合わせる事で更なるアドバンテージを稼ぐ事ができる。」

有栖「最強…と言うよりも最悪だよ！寧ろ、最凶？」

第11話 制裁デュエル 優編（後書き）

今回で制裁デュエルは一時終了。

優「……………」

有栖「優、どうしたの？」

優「ブリューゲルになって正直白ける。この結末はDDBゲー並みに酷い。」

有栖「それで次回は？」

とりあえず、2話前のラストに出て来た2人目の某人物に登場してもらいます。

第12話 ペガサス・J・クロフォード(前書き)

今回はデュエルがありません。

それゆえに短いです。

優「どうにかしなければならぬか……」

第12話 ペガサス・J・クロフォード

「ここだ。」

俺が社長に連れてこられた場所はデュエルアカデミアの校長室。

「ペガサス、連れて来たぞ。」

「Ohー！ありがとうございます。カイバボーイ。」

何…だと？

何故、この人物までここにいるんだ？

「Nice to meet you、ユウ・アマゾラボーイ。」

校長室に入った俺を待っていた人間は

インダストリアル・イリユージョン社の現・会長であり、

「この世界」でデュエルモンスターズを生み出した生みの親、ペガサス・J・クロフォード、その人だ。

「奴が貴様と話がしたいと言って来たから付いて来てもらったぞ。」

「なるほど……」

俺はペガサスと向かい合うように座り、社長はペガサスの隣に座ると言う形で居座る。

やがて、ペガサスの口が開く。

「単刀直入にお聞きします。Youはあのカードを何処で手に入れたのかを聞かせて貰います。」

その言葉を榮えにペガサスの眼つきが鋭くなる。

「どつという意味だ、ペガサス。」

「カイバボーイ。あのようなカードはまだ我が社では制作されていません。」

「何?」

「お答えして頂きますよ。ユウボーイ。」

「……………」

これ以上誤魔化すと絶対後でボロが出るのは分かっている。

だから嘘などはつかずに正直に話すことにした。

と言うよりもこの2人に嘘をついてもしょうがない。

「…分かりました。では、お話しします。」

そこからペガサスと社長に俺の全てを話すことにした。

自分はこの世界の人間ではなく、違う世界の人間でそこからこの世界へ転生と言う形でやって来た事を……

そして、自分が元いた世界ではこの世界は、アニメと言う二次元の世界であることを…

「俄か信じがたい話デース。」

「ふうん、何か証拠でもあると言うのか？」

「青眼の光龍…そして、武藤遊戯にはアテムと言う第2の人格がいた。」

「「!!!!」」

驚いているな。

光龍は確か映画である2人のデュエルが終わった後に消滅した。

遊戯と王様の事は遊戯の関係者しか知らない筈だからな。

「そして、私はデュエルモンスターズ界で封印されている名も無き3体の竜…「ティマイオスの眼」、「クリティウスの牙」、「ヘルモスの爪」…今は無き三幻神と対をなす存在と言える三邪神のカー

ド：「邪神アバター」、
「邪神ドレッド・ルート」、
「邪神イレイザー」……この学園の地下に封印されている三幻魔のカード……
「神炎皇ウリア」、
「降雷皇ハモン」、
「幻魔皇ラビエル」の存在も私は存じております。」

「……カイバボーイ。どうやら彼の言葉はTRUTHのようデース。信じるしかないようデース。」

「ああ、この学園の秘密までも知っているとはな……ましてや「奴」の存在までもを知っているのだからな。貴様がこの世界の人間ではないと言う事実、信じるでしょう。」

「ユウボーイ、Your Secretを知っている他にいるのデースカー？」

「いいえ、私の事実を知っているのはあなた達、2人だけです。こういう秘密は他言無用でお願いします。」

「ふうん、良いだろう。」

「……話はそれだけですか？」

「それだけではありませーん。実はYourの持っているシンクロモンスターと言うカードやそれに必要なチューナーモンスター、先ほどのあなたとカイバボーイのデュエルを見ていて、実に興味深く感じました。是非とも、我が社で制作してみたいのデース、よろしいでしょうか？」

ペガサスはそれだけでなく、シンクロモンスターを導入しようと考えているらしい。

だが、それはそれで考え物だ。

この時代でシンクロを導入したら未来の5D'sやZEXALの世界がどうなってしまうかだが……

考えてみれば、そもそも5D'sの未来はモーメントの暴走の原因がシンクロ召喚と人間の負の感情だと、未来組は言っていた。

だが、この世界はまだモーメントの基礎すら存在していない。それにここで許可してしまえば、未来も変わるという事になる。

彼にシンクロモンスターの情報を渡す。未来が変わると言う事にもなる……或いは未来が分岐すると言う意味合いもある。

俺の知っている5D'sは事実上並行世界の一つになる訳か。作品は変わるが、ドラゴンボールで言う所の「未来のトランクスの世界」と「Z戦士達の世界」みたいなものとも考えれば、大丈夫か……？
序にまだ「この世界」ではまだ使っていないエクシーズモンスターも見せて置こう。ここで見せないで、後で使ったまたこんな事になるのは面倒だからな。

「シンクロモンスターの導入に関するのですが、それはそれで構いません。恐らく私自身だけが持っている特殊なカードだと快く思わない輩が多数いるみたいですから。」

「Ohー！それはありがたいデース。」

「それとこのシリーズのカードも導入してみてもどうですか？」

俺は社長とペガサスにエクシーズモンスターの中の2枚、希望皇ホープとリバイス・ドラゴンのカードを見せる。

その2枚は、俺のデッキのエクストラデッキに入っていたカードでもある。

2人はそのカードをマジマジと見続ける。

「黒いカード？」

「W a o ! ? このモンスターは何というモンスターなのですカー？」

「そのカードはシンクロモンスターの後に発表されたエクシーズモンスターと分類されているモンスターです。」

「ほう…エクシーズモンスターか。」

その後、エクシーズモンスターの事について聞かれたため、その詳細を説明する事にした。

召喚方法からモンスターはレベルではなく、ランクとして扱うなど、ランクとして扱う事でレベルが関係するカードの効果を受けない等、色々な説明をする。

その説明を聞くとペガサスはとても驚きと嬉しさが混じったような表情を浮かべる。

「Wonderful!!とてもUniqueな召喚方法を持ち、面白いモンスターデース。ぜひとも、このカードも我が社で制作を試みたいデース。」

「それは構いませんが……」

「何か問題でもあるか？」

「いえ、それは自分のデッキのカードでありますので、予備として数枚程、私が所持しているシンクロモンスター、エクシーズモンスター、チューナーをお渡しするという事でよろしいですか？」

「Yes!ご協力ありがとうございます。ユウボーイ。」

「そちらが提供ばかりではこちらの気が済まん…貴様は何か要望はあるか？」

「私の所属はオシリス・レッドなのですが、その寮の改築に幾らか一部予算を回して欲しい事と改築期間の間だけ、寮生が住める仮設施設を建設して頂ければ……」

「ふうん、それ位ならば許可してやろう。」

「カードは俺の寮の部屋にあるのでこれから取りに戻ってお渡しするという事で良いでしょうか?後できれば、持ち運び用に大きめのケースをお貸しして貰えると嬉しいのですが……」

「磯野。」

「はっ。」

何時の間にいたんすか！？磯野さん。

そして、磯野さんはどこから取り出したのか、ジュラルミンケースを1つ取り出す。

相変わらず、磯野さんは色々な面では優秀だな。社長が置きたがるのも分かる。

まあ、社長に振り回されるのは同情するが……

「何処から取り出したんですか？」

「深くはお気にしないで下さいませ。」

なるほど、突っ込んだら負けという奴か。

その後、俺はケースを片手にレッド寮へ戻り、自分が保有しているチューナー、シンクロモンスター、エクシースモンスターを各1枚ずつと

おまけでボルト・ヘッジホッグやリバイバル・ギフト等チューナーをサポートするカードやエクシースサポートとしてレベルを調整できるギブ&テイクや波動共鳴等も入れて置いた。

しかし、シンクロの方は保険のため、星界の三極神や5D'sの6竜にセイヴァーやノバスターと言ったその派生カードは抜いておく事にする。

エクシーズの方もシンクロと同じ理由から「ナンバーズ」関係のモンスターは抜いておいた。

校長室へ戻ると、社長やペガサスだけでなく、鮫島校長まで居た。

それもそうか、ここは校長室なんだからな。

「お待たせしました。カードはこの中に入っています。後、一部だけそれに関連するカードも多数入れて置きました。」

「ありがとうございます。ユウボーイ。」

「ふうん、提供に感謝するぞ。天空 優。」

「オーナー？彼にいったい何を……」

「大したことではない、それと鮫島。デュエルはもう直、変革を迎えるだろう。」

「変革？」

確かにシンクロ召喚が導入されてからはデュエルの環境が大きく変わったのは否定できない。

「そうだ、人間と同じくデュエルも更なるステージへと上るだろう。」

俺達は本社へ戻るぞ。磯野。」

「はっ！」

「ユウボーイ、ご提供ありがとうございます。またお会いできるのを楽しみにしていマス。」

「天空 優、今日の借りは必ず返す。首を洗って待っている。」

社長とペガサスはそそくさと校長室を去って行く。

校長室には俺と鮫島校長だけが残っていた。

「天空君、君とペガサス会長、そして、オーナーの間に何があったのかね？」

「まあ、ちょっとしたお話です。」

「ううむ……」

そういえば、自室謹慎はどうなったのか聞き忘れていた。

約束では今日までと言う形になるが、一体どうなるんだろうな。

「そういえば、鮫島校長。自分の自室謹慎ですが、一体どうなったのでしょうか？」

「最初の約束通り、デュエルの当日までという事であるから今日限りで君の謹慎は解除される。」

「では、明日から通常通りに講義に参加……と言っ形でよろしいですか？」

「そういう約束であったからね。」

「では、自分は寮へ戻ります。失礼します。」

出ようとしていた俺を鮫島校長が引き留めてくる。

「いったい、どうしたと言っのだろうか？」

「オーナーとペガサス会長が言っていた事は本当なのかね？」

俺は鮫島校長の言葉を一瞬で理解した。

恐らくは、あの2人が鮫島校長に言っただらうな。

俺がこの世界の人間ではない事を……

あの2人から見れば、彼は信用できる人間と認識して話したんだらうな。

「ええ。」

事実である以上、包み隠さずに肯定する。

「それで君はこれからどうするつもりなのかね？元の世界に帰る手段が見つければ、帰るつもりなのか？」

「それはいいですね。自分は元いた世界からこの世界へ転生と言う形でやって来ました。仮に元いた世界に戻る手段が見つかっても戻るつもりはありません。それに戻っても大騒ぎになると思います。死人が生き返ったなんて事になれば、普通ではありえない話でしょう？」

「確かにそういわれてみれば、その通りだ。」

「自分はこの世界で生きて行くと決めましたから。それにこの世界の居心地は悪くないですし。」

そう、あんな面白味もないつまらない世界にいるよりはよっぽどいい。

「それが君の選択ならば、私は何も言いつもりはない。」

「鮫島校長、自分の事実は他言無用でお願いします。勿論、あなたの上司でもある影丸理事長も例外ではありません。」

「……分かった。約束しよう。」

「要件はそれだけですか？」

「ああ、すまなかった。」

「では、失礼します。」

俺はそう言い。校長室を後にする。

「よう、優。遅かったな。」

レッド寮へ戻るとレッド寮の外では十代と翔と隼人が集まっていた。

「こんな所で揃いも揃って集まって、何をしていたんだ？」

「みんな、優君の事を待ってたんスよ？」

「俺を？」

何故、俺を待っていた？

何か不味い事でもしたのだろうか。

「主役も揃ったから、パーティを始めるんだな。」

「パーティ？」

「3人の残留記念パーティなんだな、俺から大徳寺先生に言ったらみんなを集めてくれたんだな。」

レッド寮の食堂に入ると他のレッド寮の生徒達や大徳寺先生やトメさんやセイコさんに

有栖や大地や明日香にももえやジユンコまでいた。

テーブルには普段のレッド寮の食事には出ないほど、豪華なご馳走が並びに並んでいた。

……流石にラーメンはないか。

「それではパーティを始めるとするのじゃ〜。」

大徳寺先生の声と共にレッド寮ではパーティが開催される。

一部、レッド寮の関係者ではない面々が数人いるが、それは気にしないでおく。

第12話 ペガサス・J・クロフォード（後書き）

今回で制裁デュエル編は終了です。

優「長かったな……若本とのデュエルで2話、倫理委員に連行で1話、本番を2話、そして、今回で1話……かかり過ぎにもほどがあるぞ。」

有栖「カイザーと十代のデュエルもやってないのにね……」

ほっといてくれ。次回は万丈目の格下げ追放デュエルをお送りします。

次回もカットビングで書いていきます。

優「（ZEXALのアレがうつったのか？）」

第13話 退学を賭けたデュエル 三沢VS万丈目

「何でデュエルを学ぶ所で野球をやるんだらうな……」

「良い運動になるし良いじゃんか。」

一人ぼやいていた俺に十代が声をかけてくる。

俺の話の理由は次の講義の科目でもある保健・体育でオシリス・レッドとラー・イエローは野球を行うことになる。

オベリスク・ブルーの連中は知らん。

野球といい、テニスといい……デュエルアカデミアで何でそんな事をするのか分からん……

俺の疑問は忘却の彼方へと飛ばし、野球のチーム分けはオシリス・レッドの生徒とラー・イエローの生徒で分かれる。

チーム分けが完了し、ゲームが開始された。

「うおりゃあああ……!」

試合の方は十代の活躍によりオシリス・レッドの方が有利に進めていた。

俺？俺は野球に関しては十代ほど得意ではない。

剣道だったら、負ける気はしない。生前では1年でありながら、上

級生達をばっさばっさと薙ぎ倒していたからな。

そして、試合が終盤に差し掛かった頃に大地がラー・イエロー側に参戦。

大体、この辺りから原作は始まったんだよな。そして、ラー・イエロー側が交代を宣言する。

「ピッチャー交代！ピッチャーは三沢！」

ラー・イエローの生徒に変わり、大地がマウントへ立ち、十代と向き合う。

「ついに出て来たな、三沢あつ！しかし、お前の球もあそこに叩きこんでやる！」

「望む所だ。だが、十代！勝つのは俺だ！既にお前を打ち崩す攻略法も計算済みだからだ。」

十代はホームラン予告の如く。バットを明後日の方向へ向ける。

「行くぞっ！方程式Ver.1!!！」

原作通りに大地が十代を三球三振で打ち取り、スリーアウトのチェンジ

レッドとイエローが攻守交替でイエローの攻撃で2アウト満塁と言った状態で十代と大地の一騎打ち。

「俺は既にお前を打ち崩す方程式も出来上がっている！そして、俺はその数式にのっとり、お前を叩く！！そして、負けたお前は俺の言いなりとなる！！」

大地……

燃えている所悪いが、その発言は些か誤解を招く発言とも取られるぞ？

「勝負だ！」

「来い！十代！！」

「行くぞっ！喰らええっ！俺がヒーローだあああっ！！！！」

大地は十代の投げたボールを見事打ち取り、その球は原作通りに試合をしていた場所の近くを歩いてきたクロノスの顔面に直撃。

運が良いのか悪いのか……

クロノスが十代と翔を追っ払うと大地に何かを話している姿が見えた。

恐らく、寮の入れ替えテストの事を話しているんだろうな。

その保健・体育の講義が終わると、大地、十代、翔は制服に着替えると教室ではない何処かへ行こうとするのが見えた。

しかし、今日の講義はまだ後3科目分ある。どの講義も休講になると言う話も聞いていない。

「3人とも、何処へ行くんだ？もうすぐ次の講義だぞ？」

「すまないが、先生に残りの授業は休むと伝えて置いてくれ。」

「十代と翔もか？」

「うん。」

「わりいんだけど。頼む。」

「仕方ないな……」

俺は了解を取ると3人と別れ、教室へ戻る。

その後の3科目に関しては担当教諭に大地、十代、翔は欠席という事を報告する。

まあ、十代は良く講義をサボっているからな。

「さて……帰るとするか。」

本日の講義が全て終わり、いつものようにアカデミアからレッド寮へ戻る途中。

「やあ、優。今から寮へ帰るところかい？」

エントランスの所で有栖と鉢合わせになる。

しかし、こいつは俺の行く所に待ち伏せているかのように現れるな……

「そのつもりだが、何か用か？」

「キミさえよければなんだけど、ボクのデッキを少し見てくださいませんか？」

「ガジェットなら安定するからいいんじゃないのか？」

「それでも、やっぱりキミの意見も聞いてみたいんだよ。」

「それでお前の気が済むなら別に良いが……」

「本当かい？ありがとう。（フフフフ、これで優へのアプローチがまた1つ進んだ。塵も積もれば山となる……少しずつアプローチとフラグの積み重ねでその果てにはキミはボクの物になるんだね。フフフフフフ……）」

ゾクッ……

な、何だ？今、妙な悪寒がした……気のせいかな？

最近は寒くなって来たからな……それに来月の終わりから冬季休暇にもなる。

冬季休暇中は俺はアカデミアに残るつもりだ。原作で言うなら十代達と同じって所だ。

その間はアカデミアは快適だと思う、なんせクロノスとかブルー寮の連中の顔を見なくて済む。

だけど、某探偵アニメ風に言うと、「サイコ・シヨツカーの精霊、召喚事件！」に巻き込まれるが、それは仕方のない事だ。

314

閑話

アカデミアからレッド寮へ向かう途中で有栖が話題を出して来る。

「そういえば、クロノス教諭。どうしたんだろうね。」

「？」

「何かさ、左目を中心に丸い痣が出来ていたんだよ。」

有栖が俺にも分かるようにジェスチャーで自分の顔でその様を表していた。

「ああ、それか。それはな……」

俺はそれを知っていた為、有栖に教えてやる事にする。

「うわ〜……それは災難だったんだねクロノス教諭。」

「まあ、運が悪いかは知らんがな。」

「所でそのクロノス教諭の顔にピンポイントでボールを当てた当事者は何処へ行ったんだい？姿が見えないけど。」

「保健・体育の講義が終わったら十代と翔を引き連れてどこか行っ
た。」

「だからキミは今日は一人なんだね。」

「放って置け。俺だっていつもあいつ等とつるんでいる訳じゃない。」

話は変わり、レッド寮の部屋に戻り、有栖のデスクを見る事にした。

.....

「バランスは比較的の良いと思う……けど、ガジェットの攻撃力の低さを底上げする必要がある。」

「それはボクも悩んでいたんだけど……どうすれば良いんだろう。」

「ちよつと俺の持つてるカードの中から必要そうなカードを揃えて置くから日を改めてデッキを調整する。」

「分かった……じゃあ、ボクは帰るよ。またね。優。」

有栖はデッキを取るとブルー寮に戻るのか、部屋を出て行く。

「で、何でお前が俺の部屋に転がり込んで来る？」

夜……

夕食を食べ終わった俺の部屋に十代と大地が転がり込んで来る。

「三沢の部屋がさ、ペンキ塗りたてで寝る場所がないから、三沢を今晚だけ泊めてくれないか？」

「お前の部屋は……って、そっぴやそつちは3人居たんだったな。」

「だから頼む。」

「泊まるのは構わないけど。大徳寺教諭には了解を取ったのか？」

「ああ、「大丈夫にや〜」だつてさ。」

それから夜がある程度更けるまで俺の部屋で十代、大地と3人で雑談したりデュエルしたりしていた。

雑談の中で大地が明日、オベリスク・ブルーへの昇格がかかったテストを受ける事を聞く。

何回か、デュエルをしていたら、途中から3人によるバトルロワイヤルデュエルをする事になる。

…がそのバトルロワイヤルデュエルの内容が本当に酷かった。

何せ、序盤から十代と大地が目の前で仁義なき融合合戦を見るわ、ZeroとTORNADOの連打に巻き込まれ、

大地のブラック・ローズの強制リセットに巻き込まれたりと、十代がワイルド・ジャギーマンの効果でモンスターを一掃されて大ダメージを受けるなど散々だった。

まあ、最後は息切れした両者を最終兵器で軽く無双して俺の一人勝ちした訳だが…。

「狡いぞ！闇属性以外との戦闘では破壊できないとか…」

「迂闊だった…十代を先に潰そうと十代ばかりに目を向けていたばかりに……」

「ZeroとTORNADOを何度も連打してるお前らに言われたくない。寧ろ、お前らの融合合戦で要らん被害を被った俺の身にもなれ！」

結局、十代はそのまま、俺の部屋に泊まり込む結果となる。

俺の部屋は3人部屋で使用者は俺だけなので泊まる事自体は容易である。

ドンドンドンドン!!!

その翌日……

早朝から扉をドンドン叩く音がしていた。

こんな朝早くから誰だ？

「はい、どちら様ですか？」

「優ちゃん！大変だよ!!!」

部屋の扉を叩いていたのは、トメさんであった。

一体、何事だ？

「トメさん？一体、どうしたんですか？こんな朝早く……」

「今朝、船の荷卸しで棧橋に行つてただけど、捨ててあつただよ。こーんなにいっぱいカードが！」

トメさんは両手を広げてジェスチャーをする仕草を見せる。

「！？カードが……？」

まさか……

「優！行くぞ！」

「ああ！」

俺達は急いでレッド寮からトメさんの言っていた場所へ走って行く。

「ああ……！」

「これは……」

見てみると、破壊輪、ブラッド・ヴォルス、融合解除、エレメント・ドラゴンにサイクロン……

「……これは俺が持っていた予備のカードだ。」

「三沢のカード!？」

「迂闊だった。これは昨日ペンキを塗るために部屋から出した机に入っていたカードだ。」

「一体、誰がこんなことを……」

「だが、幸い俺のデッキは無事だから大丈夫だが……」

「誰がこんな事をしたんだ!?!ゆるせねえ!!」

「十代、怒っても仕方ない。」

それから俺達4人はデュエル場へ向かう。

そこにはもう顔の痣が治ったクロノスと大地のカードを捨てた犯人
がいた。万丈目

「遅いノーネ。セニョール三沢。」

「とつくに尻尾を巻いて逃げだしたのかと思ったよ。」

「じゃあ、三沢君の寮の入れ替えの相手って……」

「そうか、三沢のカードを捨てたのは、お前か!万丈目っ!!」

十代はこれまでにないくらい怒りを露わにし、万丈目を睨みつける。

「な、何ですトーネ!？」

「何の言いがかりだ十代、どうして俺が…」

「本当に言いがかりかしら?」

この声は……

声のする方向を向くと3人の人…明日香、カイザー、有栖の姿がある。

「明日香?」

「お兄さんに有栖さんも…?」

「万丈目君、私見てしまったの。あなたが今朝海岸にカードを捨てた所を。」

「!?!?」

「っ!」

「どうしても気になって、何か怪しいなって思って事情を聞きに来ただけ。」

「汚いぞ! 万丈目! やっぱりお前が!」

「黙れ! 俺は自分のカードを捨てたんだ、それともそのカードに名前でも書いてあったのか!？」

「万丈目!!!」

「俺を泥棒呼ばわりした責任は取って貰うぞ? 如何でしょう、このデュエルで負けた方が退学になるといふのは?」

「何だと?! 万丈目!!!」

このどうしようもない。

大馬鹿野郎に言ってやるか。

「あくまで白を切り、自分のカードを捨てたとしたら、お前はデュエリストとは言えないな。」

「何!?!」

「俺は馬鹿だから頭の良い事は言えないが、これだけは言える…デュエリストにとってカードは己の魂を体現する物…それを捨てると言う行為を取った時点でお前はデュエリストではない…いや、カードを持つ資格すらない。」

「!!!」

「それに尻尾を巻いて逃げた方が良いのはお前じゃないのか? 格下げ目のエリートさん?」

「!!!!!!!…き、貴様あああ!!!!!!」

万丈目は怒り心頭になっているのか、顔全身で怒りで凄い顔になっ

ている。

ちよつと言い過ぎた気もする……今更遅いか。

「優、もう良い。それに俺は負けるつもりはない。行くぞ、万丈目！」

「粹がるな！三沢あ！！」

「「デュエル！！」」

三沢

LP：4000

万丈目

LP：4000

「俺のターン！ドロー！」

万丈目

手札：6

「地獄戦士を攻撃表示で召喚！」

地獄戦士

ATK 1200

万丈目

手札：5

モンスター：1

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

万丈目

手札：4

魔法・罫：1

「俺のターンだ！」

三沢

手札：6

「E・HERO オーシャンを召喚！」

E・HERO オーシャン

ATK 1500

三沢

手札：5

モンスター：1

「オーシャンで地獄戦士を攻撃!!」

E・HERO オーシャン

ATK 1500

地獄戦士

ATK 1200

万丈目

モンスター：0

LP：4000 3700

「しかし、この瞬間！地獄戦士の効果発動！俺が受けた戦闘ダメージをそのまま相手にも与える!!!」

三沢

LP：4000 3700

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

三沢

手札：4
魔法・罾：0

「俺のターン！ドロー！」

万丈目
手札：5

「俺はここでリバーズカードオープン！罾カード、リビンググデッドの呼び声を発動！復活しろ！地獄戦士！！」

万丈目
モンスター：1

「更に俺は速攻魔法！地獄の暴走召喚を発動！このカードは相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動可能！その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。」

「！！！」

「俺はデッキから地獄戦士を2体特殊召喚する！貴様もオーシャンをデッキ・手札・墓地から特殊召喚しろ！！」

万丈目

モンスター：3

手札：4

三沢

モンスター：3

「いくら、地獄戦士を並べても、その攻撃力は1200。」

「攻撃力1500のオーシャンには及ばないよ。」

「何か策でもあるのだろうか。」

「当たり前だ！カイザー！オベリスク・ブルーであなたの跡を継ぐのはこの俺だ！！」

格下げになりそうな時点でそんな事が良く言える……

GXのアニメ版と漫画版のキャラが丸つきり別物だ。正直言って、漫画版の方がバリバリにライバル臭があった。

「俺は装備魔法、ヘル・アライアンスを地獄戦士に装備！このカードはフィールド上に表側表示で存在する装備モンスターと同名のモンスター1体につき、装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。よって、地獄戦士の攻撃力は……2800！」

ATK 2800 1800

「バトル！地獄戦士！オーシャンに攻撃だ！」

「何！？」

E・HERO オーシャン

ATK 1500

地獄戦士

ATK 1200

万丈目

モンスター：2

LP：3700 3400

「万丈目の奴、何で態々、自爆特攻なんて真似を……」

「奴の狙いは、自爆特攻で自分のモンスターを減らしヘルバーナーの攻撃力を上げる目算か……」

「それじゃあ、ヘルバーナーの攻撃力は……」

炎獄魔人ヘルバーナー

ATK 1800 2300

「攻撃力が上がった……」

「更にもう1体の地獄戦士でオーシャンを攻撃！」

E・HERO オーシャン

ATK 1500

地獄戦士

ATK 1200

万丈目

モンスター：1

LP：3400 3100

「これでモンスターはヘルバーナー1体のみ、そして、ヘルバーナーは相手の場のモンスター1体につき、攻撃力を200ポイント上げる。」

炎獄魔人ヘル・バーナー

ATK 2300 2800 3400

「恨みの炎を受けるお！三沢！！」

炎獄魔人ヘル・バーナー

ATK 3400

E・HERO オーシャン
ATK 1500

「くっ!!」

「三沢っ!!」

三沢

モンスター：2

LP：3700 1800

「リバースカードオープン! 罨発動! ヒーロー・シグナル! このカードは自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札、またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。俺はデッキからE・HERO フォレストマンを守備表示で特殊召喚する!」

E・HERO フォレストマン

DEF 2000

三沢

モンスター：3

魔法・罨：0

「ふん、しぶとい奴め。ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー！」

三沢

手札：5

「スタンバイフェイズ！フォレストマンとオーシャンの効果発動！フォレストマンの効果により、デッキ・墓地から融合の魔法カードを加える事が出来る！俺はデッキから融合の魔法カードを加える。そして、オーシャンの効果によりフィールド・墓地からHEROと名のついたモンスターを手札へ加える俺は墓地からオーシャンを手札に加える！」

三沢

手札：7

「俺は魔法カード、融合を発動！場のフォレストマンとオーシャン2体のHERO3体を融合！」

「何！？」

「V・HERO トリニティーを融合召喚！」

V・HERO トリニティー

ATK 2500

三沢

手札：6

モンスター：1

「ヴ、V・HERO!? そんなカードあった?」

「あれって、確か優がくれたカードに入っていたよな?」

「ああ、HEROには入れて置いても損はないカードでもある。」

「俺の場のモンスターが減った事によりヘル・バーナーの攻撃力も下がる!」

炎獄魔人ヘル・バーナー

ATK 3400 3000

「だが、その程度の攻撃力でどうするつもりだ?」

「トリニティーは融合召喚に成功したターンのみ、攻撃力を2倍にする。そして、一度のバトルフェイズ中に3回の攻撃が可能となる。」

「何!?!」

V・HERO トリニティー

ATK 2500 5000

「攻撃力5000!」

「ヘルバーナーを完全に上回ったわ。」

「しかも、3回攻撃…勝負はあったか。」

「いや、トリニティーは相手にダイレクト・アタックが出来ないと
言う欠点を持っている。大地が何らかのモンスターを出せば、勝負
は決まるが……」

「更に融合発動!手札のE・HERO レディ・オブ・ファイアと
E・HERO ボルテックを融合し、V・HERO アドレイショ
ンを融合召喚!」

V・HERO アドレイション
ATK 2800

三沢

手札:3

モンスター:2

炎獄魔人ヘルバーナー
ATK 3000 3200

「更にV・HERO アドレイションの効果発動!1ターンに1度、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体とこのカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンする。」

「何!?!」

「俺は炎獄魔人ヘル・バーナーとV・HERO トリニティーを選択、そして、トリニティーの現在の攻撃力分、ヘルバーナーの攻撃力を下げる。」

炎獄魔人ヘル・バーナー

ATK 3200 0

「攻撃力が0?!だと!?!」

「更に速攻魔法!ハーフ・シャフトを発動!このカードはフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで半分になる。俺は炎獄魔人ヘル・バーナーを選択!だが、現在の攻撃力は既に0だから変動はない。」

三沢

手札:2

「な、何をするつもりだ。」

「俺はデュエリストとして、お前を許さない…捨てられたカード達の痛みを思い知れ！万丈目！！V・HERO アドレイションで炎獄魔人ヘル・バーナーを攻撃！アンビション・サンクシオンズ！」

V・HERO アドレイション
ATK 2800

炎獄魔人ヘル・バーナー
ATK 0

万丈目
LP:3100 300

「ぐああああ！！！！」

「更にV・HERO トリニティーで炎獄魔人ヘル・バーナーを攻撃！トリニティー・クラッシュ・ファースト！」

V・HERO トリニティー
ATK 5000

炎獄魔人ヘル・バーナー
ATK 0

万丈目
LP:300 -4700

「ぐあああああ!!!」

「まだまだ！V・HERO トリニティーで炎獄魔人ヘル・バーナーを攻撃！トリニティー・クラッシュ・セカンド！」

V・HERO トリニティー
ATK 5000

炎獄魔人ヘル・バーナー
ATK 0

万丈目
LP： - 4700 - 9700

「うわあああああ!!!」

「まだまだ！V・HERO トリニティーで炎獄魔人ヘル・バーナーを攻撃！トリニティー・クラッシュ・サード!!!」

V・HERO トリニティー
ATK 5000

炎獄魔人ヘル・バーナー
ATK 0

万丈目

LP : - 9700 - 14700

「うわああああ……！」

「更に速攻魔法！融合解除！V・HERO トリニティーの融合を解除し、その素材となったオーシャン2体とフォレストマンを特殊召喚する！」

E・HERO オーシャン

ATK 1500

E・HERO フォレストマン

ATK 1000

三沢

手札：1

モンスター：4

「ま、待て！俺のライフは……」

「問答無用……！！オーシャン！フォレストマン！万丈目にダイレクトアタック！ビッグウェーブクラッシュ！グランドタックル！」

万丈目

LP : - 14700 18700

「三沢……」

「三沢君、やり過ぎだよ。」

「……」

大地……いくらなんでもそれはやり過ぎだぞ。

- 18700つて、こつちじゃ4回死んでる事になるか。

凄まじいオーバーキルだ。俺の - 14500を超えた記録だな。

大地つてあれだな……本気で怒らせると怖いタイプだな。

「くっ……俺は……」

「万丈目。デュエルの前に言っていた海に捨てられていたカードは間違いなく俺の物だ。」

「何故、そうだと分かる？」

「それはつい、このカードにメモをしてしまったからだ。数式をな……これが証拠だ！」

「なっ……」

大地は万丈目に1枚のカードを見せる。

そのカードには何らかの数式が書かれていた。

「こんな落書きがあるカード、世界でたった一枚だろうけどな……」

「くっ……………」

「万丈目！カードを大事に出来ない奴はデュエリストとして失格だぞ！」

「うっ……………」

大地…：カードに落書きする時点で人の事を言えないぞ？

まあ、平気でカードを破り捨てたり、人から無理矢理奪い取る行為をするような輩に比べれば遙かにマシか。

生前時にもカードにお近づきの印と言う意味で1枚のカードにサインして相手に渡すと言う事があったからまだ良い方ではあるか。

「セニョール三沢、ユーのオベリスク・ブルーへの編入を認めるノ
ーネ。」

「いえ、そのお誘いはお断りします。」

「オーウ！何故なノーネ。」

「自分が一番のエリートだからと言う理由で他を見下す傲慢な態度を取るような彼らと一緒にいるのは虫唾が走ります…：ですので、俺はラー・イエローのまま結構です。」

原作とはだいぶ違うな。原作では？1になってからオベリスク・ブルーになるとか言っていた筈が…

こっちではオベリスク・ブルーの連中が嫌いとか言い出す始末だ。

まあ、デッキも違うから色々違うのもそれか…

今回の最強カード

優「今回の最強カードは、V・HERO トリニティー」

V・HERO トリニティー

融合モンスター

レベル8 闇属性 戦士族 ATK 2500 DEF 2000

融合素材：「HERO」と名のついたモンスター×3

このカードが融合召喚に成功したターン、このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。

融合召喚に成功したこのカードは、1度のバトルフェイズ中に3回攻撃する事ができる。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

主な収録パック：「V JUMP EDITION」

優「HEROと名のついたモンスター3体を融合素材にする融合モンスターで永続的に3回攻撃の能力と召喚ターンのみ攻撃力が2倍になる効果を持つ。未来融合を使用し、ダッシュガイやディアボリックガイにネクロダークマン等、墓地で効果を発動するHEROを一度に複数送れる。作中で大地が使用したようにハーフ・シャフト等、ある程度工夫すれば1ターンキルも可能。」

有栖「攻撃名は、トリニティー・クラッシュだよ。」

第13話 退学を賭けたデュエル 三沢VS万丈目（後書き）

今回はここまでします。

優「しかし……あれはやり過ぎじゃないのか？」

有栖「もう恐ろしくて何も言えないよ。」

こっちじゃ、三沢はレギュラーだからここまでやっても良いかなって……

優「そういえば、もうすぐユニークが10000を超えるが、何か記念でもやるのか？ やった方がいいよな？ こんな駄作小説を見てくれているんだから。」

とりあえずは、考えている。

有栖「どんな？」

今回の優ちゃんの語りだけで終わった「優vs十代vs三沢」のトライアングルデュエルとか……或いは有栖ちゃんの暴走？ 編とか。

有栖「題名に関しては、突っ込まないで okay。それで次回は？」

原作軸ならSALなんだけど、変わる予定になる。

優「とりあえず、次回もよろしく願います。」

第14話 デュエル馬鹿と恋する少女？（前書き）

今回はデュエルがありませんが、

何と何と何と何と……ある意味フラグが立ちます。

優「そう何回も連呼する必要があるのか……？」

第14話 デュエル馬鹿と恋する少女？

「あいつら…探しに行くなら授業を受けるよ。」

「でも、珍しいよね。明日香やももえにジュンコまで一緒に行くなんて。」

現在、俺は有栖や大地と共に教室にいた。

話の話題は講義に出席せずに万丈目を探しに行った十代達の事である。

何故、そうなったかと言うとそれは万丈目に原因でもある。

万丈目は3日前に行われた大地とのデュエルにやぶれた後を最後に行方が分からなくなっていた。

因みに本日の講義は全て終了し、生徒達は教室に残っている者もいれば、

購買へ行く者もいたり、デュエル場でデュエルを観戦したりと散り散りになっている。

「しかし、聞いていてもいい言葉ではないな…彼らの言葉は……」

「別に三沢君が気にする必要はないと思うよ？ね、優。」

「ああ、そのうちにフラッと帰って来るだろう。」

「だと良いけどな……」

大地の言う「彼ら」とは万丈目の取り巻き達の事である。

最初は万丈目に金魚の糞みたいについて回っていたが、今では掌を返す様に態度を変え、奴に関しての批難・暴言しか吐いていない。

恐らく格下である十代に2度も負けたのが原因であろう。

だが、哀れだとはちっと思わない。エリートだからと言ってそれを理由に他人を見下す道理にはならない。

それから間もなく、俺達は解散し、それぞれの寮へ戻る。

レッド寮へ戻った俺を待っていたのは十代と翔だ。

「あ、優君。お帰り。」

「お前ら…少しは講義に出ろよ。幾らオシリス・レッドが出席単位の必要がないからって…」

「だって、万丈目が心配だったんだからしょうがないだろう。」

「それで当人は見つかったのか？」

「えーと、それがね…」

翔の話によると万丈目は既に島を離れた後らしい。

原作通りなら、今頃ノース校に流れ着いている頃だろうな。

学園交流デュエルで黒い制服を身に纏って現れるだろう。

「それも良いけど……そろそろ、冬季休暇前のテストの準備位しておけよ?」

「う……」

「大丈夫さ。俺は実技で頑張るから。」

「はあ……筆記丸投げするんじゃなく、適当でも良いから少しくらい答案用紙埋める位努力しろよ。「下手な鉄砲、数撃てば当たる」と言っただろう。」

「俺は頭で考えんの苦手なんだよな……」

「じゃあ、僕らは部屋に戻るね。」

十代と翔は部屋へ戻り、俺も自分の部屋に戻る事にした。

部屋のベッドで横になりながら暇を持て余しているとPDAの呼び出し音が鳴り響く。

「有栖？」

内容を見ると有栖からのメールだった。

内容を見ると、「相談したい事があるからアカデミアの正面玄関まで来て欲しいんだ。」

相談？何か面倒事に巻き込まれそうな気がするが、行ってみればわかるか。

あ、後…折角有栖に会うからついでに「これ」を渡しておくか。

俺は呼び出された場所に来ると既に来ていたのか。有栖になぜか、分からないが明日香にももえ、ジュンコまでいた。

「来たけど、何でお前らまで居るんだ？」

「いちゃ悪いの？」

「十代君と親しい人と来たら優ぐらいしかいなかったからボクは仲間役みたいなものだよ。」

「まあ良いか。で、相談事って何だ？」

「それなんだけど……」

有栖は視線を俺からジュンコの方へ向ける。

「？」

「実は……」

「はあ？十代の好物を教えてください？何だそりゃ？」

相談相手は有栖ではなく、その友人のジュンコでその内容と云うのは「十代の好きな食べ物を知りたい」と云う内容である。

「そうよ。」

「ちょっと待て、話が読めないから。ぶっちゃけざっくりと説明してくれ。」

何故、それを教えなければならないのかがさっぱりわからない。

当事者であるジュンコや明日香やももえから話を聞く事にした。

万丈目を探すために森の中で探していたらジュンコが突然、SAL研究所と言つ場所で改造されたSALに連れ去られた。

ここは原作と同じだな。

その後、十代とSALがデュエルを行い、十代が勝ってジュンコは無事に解放された。それも良い。

逃げた猿や野生の猿達を捕まえようとしていた研究所の職員の間は大徳寺教諭の言葉で押し黙り、猿達も捕まらずに済んだと言う事らしい。

そして、ここからが問題になった。

その後、ジュンコ本人が言うには、その時に十代に惚れ込んでしまったらしい。

それだけの話では某邪気眼の上司の台詞を使うと「まるで意味が分からんぞ。」な状態だ。主になんでそうなった的な意味で。

まあ、ジュンコが十代にホの字になったという事実は良く分かった。

「なるほどなるほど……色々やって十代に近づこうと言う魂胆か。」

「天空さん、何やら引つかかるような言い方の気がしますわ。」

「気のせいだ……でも、十代の奴は改善される前のレッド寮の食事すら一番美味そうに食ってるからな。」

「優、序に聞くけど。改善される前のレッド寮の食事って何だい？」

「確か……白ご飯、味噌汁、沢庵、めざし、納豆、くさや……後、月1

でエビフライが出る位だな。」

「「「「「……………」」」」」

女子4人は余りの内容なのか絶句して言葉が出ないらしい……

まあ、分からないでもない。

「そんな表情をするな、俺は事実を突きつけているだけだ。決して間違えたことは言っていない。改善前のレッド寮の食事が非常に貧乏染みているというのは否定はしない。」

実際、食事が改善されるまでは食事が終わった後、部屋に戻ってからは生前の世界から持って来たカップラーメンを食っていたからな。

「って、話がずれたな……十代の好きな食べ物か。」

「そうそう、それよ。」

十代は基本的に好き嫌いしなくて、何でも食べるからな。

そういえば、あいつの昼飯って確か、トメさんの手製の弁当だから。

……………ん？トメさん？

「……いや、呼び出されておいてなんだが、俺に聞くよりトメさんに聞く方が手っ取り早い気がする。」

「何でトメさん？」

「あいつが昼に食べている弁当は、トメさんの手製の弁当だからな。」

「なら、今すぐ購買に行ってくるわ!!」

そういつとジュンコは凄い勢いで購買の方へ向かって行った。

早いな…もう見えなくなってしまった。

あれ…これはひょっとすると十ジュンフラグが立ちかけているか？

それは良いが…この調子に3年目に行くトレイが入るわ、明日香もその頃には異性として好意を抱いている気がするし

更にいえば、ユベルまで乱入するわけだから…うん、完璧に修羅場な展開しか見えない。

下手をすれば、十代絡みで勃発する剣山と翔の争いに乱入しかねない気もしないわけじゃない。

………何処をどう見ても完全に修羅場です、本当にありがとござい
いました。

と言う感じた。

「購買の人だからって何時も購買にいるとは限らないのに……」

「でも、明日香様。ジュンコさんはとても気合入っていましたわ。」

「ボク等もあんなジュンコを見たのは初めてだよ。……って優、どうしたの？」

「何でもない……」

……言えない。

この先の未来の展開を予想していて、頭が痛くなったなんて口が裂けても言えない。

しかも、少なからずとも関係者になっている明日香が目の前にいる時点で……

とりあえず、その事は遙か先の事なので忘れる事にしよう。うん。

「本当に大丈夫？」

「多分……後、有栖。お前のデッキに合いそうなカードを一通り渡しておく。」

渡したカードは、自身以外のマシンナーズ全般をサーチでき、アタッカーにもなるマシンナーズ・ギアフレーム。

手札・墓地から特殊召喚が可能でフィニッシャーにもなり得るマシンナーズ・フォートレス。

墓地のガジェットを回収し。ドロウができるスクラップ・リサイクルラーに種族に統一する事で火力の底上げが可能になる一族の結束。

機械族モンスターが戦闘で破壊されたらデッキから破壊されたモンスターと同属性でその攻撃力未満の機械族モンスターを特殊召喚する機甲部隊の最前線…これらを3枚ずつ。

「え？こんなに貰って良いの？」

「ああ、気にするな。」

「どれも見た事のないカードばかりですわね。」

「優、マシンナーズって、あのマシンナーズよね？」

「ああ、4体も揃えて出てくるのは良いが、攻撃のたびにライフポイントを1000も支払わなければならない。あのマシンナーズと同シリーズのカードだ。」

「幾ら機械族使いのボクでもあのカードは使う気にはなれないよ。」

「後は、お前で考えてデッキを調整してくれ。」

「ありがとう、優！」

それから俺は有栖達と別れ、レッド寮へと戻る。

その日から周り…特に十代の環境ががらりと変わった。

ジュンコは色々と十代にお節介(？)を焼く様になる。

「ほら！十代、起きなさいよ！授業に遅刻するわよ！」

「うっ……ん……俺のターン……」

毎朝は、ブルー女子寮からレッド寮まで十代を起こしに来たり…

「十代、もう居眠りばかりしないでちゃんと授業を受けなさいよ
！」

「わ、分かったよ。」

講義中はずっと居眠りをしている十代に講義のノートを見せたり…

「十代、お昼一緒に食べましょ。」

「え？良いのか？」

昼には手作りの弁当を渡したり…

「E・HERO フレイム・ウィングマンでダイレクトアタック！
フレイム・シユート！」

「きゃあああああ……！」

「ガツチャツ！楽しいデュエルだったぜ！」

放課後にはデュエル場があいていれば、デュエル場。

開いていなければ、レッド寮の前で十代とデュエルをしている。

…結果は言わずとも毎回、十代がワンサイドゲームと言わんばかりにボコボコするなど。

朝・昼と十代とジュンコのやりとり見ているが、もうあれは……何と言っか。

「世話女房…と言っ奴か？」

「恐らくは、それに近い奴だろう。」

「ジュンコ、十代君にゾッコンだね。」

ああいうのが、年頃の男女と言っものだと感じてしまっ俺はある意味で中年なのかも知れない。

生前から数えても俺はまだ精神年齢は二十歳を過ぎた20代前半の筈なのに……

「実際に見ていても微笑ましい限りだ。ああいうのを見ていると若いって良いな〜って思っってしまう。」

「優君。僕等と同じ年でしょ？そう言っのは校長先生とかトメさん位の年齢の人が言っセリフだよ？」

「放って置け。」

でも、思っていたよりもジュンコが凄い十代にアプローチしてるな…

これからどうなるんだ？あの2人……

「あの2人、どれ位でくつつくと思う？明日香、ももえ。」

「そうですね……」

「十代がジュンコの気持ちに気づけば、案外早くくつつくんじゃない？」

「でも、アニキは何で気づかないんだろう。あれだけ分かりやすい行動をしているのに……」

「十代だからだろうな。」

「くくくく？」「くくく」

俺以外の面子は一齐に？マークを浮かべながら俺に視線を向ける。

「それってどういう事？」

「翔、弟分のお前だったら分かる筈だぞ。十代がどう言う奴かって言つのを前提にして考えて見る……この中では一番、あいつと行動を共にしていてアニキとして慕っているお前なら分かる筈だ。」

俺の言葉で翔は黙りこむ。

その期間は時間にしても約1、2分程度。

「…アニキが何で気づかないのかを何となく分かった気がするツス…」

「そういう事だ。」

「は…にしても、アニキはとても罪作りな男ツスね…あの様子じゃ気づいていないみたいだし。」

「2人で勝手に話を進めないで俺達にも分かるように説明してくれ。」

その後には大地らの苦情もあり、彼らにも分かるように説明する。

十代は超が付く位デュエル馬鹿であり、それ以外には全く眼中にない位だ。

下手をすれば、デュエルと結婚した方が良いんじゃないかと思うレベルだ。

重症と言えば、重症とも取れてしまう。

なお、ここからは話していないが、十代は無意識にフラグを押し折る…一般的に言う所のフラグクラッシャーでもある。

これは十代だけでなく、初代では王様や城之内：未来では遊星まで持っている。広く言えば、メインの男性キャラはみんな持っているスキルとも言える。

寧ろ、この系統の作品でメインキャラの恋愛云々に関しては最終的

には折れると言つのが暗黙の了解なのかも知れない。

「…それは何とも言えせんわね。」

「ジュンコの最大のライバルはデュエル……皮肉な話ね。」

「彼がジュンコの気持ちに何時気づくのやら……」

「十代の場合、そう言う所までデュエルに脳が行ってしまってるのかもしれないな。」

視線をデュエル場へ向けると、十代とジュンコが第2戦目を展開していた。

相変わらず、良くやるな。あの2人。

翔だけじゃなくて、ジュンコの奴までデュエル馬鹿になりそうだな。

それでくつついたらこれが本当のデュエル馬鹿ツプルと言う奴か。

優 Side 終了

Side Change 有栖 Side

有栖 Side

十代君とジュンコが良い感じなのは良いよ。

友達が幸せそうなんだから。

でもさ、優。出来る限りならボクの事もっと見て欲しい。

もっとボクに関心を持って欲しい。ボクはキミの事が本当に好きなんだよ。

キミが望むならボクの全てを曝け出しても良いよ？

それでキミの視線をボクだけに釘付けに出来るならね。

…そうだよね、キミを最初に好きになった時に決心したからね。

楽な道じゃないのは分かっているよ。

1年で駄目なら2年。2年で駄目なら3年…どんなに時間が経っても構わない。

必ずキミの隣に立ってみせるよ。

卒業しても駄目だったら、地の果てまでキミを追いかけるよ、優。

第14話 デュエル馬鹿と恋する少女? (後書き)

優「短いし、相変わらずgdgdだな……」

しょうがないだろう。上手く書けないんだからさ。

優「それで次回は? 人造人間召喚事件か?」

その予定だったけど、大幅に予定が変わります。

優「ただでさえ、進みが遅いのこれ以上余計なことで物語の進行を遅くしてどうするんだ。」

自分でも分かっている事を言わなくても良い。

第15話 神？家訪問

アカデミアは冬期休暇を迎えた。

生徒の大半はその期間中はそれぞれの自宅へ戻るつもりでいた。

だが、その中にも一部ながら数少ない例外はいる。

十代や翔、隼人を初めとした居残り組だ。

勿論、俺も最初はその筈……だった。

当初の予定なら俺は今頃、レッド寮の自分の部屋でのんびりして居た筈なのだが……

現在、アカデミア島から本土へ向かう船の上にいる。

「何でこうなっただ……」

俺の呟きを聞く人は誰もいない。

そして、事の発端は約数日前に遡る。

~~~~~回想~~~~~

いつもの様に一日の講義が終了した放課後。

有栖にある事を聞かれる。

「冬休み中は優は何か予定でもあるのかなって。」

「…予定？」

「家に戻るのか。それともアカデミアに残るのかって意味だよ。」

そういう意味か。

俺には帰る家もないため、アカデミアに残留する予定であった。

その事を有栖に伝える。

「だったらさ、ボクの家に来ない？」

「は？」

「冬休み中はボクの家で過ごさないって意味だよ。家族にも優の事を紹介したいからさ。」

「ちょっと待て、俺はまだ行くとは一言も……」

「大丈夫だよ。それじゃあ、決定と言う事で良いよね？」

「……………」

~~~~~回想終了~~~~~

結果として、半ば強引に有栖に船に強制連行される事となった。

船に揺られる事数時間…船は本土へと到着する。

生徒達は次々に下船する。俺達もその中に混じっていた。

「ふう〜、やっと本土だ。長かったね。」

「そうだな…それでお前の実家と言つのは…」

「ちょっと遠いんだけど、大丈夫？」

「大丈夫だ。気にする必要はない。」

そこから俺は有栖の案内でバスに数十分ほど乗って、少し移動する。

バスを降り、15分程度徒歩で移動する所に有栖の自宅があった。

「ほら、あそこがボクの自宅だよ。」

「は………?」

それを見て、俺は言葉を失う。

自宅と言えば自宅なのかもしれないが……

俺の予想を遥かに上回っていた。

「ひよっとするとお前……良い所のお嬢様か何か？」

「まあ、世間一般的に言えば、そうなのかも知れないね。」

「……人は見かけによらないとは正にこの事か。」

「優、それってどういう意味かな？」

「だって、どう見てもお前、お嬢様って感じじゃないだろう。」

「失礼だね。」

そう、有栖の自宅の庭は何処かの大金持ちが住んでいるような広い庭が広がっており、その奥には地主が住んでいると思われる屋敷が佇んでいた。

規模は生前時は平凡な一般家庭の出身である俺から見れば十分に大豪邸と言っても差し支えない。

「初めてだぞ。こんな豪邸を見たのは……」

「優、そんな所に立ってないで早く入ろうよ。」

有栖に促されるがままに俺は神？邸へ入る事になる。

俺は神？家に入るとそれから暫くすると有栖の家族と対面する。

有栖は俺の隣に座っている。

有栖の家族は机を挟んで向かい合うように並んで座っている。その表情はとても険しい表情をしている。

その中でも中央に杖を持ちながらどっしりと構えているご老人は歳だけでなく、

この一族を纏めている長故なのか、凄まじい威圧感を放っているのは素人の俺でも分かるほどだ。

更にいえば、そのご老人の顔つきは何処か、5D'sのホセ爺さんに似ているような気もしない。

今更かも知れないが、俺は色々な意味でとんでもない奴に関わってしまったのかも知れない。

寧ろ、遊びに來ただけなのに何でこんなことになっているのか誰か

説明してくれ……

沈黙が続く中、切り出す様に有栖が口を開く。

「皆様、紹介します。彼の名前は、天空 優です。」

「初めまして…天空 優と申します。」

「ほう……」

俺は有栖に名前を紹介され、姓と名を名乗ると向かい側で中央に座っていたご老人が低い声で返事をする。

そして、ご老人は鋭い目で俺を直視する。実際に睨まれているのかもしれないが、睨まれてると思えるような錯覚さえ覚えてしまう。

俺はまだ死にたくないなのでその視線を返す様にそのご老人を直視する。

黙々とした空間がしばらく続いた瞬間。

「龍樹よ。」

「はい。私も意見は同じかと思えます。いえ、この場に集まっている一同もそう思っています。」

龍樹と呼ばれた40代半ば位の歳になるであろう男性は返事をする。

恐らくは、この人が有栖の父親なのだろうな。まあ…あのご老人が有栖の祖父と仮定するなら…の話だが、

返事をした男性はご老人の席から見て、右隣の席に座っている。

その男性が周囲に促すと、向かい側の席に座っている者達は全員頷く。

やがて、中央に座っていたご老人がゆっくりと口を開くと…

「……………合格じゃ。」

と一言洩らした。

合格って……一体、何が合格なんですか？ご老人。

「本当ですか？お爺様。」

「うむ。有栖よ。お前は良くやってくれた。なあ、龍樹に董よ。」

さっきまでこの場を支配していた重々しい空気はなくなり、ご老人はふおおふおおと笑いながら誇らしげに笑顔を見せる。

先ほどの男性とその男性の左隣に座っていた女性は先ほどとは打って変わり、ご老人同様に穏やかな表情を見せた。

彼らだけでなく、そこに集まっていた有栖の親族達も同様に。

「はい…有栖が初めて連れて来た男がこつも当たりとは…」

「流石は、私達の娘ですね。」

「男とは絶対無縁だと思っていたあの有栖が婿を連れてくるとは…
…これで有栖の未来も安泰だ。」

は？婿？……MUKO……MU……KO……む……KO……む……こ……むこ……婿！？

ちょっと待て、何がどうという理由でどうという方向に行けば、婿なんだ？

まあ、いきなり「出て行け！」とか言っただけ追いつかれるよりは幾分マシかもしれないが……

俺としては、寧ろそっちの方が良かった方かもしれない。そうすれば、翌日の船でアカデミア島へ戻れた筈だ。

「有栖さん……私は現在進行形でかなりパニック状態になっています。どうか、ご説明をお願いします。」

「えーとね……実はキミを連れて行くって家族に連絡を入れたら。何かボクが花婿候補を連れて来るって事になっちゃったから……ごめんね？」

「もう色々と通り越してしまって呆れるのも馬鹿らしくなっていました。……と言うよりもごめんで済んだら警察はいらない。」

「うう……ごめん。」

その後、有栖の家族の方々からの自己紹介を受ける。

先ほどのご老人は有栖の祖父でもある神かんさき？ 源一郎げんいちろうさん。

良く笑う印象を持たせるご老人であり、先ほどの威圧感を放つていた人物と同一人物とはとても思えない。

次に席で言う所の源一郎さんの左隣に座っていたご老婆は、彼の妻

で神？^{かんざき} 笑子さん^{えみこ}で有栖の祖母にあたる人物。

名前の通り、その顔はとてもニコニコしていて物腰が柔らかかそうな印象を持たせていた。

源一郎さんの右隣に座っていた男性は神？^{かんたき} 龍樹さん^{りゅうじき}で有栖の父親

冗談か本気が分からないが、「気軽にお義父さんと呼んでくれたまえ」と言われる始末だ。

続いて、有栖の母親で先ほどの席では笑子さんの左隣に座っていた神？^{かんざき} 董さん^{すみれ}。

見た目からしても有栖の母親と言うのは分かる、何せ、顔つきや髪の色は若干違えど、有栖が大人になったような感じた。

最後に執事長を務めると言う男性：城咲^{しろさき} 啓冴さん^{けいせい}にあいさつされ、ご丁寧に名刺まで渡される。

何でもこの人の家系は代々、有栖の家に仕えているらしい。

それからご家族の方々から色々聞かれる。

有栖とはどのように出会ったのか等、話の内容は様々…

色々話している間に陽は大きく傾き気が付けば、夜になっていた。

「ちょっと待て、何で俺がお前の部屋に泊まる事になってしまったんだ？」

その日の夕食は有栖の家でお呼ばれし、ご丁寧にお風呂場までお借りしてしまい。

後は就寝だけであるのだが、そこでとんでもない問題は発生した。

龍樹さんが「今夜は有栖の部屋と一緒に眠ると良い。」なんて言うてくれた。

そして、現在：俺は有栖の部屋にいた。持参して来た寝巻に着替えて…

有栖の部屋に関してはいかにも女の子の部屋だと言う雰囲気だけはあった。

それはさておいて、ZEXALの遊馬じゃないけど、正直言っただけで色々とビングレ過ぎていて。

寝床に関してはベッドが1つあり、そのベッドの上に枕が2つ置いてあり、俺にここで寝ろと言う意味あいであった。

おかげで頭痛じゃないのかと思う程、非常に頭が痛くて痛くてしょうがない。

寧ろ、手塩をかけて大事に育てた一人娘が何処の馬の骨とも分からんような男と同じ部屋に一晚放り込むとかどう言っただ見だ！？

「だって、もう決まった事だし。」

「…お前は血の繋がりのない異性と寝る事に抵抗とかないのか。」

「抵抗？…しいて言うなら、優と一緒に寝ると思うとドキドキする位だよ。」

「……………」

「え?! ひょっとしてボク、今晚優に襲われちゃうの!?!?」

最初の告白で痛い人間とか電波とか思っていたけど。

ここまで頭の螺子がぶっ飛んでいるのも珍しい。

と言うよりもあの家族も問題がありすぎるだろう……

娘が同年代の男を連れて来た!! 花婿騒動とは何時の時代の家だと思っってしまう。

「襲うつつもりはない……ってそうじゃなくて、お前は女性、俺は男。意味は分かっているな?」

「勿論わかっているよ。ボクだって、年頃の女の子なんだから分かっているつもりだよ。」

「だったら……………」

「優だからだよ。」

「？」

突如、有栖が声のトーンを変えて喋る。

俺だから……？

「優だから良いんだよ。ボクは前にキミに言ったよね？ボクはキミが好きだって……」

有栖の言葉に俺は肯定するように小さく頷く。

「その気持ちはあの日からずっと変わらないよ。ボクはキミが望むならね。ボクの全てを曝け出しても良いよ。」

「！」

「優、キミのあの時の言葉を聞かせて欲しい。ボクはキミが好きだ。キミが欲しい。」

「……………」

「優、もう1度…キミの答えを聞かせて欲しい。」

あの時は、有栖がどういう人間かなんて分からなかった。

有栖と出会って、それなりの時間が経ったから分かった事はある。

彼女は、俺が予想をしていたような目的で俺に近付いて来た訳ではない事を……

「正直に話す。これは俺が初めてお前に会った時に思っていた事だ。」

「うん。」

その後、有栖に思っていた事を告白する。

彼女がどういう人間かを見極める事と本当は俺が保有するシンクロモンスターを狙って近付いて来た事を……

それを聞くと有栖はよっぽどショックだったのか、とても落胆していた。

「そうなんだ……」

「失望したと言うならそこまでだ。」

「そうじゃないよ。それでキミから見てボクはどんなのかな?」

「行動の表裏がはっきりしている人間だと言うのは分かった。まあ、好きか嫌いかと聞かれたら嫌いではない。」

「ボクとしてはそこは好きって言って欲しいんだけど…」

「「友人」と言う前提ならば好きに入る人間だ。」

「じゃあ、もう一度単刀直入に言うよ。これは今のボクの正直な気持ちだよ。嘘偽りでは決してないからね。」

「？」

「ボクはキミの存在に心を奪われた女だよ！この気持ち、正しく愛だよ！ボクはキミと出会えた事に運命を感じずにはいられないよ。ボクとキミは運命の赤い糸で結ばれていたと思いたい。そして、キミを永遠に愛していると言いたいくらいキミが好きなんだ！！」

……何か、前よりバージョンアップしてないか？

「ここまで言っただけなら、この場でキミを押し倒さ」

「分かった…お前の気持ちは良く伝わったから落ち着け。」

「ボクの気持ち伝わったなら良いんだ。それでキミの答えを聞かせて欲しい。」

「……………」

「優？」

「お前の正直な気持ちは嬉しい。友人としてならともかく、異性と
言う概念で見たらどうなるかと言う時点で少々戸惑っている。」

「うん。」

「結果的に言えば、断ると言う事になってしまいかもしれないが…
俺に考える時間を欲しい。」

「……………」

「？」

「ここで答えを聞けないのは残念だけど。ボクだって、無理意地は
させたくないからキミがキミ自身で納得の行く答えが出るまで待つ
ているから。」

「……………すまん。」

「良いよ。ボクは全然気にしてないから。」

有栖は微笑みを俺に向けてくる。

情けないが、その微笑みがとても可愛らしく思えてしまう。

その後は、デッキを持参して来ていたのでベッドの上でデュエルを
していた。

「シンクロ召喚、ブラック・ローズ・ドラゴン！その効果でフィー

ルド上のカードを全て破壊する。」

「あー、ずるいー！」

「早すぎた埋葬で墓地からブラック・ローズ・ドラゴンを特殊召喚。ダイレクトアタック。」

「また負けたー！」

有栖は正直言っただけ強いと俺は思う。

下手をすれば、十代にも引けは取らないと思われる。

気が付けば、マシナーズ・フォートレス3体並んでいたりするし、本当に強い。

そうならば、ブラック・ローズで強制リセットでどうにかするしかない。

ある程度夜が更けて来たら、有栖が眠いのか欠伸を噛み殺す仕草を見せたのでその日はもう眠る事にする。

有栖の寝顔は先ほどの微笑みと同じく、可愛らしかった。

正直言っただけ、こんな事が冬期休暇…アカデミアに戻るまでの間ずっと続くと思うと気が重い。

第15話 神？家訪問（後書き）

冬休み編は路線を変え、有栖の家へお邪魔と言う形になりました。

有栖「両親からOK貰ったから優がOKしてくれたらそのまま、こ
んや」

優「それで次回はどうなるんだ？」

次回はアカデミアに戻るよ。そう何話も無駄に使えないから。

優「それでは次回もよろしくお願いします。」

第16話 熱血馬鹿と公開処刑（前書き）

祝、お気に入り登録件数100件超えました。ワイ、（、）、
ワイ

優「本当に超すとは思わなかったな。」

でも、正直言えば、メッセーજボックスにでもいいから感想とは言
わずに「読みました」とかでも良いからコメントが欲しいです。

優「感想貰えるだけありがたいがたく思え、この駄作者。」

第16話 熱血馬鹿と公開処刑

長いようで短かった冬期休暇の期間が終わり、アカデミア島へと戻って来た。

一言いえば、ある意味波乱に満ちて、疲れた冬期休暇だった。

冬期休暇は本当に休めた気がしない。肉体的ならともかく、精神的には休めた気がしない。

特に年明けが酷かった……

お正月という事もあって、有栖の着物姿は……まあ、可愛かったし、普段のオベリスク・ブルーの制服と違って新鮮だった。

だが、ジュースと間違えて、酒を飲んでしまって、「優〜！ボクと姫始めしよう！」と言いだして来た……これだから酒は怖い。

人間酒が入るとどんな行動をとるか分からない。だから俺は生前では二十歳過ぎているけど、酒も煙草もノーサンキューだ。

神？家の皆さんは、止める所か：「遠慮せずにごゆっくり」等と逆に煽っているのだから性質が悪い。

その時は、危機一髪の有栖が酒の酔いが回ったのか、そのまま眠ってしまったって、事なきを得たが……

特に一番、反応に困るのは神？家に滞在中の期間、朝起きるたびに龍樹さんを初めとした神？家のみなさんが「昨夜はお楽しみでした

か？」などと聞かれる始末だ。

そして、新学期が始まり講義も始まったのだが……

「何でデュエルを専門とする場所でテニスなんだろうな。」

「いいじゃんかよ、良い運動になるって……何か、このやり取り前にもあったような気がするんだけどな。」

十代が何かをぼやいているのは気にしないで置く。

鮎川教諭の号令のもと、生徒達は分かれて、ペアを組むためと散らばって行く。

さて、俺も相手を探さなければならぬが、誰か組んでくれそうな人はいないかな。

パートナーを探していると、有栖が俺の前に現れる。

「優、キミさえ良かったらボクと組まない？」

「それは構わないが……男女混合は良いのか？」

「だって、あそこにもいるよ。」

有栖がある方向を指を差す。

そこには、十代とジュンコ、翔とももえがペアを組む光景が見えた。更にいえば、大地と明日香がペアを組んでいる光景も隅に見えた。

友達として失礼かもしれないが、大地と明日香って凄い違和感があるって仕方ない。

十代とジュンコは分かるが、なんで翔とももえが組んでいるとしても奇妙な光景だ。

確か、原作では十代と翔、ジュンコとももえが組んでいた筈だが…

「何とも奇妙な光景だな…」

「ジュンコは猛烈に十代君にアタック中で、翔君とももえはそれに巻き込まれているって感じだね。」

「……」

翔とももえを見ると、十代とジュンコの横でお互いにペコペコと頭を下げている姿が見える。

何で頭を下げているのかわからんが……

それからまもなく、テニスのゲームが開始される。

暫くして、原作通りに十代が間違えて打ってしまったボールが明日香の方へ向かい。

そのボールがどこからともなく現れた。うえだゆうじ声の優男が打ち返し、ボールはそのまま、何で審判をやっているかは知らないが、クロノスの顔面に直撃。

しかし、良くボールにあたるなと思うよ。野球の時にも大地が打つた野球ボールが顔面に直撃したもんな……

講義が終り、寮で暇を持て余している所へPDAの呼び出し音が鳴り響く。

PDAを開いて見てみるとその相手は翔だ。

『優君！優君！』

「翔、どうかしたのか？」

『早くテニスコートに来てほしいッス！』

「は？テニスコート？」

『とにかく、早く来てほしいッス！！！！』

「おい、ちょっと訳を……」

翔は俺の言葉も聞かずに切ってしまう。

テニスコート……確か、原作じゃ部長の綾小路……とか言ったか。

そいつと十代がいきなり明日香を巡ってデュエルになったんだよな。
何か、凄まじく嫌な予感しかしない。

それから間もなく、俺はテニスコートへ向かう。

テニスコートには十代、翔、明日香、ジュンコ、ももえ、大地、有栖。

そして、部長の綾小路とその他数人のテニス部員がいた。

俺が呼ばれた理由が全くもって不明だ。

「翔、俺は何で呼ばれたのか分からない。」

「えーと、それがツスね…」

訳が分からないので翔の話聞く事になる。

十代の罰でもある一日入部が終わった後、十代がジュンコが飲み物とタオルを受け取りながら、明日香から万丈目の行方を聞いていた時の事である。

突如、綾小路が「二股をかけるとは言語道断」等と言い始めたらしい。

そこから話が更にややこしくなり、「デュエルで勝った方が明日香

の婚約者だ」^{フィアンセ}と言う事態に発展し、十代にデュエルを申し込む経緯になる。

十代はそれを受けたが、そのデュエルの間は終始、翔の視点からでは、ジュンコの機嫌が非常に悪かったとの事だ。

まあ…好きな人が尊敬している人絡みでデュエルとなれば、複雑にもなるだろう。

そのデュエルの結果は原作通り、十代の圧勝で終わり、ジュンコの機嫌も直ったらしい。

それから何を勘違いしたのか有栖の手を握り、その男が有栖を口説きにかかったの事……

だが、有栖が「ボクには優と言う一万年と二千年前から永遠の愛を誓い合った人がいるからお断りします。」と言い断ったらしい。

そしたら綾小路が「その永遠の愛を誓い合った人とやらを呼んで来てくれ!!」となり、俺が呼ばれたらしい。

「なるほど……何で俺が呼ばれたのかよく分かった。」

そして、俺は綾小路とか言う奴と対峙する。

何故か分からんが、何か無性に腹が立って仕方ない。

徹底的にぶちのめしたい程に……

しかも、翔の話で有栖が綾小路に絡まれたと言つ所から、どうもイライラし出している。

そのイライラは収まる所か、時間が経過するにつれて増して行く一方だ。

「神？君は僕のような人間にこそふさわしい！君のようなオシリス・レッドのぶぎゃああ……！」

鬱陶しいから顔面に拳を叩きこんでやった。

綾小路は凄まじい勢いで吹っ飛ぶ。

「な、何をするんだ！君は……！」

「うるせえ……さつさと構えろ。さもないとめえの顔面にもう一発叩き込むぞ？」

「……良いだろう！勝った方が神？君の婚約者だ。フィアンセ」

「優！頑張つて……！」

「あらあら、今度は有栖さんを巡ってお二人が戦つようですね。」

「え、ええ………そうね。」

「明日香様？どうかなされたのですか……」

「な、何でもないわ。（優のあの眼…あの時と同じじゃない。）」
その時、俺は明日香がいつぞやの退学騒動時に見せた俺の姿を思い
出していたのを知る由もない。

「デュエル!!」

優

LP：4000

綾小路

LP：4000

「先手必勝！僕の「俺のターン、ドロー！」」

優

手札：6

「俺はレスキューキャットを召喚。」

レスキューキャット

ATK 300

優

手札：5
モンスター：1

「その効果で墓地へ送り、デッキからレベル3以下の獣族モンスター
1 2体を特殊召喚する。極星獣タンギリスニとエレファンを特殊召
喚。」

極星獣タンギリスニ
ATK 1200

エレファン

ATK 500

優

モンスター：2

「レベル3の極星獣タンギリスニにレベル2のエレファンをチュ
ニング。」

3 + 2 || 5

2体は天へと舞い上がり、エレファンが2つの輪へと変化し、タン
ギリスニはその輪を潜り抜ける。

「5つの星々が輝く時、自然界を守護する白虎の怒りが木霊する。シンクロ召喚！いざ、吼えろ！ナチュル・ビースト！」

ナチュル・ビースト

ATK 2200

優

モンスター：1

「げっ……あのモンスターは……」

「知ってるのか？十代。」

「ああ、効果がえげつないんだ。三沢、もし優が俺やお前とやり合った時に出されると俺達は何もできずに確実に負ける。」

「十代が何もできないで負ける！？嘘でしょ？」

「ジユンコさん、アニキは間違えた事は言っただけです。」

「更に装備魔法、早すぎた埋葬を発動！発動コストとして、LPを800ポイント支払う。」

優

手札：4

LP：4000

3200

「墓地からモンスターを特殊召喚！俺は墓地からレスキューキャットを特殊召喚。」

レスキューキャット

ATK 300

優

モンスター：2

「墓地に送り、効果発動。デッキからレベル3以下の獣族モンスター2体を特殊召喚。俺はデッキからX-セイバーエアベルンと極星獣タングニョーストを特殊召喚。」

X-セイバー エアベルン

ATK 1600

極星獣タングニョースト

ATK 800

優

モンスター：3

「レベル3、極星獣タングニョーストにレベル3、X-セイバーエアベルンをチューニング。」

3 + 3 = 6

エアベルンとタンゲニョーストが天へと舞い上がり、エアベルンの姿は3つの緑の輪へと変わり、タンゲニョーストがその輪を潜り抜ける。

「6つの星々が輝く時、自然の森を守護する青竜の咆哮が響く！シンクロ召喚！轟け！ナチュル・パルキオン！」

ナチュル・パルキオン

ATK 2500

優

モンスター：2

「また新しいシンクロモンスターだな。」

「ナチュルとつくから名前からしてもあの2体は関連性があるみたいね。」

「相変わらず、凄い展開力ツスね。」

「それが優のデッキの売りだからね。ボクも冬休み中、何回もデュエルしたけど全然勝てなかったからね。」

「おやおや、初手から大型モンスターを2体も展開するとはね。オ

シリス・レッドにしてhブハツ!!」

五月蠅いので足元に何個か転がっていたテニスボールを1つ拾って、思いつきり投げる。

俺が投げたボールはそのまま、綾小路の顔面に直撃。

「な、何をするんだブハツ!!!」

反論して来たのでもう1つテニスボールを拾って、同じように投げる。

リアルダイレクトアタック?何の事かな?

「御託は良い、早くしろ。」

「……………僕のターン!ドロー!」

綾小路

手札：6

「魔法カード、サービスエースを発動!」

サービスエース(アニメオリジナル)
通常魔法

自分の手札からこのカード以外のカードを1枚選択し、相手にその

カードの種類を当てさせる。
当たった場合はそのカードを破壊する。
ハズレの場合はそのカードをゲームから除外し、相手に1500ポイントのダメージを与える。

「ナチュル・ビーストの効果。」

「何!？」

「このカードが表側表示で存在するとき、自分のデッキからカード2枚墓地へ送る事で魔法カードの発動を無効にし、破壊する。」

「な……」

フィールドにナチュル・ビーストの咆哮が鳴り響く。

サービスエースは弾け飛んで、破壊される。

それから俺はデッキからカードを2枚墓地へ送る。

因みに送られたのはクリッターと巨大ネズミ。

正直言つて、落ちが良くないか…

綾小路

手札：5

「く…ならば、魔法カード！スマッシュエースを発動！」

スマッシュエース

通常魔法

デッキの一番上のカードをめくる。

そのカードがモンスターカードだった場合、相手に1000ポイントのダメージを与える。

めくったカードは墓地に送る。

「（あのカードの効果は自分のデッキ削らなければならない。下手に自分のデッキを削るような真似はもうしないだろう。）」

「懲りない奴だ。無駄だ、ナチュラル・ビーストの効果をもう1度発動！」

「何！？正気なのか！」

俺はデッキからカードを2枚墓地へ送ると、再びナチュラル・ビーストの咆哮が響く。

今度の効果で墓地へ送られたのはゾンビ・キャリアとグローアップ・バルブだった。

今度の落ちが良い方だな。

綾小路

手札：4

「で、どうするんだ？」

「ならカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

綾小路

手札：3

魔法・罠：1

「俺のターン、ドロー！」

優

手札：5

「魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のモンスター5体を選択して、デッキに戻し、シャッフルし、2枚ドローする。俺は、エレファン、極星獣タンギリスニ、極星獣タングニョースト、クリッター、巨大ネズミを選択し、デッキに戻し、2枚ドロー！」

優

手札：6

「手札から死者蘇生を発動。墓地からレスキューキャットを特殊召喚。」

レスキューキャット

ATK 300

優

手札：5

モンスター：3

「そして、効果発動！デッキからレベル3以下の獣族モンスター2体を特殊召喚。俺はデッキからエレファンと極星獣タンギリスニを特殊召喚。」

エレファン

ATK 500

極星獣タンギリスニ

ATK 1200

優

モンスター：4

「レベル3、極星獣タンギリスニにレベル2、エレファンをチューニング！」

3 + 2 = 5

2体は天へと舞い上がり、エレファンが2つの輪へと変化し、タン
グリスニはその輪を潜り抜ける。

「5つの星々が輝く時、知識の魔導師が無限の可能性を模索する。
シンクロ召喚！カモン！TG ハイパー・ライブラリアン！」

TG ハイパー・ライブラリアン
ATK 2400

優

モンスター：3

「バトルフェーダーを通常召喚！」

バトルフェーダー
ATK 0

優

手札：4

モンスター：4

「攻撃力0？馬鹿にしているのかい？」

「黙れ、まだ準備が終わってない。墓地のグローアップ・バルブの効果発動！自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。ただし、この効果はデュエル中に1度しか使用できない。」

送られたカードは、極星獣グルファクシか、トールが出ていれば落ちて欲しいカードではある。

グローアップ・バルブ

ATK 100

優

モンスター：5

「レベル1、バトルフェーダーにレベル1、グローアップ・バルブをチューニング！」

1 + 1 = 2

「2つの星々が混じり合う時、更なる希望が舞い降りる。シンクロ召喚！来い、シンクロチューナー！フォーミュラ・シンクロン！」

フォーミュラ・シンクロン

ATK 200

優

モンスター：4

「シンクロチューナー？」

「普通のシンクロモンスターとあんまり変わらない気がするんだけど……」

「シンクロモンスター版のチューナーと言う事か？」

「みんなそれよりもさ、気が付いたら優君の場に4体もシンクロモンスターが並んでいることに突っ込もうよ。僕達がシンクロモンスターを使えたとしてもあんな芸当はできないよ。」

悪い、翔。

最低でも3体並ぶ事は、猫無しでも生前の世界では日常茶飯事だ。

「フォーミュラ・シンクロンがシンクロ召喚に成功したため、1枚ドローするが、それにTG ハイパー・ライブラリアンの効果がチエーン！このカードが表側表示で存在する時に、自分もしくは相手がシンクロ召喚をしたときカードの1枚ドローする。よって、俺はカードを2枚ドロー！」

優

手札：6

「これで準備が整った。……お前を処刑する準備がな。」

「処刑!?!」

「レベル5、ナチュラル・ビースト、TG ハイパー・ライブラリアンにレベル2、シンクロチューナー・フォーミュラ・シンクロンをチューニング!」

5 + 5 + 2 || 1 2

指定した3体が天へ上がり、フォーミュラ・シンクロンが2つの輪へと姿を変え、ナチュラル・ビーストとハイパー・ライブラリアンがその輪へ入り込む。

「5と5と2だから……えーと……」

「レベル1 2……?」

「……レベル1 2!?!?」

「淒いよ、優……」

「1 2の星々が輝く時、世で最も輝く星を纏いし聖龍が舞い降りる。

シンクロ召喚！準星龍、シューティング・クエーサー・ドラゴン！」
3体が一筋の光になった瞬間、天から光の柱が立つような光景が見え、

その光の中から人型に近い巨大な龍が現われる。

シューティング・クエーサー・ドラゴン
ATK 4000

優
モンスター：2

「攻撃力4000!？」

「「綺麗……」」

「正にその名の通りだな。」

「更に速攻魔法、サイクロン発動。その伏せカードを破壊する。」

「くっ!!」

優
手札：5

綾小路

魔法・罨：0

破壊されたのはレシープエース……アニメのままだな。

クエーサーやパルキオンの効果使ってもよかつたけど……まあ、良いや。

寧ろ、パルキオンを出した意味が在るのか凄く怪しい。

まあ、出す準備をしている途中に激流葬とか奈落とかやられた時の保険と言う意味では無駄ではないかもしれない。

寧ろ、何で俺はこんな雑魚クエーサーにこいつを出す何て事をしてしまったのかが分からん。

それ以前に出る事自体の確立が1パック買ってホログラフィックレアが当たるくらいの確立だからな……

レシープエース（アニメオリジナル）
通常罨

相手モンスター1体の直接攻撃を無効にし、相手に1500ポイントのダメージを与える。

その後、自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。

「覚悟は良いな？ ナチュル・パルキオンでダイレクトアタック。」

「うわあああああ……！」

ナチュル・パルキオンから放たれた息吹が綾小路を襲う。

綾小路

LP：4000 1500

「これで終わりだ。シューティング・クエーサー・ドラゴンでダイレクトアタック！天地創造撃、ザ・クリエーション・バースト！！」

「うわあああああ！！！！」

シューティング・クエーサー・ドラゴンの手から光の球が放たれ、その球は一直線に綾小路へ向かい。

そのまま、奴へ襲いかかる。

綾小路

LP：1500 - 2500

「この僕が2回も負けたああああああ！！！！！！」

綾小路は泣きながらテニス場を逃げるように走り去って行った。

たかが、デュエルで負けた程度で泣きべそをかくとは、情けない……
それでも男か。

あの歳でありながら、この程度で泣くようではよっぽど甘やかされて育てられたみたいだな……

「やったな、優。」

「ああ……」

「優……」

「……？」

「キミはボクのためにあんな凄いモンスターを出してくれるなんて……
……やっぱり……」

「いや……そうではない。」

「……え？」

「ただ、あの男が何か分からんが無性にムカついて仕方ないからプ
ライドとか色々な物を押し折るために出したただけだ。」

「……」

「あれ？みんな、どうしたんだよ？黙り込んでさ。」

？……何故か、分からないが、十代以外の全員が揃って黙り込んでし

まう。

場の空気が凄まじく気まずいぞ……俺は何か、間違えたことを言ったのか？

本音を言つと、あの男には有栖を渡したくない……その感情はあつた。

それは友達としてなのか、それとも……

優 Side 終了

Side Change 有栖 Side

有栖 Side

優……キミ、素なのか狙っているのかわからないけど。

中途半端に鈍いよ……

今回はデュエルでキミが間接的にはいえ、ボクのために戦ってくれたから良いよ。

でも、あの時の優はとてもカッコ良かったな。

見ている本当に惚れ惚れしたよ。

ボクは十代君達と話している時の優……デュエルをしている時の優……

カップラーメンを美味しそうに食べる時の優。

どの優も好きだよ…愛しているよ。

今回の最強カード

優「今回の最強カードは…」

有栖「シューティング・クエーサー・ドラゴンだよ。」

シューティング・クエーサー・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル12 光属性 ドラゴン族 ATK 4000 DEF 4000

シンクロ素材：シンクロモンスターのチューナー1体+チューナー以外のシンクロモンスター2体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このカードはこのカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。
1ターンに1度、魔法・罫・効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する事ができる。

このカードがフィールド上から離れた時、「シューティング・スター・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

主な収録パック：「MASTER GUIDE3 書籍付属カード」

優「レベル12のシンクロモンスター、シンクロモンスターのチューナーとそれ以外のシンクロモンスター2体以上でのシンクロ素材が必要なモンスター。」

有栖「シンクロ召喚でしか特殊召喚できない効果と連続攻撃効果にカード効果の発動を無効にする効果とフィールドを離れるとシューティング・スター・ドラゴンを特殊召喚できる効果を持っているよ。」

優「効果は強力だが、出す準備として最低でもシンクロモンスターが3体並べる必要があり、尚且つ1体はシンクロチューナーでないとならない。」

有栖「だけど、それに見合った効果を持った強力なモンスターであることは確かだね。」

優「ああ、だが最も警戒が必要なカードは超融合。これだけは無効化が出来ず、更にチェーンに融合の処理が入ってしまうため、タイミングを逃し、シューティング・スター・ドラゴンを出す事が出来ない。また、この効果で呼び出したシューティング・スター・ドラゴンが蘇生制限を満たしていないので効果で除外した場合は戻ってこないので注意が必要だ。」

有栖「攻撃力・守備力は共に4000、攻撃名は天地創造撃 ザ・クリエーション・バーストだよ。」

第16話 熱血馬鹿と公開処刑 (後書き)

やっと16話目が書き終わりました。

優「今回の俺のアレは有なのか？(リアルダイレクトアタック的な)

」

多分、問題なし。

優「多分かよ……」

有栖「で、次回はまたしようもない話になるの？」

次回は遊戯デッキ強奪事件……の予定。

優「また予定か……とりあえず、今話も読んで下さった皆様。ありが

とうございます。」

第17話 初代デュエルキングのデツキ盗難事件！？

「優。これあげるよ。」

テニス部のアホ部長の公開処刑デュエルから数日後の月日が経ち。

一日の講義が終了し、教室から生徒達が次々に出て行き、俺もレツド寮へ戻ろうとした所へ有栖が現れる。

手には何かのチケットのようなものが握られていて、それを俺に渡す。

これはいつたい、何のチケットだ？

「有栖、これは？」

「知らないの！？明日、初代デュエルキング武藤遊戯のデツキの特別展示会があつて、これは明日の朝一番で見られる整理券だよ？」

有栖が驚いたような顔で説明してくれた。

明日と言えば、週末の休みで講義自体は休みだったか。

そう言えば、原作ではテニス部長の云々の後にはそんな話もあつたな。

この世界に来てから何がどういう順番で起こったか少々忘れかけた気がしていたけど。

その時期か…となれば、これが過ぎると学園代表戦やレイが顔出しに来る頃か。

「でも、お前は良いのか？そう言うのって数が少ないんだろっ？」

「ボクの分はちゃんと自分で取ってあるから大丈夫だよ。」

「なら、ありがたく受け取って置く。ありがとう。」

「どういたしまして…じゃあ、また明日、展示会場でね。」

「ああ……」

俺は有栖と別れると有栖は女子ブルー寮へ俺はレッド寮へと足を運んで行く。

遊戯のデッキか…あれは普通に考えても常人には絶対に回せないデッキだ。

特に下級モンスターの大半が通常モンスターでもあって、種族もバラバラと来た。

だが、俺が知っているのは戦いの儀までの遊戯であって、それ以降は知らない。

正直言えば、どんなデッキ構築であるのかが興味があった。

ドンドンドン！

「！」

「優、居るか？」

夕食後、部屋にいた所に突如扉を叩かれる音が聞こえて来る。

音と共に聞こえて来たのは十代の声であった。

対応するため、扉を開けると十代だけでなく、翔と隼人の姿があった。

「どうした？こんな時間に。」

「なあ、これから展示会場に行かないか？」

「これからって……展示会は明日からだろ？」

「開くのは明日の朝9時、つまり…もうデッキは展示してあるかも知れないだろ。今行けば、ちよつと見せて貰えるかもしれないだろ？」

「別にデッキは逃げやしないだろうが…」

「そんな事言わずに優君も一緒に行こうよ！」

「明日は込むと思うんだな。」

まあ、原作だと俺達行く頃にはデッキが盗まれているだろう。

と言うよりも生徒の大半が同じような考えをしているのかも知れないな。

「まあ、別に構わないけどな。」

「なら善は急げ、速く行こうぜ！」

俺達はレッド寮から遊戯のデッキが展示されている展示会場へと向かう。

予定だと向かったデッキの展示会場の入り口付近で大地と鉢合わせになるんだが……

「あ！」

「十代！？それに優に翔君に隼人君！？」

「明日香さんにお兄さん！？」

「って……何でお前ら、何でこんな時間にこんな場所にいるんだ？」

「それはキミ達もでしょ？」

大地だけではなく。明日香や有栖にカイザー。それにジュンコやももえとも鉢合わせとなった。

ジュンコは十代にホの字になったお蔭でかなり原作組に食い込んで来ているし、ももえはそれに巻き込まれたという感じだな。

ここで色々なメンバーが一気に喰い込んで来たな。

「俺はちょっとフライングしてキングのデッキを拝みにね…」

「ひょっとして、お兄さんも?」

「ああ、そうだ。」

「序に言つと私達もね。」

「何だ…みんな考えている事は同じか。」

「類は友を呼ぶとは正にこの事なんだな。」

と言うよりは同じ穴の貉と言った方が正しいかもしれないな。

「マンマミーヤ!」

と展示会場の方から叫び声が聞こえる。

声からしてもクロノスだろうな……

「「「「「「「「「「「!?!?」「」「」「」「」「」

「今の声は!」

「クロノス教諭だ。」

カイザーがいち早く反応し、駆け出す。

珍しいな、カイザーがそのような反応をするとは……

余程、遊戯のデッキが気になるらしいな。

展示会場へ駆け込むとそこにはクロノスと割られたガラスケースがあった。

寧ろ、盗んだ神楽坂はどうやって忍び込んでデッキを盗んだのだろうか。

周りを見ても外部から入れそうな所はない。

「な、ギャビーン!!」

「クロノス教諭!?!」

「展示ケースが割られている……!?!」

「キングのデッキがないんだな。」

「まさか、クロノス先生が……」

「ち、違うノーネ。私じゃないノーネ。」

「クロノス教諭、悪い事は言いません……ですからキングのデッキを返した方が良いでしょう。」

「だから、私じゃないノーネ。」

「だったら、何でここにいますか!？」

と言っか、みんなクロノスがデツキを盗んだと思っ込んでいる。

他の連中はともかく、カイザーまでもがクロノスを犯人扱っして
いるな……

こいつら、何処まで馬鹿なんだ？

ひょっとして、俺が介入したのが原因なのか？結果的に言えば、俺
が悪いのか？

誰か教えてくれ……

「待て、みんな。」

「何で止めるの？優。」

「考えてみる、クロノス教諭…あなたは、ガラスケースの鍵を持ち
合わせていますか？」

「こゝ、ここにあるノーネ。」

クロノスは俺達全員にわかるようにガラスケースの鍵を見せる。

「クロノス教諭が犯人であるとすれば、鍵を持つているならば、態
々ガラスケースを割る必要性はない。しかし、現実にガラスケース
は割れてデツキは盗まれている…となれば、犯人は鍵を持つていな
い外部の人間か、アカデミアの教諭・生徒に限られる。」

「そ、そんなノーネ。」

「じゃあ、誰がこんな事を…」

「そうならば、盗んだ犯人は島のどこかにいる筈だ。クロノス教諭はアカデミア内部を、俺達は手分けしてアカデミアの外を探す……と言っ事で良いか？」

「シニョール達だけが頼りナノーネ。これでこの事が公になってしまったーラ……」

「事が公になってデッキも戻らなかつたらあなたの首が飛ぶのは確実でしょうね。俺達はあなたの首がふっ飛ばうが逮捕されようが懲戒免職にされようが関係ありませんが……」

「優……いくら思っているも本人の前に言うのはどうかと思うよ。」

「優君、その証拠にこれ見てよ。」

翔の言葉が気になり、クロノスの方を目に向けた。

クロノスに背を向けていて気付かなかったが、クロノスは余程ショックだったのか、その姿は石になってしまっていた。

ジュンコが軽く、叩くと見事に「コンコン」と言う音がしており、本当に石になっているのである。

「大の大人が餓鬼の言葉を真に受けるなよ……」

「優、キミが本当に15歳なのか気になるんだけど。」

確かに俺は見た目だけは15歳だ。精神年齢は一応、ギリギリで二十歳は超えている。

それでもクロノスは（多分）三十路は超えている筈なのだから、クロノスから見れば20代の人間も十分餓鬼に見える筈だ。

「それよりこれ、どうするのよ？完全に石になっちゃってるわよ？」

「放って置こう。」

「良いのかな……」

「それよりもデッキを盗んだ犯人を捜す方が先だ。」

「まだ時間もそう経っていない筈、犯人を見つけ出すんだ。」

俺達はアカデミアを出た後、手分けして島中を探す事にした。

原作では確か、神楽坂は海岸の岩場付近に居た筈だが、この島は無駄に広いし、似たような場所も多々ある。

その場所を割り当てるのも困難だ。

俺は現在、有栖と犯人捜しを開始していた。

「やっぱり、何処にもいないね。」

「ああ……」

俺達はレッド寮の近くにかかっている橋の前で合流する。

俺と有栖が付いた時には、十代と隼人に大地、明日香、ジュンコ、
ももえだけで。

丸藤兄弟は両方とも姿を見せてなかった。

「そっちはいたか？」

「いや、こっちにはいなかった。」

「あたし達も駄目だったわ。」

「ぐわあああああっっ！！！！」

と遠くの方から叫び声が聞こえて来る。

場所は橋を渡った方向から聞こえて来た。

「！？」

「あっちだ！！」

俺達は橋を渡り、声がする方向へ向かう。

「ああ……流石はキングのデッキだと言っただけの事はある。」

「アニキ、みんな。アイツが……」

みんなの視線が神楽坂に集中する。

「神楽坂!!お前が犯人か!?!」

「よう、三沢。」

「そのデッキをお返しになって下さいませ!今ならアカデミア側も大事にはしない筈ですわ!」

「ふっ……嫌だと言ったら?」

「何!?!」

「これこそが……このデッキこそが俺の求めていた最強のデッキだ。俺なら……武藤遊戯のデュエルを徹底的に研究している俺なら!彼のデュエルを100%再現できる!もう俺は誰にも負けない!!俺こそが最強なんだ。」

「……」

「優?」

「……あいつは何もわかってない。」

神楽坂
あいつは生前の世界でも居たが、奴は単なるコピー厨だ。

虎の威を借る狐みたいで自分の力で考えてないデッキを使う輩と同類に他ならない。

ああいう奴は、叩き潰して目を覚まさせるしかない。

「カイザー、ディスクを貸してほしい。」

「やるつもりか？」

「あいつはデュエリストとして、何一つとして分かってない。少し灸を添えてやるだけだ。」

「…分かった。」

俺はカイザーからデュエルディスクを受け取るうとした時……

「待つて、優。……ボクが行くよ。」

「有栖？」

「キミが何で怒っているのかボクには何となく分かるよ……だから、キミの出る幕ではないよ。ボクが信じて作ったデッキが、ただ行動を真似る事しか能のない奴が使うデッキに負ける訳がないからね。」

「……何でお前がそこまでやる気なのかは知らないが、お前に任せ
る。」

「ありがとう。(ここで勝って、優にカッコいい所を見せないとね。
)」

俺は有栖にデュエルディスクを渡し、有栖はそれを受け取ると岩場
に上がる。

「誰にも負けないと言っならボクとデュエルしろ。そして、ボクが
勝ったらそのデッキは潔く返すんだ。」

「お前、本気で俺に勝つ気でいるのか？」

「勝てるよ。」

「何!？」

「強いのはそのデッキであって、君自身の強さじゃない。寧ろ、君
は虎の威を借る狐と同じだよ。」

「黙れ!お前にも俺の強さを認めさせてやる!！」

「黙らないよ!誰も君の事なんか認めない。」

「デュエル!！」

有栖の事だから大丈夫だとは思っが…心配だな。

有栖

LP:4000

神楽坂

LP：4000

「ボクのターン！」

有栖

手札：6

「ボクは、マシナーズ・ギアフレームを召喚！」

マシナーズ・ギアフレーム

ATK 1800

有栖

手札：5

モンスター：1

「マシナーズ・ギアフレームが通常召喚に成功した時、自分のデッキから「マシナーズ」と名のついたモンスターを手札に加える！ボクはデッキからレベル7のマシナーズ・フォートレスを手札に加える！」

有栖

手札：6

「更に永続魔法、機甲部隊の最前線を発動して、ボクはターンエンドだ。」

有栖

手札：5

魔法・罠：1

「俺のターン！」

神楽坂

手札：6

「手札から魔法カード融合発動！手札の幻獣王ガゼルとバフオメツトを手札融合！出でよ！有翼幻獣キマイラ！」

有翼幻獣キマイラ

ATK 2100

神楽坂

手札：3

モンスター：1

「更に魔法カード、天使の施し！デッキからカード3枚引き、その

後、手札から2枚を墓地へ捨てる。」

「手札交換カード……」

「バトル！行け、キマイラ！キマイラ・インパクト・ダッシュ幻獣衝撃粉碎！！」

有翼幻獣キマイラ

ATK 2100

マシンナーズ・ギアフレーム

ATK 1300

有栖

LP:4000

3200

「くっ……！？どうして、ギアフレームの攻撃力が！？」

「ふ、こいつの効果だ。」

神楽坂は墓地に送られたあるカードを見せる。

「それは……！」

「暗黒魔族ギルファア・デーモンは墓地に送られた時、フィールド上のモンスターの装備カード扱いとして装備され、装備モンスターの攻撃力を500ポイント下げる。」

「そんなカード何時の間に……！」

「あつたのさ、このカードを墓地に送るタイミングが…」

さっきの天使の施しで捨てたカードか…

「だけど、マシンナーズ・ギアフレームが戦闘で破壊された時に永続魔法、機甲部隊の最前線の効果発動！このカードは1ターンに1度、機械族モンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力の低い、同じ属性の機械族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。ボクはデッキからグリーン・ガジェットを特殊召喚！」

グリーン・ガジェット

ATK 1400

有栖

モンスター：1

「更にグリーン・ガジェットが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキからレッド・ガジェットを手札に加える事が出来る。」

有栖

手札：6

「サーチ効果か、小賢しい。俺はこれでターンエンドだ。」

「ボクのターン、ドロー！」

有栖

手札：7

「三沢、神楽坂ってどんな奴なんだ？」

俺の横では十代が大地に神楽坂について聞いているのが見える。

「話じゃ、理屈ばかりで実践はからつきしって聞いているけど？」

「神楽坂は記憶力が良すぎて、自分で組んだデッキは無意識のうちに誰かのデッキに似てしまう。そこをつかれていつも勝負では負けてしまうが、デッキを真似るといふ事は一瞬で他人のデッキの特徴を読み取るという事だ。デッキからそれを作ったデュエリストの人格まで読み取り…そのタクティクスを再現する。」

幾ら、デュエルで勝つためとはいえ、人格まで真似るって…そこまで真似する必要はないと思う。

人格そのものまで真似したら、ある意味、人権侵害的なものになるのではないか？

「今、奴の持っているデッキが最強と言うのなら、今のアイツは無敵のデュエリストという事だ。」

「最強…無敵。そんなのはただの虚言だと思うが？」

「優の言う通りだ。最強・完璧：そういう事であるならば、それが限界でもあるとも取れる。」

「ふん、天空 優。お前の獣デッキは使ってみたが本当に雑魚だったな。」

俺達の会話が気に食わなかったのか、神楽坂が鼻で笑いながら視線をこつちに向けながら話す。

「……」

「あんなシンクロモンスターとか訳の分からないせこいモンスター頼りでそれがなければただの雑魚デッキだったぜ？」

最早、せこい呼ばわりか。

「神楽坂！！てめえ！」

「落ち着け、十代。」

「優！お前は何とも思わないのか！？お前の自慢のデッキが馬鹿にされてるんだぞ！？」

「神楽坂！！お前に優のデッキをとやかく言う資格はない！！」

「雑魚はどこまで行っても雑魚なんだよ。屑だ、塵なんだよ！三沢！お前もな。」

Side Change

有栖 Side

有栖 Side

今、……………こいつは優に向かって何て言った……………？

雑魚？……………優のデッキを雑魚と言った。

ユウノデッキキヲザコトイッタ……………？

優が…ボクが愛している人が一生懸命組み上げたデッキを雑魚呼ばわり。

優の強さはボクや十代君や明日香達、みんなが知っている……………

ボクは優と冬休み中に家へ招待して、休み中の空いている時間は殆どデュエルをしていた。

優とデュエルをしていたその時間がボクにとっては、とても至福の時だった。

負けるのは悔しかったけど、それは優の強さがボクよりも上だから

仕方ない事なんだ。

その優のデッキの強さは本物で、それを使いこなす優の強さも本物だ。

優のデュエルを見ていない、こんな奴に優のデッキを馬鹿にする資格なんかない！！

神楽坂……………こいつだけは……………こいつだけは絶対に許さない！！

優を……………優を侮辱したこいつだけは絶対に許せない！！

他人の力でいい気になっているような奴には絶対に許さない！

叩き潰してやる。完膚無きにまで徹底的に叩き潰して、優を馬鹿にした事を後悔させてやる……………

Side Change 優 Side

優 Side

「……………ボクは永続魔法、一族の結束を発動。……………このカードは自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類のみ

場合、自分フィールド上に表側表示で存在する。その種族と同種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。」

「何だと!?!」

有栖

手札：6

魔法・罠：2

!?!

有栖の様子が変だが：大丈夫か？

何時ものあいつと何かが違う……

上手くは説明できないけど、彼女の祖父でもある。源一郎さんが放っていた威圧感に似ているものが感じられる。

「な、なんか。有栖の様子が変じゃない?」

「あのような有栖さんは初めて見ましたわ。」

「お前達も初めて見るのか?」

「ええ……あの子があんな眼は初めてよ。」

有栖と中等部からの付き合いでもある明日香達ですら始めてみると言った。

「……………墓地にはマシンナーズ・ギアフレームが存在する。……
……よって、グリーン・ガジエットの攻撃力は800ポイントアッ
プ。」

グリーン・ガジエット

ATK 1400 2200

「……………更にマシンナーズ・フォートレスの効果、このカードは
手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨て
て、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。」

「手札のモンスターを捨てて特殊召喚する効果だと!?!」

「……………ボクは手札のマシンナーズ・フォートレスとレッド・ガ
ジエットを手札から捨てて、このカードを墓地から特殊召喚。」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

有栖

手札：4

モンスター：2

「更に一族の結束の効果を得て、攻撃力アップ。」

マシンナーズ・フォートレス
ATK 2500 3300

「こ、攻撃力3300!？」

「……………スクラップ・リサイクラーを通常召喚。」

スクラップ・リサイクラー
ATK 900

有栖

手札：3

モンスター：3

「……………このカードが召喚に成功した時、このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから機械族モンスター1体を選択して墓地へ送る事ができる。……………ボクは、デッキからマシンナーズ・フォートレスを墓地へ送るよ。」

「なっ。そのカードは……………」

「……………そして、このモンスターも機械族……………一族の結束の効果が適用されるよ。」

スクラップ・リサイクラー

ATK 900 1700

「……………ボクは手札のイエロー・ガジェットとマシンナーズ・ギアフレームを墓地へ送り、マシンナーズ・フォートレスを墓地から特殊召喚。」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

有栖

手札：1

モンスター：4

「……………更にこれらのカードも機械族……………よって、一族の結束の効果が適用される。」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500 3300

「……………更に速攻魔法、リミッター解除を発動。このカードは発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する。全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。……………ただ、このターンで終わらせれば問題はない。」

有栖
手札：0

マシンナーズ・フォートレス
ATK 3300 6600

マシンナーズ・フォートレス
ATK 3300 6600

スクラップ・リサイクラー
ATK 1700 3400

グリーン・ガジェット
ATK 2200 4400

「……………君だけは許さないよ。……………優のデッキを雑魚と言っ
た事を後悔させてやる。スクラップ・リサイクラーで有翼幻獣キマ
イラを攻撃！！」

スクラップ・リサイクラー
ATK 3400

有翼幻獣キマイラ
ATK 2100

神楽坂
モンスター：0

LP : 4000 2700

「くっ…だが、キマイラの特殊効果発動！破壊された時、墓地のバフォメットか幻獣王ガゼルを特殊召喚する！俺はバフォメットを守備表示で特殊召喚！」

バフォメット

DEF 1800

神楽坂

モンスター：1

「……………続けて、グリーン・ガジェットでバフォメットを攻撃。」

グリーン・ガジェット

ATK 4400

バフォメット

DEF 1800

「……………マシナーズ・フォートレス2体でダイレクトアタック！」

「ぐわああああああっ……！！！！！」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 6600

神楽坂

LP : 2700 - 10500

WIN : 有栖

「負けた……この俺が……こんな強いデッキを使っても負けた。」

「……………」

有栖は冷めた眼で神楽坂を見ていた。

「やっぱり、俺には才能がまるでないんだ……………」

そう言うのは才能とか以前の問題だろう。

「神楽坂。お前は何で人のデッキを真似するような事をする?」

「そんなの勝ちたいからに決まっているだろ! ……強いデュエリストのデッキを使えば勝てる……………そう信じていたのに。」

駄目だ、このアホは何にも分かってない。

「お前、アホだろ。」

「な、何だと……………?」

「そのデッキが強いのは武藤遊戯が時間と労力かけて作ったデッキでそのデッキの真の強さは武藤遊戯が使ってこそ、完全に発揮されるものだ。お前はそれを真似しているだけで、お前の本当の強さじゃないんだよ。」

それにその遊戯のデッキも過去に彼が使っていたと言っただけであり、今は違うかも知れない。

「俺の本当の強さじゃない……………」

「…俺は物事を他人に説明するのは得意じゃないが、バツサリいうと武藤遊戯や海馬瀬人…その他の名立たるデュエリストのデータとか全部綺麗さっぱり忘れて、お前自身が時間と労力をかけてお前にしか作る事ができないオリジナルのデッキを作り上げて見るよ。それがお前にとって、最強のデッキなんだ。」

「俺だけにしか作る事が出来ないデッキ…」

「ああ、カードがないなら、俺の所に来ればカードは幾らでも分けてやるから。」

「天空優。お前は……………どうして、そんな優しい言葉をかけてくれるんだ？……………俺はあそこまでお前のデッキを馬鹿にしたのに……………」

「……………そうだよ、優。ボクはキミを馬鹿にしたこいつが許せないんだ。」

「なるほど……………だから途中で様子が変わったのか。」

「…………好きな人を馬鹿にされて黙っているほど、ボクは温和なつもりはないよ。」

有栖に視線を移すと有栖は神楽坂を睨むように見ていた。

少しして、視線を神楽坂の方へ戻す。

「まあ、気にするな神楽坂。俺は全然、気にしてはいない。」

「自分を馬鹿にした相手を平然と許す所か、手を差し伸べる優君の男気と優しさに痺れる憧れるツースー!!！」

「カイザー……………」

「…………十代、こんな弟なんだが、宜しく頼む。」

後ろの方で翔が何か叫んでいる気がするが気にしないで置く。

「確かにデツキを盗んだと言う行為は許される事ではないかもしれない。俺達もクロノス教諭や鮫島校長に掛け合って、罪を少しでも軽くして貰えるように頭下げるから。」

「天空……………」

「じゃあ、デツキは返してくれるな?」

「ああ、勿論だ。」

盗まれた遊戯のデッキは無事に返された。

神楽坂の処罰に関しては、俺やカイザー、十代達が鮫島校長やクロノスを説得した結果、処罰として、一週間の寮室謹慎と言う事で済む事になる。

今回の最強カード

優「今回の最強カードはマシンナーズ・フォートレス」

マシンナーズ・フォートレス

レベル7 地属性 機械族 ATK 2500 DEF 1600

このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する、このカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

主な収録パック：「ストラクチャーデッキ・マシンナーズ・コマンド」

優「レベル7の機械族モンスター。」

有栖「手札と墓地から特殊召喚する効果と戦闘で破壊された時に相手のカードを1枚破壊する効果にカードの効果の対象になった時に相手の手札を確認して捨てさせる効果があるよ。」

優「マシンナーズと名のついているため、マシンナーズ・ギアフレームやマシンナーズ・ソルジャーにも対応している。」

有栖「手札に機械族モンスターを多く溜め込むことができるデッキとは相性がバツチリだよ。ボクと優みたいに。」

第18話 恋は盲目？

神楽坂の謹慎が解除された数日後の事……

レッド寮でカード整理をしていた所へ思わぬ珍客が訪れて来た。

「優、いるか？」

「……………」

珍客とは大地と数日前に謹慎が解除された神楽坂である。

メインの大地はともかく、一回しか登場しない神楽坂が訪れて来るなんて珍しい。

「どうしたんだ？」

「彼の話聞いてはくれないだろうか？」

大地は神楽坂の方に視線を向ける。

とりあえず、2人を部屋の中へ入れて、彼の話聞いてみる事にした。

有栖とのデュエル後の謹慎期間中、神楽坂はどうすれば、自分のオリジナルのデッキを組めるかを考えていたらしい。

これはかなり良い傾向にあった。原作では何をとち狂ったのか。」

自分のなりきり方が半端だったからだ。」とか言いだし、結局何もわかっていなかったのだから……

それで謹慎が解けた後、彼が大地に相談したら、話で大地が「俺が珍しいカードをたくさん所有している」と言う話になり、

そのカードを使ってデッキを組もうと言う事になったらしい。

「お前のデッキを馬鹿にして烏滸がましいとは思っている…頼む。俺のオリジナルのデッキの作成に協力してくれ!!」

何と神楽坂は頭を下げ始めた。

ここまでされたら、否なんて言えないからな。

「良いぞ。それでどういうデッキを作りたいんだ？」

「何かこう……どう説明したらいいのか。他の連中じゃ、出来ないような戦術を取りたいデッキを作りたい。」

この世界で他の連中が取れないような戦術をとれるデッキ……

ひょっとしたら、「あのカード」達を使いこなせるかもしれないな。

「ちょっと待ってる……」

俺は段ボール箱の中のカードを漁り始める。

「凄いカードの量だな……」

「ああ、俺も訪れて来た時は吃驚したさ。」

後ろの方で神楽坂と大地が話しているが、気にせずに俺はある1枚のカードを彼らに見せる。

そのカードを見るのは初めてなのかまじまじと見ていた。

「…みた事ないモンスターだな。」

「どのように回すデッキなんだ？」

神楽坂は真剣なまなざしでこれらのカードを見ながら聞いて来た。

俺はそれの特徴を教える事にした。

「どうだ？神楽坂。」

「……面白い。面白そうなデッキだ是非とも組んでみたいデッキだ。」

本人も気に入ったそうで何よりだ。

そこから俺達3人は神楽坂のデッキの構築に時間を費やす。

「って、もうこんな時間か。」

時が経つのは早いもので時計を見ると時計はもう直ぐ夜の7時を指そうとしていた。

各寮の食事の時間は大体、7時位になっている。

「もうこんな時間か……」

「優、神楽坂。今日はこれ位にして、明日の授業が終わったらここに集まって、続けてやる事にしよう。」

「ああ……そうだな。悪かったな、天空。いきなり押しかけちゃって。」

「何、気にするな。それと……優だ。」

「?」

「俺達はもう友達だろ? なあ、大地。」

「ああ、そうだな。優とお前はもう友達だ。」

「だけど……俺は……お前を……」

まだ、あの時の事を気にしているらしいな。

こいつ、結構引き摺るタイプだな……

「だから、気にしてないって言っているだろ？ほら、右手を貸せ。」

「？」

神楽坂は俺に言われるがままに右手を貸す。

そして、俺は右手で神楽坂の右手を握りしめる。

「！！！」

「ちょっと強引だけどな……これで和解だ。」

「待ってくれ！だったら……」

神楽坂は一息つくくと、俺を直視するように見る。

「改めて自己紹介をさせてくれ。俺は鏡……神楽坂かくらさか 鏡きょうだ。」

「俺は天空 優。よろしくな、鏡。」

「ああ、こちらこそよろしくな。優。」

俺の直観だけど、こいつも実は大地と同じで結構良い奴なのかもしれないな。

それから神楽坂改め、鏡と大地はイエロー寮へ戻って行った。

俺も時計を見て、食事の時間と思えたのでレッド寮の食堂へ向かう。
案の定、レッド寮の食堂には既に何人ものレッド寮生がいた。

「にゃ〜、皆さんに紹介したい人がいますのにゃ〜」

食事中に大徳寺教諭が1人の生徒を連れて来た。

制服はオシリスレッドで詳しい容姿は帽子を被って隠れており、顔も俯かせていて良く見えない。

まあ、誰だか大方分かつてはいるけどな……

「編入テストを受けて、この度、オシリス・レッドにやって来た早乙女レイ君だにゃ。」

「……………」

「女の子みたいに綺麗なこなんだな〜。」

「編入先がオシリス・レッドで落ち込んでいるのかな？その気持ち、分かるッス。」

「そうか？俺はオシリス・レッドでも十分だと思っが。」

「そう思っているのは優君とアニキだけだよ。」

その後、十代がレイを励ます様に応援をし、大徳寺教諭がレイは少

しの間だけオシリス・レッドに在籍し、しばらくしたらラー・イエローに移籍する事になると告げる。

肝心の部屋だが、話し合いの結果、レイは十代達の部屋に泊まる事になった。

寧ろ、俺の部屋に泊めた方が良いんじゃないかと思う。一応、俺の部屋は3人部屋仕様だから泊まれる筈なのだが、大徳寺教諭は何も言っていない。

まさかだとは思いますが、大徳寺教諭は俺が使っている部屋が3人部屋であることを忘れていないんじゃないだろうか……？

あの人に限って、そんな事はないとは思いますが……

レイが編入したその翌日、定期的に行われる全校集会の中でノース校との友好デュエルの話題が鮫島校長から出る。

去年は当時2年であったカイザーが代表となり、ノース校の代表を倒し、本校の面目躍如となったと話す。

その途中でレイは視線をカイザーに向けるのが見え、翔が囁くようにレイに何かを言うような仕草をする。

「あ……」

「へへ、僕の兄さんなんだ。」

「へえ……」

「僕と違って、成績良いからね。」

それから鮫島校長は今年の代表はまだ決まっておらず、誰が選ばれてもいいように、日々努力を続けるように……と言つ言葉を最後に集会が終了する。

そして、生徒達もまばらにわかる。

十代が代表になれるように気合を入れるが、翔が「今年もカイザー亮で決まり」と一刀両断していた。

「今年は何だろつな……」

「やっぱ、去年同様にカイザー亮じゃないのか？」

「いや、入学試験じゃクロノス教諭を破り、あのカイザー亮や海馬瀬人を破っている天空優じゃないのか？」

「所詮オシリス・レッドだろ？今年もカイザー亮で決まりだ。」

「でも、クロノス教諭にカイザー亮所か、あの伝説のデュエリストと言える海馬瀬人までも破っているんだぞ？そうでなくても、候補には喰い込んでいるだろ。」

等と他にも話し声が聞こえる。

俺は万にありえないが、もし選ばれてしまったら辞退するつもりで

はある。

その日も放課後には大地と鏡が俺の部屋を訪れては、昨日と同じように食事の時間辺りまで鏡のデッキの構築に時間を当てていた。

他人のデッキである以上、その持ち主の意志を尊重して構築している以上、時間もかかってしまう。

「完成度は大体、4割前後か。」

「まだまだ思ってたより進まないな。」

「時間と労力をかければかけるだけ、良いデッキに仕上がるからな。」

「本日はここら辺までにして、また明日もあるんだからさ。」

2人が帰った後、俺は食事と入浴が終了し、気分転換を兼ねて外へ出るとレッド寮の崖に人影が見えた。

「あれは……」

よく見ると、そこにいたのは、翔と隼人、そして、カイザーと明日香だ。

という事はそろそろ、十代とレイのデュエルが始まる訳か。

「こんな時間に珍しい組み合わせだな。」

「天空 優か。」

「優君！聞いて、実はレイが「女だって事だろ？」え？」

「優も知っていたのか？」

「ああ……」

「どうやって、知ったんスか？」

「声だ。」

「「「声？」「」」

「ああ…小さいにしてもあの背格好の割には、声が男にしては違和感があったからな…まさかとは思っていたけど。」

嘘です。

原作を見ていた時は、正体がバレるまで女だとは知りませんでした。

あんなカッコつけ発言をした俺が恥ずかしい……

「お喋りはそこまでだ。…始まるぞ。」

カイザーの言葉で俺達の視線は十代とレイのデュエルシーンに向けられる。

「デュエル!!」

十代

LP：4000

レイ

LP：4000

「僕のターン!ドロー!」

レイ

手札：6

「恋する乙女、召喚!」

恋する乙女

ATK 400

恋する乙女
アニメオリジナル

レベル2 光属性 魔法使い族 ATK 400 DEF 300

効果：このカードは表側攻撃表示でフィールド上に存在する限り、
戦闘で破壊されない。

このカードを攻撃した相手モンスターに乙女カウンターを1つ乗せる。

レイ

手札：5

モンスター：1

「ターン終了。」

「俺のターン！ドロー！」

十代

手札：6

「よし……E・HERO フェザーマンを召喚！」

E・HERO フェザーマン

ATK 1000

十代

手札：5

モンスター：1

あれ？エアーマンも増援もE・エマーゼンシーコールも引かなかったのか？

十代にしては珍しいな。

「バトルだ！」

「え〜…勝負にならないよ。」

「翔、どっちの応援をしているんだ？」

「でも、恋すると女性は変わるわ。」

「…俺にはさっぱりわからん。」

「そう？有栖だって、あなたと会う前に比べたら女の子らしくなったのよ？」

「俺は俺と出会う前の有栖の事は何一つ知らんから言われても困る…主に何が変わったんだ？」

「自分で料理するようになったとかかしら後、寮の部屋では、デッキ調整の他に料理の本ばかり読んでいるわよ？」

「……………」

「フェザーマンで恋する乙女を攻撃！フェザー・ブレイク！…！」

E・HERO フェザーマン

ATK 1000

恋する乙女

ATK

レイ

LP:4000

3400

「恋する乙女のモンスター効果発動！このカードは表側攻撃表示である限り、戦闘によっては破壊されない。」

でも、ああいうカードを見ていると守備表示にして、無性にレッド・デーモンズ・ドラゴンを出して問答無用で効果破壊したいと思う。

或いは、シューティング・スター・ドラゴンで某下っ端さん曰く「馬鹿な！攻撃5回の攻撃だど！？」ってやりたいな。

「しっかりとしろ！フェザーマン！お前、それでもヒーローか！？」

「何か、アニキの様子が変だよ？」

「きつと十代には俺達が見えないものが見えているんだな。」

「フェザーマン、どうしちまったんだ？」

「ふふ、もう1つのモンスター効果。恋する乙女に攻撃したモンスターに乙女カウンターを1つ乗せる。」

「お、乙女カウンター…？（訳の分からないカウンターだな……ここは）カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

E・HERO フェザーマン

乙女カウンター：0 1

十代

手札：4

魔法・罨：1

「僕のターン、ドロー！」

レイ

手札：6

「手札から装備魔法、キューピッド・キスを発動する！」

キューピッド・キス（アニメオリジナル）

装備魔法

装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを受けた時、ダメージステップ終了時に攻撃を行った乙女カウンターを置いているモンスターのコントロールを得る。

レイ

手札：5

魔法・罨：1

「バトルよ！一途な思い！」

恋する乙女

ATK 400

E・HERO フェザーマン

ATK 1000

レイ

LP:3400 2800

「この瞬間、キューピッド・キスの効果が発動する。乙女カウンターの乗っているモンスターと戦闘し、逆にダメージを受けたらそのモンスターのコントロール出来る。」

レイ

モンスター:2

十代

モンスター:0

「フェザーマアアッ！女の子にメロメロになるなんて、それでもヒーローかあああっ！……！」

十代が頭を抱えながら悲痛な叫びをあげている。

まあ、分からんでもないが……

「アニキがまた変だ。」

「やっぱり、十代には何かが見えているんだな。」

「フェザーマンで十代にダイレクトアタック！」

E・HERO フェザーマン

ATK 1000

「リバーズカードオープン！畏発動！ドレインシールド！このカードは相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。」

十代

LP:4000 5000

魔法・畏:0

「カードを1枚伏せて、僕のターンは終了だ。」

レイ

手札:4

魔法・畏:2

「くそ…何か調子狂うぜ。とにかく、ドローだ。」

十代

手札：5

「（恋する乙女に攻撃しなければ、モンスターを奪われる事はない…よし）E・HERO スパークマンを召喚！」

E・HERO スパークマン

ATK 1600

十代

手札：4

「悪いが、フェザーマン！お前を攻撃させて貰う！スパークマン！フェザーマンにスパーク・フラッシュだ！」

E・HERO スパークマン

ATK 1600

E・HERO フェザーマン

ATK 1000

「リバーズカードオープン！罾カード！ディフェンス・メイデン発動！」

ディフェンス・メイデン（アニメオリジナル）

永續罾

自分フィールド上に「恋する乙女」が表側表示で存在する限り、相手モンスター1体が自分フィールド上のモンスターに攻撃宣言をした場合、その攻撃対象を自分フィールド上の「恋する乙女」1体に移し替える事ができる。

「なっ！」

「ディフェンス・メイデンの効果でスパークマンの攻撃は恋する乙女に移った。」

E・HERO スパークマン

ATK 1600

恋する乙女

ATK 400

レイ

LP:2800

1600

「優、あなた…そのえげつない言葉使いは止めて置いた方が良いわよ?」

「軽い言葉のあやだ。聞き流して貰って構わない。」

「そついつあなただって、有栖に振り回されているじゃない?」

「……………」

明日香の言葉は事実である以上、否定はできない。

「僕のターン、ドロー!」

レイ

手札：5

「装備魔法、ハッピー・マリッジを発動!」

ハッピー・マリッジ（アニメオリジナル）

装備魔法

自分フィールド上に相手からコントロールを得たモンスターが表側表示で

存在する場合に発動する事ができる。

装備モンスターの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の数値分アップする。

「その効果により、フェザーマンの攻撃力の分だけ、恋する乙女の攻撃力がアップする！」

レイ

手札：4

魔法・罫：3

恋する乙女

ATK 400 1400

「恋する乙女でスパークマンを攻撃！」

恋する乙女

ATK 1400

E・HERO スパークマン

ATK 1600

レイ

LP：1600 1400

レイ

モンスター：3

十代

モンスター：0

「スパークマンとフェザーマンでダイレクトアタック！」

E・HERO スパークマン

ATK 1600

E・HERO フェザーマン

ATK 1000

十代

LP：5000

3400

2400

「ぐわあああっつっ!!！」

「女の子は恋をすれば強くなる！不可能なんてないの!!！」

デュエルの衝撃でレイの帽子は飛び、その下で縛っていたバンダナも外れ、

彼女の長い髪が露わになる。

「流石の十代もレイの前ではタジタジだな。」

「デュエルのモンスターを夢中にさせることくらい簡単でしょ？初恋の人を追いかけて、南の島まで飛んで来ちゃったんだもの。」

「え!？」

「そうだったの!？」

「しかも、難しい編入試験まで突破してね。」

「……………」

「大したやけつぱち根性だな。あの餓鬼は……………」

「いてて……………やっぱ、女の子に男のヒーローをぶつけたのが間違っていたな、俺のターン。ドロォー!」

十代

手札：5

「(やっぱ、女の子には女の子だな。)(E・HERO バーストレディを召喚!)」

E・HERO バーストレディ

ATK 1200

十代

手札：4

モンスター：1

「魔法カード、バースト・リターン発動!このカードは「E・HERO バーストレディ」が自分フィールド上に表側表示で存在する

時のみ発動する事ができる。フィールド上の「E・HERO」以外の「E・HERO」と名のついたモンスターを全て持ち主の手札に戻す。」

十代

手札：5

レイ

モンスター：1

「ヒーローの絆はそんな恋愛ごっこより強いって訳さ。」

「くっ……」

「手札から融合を発動、手札のフェザーマンと場のバーストレディを融合して、マイフェアリットカード！E・HERO フレイムウィングマンを召喚！」

E・HERO フレイム・ウィングマン

ATK 2100

十代

手札：3

「……」

「お兄さん!？」

勝負の途中であるのだが、カイザーは何処かへ走って行く。

多分。下へ降りて行くんだろっな…俺達もその後を追う事にした。

レッド寮の崖から下へ降りて行くとレイがフレイム・ウィングマンの超過焼きに遭い、デュエルに決着をつける。

レイ

LP:1400 0

WIN:十代

「ガツチャ!レイ、面白いデュエルだったぜ！」

「十代…僕…」

「おっと、皆まで言うな。そこから先はずっと見ていた、後ろの奴に言ってくれないか？」

「え……………」

レイは振り向くとすぐさまカイザーの方を直視する。

そして、明日香が後押しするような発言をした。

男は異性と関わった以上はやはり責任を取らなければならないのか

……………?

俺は生前時は、異性と殆ど交流がなかったから分かんが……

そして、カイザーとレイの会話が始まる。

レイは会いたいと言う理由でここまで来たらしい。

だが、それは決して良い事とは言えない。

「……下らないな。」

「!?!」

「ゆ、優君!?!」

「優!?!」

場の空気をぶち壊しにするのは先刻承知であえて、言わせて貰う。

例え、十代や翔達に何を言われようとな。

当然、レイが俺に敵意を向けるように睨んで来る。

「く、下らない!?! 十分な理由じゃない。何がくだらないっていうの!?!」

「じゃあ、てめえの身勝手とも言える行動のおかげで心配しているのは誰だか言ってみろよ!」

「う……」

「親御さんや友達やてめえの通ってる学校の先生を心配させといて、十分な理由だ！？世の中舐めんのもいい加減にしろや！！この糞餓鬼あー！」

「ひっ……」

「世の中はな、お花畑やチヨコレートみたいに甘つちよろいもんで出来てんじゃねえんだよ！！分かってんのか？ゴルアアア！！！」

「ひうつ……」

「分からねえなら、俺が直々にその身体に世の中の恐ろしさを骨身の底の底まで嫌と言うほどに染み込ませてやるうか？あああ！！？」

「ひいひいっつ！！！！」

「優、落ち着くんだな、言っている事とやるうつとしていることが無茶苦茶なんだな。」

「優君、落ち着いて。」

「言いたいことは分かるけど……ほら。」

隼人と翔に宥められるが、俺は根は落ち着いているつもりだ。

明日香の視線を向けると、レイは今にも泣きだしそうな表情をしていた。

うっつ……少し言いすぎたかもしれないな。

叱るつもりで言うつもりが、気が付いたらヒートアップし過ぎたかもしれない……

大人げなかった俺も悪いかもしれん。

「あー、レイ。優を悪く思わないでくれよ？ただ、お前の事を思って怒っただけなんだと思うからさ。」

十代が俺をフォローしてくれ、その言葉は実は本当に嬉しく思っている。

そこからレイがまだ小学5年生である事とカイザーから暴露された。

小学生相手に苦戦していた事を悔しがる十代。

そんな十代の真似をするようにガツチャとやるレイとずっとこけながら笑う十代でその騒動は幕を閉じる。

その翌日…

本土行きの船が出る埠頭の前で俺達はレイの見送りに来ていた。

「来年、小学校を卒業したらまたテストを受けて、入学するからね
」……」

「へへ、だってよ?」

「その時は俺はもういないけどな。」

「いや、あの迫力には負けるぜ。」

「待っててね〜!!十代様〜!!!!」

と原作通りに十代の名前を呼び、驚く十代。

しかし、この時の十代の顔は本当に面白かったな。

「な、何で俺なんだよ!?!」

「きつと、あなたのデュエルに惚れたのね。」

ふむ、ジュンコに続いて、レイともフラグが立ったな。

あの2人、勝気なところが似ているからな、レイが編入したら凄まじい修羅場が展開されそうだ。

つまり、3年目は開始早々修羅場の嵐か……

「後は、任せたぞ。」

「アニキ、僕達、先に帰るね。」

「しっかり、見送ってあげるんだな。」

「船が見えなくなるまでね。」

カイザー、翔、隼人、明日香は去って行くが、十代は若干、タジタジになりながらも見送っていた。

昨夜、フォローしてくれた礼に付き合っただるか。

「俺も付き合っただるから見送っただるう。」

「お、おう……」

そして、俺と十代はレイの乗った船が見えなくなるまでその場に残り、見送り続ける。

さて、人騒がせな恋する幼い乙女の来訪も終わったから次のイベントは学園選抜戦だな。

第18話 恋は盲目？（後書き）

神楽坂君が一発キャラにするのが何か惜しいので救済し、レギュラーにしました。

有栖「……………何で今回。ボクの出番がないの？」（背後にどす黒いオーラ放出中）

えー、だって…有栖ちゃんが絡む要素がないから。

有栖「……………ボクは…」

公開処刑をされる前にgry

第19話 神楽坂の新デッキ

幼い恋する乙女の来訪からある程度、日数が経つ。

教諭陣の中ではノース校との友好デュエルで誰が代表にするかで話しているとの事だ。

多分、カイザーが十代を推薦して、それを良しとしないクロノスが大地を推薦するんだろうから。

そのような話はさておいて、俺は鏡と共に数日前から続いていた鏡の新デッキの構築作業に勤しんでいた。

数日間に渡る作業の甲斐あり、既に完成率は9割8分とほぼ完成に近い。

そして、ついに……

「で、できた……俺の……俺だけのデッキが……もう、誰の真似でもない俺だけのオリジナルのデッキが……」

鏡は本当に嬉しかったのか、涙ぐんでいた。

この数日間で分かった事は結構ある。

話していて、鏡は大地と同じ位、本当に気が合う奴だという事。

後、何気に鏡も大地と同じでオベリスク・ブルーの連中を快く思っ

てないらしい。

「本当にありがとう……優。」

「俺はただ、お前に協力しただけだ。気にする必要はない。」

「だけど、感謝しようにも感謝しきれないんだ。本当にありがとう……」

「大げさな奴だな……だけど、デュエルはどうする？……外はほぼ夜だけだ。」

因みに部屋の壁にかけられている時計の時刻は現在、午後6時30分過ぎを差していた。

とてもデュエルができる明るさではない。

「今すぐやりたいと思うが、仕方ないから明日か。」

「何処でやる、デュエル場か？」

「いや、レッド寮の前でやらせてくれないか？……デュエル場でも良いんだけど。明らかにブルーの連中が陣取っているだろうからな。」

「そうだろうな……分かった、じゃあ、他のレッド生達にも開けるように言って置く。」

鏡にそういつと彼も了解し、その日はそれで解散する。

その翌日にレッド寮の前には俺の他に十代、翔、隼人、有栖、明日香、ももえ、ジユンコ…更にはカイザーまでいたのだから驚きだ。

そして、何処から聞きつけたのか、レッド寮の責任者である大徳寺教諭はともかく、鮫島校長までもがギャラリーに加わっていた。

何故、ここに…と理由を尋ねると「生徒の成長を見るのもデュエルアカデミアの校長である私の務めです。」と返される。

そして、肝心の鏡の相手は本人の希望で大地となった。恐らくその後十代がデュエルしたいと言っただろうけど……

「行くぞ！三沢！」

「来い！神楽坂！お前の新しいデッキの力を見せて見ろ！！」

「デュエルッ！！」

神楽坂

LP：4000

三沢

LP：4000

「俺のターン！」

三沢
手札：6

「俺は、沼地の魔神王を捨てて、デッキから融合の魔法カードを加える。更に魔法カード、増援を発動。デッキからレベル4以下の戦士族モンスターを加える。俺が加えるのは、E・HERO エアーマン。そして、そのまま召喚。」

E・HERO エアーマン
ATK 1800

三沢
手札：5
モンスター：1

「エアーマンの効果でデッキからHEROと名のついたモンスターを手札へ加える。俺が加えるのはE・HERO オーシャン。」

三沢
手札：6

「更に永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動、融合モンスターを選択し、デッキから融合素材モンスターを墓地へ送り、2ターン後の自分のスタンバイフェイズにその融合モンスターを特殊召喚する。俺はE・HERO ジ・アースを選択し、E・HERO フォレストマンとE・HERO オーシャンを墓地へ送

る。」

三沢

手札：5

魔法・罨：1

「更に俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ。」

三沢

手札：3

魔法・罨：3

「俺のターン、ドロー！」

神楽坂

手札：6

「俺はフィールド魔法、脳開発研究所を発動！」

神楽坂

手札：5

フィールド：無

脳開発研究所

フィールドは何やら怪しげな研究施設に早変わりする。

「な、何？このフィールドは。」

「今にわかる。このフィールド魔法が今の鏡の新しいデッキのエンジンでもあるからな。」

「俺はデイストラクターを召喚！」

デイストラクター

ATK 1600

神楽坂

手札：4

モンスター：1

「完全に新しいデッキって感じだね。」

「どんな戦術をとって来るのでしょうか？」

「脳開発研究所の効果。このカードがフィールド上に存在する限り、通常召喚に加えて1度だけサイキック族モンスター1体を召喚する事ができる。なお、この方法でサイキック族モンスターの召喚に成功した時、このカードにサイコカウンターを1つ置く。」

脳開発研究所

サイコカウンター：0

1

「ええ、通常召喚が2回も!？」

「あのモンスターを生贄に上級モンスターを召喚できると言っ訳か。」

「しかし、あのモンスターは初めて見ますね。」

「あれが、鏡の新デッキ・サイキックデッキだ。」

『サイキックデッキ!?!』

みんなが声を揃えて言い出す。

「どんな戦術かは、見てのお楽しみだ。」

「俺はディストラクターを生贄にマックス・テレポーターを召喚!」

マックス・テレポーター

ATK 2100

神楽坂

手札：3

「マックス・テレポーターの効果発動、ライフポイントを2000

支払う事でデッキからレベル3のサイキック族モンスターを2体特殊召喚する。しかし、この効果は場にいる時、1度しか使用する事が出来ない。」

「えええええ！！？ライフポイントを2000も支払うの！？」

「LPがなくなっちまうんじゃないのか？」

「いや、そつでもないさ。」

『え？』

「脳開発研究所の効果、自分フィールド上に存在するサイキック族モンスターの効果を発動するためにライフポイントを払う場合、代わりにこのカードにサイコカウンターを1つ置く事ができる。」

脳開発研究所

サイコカウンター：1

2

「どついう事？」

「あのフィールド魔法がある限り、サイキック族のモンスター効果によって支払うLPをフィールド魔法にカウンターを乗せる事で払わずに済むという事だ。」

「だが、カウンターが乗るという事はそれなりのリスクがあるという事か。」

流石はカイザーか…それを見抜いたか。

「その通り。あのフィールド魔法がフィールドを離れると乗っていたカウンターの数×1000ポイントのダメージを受けてしまうと、言う正に綱渡りに近い戦術でもある。」

「天空君。1つ聞いても、良いでしょうか？」

俺の言葉に苦い顔をするギャラリーの面々の中、鮫島校長だけが表情を変えずに俺に質問を問いて来る。

「何でしょう？ 鮫島校長。」

「サイキック族モンスターの特徴を教えて貰いたいのですが、よろしいですか？」

そういえば、この時代にサイキック族はまだ出ていなかったな。

そこの説明もしなければならんか。

「サイキック族の主な特徴は、LPを払う事で発動する効果を持つモンスターやサポートカードが多いのが最大の特徴です。更に自分で墓地のカードを除外し、そこから大量展開をする事ができ、爆発力に長けたデッキともいえます。…ご理解頂けましたか？」

「なるほど、解説をどうもありがとうございます。天空君。」

それを聞くと他のギャラリーは更に凄まじい顔をする。

「何て戦術なの……LPを支払って効果を発動するカードが大半な

んて……」

「型破りにも程があり過ぎるわよ……！」

「俺はデッキからサイコ・コマンダーと寡黙なるサイコプリストを特殊召喚する。」

サイコ・コマンダー

ATK 1400

寡黙なるサイコプリスト

DEF 2100

神楽坂

モンスター：3

「行くぞ、レベル6のマックス・テレポーターにレベル3のサイコ・コマンダーをチューニング！」

6 + 3 = 9

「超能力の狙撃主よ。その弾丸で全てを撃ち抜け！シンクロ召喚、狙い撃つぜ！ハイパーサイコガンナー……！」

ハイパーサイコガンナー

ATK 3000

神楽坂

モンスター：2

「更に寡黙なるサイコプリーストの効果発動、このカードは1ターンに1度、手札を1枚墓地へ送る事で自分の墓地のサイキック族モンスターを1体をゲームから除外する。俺はその効果で手札を1枚墓地へ送り、墓地のサイコ・コマンドーを除外する！」

神楽坂

手札：2

「更に速攻魔法、緊急レポートを発動、デッキ・手札からレベル3以下のサイキック族モンスターを特殊召喚する。俺はデッキからレベル2のクレボンスを特殊召喚。」

クレボンス

ATK 1200

神楽坂

手札：1

モンスター：3

「レベル3の寡黙なるサイコプリーストにレベル2のクレボンスを

チューニング。」

3 + 2 = 5

「人造なる巫女よ、その人知を超えた力で生命に潤いを与えよ！シンクロ召喚、マジカル・アンドロイド！」

マジカル・アンドロイド

ATK 2400

神楽坂

モンスター：2

「1ターンで2回もシンクロ召喚をするか。やるな、鏡。」

「俺はまだまだぶん回して行くぜ。墓地へ送られた寡黙なるサイコプリーストの効果発動、このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、このカードの効果で除外したモンスター1体を選択して特殊召喚する。その効果で除外されたサイコ・コマンダーを特殊召喚！」

サイコ・コマンダー

ATK 1400

神楽坂

モンスター：3

「レベル5のマジカル・アンドロイドにレベル3のサイコ・コマンドーをチューニング！」

5 + 3 = 8

「精神の深淵を統べる悪魔よ、敵の命を糧に我らに癒しを与えよ！シンクロ召喚！降臨せよ、メンタルスフィア・デーモン！」

メンタルスフィア・デーモン

ATK 2700

神楽坂

モンスター：2

「大型のシンクロモンスターを2体か……やるな、神楽坂。」

「……何か、優のデュエルを見ているような光景に近い気がするよ。」

「そうか？」

「最上級クラスのモンスターが2体。」

「優君の言う通り、凄まじい展開力ツスね。」

「いや、あれは彼のプレイングの賜物だろう。」

カイザーの言う通りだ。今の鏡のデュエルは誰の真似でもない。

鏡自身のデュエルとも言える。

「メンタルスファイア・デーモンでエアーマンを攻撃！」

メンタルスファイア・デーモン

ATK 2700

E・HERO エアーマン

ATK 1800

「くっ!!」

三沢

モンスター：0

LP：4000

3100

「リバースカードオープン！畏発動！ヒーロー・シグナル！自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札またはデッキからレベル4以下

のE・HEROを特殊召喚する。俺はデッキからE・HERO フ
オレストマンを守備表示で特殊召喚する！」

E・HERO フオレストマン

DEF 2000

三沢

モンスター：1

魔法・罫：2

「だが、この瞬間！メンタルスフィア・デーモンの効果が発動！このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力だけ自分のライフポイントを回復する。エアーマンの攻撃力は1800…よって、俺はLPを1800ポイント回復する。」

神楽坂

LP：4000

5800

「なるほど…下級モンスターや魔法などで消費するLPをシンクロモンスターのモンスター効果で回復して行けると言う訳か。」

「まあ、それがサイキック族の基本的な戦術でもある。」

「続けて、ハイパーサイコガンナーでフオレストマンを攻撃！」

ハイパーサイコガンナー

ATK 3000

E・HERO フォレストマン

DEF 2000

「ハイパーサイコガンナーの効果、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手にダメージを与える。1000ポイントの貫通ダメージを受けて貰うぜ！」

「ぐあぁっ!!！」

三沢

LP：3100 2100

モンスター：0

「そして、ハイパーサイコガンナーの第2の効果、このカードが守備表示モンスターを攻撃したダメージステップ終了時に守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ自分のLPを回復する。俺は1000ポイント回復。」

神楽坂

LP：5800 6800

「俺はこれでターンエンド。」

「なら、俺はお前のエンドフェイズにリバーズカードオープン。畏れ発動、奇跡の残照を発動。このカードはこのターン戦闘によって破壊され、自分の墓地へ送られたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。俺はエアーマンを特殊召喚！」

三沢

モンスター：1

魔法・罫：1

「エアーマンが特殊召喚されたことによって、効果を発動！俺はデッキからHEROと名のつくカードを手札に加える。俺はデッキからE・HERO ザ・ヒートを手札に加える。」

三沢

手札：4

「（不味い……手札にHEROがまた補充された……これで融合を使われたらこの状況でも逆転される危険性がある。だが、融合主体のデッキは手札消費が激しいのが欠点だ。手札の枚数を考えてもできずとしても1度が限度の筈……それにメンタルスフィア・デーモンにはLPを1000払う事でサイキック族モンスターを対象とする魔法・罫の発動を無効にできる効果がある状況は俺に有利なはずだ。」

」

「俺のターン！」

三沢

手札：5

未来融合 - フューチャー・フュージョン（1ターン目）

「俺はフィールド魔法、フュージョン・ゲートを発動！」

「!?!?…そのフィールド魔法は…」

「そう。このカードがフィールド上に存在する限り、融合の魔法カードを使用せずに融合召喚をする事ができる。その代わり、その融合素材モンスターは墓地へは行かず、ゲームから除外される。」

三沢

手札：4

フィールド：脳開発研究所 フュージョン・ゲート

フィールドは研究所から空に特殊な空間が漂うフィールドへ変化する。

「そして、脳開発研究所がフィールドから離れた事により、そのカードのコントローラーは乗っていたサイコカウター1つにつき、1000ポイントのダメージ…よって、2000ポイントのダメージ

ジを受けて貰う。」

「くっ……!!」

神楽坂

LP:6800 4800

「そして、俺はフュージョンゲートの効果で手札のE・HERO
オーシャンとE・HERO ザ・ヒートを除外し、V・HERO
アンドレイションを融合召喚!」

V・HERO アンドレイション

ATK 2800

三沢

手札:2

モンスター:2

「V・HERO アンドレイションの効果発動!1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体とこのカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンする。」

「なっ……(しまった、メンタルスフィア・デーモンで無効にでき

るのは魔法と罾の発動だけ、モンスター効果には全く対応できない
…！）」

「俺は、その効果でエアーマンとハイパーサイコガンナーを選択！」

ハイパーサイコガンナー

ATK 3000 1200

「バトル！エアーマンでハイパーサイコガンナーを攻撃！」

E・HERO エアーマン

ATK 1800

ハイパーサイコガンナー

ATK 1200

神楽坂

モンスター：1

LP：4800 4200

「ちっ！」

「更にアンドレイションでメンタルスフィア・デーモンを攻撃！ア
ンビション・サンクションズ！」

V・HERO アンドレイション
ATK 2800

メンタルスファイア・デーモン
ATK 2700

神楽坂
モンスター：0
LP：4200 4100

「ちっ！（嫌な予感が当たっちゃったか……）」

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。（念には念を入れて置く……このカードは聖なるバリア・ミラーフォース……神楽坂が何らかのモンスターを召喚してもこれで対処は出来る。）」

三沢
手札：1
魔法・罠：2

「凄まじい攻防ですねにゃ〜」

「最初は神楽坂君が大型モンスターを展開したと思えば、返して三沢君はモンスター効果で上手く処理したし……」

「おおおお、これはもう面白れえ勝負になって来たな!!!」

「（勝負は次の引きにかかっている……頼むぜ。俺のデッキ、俺はお前達を信じる。だから俺に逆転のカードを引かせてくれ！）俺のターン！」

神楽坂

手札：2

「！」

「（何を引いたんだ？）」

神楽坂

手札：2

「魔法カード、天使の施しを発動！その効果でデッキから3枚引き……そこから2枚墓地へ捨てる。」

勝負は鏡が何を引き、何を捨てたかで決まる。

そうでなければ、次の大地のターンにジ・アースが召喚されて幾らLPが有利でも確実にLPを削りきれられる可能性がある。

「俺はまず、永続魔法、フューチャー・グロウを発動！自分の墓地に存在するサイキック族モンスター1体をゲームから除外して発動。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する全てのサイキック族モンスターの攻撃力は、このカードを発動するために除外したサイキック族モンスターのレベル×200ポイントアップする！！」

神楽坂

手札：1

魔法・罠：1

「（今まで神楽坂が召喚したモンスターで最高はレベル9のハイパーサイコガンナーか。」

「俺が除外するのはレベル11のハイパーサイコガンナー、バスターよって、2200ポイントアップ。」

「なっ……」

何時の間にそんなカードを……

って、さっき天使の施して捨てたんだろっな。

フューチャー・グロウが発売してからサイキックではハイパーサイコガンナー、バスターを捨てて、それで除外すれば、攻撃力は2200上がるからな。

2200ポイントの全体強化ってその時点で普通の装備カードの数値の比じゃないぞ。

「そして、これが俺の切り札だ！魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動！」

「な……」

「ミラクルシンクロフュージョン？」

「ミラクルフュージョンじゃないの？」

「ミラクルシンクロフュージョンは、シンクロモンスターを融合素材とする融合モンスターを墓地とフィールドから除外してその融合モンスターを特殊召喚するカードだ。」

「俺は墓地のサイキック族シンクロモンスター、マジカル・アンドロイドとサイキック族モンスター、メンタルマスターを墓地から除外！アルティメット・サイキッカーを融合召喚！！！」

アルティメット・サイキッカー

ATK 2900

神楽坂

手札：0

モンスター：1

「そして、フューチャー・グロウの効果で攻撃力が上がる。」

アルティメット・サイキッカー

ATK 2900 5100

「こ、攻撃力5100!?!？」

「普通じゃそこまで叩き出せないぞ!？」

「全体的に攻撃力をあげられるカードか……なかなか強力だな。」

カイザー：「普通に10000オーバーの攻撃力を叩きだしているあなたも言っても説得力ない。」

「アルティメット・サイキッカーでアンドレイションを攻撃だ!」

アルティメット・サイキッカー

ATK 5100

V・HERO アンドレイション

ATK 2800

「甘いな、神楽坂!俺も負けるつもりはない!リバースカードオープン!畏発動!聖なるバリア・ミラーフォース・相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する!」

「それはどうかな?アルティメット・サイキッカーは最強の超能力を操る事が出来る。このカードはカード効果によっては破壊されることはない。」

「何!？」

「よって、ミラーフォースは無意味だ!」

三沢

LP:2100

- 200

「ぐわああああっっ!!!!!!」

WIN:神楽坂

「いよっしやあああああ!!!!!!!!!!」

鏡は本当に嬉しかったのか雄叫びに近い叫び声をあげる。

勝てなかった人間にとっては、どんな勝利でも嬉しいだろうな。

それが自分で組み上げたデッキならば尚更か。

「…俺の完敗だ。神楽坂。」

「三沢…」

「良いデュエルだった。」

「ああ…ありがとう。」

パチパチパチパチ。

拍手のする方向を見るとそれは鮫島校長であった。

それにつられるようにそのデュエルを見ていたギャラリイ達も拍手を送る。

「神楽坂君…そして、三沢君。どちらも素晴らしいデュエルでしたよ。」

「はい。ありがとうございます！」

「ありがとうございます。」

鮫島校長はそう言うと「失礼するとするよ。」と言い残しその場から去って行く。

それから十代が「俺ともやろうぜ！」と言いだし、十代と鏡によるデュエルが開始される。

因みにカイザーは鮫島校長が去った後に気が付いたらいつの間にか姿を消していた。

今回の最強カード

優「今回の最強カードはアルティメット・サイキッカー。」

アルティメット・サイキッカー

融合モンスター

レベル10 光属性 サイキック族 ATK 2900 DEF

1700

融合素材：サイキック族シンクロモンスター＋サイキック族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚することができる。

このカードはカードの効果では破壊されない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与え

る。

また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

主な収録パック：「DUELIST REVOLUTION」

優「サイキック族の融合モンスターでサイキック族のシンクロモンスターとサイキック族モンスターを融合素材しなければならないモンスター。」

有栖「融合召喚でしか特殊召喚できない効果と破壊効果耐性効果にメンタルスフィア・デーモンの回復効果にハイパーサイコガンナーの貫通効果が備わったモンスターだよ。」

優「召喚に関しては純サイキック族ならミラクルシンクロフュージョンを仕込むだけで簡単に召喚は出来る。」

有栖「効果破壊耐性を持っているからミラーフォースとかライトニング・ボルテックスも効かないって事だよな。」

優「だが、除外やバウンスには全く無力だから気を付けて欲しい。」

有栖「所でこのモンスターって元はなんだったのかな？」

優「羽や腕の爪を見る限り、メンタルスフィア・デーモンが進化・強化された姿だろうな。」

有栖「2体を見比べても殆ど原型留めてないよね？」

優「デジモンで例える所のヴァンデモンとベリアルヴァンデモンみ

たいなものだろう……（何でデジモンで例える？ サーセンb y z
E T）「

有栖「元のモンスターは闇属性だったのにこっちは光属性だよね？」

優「そこまでは知らん。」

第19話 神楽坂の新デッキ（後書き）

次回はいよいよ学園代表決定戦となります。

優「それでいつぞやのお気に入り100件記念やヒートソウル氏と話していたあれの話はどうなるんだ？」

一「区切りついたら書くつもりだよ。」

有栖「一区切りって？」

理想としては交流試合が終わって、セブンスターズ編に入る前に書くつもり。

優「それで納得してくれれば、良いがな……」

第20話 学園代表決定戦 E・HERO対決！

鏡の新デツキお披露目の翌日の大徳寺教諭の講義終了後。

大徳寺教諭が十代と大地がノース校との友好試合の代表候補に選ばれたと告げられる。

それは良いが……

「……………」

教室のある一部分では凄まじく重苦しい空気が出ていた。

そう、神？有栖と言う人物からは異常とも言えるものが出ている。

それが原因でみんな、彼女に近寄れずにいた。

「何故、そんなに機嫌が悪い？」

誰も近付きたがらないため、彼女と親しいと言う訳でもないが…明日香達から「俺が行け」と言う事で俺が原因を尋ねる事にする。

俺が尋ねると少しだけであるが、彼女の重苦しい空気も若干ながら和らぐ。

「……………だってさ、おかしいと思わない？」

「何がだ？」

「……………この学園の1年生で一番強いのは誰がどう見ても優なものさ。それを差し置いて、あの2人が代表ってどういう事って思っているんだよ。」

「…では、質問を変えよう。何故、そう思う根拠は何だ。」

「……………だって、優はあの丸藤先輩や海馬社長にも勝っているんだよ。それなのにキミが選ばれないっておかしいと思わない？」

呆れた。俺が候補に選ばれない理由で不貞腐れているとは

何で機嫌悪いのか思えば、そんな理由だったとは……

「仕方ないだろ？アカデミアで決まった事は決まった事なんだから。」

「優は何とも思わないのかい？キミは……」

「思わない。寧ろ、選ばれなくて良かったと思っている。」

「何でさ？」

「俺はどうも、そう言うのは性に合わない。自信過剰って訳じゃないが、仮に選ばれても辞退するつもりだったからな。」

「へえ……………ボクは、キミのそう言う所も好きだよ。」

「……………まあ、俺を持ち上げてくれた事には感謝している……………何も礼

は出来ないけどな。」

「ボクとしては早く答えを出して欲しいのが本音だけどね。」

それから有栖も機嫌を直した様子である。

でも、本当に俺はどうなんだろうか……有栖の事に関して…

良くは分からない…でも、俺は最近、彼女の事をとて意識している……

仲間・友人としてではなく、異性として意識していた。

しかも、いつぞやのテニス部部长の時の良い例だ。

十代や翔は彼女を友人として見ているのは分かるが、他の男が近づくとと思うと無性に腹立たしくなった。

それだけは自分の事であるから良く分かっている。

俺自身の有栖に対する意識の戸惑いを他所にノース校との交流試合の代表を決める戦いの当日を迎える。

当事者の十代はというと、本日はレッド寮の食事ではなく、彼だけ

は特別メニューの食事となる。

「ほら、お腹一杯にして、準備万端にしなさいよ。」

「おう！」

彼にはジュンコの手料理が振る舞われる。

十代はそれをどれも美味しそうに平らげて行く。

その光景を俺、翔、隼人は離れた席で見っていた。

「全く……十代は相変わらずか。」

「アニキって、緊張とかしないのかな。」

「どんな時でもデュエルを楽しむ、それが十代の強さなんだな。」

俺達は、一足先に代表決定戦が開始されるデュエル場へ行き、座席取りをすることにした。

姉妹校との友好デュエルを行い、その代表候補の片割れがオシリス・レッドとなる事もあり、既に若干ながら生徒達が座席を確保していた。

「席はどのあたりにする。」

「あそこら辺が良いと思うんだな。」

隼人が指を差した辺りの席へ俺達は座り、デュエルの開始を待つこ

とにした。

しかし、ここは結構特等席かもしれないな、良い感じでデュエルが見れるだろう。

「あ、もう来ていたんだ。」

「よっ！」

それから暫くすると、有栖、鏡、明日香、ももえが俺達が座っていた席の隣に座ってきた。

「朝からすみません。なんか、ジュンコさんが朝からそちらへお邪魔しているご様子で……」

「いえいえ、こっちもうちのアニキがいつもお世話をかけているみたいで……」

いつぞやのテニスの時みたいに頭をペコペコ下げる翔とももえ。

この2人の口ぶりはまるであの2人の保護者にも見える。

十ジュンと翔もも……それはそれでありかも知れない。

そんな話をしていると、十代の世話女房ことジュンコもこちらを見つけたのか合流し、試合の時間が近づくにつれて、周りの席にも生徒で埋まりつつあった。

「セニョール！セニョーラ！お待ちせしたノーネ！これより学園代表デュエルを始めるノーネ！！」

時間になったのかマイクを持ったクロノスがデュエル場に姿を現す。デュエル場の両サイドには既にディスクを持ち、スタンバイ済みの十代と大地がいる。

始めると言う言葉が引き金で観客にいた生徒達のテンションも上がった。

「ラー・イエローからは三沢大地！そして、オシリス・レッドからは遊城十代！と。」

どうみても十代と大地の紹介が明らかに差がある。

「クロノス！！もうちょっと真面目に紹介しなさいよ！！」

「じゅ、ジュンコさん。落ち着いて下さいまし。」

「アニキ、頑張って！！」

「優、この戦いはどうなると思うんだ？」

「この戦いとは？」

「十代君と三沢君の戦いだよ。」

鏡と有栖は俺に視線を向ける。

と言う気が付くと翔、隼人、明日香、ジュンコ、ももえまでが俺に視線を向けていたのに気づく。

あの2人のデッキの元を弄った片棒を担いだのは俺だからな。

十代はともかく、大地のデッキは原作とも根本的に違う以上、先が全く読めない。

「分からないな。」

「分からない？」

そこから俺は2人のデッキの特徴を説明する。

十代と大地のデッキは根本的にE・HEROを主体にしたデッキ。

展開がどのようになるかは全く予想がつかめない。

違う所と言えば、十代のHEROは融合先が多種多彩である。

たとえば、属性融合HEROの他にも終盤でのフィニッシュャーともなれるシャイニング・フレア・ウィングマンとかが良い例である。

対する大地は主軸が漫画版と属性融合HEROになるが、こちらはデブリ・ドラゴンによるシンクロ召喚が可能だ。

E・HEROと言うカテゴリーで分類するならば、一種のミラーマッチとも言える。

「勝負は五分五分になりそうだけど……勝負を分ける最大の要因は運だな。」

「運？」

「ああ、言いかえれば引きの強さが良い方が勝つ……俺が言えるのはそれ位だな。」

「デュエル……！」

十代

LP：4000

三沢

LP：4000

「俺の先行、ドロー！」

三沢

手札：6

「俺は、E・HERO フォレストマンを守備表示で召喚。」

E・HERO フォレストマン

DEF 2000

三沢

手札：5

モンスター：1

「そして、永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを發動！」

三沢

手札：4

魔法・罨：1

「融合モンスターを選択し、デッキから融合素材モンスターを墓地へ送り、2ターン後の自分のスタンバイフェイズにその融合モンスターを特殊召喚する。俺は融合デッキからE・HERO ノヴァマスターを選択する。デッキからE・HERO レディ・オブ・ファイアとE・HERO クノスペを墓地に送る。俺はこれでターンエンドだ。」

「行け、俺のターン！ドロー！」

十代

手札：6

「俺はE・エマージェンシーコールを發動！デッキからE・HEROと名のついたモンスターを手札へ加える。俺はデッキからE・H

E・HERO エッジマンを加えるぜ。」

「（上級E・HEROを手札へ…？エアーマンじゃないのか…？）」

「更に俺は魔法カード、天使の施しを発動。デッキから3枚引いてから。2枚墓地へ送る。そして、墓地のE・HERO ネクロダイクマンの効果発動！このカードが墓地にある時レベル5以上のE・HEROを1度だけ生贄なしで召喚できる。」

「な……何時の間に…」

「へへ、さっきの天使の施しで墓地に送ったのさ、来い！E・HERO エッジマン！！」

E・HERO エッジマン

ATK 2600

十代

手札：5

モンスター：1

「さあ、行くぜ！エッジマンでフォレストマンを攻撃！パワー・エッジ・アタック！！」

E・HERO エッジマン

ATK 2600

E・HERO フォレストマン
DEF 2000

「エッジマンのモンスター効果、このカードが守備表示モンスターの攻撃した時、守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。」

「ううう…くっ！」

三沢

LP：4000 3400

モンスター：0

「十代が先制した！」

「良いぞ！アニキ！！」

ジュンコと翔の応援が凄まじい。

大地はどう返して来るかが問題にもなるか。

「ターンエンドだ。」

「やるな、十代。だが、俺もまだ負けたわけではない！俺のターン！」

三沢

手札：5

未来融合 - フューチャー・フュージョン（1ターン目）

「俺は魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！フィールド・墓地に存在するモンスターを除外して、E・HEROと名のついた融合モンスターを特殊召喚する。俺は墓地のE・HERO フォレストマンとE・HERO クノスベを除外し、地属性モンスターとE・HEROを融合し、E・HERO ギアを融合召喚する！」

E・HERO ギア

ATK 2200

三沢

手札：4

モンスター：1

「ギアの効果！このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動。エンドフェイズまで選択したモンスターの攻撃力を半分にし、このカードの攻撃力はその数値分アップする。俺は選択するのはエッジマンだ！！」

E・HERO ギア

ATK 2200 3500

E・HERO エッジマン
ATK 2600 1300

「バトルだ！ガイアでエッジマンを攻撃、コンチネンタル・ハンマ
ー！！！」

E・HERO ガイア
ATK 3500

E・HERO エッジマン
ATK 1300

「ぐ、うわああー！！」

十代

LP:4000 1800
モンスター:0

「アニキっ！！」

「十代！頑張って！！」

ジュンコと翔が凄まじく応援してるな。

もうこの2人、十代応援団で良いんじゃないかって思ってしまった。

「俺はこれでターンエンドだ。このエンドフェイスにガイアの攻撃力は通常の2200へ戻る。」

E・HERO ガイア

ATK 2200

「へ、まだまだ！俺のターン！」

十代

手札：6

「俺は魔法カード、融合発動！手札のE・HERO フェザーマンとE・HERO バーストレディを融合し、来い！炎のHERO！E・HERO ノヴァマスター！」

E・HERO ノヴァマスター

ATK 2600

十代

手札：3

モンスター：1

「さあ、行くぜ！ノヴァマスターでガイアへ攻撃！瞬間炎上！」
ノヴァ・フレイム

E・HERO ノヴァマスター

ATK 2600

E・HERO ガイア

ATK 2200

「つつ！！」

三沢

モンスター：0

LP：3400 3000

「ノヴァマスターの効果発動！このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、自分のデッキからカードを1枚ドローする。俺は1枚ドロー！」

十代

手札：4

「！俺は魔法カード、強欲な壺を発動！デッキからカードは2枚ドロー！」

十代

手札：5

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

十代

手札：4

「俺のターン！ドロー！」

三沢

手札：5

未来融合 - フューチャー・フュージョン（2ターン目）

「このターンのスタンバイフェイズに未来融合により選択した融合モンスターを融合召喚する！出でよ、炎のHERO！E・HERO
ノヴァマスター！！」

E・HERO ノヴァマスター

ATK 2600

三沢

モンスター：1

「更にフィールド魔法、フュージョン・ゲートを発動！」

三沢

手札：4

フィールド：無 フュージョン・ゲート

「このカードがフィールド上に存在する限り、「融合」魔法カードを使用せずに融合召喚をする事ができる。この際の融合素材モンスターは墓地へは行かず、ゲームから除外される。」

「あれ？」

フュージョン・ゲートを見ると、有栖は疑問でもあったのか何かを考える仕草をする。

「どうした？有栖。」

「E・HEROって、ミラクル・フュージョンとか専用の融合カードがあるよね。それに除外しちゃったら相性とか悪くならないのになって思ったんだよ。」

「いや、そうでもない。フュージョン・ゲートを軸にしたHEROならな。」

「？」

「俺はフュージョン・ゲートの効果を発動、手札のE・HERO
ザ・ヒートとE・HERO ボルテックを除外し、出でよ！光のH
ERO！E・HERO The シャイニングを融合召喚！！」

E・HERO The シャイニング
ATK 2600

三沢

手札：2

モンスター：2

「The シャイニングは除外されている自分のE・HEROの数
×300ポイント攻撃力がアップする。現在除外されている俺のE・
HEROの数は4枚。よって、1200ポイントアップ。」

E・HERO The シャイニング
ATK 2600 3800

「攻撃力3800!?!」

「まだだ、もう1度、フュージョン・ゲートの効果を使用し、手札
のE・HERO オーシャンと沼地の魔神王を除外、出でよ、氷の
HERO！E・HERO アブソルートZeroを融合召喚！」

E・HERO アブソルートZero
ATK 2500

三沢

手札：0

モンスター：3

「更に除外されているE・HEROが増えた事でThe シャイニングの攻撃力もアップ。」

E・HERO The シャイニング
ATK 3800 4100

「バトルだ！The シャイニングでノヴァマスターを攻撃！オプティカル・ストーム！」

The シャイニング
ATK 4100

E・HERO ノヴァマスター
ATK 2600

「っわあああっっ！！！！」

十代

LP：1800

300

モンスター：0

「これで決まりだ！ノヴァマスター！十代へダイレクトアタック！」

「この攻撃が決まったら十代は負ける。」

「「十代！！」」

「アニキイイツ！！」

「まだまだ！リバーズカードオープン！速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛！デッキからハネクリボーを守備表示で特殊召喚する！」

ハネクリボー

DEF 200

十代

モンスター：1

魔法・罫：0

「そのまま、ノヴァマスターでハネクリボーを攻撃！瞬間炎上！」

ノヴァ・フレイム

E・HERO ノヴァマスター

ATK 2600

ハネクリボー

DEF 200

「くっ！だが、ハネクリボーが破壊されたこのターン。俺が受ける戦闘ダメージは0になる。助かったぜ、ハネクリボー。」

「後、一步の所か。俺はターンエンドだ。」

「不味いよ。三沢君の場には融合モンスターが3体。アニキのモンスターもリバースカードもない。」

「十代……」

「どうにかなるんじゃないのか？」

「優、お前はあの状況から十代は逆転できると思ってるのか？」

「ああ、あいつは俺達にはない物を持っているからな。」

天性のドローパワーと言うカードゲームをやっている人間からしてみれば喉から手が出るほど欲しい物がな。

「楽しいな三沢、こんなワクワクするデュエルはないぜ！俺のターン！」

十代

手札：5

「俺は、E・HERO プリズムマーを召喚！」

E・HERO プリズムマー

ATK 1700

十代

手札：4

モンスター：1

「プリズマーの効果、1ターンに1度、融合デッキに存在する融合モンスター1体を相手に見せ、そのモンスターにカード名が記されている融合素材モンスター1体を自分のデッキから墓地へ送り、プリズマーはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。俺はE・HERO サンダー・ジャイアント選択し、E・HERO クレイマンを墓地へ送り、プリズマーはこのターン、クレイマンとして扱う！リフレクト・チェンジ！」

E・HERO プリズムマー

E・HERO クレイマン

「そして、俺もこいつを使うぜ。魔法カード、ミラクル・フュージョン！フィールド・墓地に存在するモンスターを除外して、E・HEROと名のついた融合モンスターを特殊召喚する。俺は、フィールドのE・HERO クレイマンとして扱われたE・HERO プリズムマーと墓地のE・HERO フェザーマン、E・HERO バーストレディ、E・HERO バブルマンを除外し、E・HERO

「エリクシーラーを融合召喚!!」

「E・HERO エリクシーラーだと!?!」

E・HERO エリクシーラー

ATK 2900

十代

手札：3

エリクシーラー!?! ちょっと待て! 入学当初は十代のデッキを見たけど、エリクシーラーはまだ入ってなかったぞ?

何時、入れた? 使うとしても初使用は大徳寺教諭…じゃなかったアムナエルの時でまだ先の話の筈だが……

「あああああつっ!?!」

「ど、どうしたのよジュンコ? 行き成り大声あげて。」

「あのカード、あたしが試合前に十代にあげたカードよ。」

「ええ!?!」

「ジュンコ……要らんこと聞くが、あのカードを何処で手に入れたんだ?」

「少し前に購買で買ったパックに入っていたのよ。E・HEROだから十代にあげようって思ったからよ。あれって、そんな凄いカードだったの？」

ちよつと待て。あのカードは確かPREMIUM PACK9に入っているカードじゃなかったか？

確か、イベントで先行発売されて、後に一般販売されたけど。生前時は殆ど見かけてないから……「一応」限定カードなのか？

って、それを言うならさつき十代が使ったクリボーを呼ぶ笛もそうだったな……

自分が渡したカードのおかげで十代は逆転の糸口を掴めたんだから嬉しく思えよ。

「エリクシーラーの効果発動！このカードが融合召喚に成功した時ゲームから除外された全てのカードを持ち主のデッキに戻す。」

「な、何？」

「そして、除外されたE・HEROがなくなり、The シャイニングの攻撃力は下がる！」

E・HERO The シャイニング

ATK 3800 2600

「エリクシーラーは水・地・炎・風の属性として扱う事が出来る。
そして、相手フィールド上に存在するこのカードと同じ属性のモン
スター1体につき、このカードの攻撃力は300ポイントアップす
る。」

「ノヴァマスターは炎、The シャイニングは光、アブソルート
Zeroは水！」

「よって、エリクシーラーの攻撃力は900ポイントアップ！」

「だが、自身以外の水属性が増えた事でアブソルートZeroの攻
撃力も500ポイントアップ！」

E・HERO エリクシーラー

ATK 2900 3800

E・HERO アブソルートZero

ATK 2500 3000

「更に融合を発動、手札のE・HERO スパークマンと沼地の魔
神王を融合し、E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマ
ンを融合召喚！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン

ATK 2500

十代

手札：0

モンスター：2

「シャイニング・フレア・ウィングマンは自分の墓地のE・HEROの数×300ポイント攻撃力がアップする！俺の墓地には4体！よって、1200ポイントアップする。」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン

ATK 2500 3700

「な、攻撃力3700!?!」

「バトルだ！エリクシーラーでノヴァマスターを攻撃、フュージオニスト・マジスター!?!」

E・HERO エリクシーラー

ATK 3800

E・HERO ノヴァマスター

ATK 2600

「ぐっ!?!」

三沢

モンスター：2

LP：3000 1800

「シャイニング・フレア・ウィングマンでThe シャイニングを
攻撃！究極の輝きを放て、シャイニング・シュートッ！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン

ATK 3700

E・HERO The シャイニング

ATK 2600

「くっ…っう！」

三沢

モンスター：1

LP：1800 700

「更にシャイニング・フレア・ウィングマンはフレイム・ウィング
マンの効果を受け継いだE・HEROだ。戦闘で破壊した相手モン
スターの攻撃力分のダメージを受けて貰うぜ、三沢。」

「ぐわああああああっ！！！！！」

三沢

LP:700

- 1900

WIN:十代

うおおおおおおお!!!

試合に決着がつくと観客席の生徒達が歓声を上げる。

十代が何とか勝ったな。

「勝者！オシリス・レッド、遊城十代！おめでとう、君が我がデュエルアカデミアの代表だ。」

と鮫島校長の口から十代へ告げられる。

気が付くと、翔、隼人、ジュンコの姿がいつの間になく、気が付けば十代の傍にいたから驚きだ。

デュエル場で十代と大地が握手をしている光景が目映った。

「本当に勝っちまったな。」

「ああ、十代はここぞと言う時は凄まじい勝負運を発揮する奴だ。」

「あいつはそういうとんでもない力を秘めているって訳ね。」

明日香の言う事は間違っていない。

最終的には精霊と超融合すると言う超展開になるわけなんだからな

……

学園代表は十代で決まった訳だが、ノース校の方は恐らく万丈目が代表なんだろう。

今回の最強カード

優「今回の最強カードは、E・HERO エリクシーラー」

E・HERO エリクシーラー

融合モンスター

レベル10 光属性 戦士族 ATK 2900 DEF 2600

融合素材：E・HERO フェザーマン + E・HERO バー

ストレディ + E・HERO クレイマン + E・HERO

バブルマン

効果：このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの属性は「風」「水」「炎」「地」としても扱う。

このカードが融合召喚に成功した時、ゲームから除外された全てのカードを持ち主のデッキに戻し、デッキをシャッフルする。

相手フィールド上に存在するこのカードと同じ属性のモンスター1体につき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

主な収録パック：「PREMIUM PACK9」

優「E・HEROの融合モンスターで4体の融合素材を必要とする。

有栖「融合召喚でしか召喚できない効果と除外されたカードをデッキに戻す効果に風・水・炎・地の4属性としても扱い相手フィールド上のモンスターの属性しだいで攻撃力を上げる効果を持つてるよ。」

優「自身も光属性であるため、事実5属性のモンスターとの戦闘では有利に戦いを進められる。何より最大の利点はこのカード1枚で風林火山の発動条件を満たすことができる。」

有栖「ジュンコが十代君が試合前にあげたカードだね、これのおかげで十代君は勝てたからジュンコは十代君の勝利の女神と言った所だね。」

優「攻撃名はフュージョニスト・マジスターだ。」

第20話 学園代表決定戦 E・HERO対決！（後書き）

学園代表決定戦が終了し、次回はいよいよ友好デュエルになります。有栖「作者、優を代表候補にすら選ばないとは何を考えているんだい？」（黒笑み）

あ、あの有栖ちゃん。落ち着いてくださいね？

有栖「ボクの優が…ボクの婿が代表じゃない時点で許せない嫁がどこにいるんだい？」（ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…！！！！）

ひいひいひいひい、優ちゃん助けてえええ！！

優「無理。」

ちよ、そんな即答なんt（ry

第21話 ノース校との学園対抗デュエル

学園代表デュエルからの十代の周辺は大嵐の状態だった。

ノース校との学園対抗デュエルに向けて、デッキ調整に勤しむ十代。原作通りに大地達が「あれも入れよう、これも入れるべき」等と要らない横槍を入れて来て、十代のデッキ調整が全く捗らない一方。

しかし、彼らの行動が原因でジユンコの堪忍袋の尾が切れてしまい。

「あんだ達っ！揃いも揃って十代の邪魔をするなあああ！！！」

と暴れ出し、その相手が自身が尊敬しているであろう明日香が相手でも容赦ない。

俺、有栖、鏡、ももえはそれを横で見ている。

「何か、もうあれだな。枕田の奴……」

「十代君のお嫁さんって感じだよな。」

「有栖さん、それは今更ですわ。」

「朝は起こしに来て、昼は一緒に弁当食って、放課後は一緒にデュエルしていて……」

「正に鴛鴦夫婦……と言う奴だな。」

「下手な事はしないで十代君に任せればいいのに。」

そのような事があってからジュンコが十代を常時ガードしていると
言う状態である。

主に大地、明日香、翔、隼人等を初めとした十代のデッキ調整を妨
害しようとする輩達から。

それだけでは収まらず、学園対抗デュエルが終わるまで十代を俺の
部屋に泊めると言ってくる始末だ。

理由を聞くと、「翔達が十代の邪魔をするのが目に見えている」と
断言される。

断ろうかと思ったが……ここで断ったら俺にまで火の粉が飛んで来
る可能性があるため、渋々了承した。

「なあ、優。こいつの代わりに使えそうなカードないか？」

その期間中、俺の部屋でデッキの調整をしていた十代があるカード
を出す。

それは以前、俺が投入を勧めた王宮のお触れである。

「あるにはあるけど。やはり使い難いか？」

「ヒーロー・シグナルとかミラーフォースとかが使えなくなるのが

ちよつとな。」

「ちよつと待つてる。」

俺は再び段ボールの箱の中からカードを漁りだす。

漁る事数刻……

「お触れがだめならこつちでどうだ？ 後、こつちは少し前に整理しなおしていたら出て来た物だし、融合主体のデッキには好相性だと思っ。」

十代に提供してみたのは、王宮のお触れの簡易版と言えるトラップ・スタン。

融合モンスターを一時的に除外する事で魔法・罠の発動やモンスターの特殊召喚を無効にできるパラドックス・フュージョン。

使用したターンに特殊召喚が出来なくなるが、除外されたモンスター同士をデッキへ戻して融合し、E・HEROの融合モンスターを融合召喚する効果を持つ並行世界融合。

「へえ、こんなカードがあるのか。試に使ってみるな。」

「ああ、そうしてくれ。」

ちよつどこの場には俺と十代しかいないから聞いてみる事にする。

ジュンコの方とはかく、十代はどう思っているのかを……

「十代。」

「?何だよ。」

率直に聞いてみる事にした彼が 十代がジュンコをどう思っているのかを……

恋愛にはこれでもかと言う位とことん疎い十代はジュンコの好意に全く気付いていない。

だからこそ、聞いてみる事にした。

自覚させると言つつもりはない。ただ、十代の本音が知りたいだけである。

「んー……なんつーんだろう。良く分からないんだよ。」

「分からないとは?。」

「でも、明日香や有栖達とはちょっと違う感じなんだよな。」

「…違う?。」

「ああ、何て言っただろう?……ずっと一緒に居ても良いって感じがするんだよ。」

「なるほどな……つまらない事を聞いて悪かったな。」

「いや、俺の方が世話になってんだから言いつこなしだよ。」

聞いて分かったが、十代も少なからずともジュンコを意識している訳か。

ずっと一緒に居ても良いつて、遠回しに結婚してくれと言っているような気がするのはいのせいかな？

そもそも、そう思う時点で俺も色々と末期かも知れないな……これかな。

その日から毎日、十代のデッキ調整を手伝う事となる。

十代が使つ以上、基本的な調整は十代に任せる事にした。

それに何より、ジュンコの逆鱗に触れたくないのも本音の一つである。

いよいよ、ノースとの友好デュエルが開始される当日の朝。

特に十代の朝食は凄まじい物であった。

ジュンコ手製の料理がずらりと並んでおり、十代はそれを平然と平らげて行く。

「よく朝からあんなに入るな……」

「十代の胃袋は底なしなんだな。」

「でも、美味しそうだよな。」

生憎、その食事はジュンコが十代のために腕を奮った料理であり、彼以外の人間が手をだそうならば、調理場から問答無用で包丁がマシガンのように飛んで来るため、誰も手を出そうとは思わない。寧ろ、ジュンコ。包丁は材料を切るための物でドラマみたいに人を刺したり、投げる物じゃないぞ。

朝食が終わった後、俺達は鮫島校長とクロノスが引率でノース校代表団を迎えるために島の埠頭に来ていた。

そして、埠頭に現れたのはノース校の移動手段でもあった潜水艦である。

その潜水艦から白い鉢巻に眼鏡をかけた男が出てくる。

特徴はよく覚えてないが、確か。ノース校の校長だった筈。

挨拶代わりなのか、鮫島校長と握手を交わす

「おお、良くいらしたな。一之瀬校長。」

「暫くうちの悪童らがお世話をかけますが宜しく願いますよ。」

「いや、こちらの方こそ…」

「ところで…トメさんはお元気ですか？」

「勿論、トメさんはこの対抗試合にはかかせない人ですから。」

「優、今の言葉ってどういう意味？トメさんはただの購買の人だよ
ね。」

「……さあな。」

知らない有栖が疑問に思うのも分かる。

だが、真実を知ると何とも言えない感情になってしまう。

あんな「下らない権利」を賭けて戦う代表生徒の身にもなってほしい。

だが、下らないなどとは口が裂けても言えない。

やがて潜水艦から万丈目が黒い制服を身に纏い、4人の舎弟を引き連れて現れ、自分がノース校の代表と宣言する。

それとほぼ、同時に万丈目の兄2人がとあるTV局の番組スタッフを引き連れて参上する。

TV番組のスタッフの口から「今年は大々的にTV中継する」と告げられた。

「でも、凄い事になったね。TV放送だなんて…」

「ああ………」

場所はデュエル場に移り、俺達は観客席に座っていた。

観客席の生徒達は学園対抗戦という事もあり、テンションが高いらしく、歓声を上げる。

周囲には何時も見慣れた面子が揃っている。

左隣には有栖が右隣には鏡が座り。前の席には明日香、ジュンコ、ももえ、翔…後ろの席には大地、隼人、カイザーが座っていた。

「だが、驚いたな。万丈目がノース校の代表とは………」

「ええ、そうね。」

「なら、この勝負は十代の勝ちで決まったも当然よね。十代は前に万丈目に勝ってるんだから。」

と十代の嫁こと、ジュンコは豪語するが、今の万丈目は別名、万丈目サンダーの万丈目であって、

ブルーの制服を着ていた頃の存在にやられ役で定評があったブルー

万丈目じゃない。

「それはどうかな。」

「優は違っつて言いたいのか？」

「そうじゃない、学園のトップになるってことは並大抵の実力じゃ無理な筈だ。今のアイツは、DAにいる生徒達が知っている万丈目準ではない。」

「それに何かさ彼、雰囲気が変わったよね。優程じゃないけど、凄みが増したと言うか……」

『さあ、皆さん！いよいよ始まります！世紀の学園対抗デュエル大会！拍手も応援もよろしく。』

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

ノース校の生徒は雷マークが記された旗を大きく振る。

そして、アカデミア本校側のフィールドの下では十代がいた。

「悪い、ちよつと席外す。」

「ちょっと優っ…もうすぐ試合が始まるよっ…!」

「すぐに戻る。」

俺は観客席から通路を通り、十代のいるデュエル場の下にたどり着く。

「十代。」

「優、どうしたんだ？」

「いや、お前が心配になったからな。大丈夫か？」

「ああ…でも。」

「?」

「今の万丈目は尊敬するぜ。たった一人で他所の学校一番を取って、ここへ殴り込んで来やがったんだからな。」

「……………」

「なんかアイツ…カッコいいぜ。」

「ではこれより、デュエルアカデミア本校…」

「ノース校…」

「「対抗デュエル大会の開催を宣言する!!!」」

「始まるか。じゃあ、俺も席に戻って応援しているからな。頑張れよ。」

「おっ!」

俺は通路を通り、先ほど、自分が座っていた観客席に戻る。

「遅いよ。もうすぐ始まる所だったんだよ。」

「悪い。」

俺は有栖に謝罪しながら席に着くと同時にクロノスによる開催宣言が出される。

『まず、紹介するのは、デュエルアカデミア本校代表、ドロップアウトボー……じゃなかった、遊城く十代く!』

クロノスが十代を紹介すると、本校の生徒達の歓声が上がリ、本校側のボルテージも上昇する。

「十代、頑張つて!」

「アニキ、負けるな!」

『対するは、ノース校……』

「要らん！俺の名は俺が告げる！黙って引つ込め、おかつぱ野郎！」
『お、おかつぱじゃないワ。これは有名な…』

しかし、クロノスの足にコードが絡まり、転ぶようにデュエル場から落ちる。

何をやっているんだか……

「お前達！この俺を覚えているか！？」

やがて、万丈目が喋り出す、観客席の生徒達は沈黙する。

それを気にする事無く、言葉を続ける。

「俺が消えて清々したと思っている奴！俺の退学を自業自得だとほざいた奴！知らぬなら言っただけ聞かせるぜ！その耳かっぼじって良く聞くがいい！地獄の底から不死鳥の如く復活した俺の名は……！」

そして、万丈目は右手を天へ上げる。

「――！十！」

「……………百！千！」

「万丈目サンダーッッ！！！」

「……………うおおおおおおおっつっつ！！！！！！万丈目サンダーッッ！！！！！！」

万丈目
手札：6

「俺は仮面龍を守備表示で召喚！」

仮面龍

DEF 1100

万丈目

手札：5

モンスター：1

仮面龍：デッキからドラゴン族を特殊召喚するリクルーター。

恐らくは、アームド・ドラゴンへ繋げる布石だろうな…

「ターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！」

十代

手札：6

「俺はE・HERO エアーマンを召喚！」

E・HERO エアーマン
ATK 1800

十代

手札：5

モンスター：1

「エアーマンが召喚に成功した時、効果が発動。俺は2つ目の自分のデッキからHEROと名のついたモンスター1体を手札に加える効果を発動、俺はE・HERO バーストレディを手札に加える。」

十代

手札：6

「更に魔法カード、強欲な壺を発動。デッキからカードを2枚ドロ
ー！」

十代

手札：7

「更に魔法カード、天使の施しを発動！デッキからカードを3枚引き、それから2枚墓地へ捨てる。」

「ふん、随分と手札を交換するな。よっぽど手札が悪いのか？」

「更に魔法カード、融合を発動、手札のフェザーマンとバーストレ
ディを融合！現れる、フレイム・ウィングマン！」

E・HERO フレイム・ウィングマン
ATK 2100

十代

手札：4

モンスター：2

「バトル！フレイムウィングマンで仮面龍を攻撃！フレイム・シユ
ートツ！！」

E・HERO フレイム・ウィングマン
ATK 2100

仮面龍

DEF 1100

「フレイム・ウィングマンの効果、戦闘破壊した相手モンスターの
元々の攻撃力分のダメージを与える。仮面龍の元々の攻撃力は14
00…よって、1400ポイントのダメージを受けて貰うぜ！」

「ぐがあああああ！…！」

万丈目
LP：4000
2600
モンスター：0

「しかし！仮面龍が戦闘で破壊されたことによりデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚する！俺は2枚目の仮面龍を特殊召喚！」

仮面龍
DEF 1100

万丈目
モンスター：1

「更にエアーマンで仮面龍を攻撃！」

E・HERO エアーマン
ATK 1800

仮面龍
DEF 1100

万丈目
モンスター：0

「くっ……しかし、再び仮面龍の効果を発動、その効果でデッキからアームド・ドラゴン レベル3を特殊召喚！いでよ、レベル3！」

アームド・ドラゴンレベル3

ATK 1200

万丈目

モンスター：1

アームド・ドラゴンレベル3が現われた事でノース校側のテンションがさらに上がる。

「レベルって…」

「条件を満たすとどんどんレベルアップして行くモンスターだ。」

「でも、レベルモンスターはどれも伝説と言われる位、非常にレアなカードだけど…」

「万丈目はあれを何処で手に入れた？」

ノース校に伝わる秘宝のカードだったみたいだからな。

でも、それでも負けたからな奴は…

「褒美は今年も私の物だ！十代君負けるな！！負けてはならんぞ！

！」

と鮫島校長が大声で叫んでいた。

俺からしてみれば、本当に「下らない」と思ってしまう。

「あつたりまえじゃん、こんな面白そうなカードが最後にはどうなるか、最後まで見届けなくっちゃ。」

「強がっていられるのも今のうちだ。」

「俺はターンエンドだ！」

「そして、恐怖の俺のターンが始まる！ドロー！」

万丈目

手札：6

「くくくく、十代。俺のスタンバイフェイズが訪れた事でアームド・ドラゴン Lv3の効果が発動。自分のターンのスタンバイフェイズ時にフィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、手札・デッキからアームド・ドラゴン Lv5を1体特殊召喚する。」

「何!?!」

「俺はアームド・ドラゴン Lv3を墓地へ送り、デッキからアームド・ドラゴン Lv5を特殊召喚する！いでよ、Lv5！」

アームド・ドラゴン L V 5
ATK 2400

アームド・ドラゴン L V 5が召喚されたことでノース校のテンションもさらに上がる。

「気をつける十代！アームド・ドラゴンがレベルアップしたことでそのモンスター効果も上がっている筈だ。」

「アニキ……」

「十代……」

「くくくく、その通りだ。アームド・ドラゴン L V 5の効果発動、手札からモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する！」

「な……」

「俺は手札の闇より出でし絶望を墓地に送る！闇より出でし絶望の攻撃力は2800！よって、貴様の攻撃力2100のフレイム・ウイングマンを破壊する！デストロイド・パイル！」

十代

モンスター：1

万丈目

手札：5

「アームド・ドラゴン　L V 5！エアーマンを捻り潰せ！アームド・バスター！」

アームド・ドラゴン　L V 5
A T K　2 4 0 0

E・HERO　エアーマン
A T K　1 8 0 0

「ううっ……」

十代

L P：4 0 0 0　　3 4 0 0
モンスター：0

「ああっ…アニキのモンスターが全滅しちゃった…」

「くくくくくく……そして、このターンのエンドフェイズ。アームド・ドラゴン　L V 5は更なるレベルアップを遂げる。」

「何だと!？」

「このカードが戦闘によってモンスターを破壊したターンのエンドフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地

鏡はずっこける。

「じゅ、十代〜。」

「アニキ、自分の身が危ないんだよ。」

「十代らしいと言えば、十代らしいか……」

「馬鹿が！お前の身が危ないんだぞ！感心している場合か！」

「だけどき、こんなにワクワクする事ってあるかよ。俺、今ピンチになるくらい強いモンスターと戦っているってことだぜ。」

「ええい、鼻につく…俺は貴様の様に何も考えず、毎日をただチャラチャラ生きて行くわけにはいかないんだ。見る！この張りつめた視線を万丈目家の夢と野望を全部、俺の肩に乗せたこの重い視線を！俺は兄さんたちの期待に応えるため…そして、俺の価値を証明するため、遊城十代！俺はお前を倒さなければならぬ！」

万丈目の奴、何か言っているな…

価値だと言うが、人は物ではない。

自分の価値は自分で決めれば良いだろうが……

デュエルとかではなく、お前自身の力で。

「そう簡単にはやられないぜ！万丈目！」

「万丈目サンダーッ！！」

「気張れ、十代！」

「頑張つて、十代！」

「アニキー！」

「俺のターン、ドロー！」

十代

手札：5

「俺は魔法カード、融合回収を発動、墓地にある融合の魔法カードと融合に使用された融合素材モンスターを1体、手札に加える。俺はフェザーマンと融合を回収。」

十代

手札：6

「更に融合を発動！手札のフェザーマンとバブルマンを融合！現れる、氷のHERO、アブソルトZero！」

E・HERO アブソルトZero

ATK 2500

十代

手札：3

モンスター：1

「な……そ、そいつは！」

万丈目の表情が険しくなり始めた。

恐らく、この学園へ来た時に自分が吹っかけたアンティデュエルの事を思い出しているんだろうな……

「更にワイルドマンを召喚！」

E・HERO ワイルドマン

ATK 1500

十代

手札：2

モンスター：2

「行くぜ！アブソルートZeroでアームド・ドラゴン Lv7を
攻撃！瞬間氷結《Freezing at moment》」

「くっ！振り返ちにしろ、アームド・ドラゴン Lv7！アームド・
ヴァニッシャー！」

アームド・ドラゴン L V 7
ATK 2800

E・HERO アブソルトZero
ATK 2500

「くっ！」

「アニキ、何やってんの！？折角出したモンスターを……」

「いや、あれで良い。アブソルトZeroはフィールドを離れた時に効果が発動する。多少強引ではあるが、自爆特攻で破壊されて効果が相手の場を全滅させると言う戦法も取れる。」

大地、解説ありがとう。

今の十代のやり方は本当に無理矢理だな。実際ならば、除去にチェインして亜空間物質転送装置やパドックス・フュージョンで除外したり、

Zero自身を素材にして他の属性融合HEROを出して、アドバントージを稼ぐ方が合理的でもある。

十代

LP：3400 3100
モンスター：1

「この瞬間、アブソルートZeroの効果が発動、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

万丈目

モンスター：0

「くううつつ!!!」

「やったやった！アニキがアームド・ドラゴンの究極態を破壊した！」

「流れは十代の方に向いて来た。」

「行けっ！ワイルドマン！万丈目！サンダーにダイレクトアタック！ワイルド・スラッシュュ!!!」

E・HERO ワイルドマン

ATK 1500

万丈目

LP：2600 1100

「ぐわあああっつ！!!!」

「立て！立つんだ！サンダー!!!」

「……………立つんだ!!サンダーアアア
ツツ!!!!」

派手に吹っ飛んだ万丈目はよろよろと立ちあがる。

「俺の…ターン。ドロー!!」

万丈目

手札：6

「俺は魔法カード、レベル調整を発動!このカードは相手にカードを2枚ドローさせる!さあ、2枚のカードをドローしろ!」

「え、良いのか?じゃあ、2枚ドロー!」

万丈目

手札：5

十代

手札：4

「その後、自分の墓地に存在するLvを持つモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃できず効果を発動及び適用する事もできない。蘇れ、アームド・ドラゴン Lv7!!」

アームド・ドラゴン L V 7
ATK 2800

万丈目
モンスター：1

「ああ、折角破壊したアームド・ドラゴンが復活しちゃった。」

「だが、レベル調整で呼び出したモンスターはこのターン、攻撃および効果を発動する事が出来ない。万丈目は一体何を狙っている……」

恐らくは、「アレ」への布石だろうな。

まあ、登場がかなり後になったが……

「そして、俺はアームド・ドラゴン L V 7を生贄に!!」

「何!?アームド・ドラゴン L V 7を生贄に!?!」

まさかとは思ったが、本当に出てくるのか。

余程の事がない限り採用はほぼ皆無のあのカードが……

「アームド・ドラゴン L V 7程のモンスターを生贄にするだど?」

「生け贄にして上級モンスターを呼ぶならL V 3やL V 5でも良か

「たんじゃ…」

「いや違う……」

「優、何が違うって言うんだ？」

「奴はアームド・ドラゴンの最終形態を呼び出すつもりだ。」

「いでよ、アームド・ドラゴン　LV10!」

アームド・ドラゴン　LV10

ATK 3000

万丈目

手札：4

「な、何だこのカードは。」

「このカードは通常召喚できなく、自分フィールド上に存在するアームド・ドラゴン　LV7を1体、生け贄にした、場合のみ手札から特殊召喚できる。これがアームド・ドラゴンの最終進化形態だ!」

「アームド・ドラゴンの最終進化形態……」

「これがアームド・ドラゴン　LV10の効果、手札を1枚墓地へ送る事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全

て破壊する。」

「な、何だっつて!?!」

十代

モンスター：0

万丈目

手札：3

「アームド・ドラゴン Lv10でダイレクトアタック!アームド・ビッグ・バニッシャー!」

十代

LP：3100

100

「ぐわああああっつ!?!?!?!」

「アニキッツ!?!」

「十代っつ!?!」

「LPが紙一重で繋がったが、形勢は十代に不利だ。」

「十代……」

十代

手札：5

「俺は魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動。フィールド・墓地に存在するモンスターを除外して、E・HEROと名のついた融合モンスターを特殊召喚する。俺は墓地のワイルドマンとアブソルートZeroを除外し、地のHERO！E・HERO　ガイアを融合召喚！」

E・HERO　ガイア

ATK　2200

十代

手札：4

モンスター：1

「だが、俺のアームド・ドラゴン　LV10の攻撃力は3000！倒す事は出来ん！！」

「いや、これで俺の勝ちは決まりだ。」

「な、なんだと？」

「E・HERO　ガイアは融合召喚した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動。エンドフェイズまで選択したモンスターの攻撃力を半分にし、このカードの攻撃力

はその数値分アップする。」

「何!?!」

E・HERO ガイア

ATK 2200 3700

アームド・ドラゴン LV10

ATK 3000 1500

「あ、アームド・ドラゴンの攻撃力が……」

「これで俺の勝ちだ!行け!ガイア!コンチネンタル・ハンマー!
!」

E・HERO ガイア

ATK 3700

アームド・ドラゴン LV10

ATK 1500

『あああ、不味い不味い!!カットだ!カット!!』

とTV局のスタッフが大声を上げ始める。

情けないな……そもそも、何が目的でTV中継したのかが不明だ。

恐らくは、万丈目グループの宣伝のようなものだろうな……

万丈目

LP：1100 - 1100

WIN：十代

決着がつき、アカデミアの生徒達の歓声で包まれる。

みんなが十代の所へ行くのか、席を立って行く。

俺もそれを追いかける。

「やったな、十代。」

「凄い大逆転勝利だったよ、アニキ。」

「おう！みんなも応援サンキューな。」

視線を十代から膝をついている万丈目へ移す。

彼の元に2人の兄達が近付いていたのが見えた。

万丈目に対して、何かを言っているのが聞こえる。

恐らく、自分達が用意したカードを使わなかったことに腹を立てた

のだろうな。

この兄弟はデュエルに関して何もわかっていない。

真のデュエリストならば、自分が信じたカードを使ったデッキで戦ってこそだ。

幾ら強いカードを入れても、デッキとの相性の有無やそのデッキではカードの性能を引き出せなかったりと色々ある。

この兄弟は、それをまるで分っていない。

十代は万丈目は必死に戦い、兄達から一方的に押し付けられたプレッシャーに打ち勝ち、彼らを乗り越えたと弁護する。

「兄さんたち……帰ってくれ。」

苦し紛れに万丈目の小さく呟いた一言……

その一言が引き金となり観客席にいたアカデミアの本校・ノース校の生徒達による万丈目兄達に大ブーイングと帰れコールが放たれる。

万丈目には、反対に負けはしたが、最後まで戦った彼を称賛する声が上がリ、サンダーコールが続く。

「……見損なつたぞ準！行くぞ、正司！」

「くっ……」

状況が自分たちに対して悪いと思ったのか、万丈目兄2人はその場から逃げるように去って行く。

十代はその姿を睨む様に見ていた。

「もう帰っちゃうっスね。」

「ノース校に行っても元気だな。」

「いや……俺はノース校には帰らん。」

万丈目の一言にノース校の面々が驚いたような表情を見せる。

それはそうだろうな、慕っていた人間が違う所へ行くと言ったら……

「俺は、ここでやり残したことがある。江戸川！ノース校キングの座はお前に帰すぜ。」

「返すって……サンダー！」

「校長、もう1度厄介になる。」

「勿論、万丈目君は元々、ここの生徒ですから。」

鮫島校長は快く、万丈目の受け入れを了承する。

そして、表彰式が開催される。進行を担当しているのはクロノスであった。

あのおっさん。実技最高責任者でありながら、色々やっているよな

……

『これよりも、表彰式を行いたいと思いますノーネ。そして、ご褒美を渡すノーは、ミス・デュエルアカデミーア！』

「ミス・デュエルアカデミーアって……」

「そんな人いたんすか！？」

そして、現れたのは……

「と、トメさん！？」

「トメさんってミス・デュエルアカデミーアだったのか。」

「みただいな。」

現れたのはチャイナドレスを身に纏ったトメさんである。

しかし、はっきり言って俺は似合わないと思う。

寧ろ、いつもの購買の制服の方が似合っている気がする。

意外な人物が現れて驚愕な表情を浮かべるアカデミアの男子生徒達。

俺は知っていたからあまり気にはしない。

『では、勝者の校長はこちらへ。』

クロノスに促されるように鮫島校長がトメさんの隣へ歩いて行く。

その表情はとても嬉しそうであった。

鮫島校長がトメさんの隣に立つと、トメさんが鮫島校長の頬にキスをする。

十代も言っていたけど、あんなことなんかのために戦う生徒の身にもなって欲しい。

背後の方から誰かが泣くような声がしたため、向いてみるとノース校の校長が泣きながら潜水艦の方へ走り去って行く姿が見えた。

「本当にこれで良かったのかな？」

表彰式も終わり、ノース校の代表団を乗せた潜水艦がアカデミア本島から離れて行き、俺達はそれを見送った後。

鮫島校長が万丈目に尋ねる。

「勿論。」

「だが……」

「ここに残っても万丈目サンダーは3か月の授業欠席でオベリスク・ブルーでは進級できないのじゃー」

「な……」

まあ、三ヶ月間も授業を休んだツケが回って来た訳だ。

「進級したいのなら出席日数の関係ないオシリス・レッドに入るしかないのじゃー。」

「この俺がオシリス・レッドだと!?この俺がこいつらと同じ。」

「文字通り同僚になるんだね。」

「五月蠅い!!」

「宜しく頼むぜ。同僚。」

「断る!何で俺がこいつらと……!!」

「それじゃあ、万丈目の入寮を祝して。」

「勝手に決めるな!!」

十代を初めとしたアカデミアの生徒達や鮫島校長やクロノスを交えて、万丈目の歓迎会が盛大に行われる事で学園対抗デュエル大会は幕を閉じる。

今回の最強カード

優「今回の最強カードは、E・HERO ガイア」

E・HERO ガイア

融合モンスター

レベル6 地属性 戦士族 ATK 2200 DEF 2600

融合素材：「E・HERO」と名のついたモンスター+地属性モンスター

効果：このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示

で存在するモンスター1体を選択して発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスター1体の攻撃力を半分にし、このカードの攻撃力はその数値分アップする。

主な収録パック：「DUEL TERMINAL - オメガの裁き
! ! -」

優「地属性とE・HEROと名のついたモンスターを融合素材にする融合モンスター。」

有栖「融合召喚でしか特殊召喚できない効果と融合召喚に成功した時、相手のモンスター1体の攻撃力を半分にして、その数値分自身の攻撃力に加える効果を持っているよ。」

優「E・HEROには必須とも言えるエアーマンとフォレストマンを素材にすることで無理なく融合召喚する事が出来る。」

有栖「フレイム・ウィングマンやアサルト・アーマー等と組み合わせる事で相手により多くのダメージを与える事が出来るんだよ。」

優「効果は召喚したターンのエンドフェイズまででそれを過ぎるとただの2200のモンスターになってしまうので注意が必要。(更に言えば、絶版だったりノーマルレアだったりシークレットだったり1枚を入手するのも非常に困難だ。)」

有栖「攻撃名はコンチネンタル・ハンマーだよ。」

第21話 ノース校との学園対抗デュエル（後書き）

今回で「第1章 学園編」は完結します。

優「次回からは三幻魔…セブンスターズ編と言う訳か。」

そうなのですが、その前に次回はお気に入り100件登録記念としての番外編になります。

有栖「ボクと優の子供が出て来る話だったよね。」

100件登録のアンケートにご回答して下さいました皆様。ありがとうございます。

前書き

このお話は時間系列で言う所では「第2章 セブンスターズ編」が完結した直後の話とさせていただきますのでご了承下さい。

またこのお話と本編は全く関係がない事も視野に入れてお読みください。

影丸理事長が黒幕として引き起こされたセブンスターズとの戦いが集結し、デュエル・アカデミアには平穏が訪れる。

隼人がインダストリアル・イリユージョン社にカードデザイナーとしてスカウトされ、デュエル・アカデミアを去って行った。

そんなある日の事である。

「シニョール天空、校長がお呼びであるから直ちに行くノーネ。」

とクロノス教諭に言われてしまい、俺は止むを得ず校長室へ向かう。

本日も講義があるが、俺はオシリス・レッドであるため、事実的に言えば出席日数は必要はない。

現在、俺は校長室へ向かう途中で考え事をしていた。

それは自分が呼ばれた理由である。

自分で言うのもなんであるが、自分は疚しい事はしていない筈……

十代とかと違い、講義には面倒ではあるものも出席はしている。

しかし、いくら考えても心当たりが見当たらないから困った。

「失礼します。」

校長室へ入った俺を待っていたのは鮫島校長、鮎川教諭と有栖に10歳前後の1人の少女がいた。

鮫島校長と本校の教諭でもある鮎川教諭はともかく、生徒である有栖までいるのかが疑問だ。

その疑問は更に増える一方である。

極めつけは有栖の手を握っている少女…その顔つきを見てみると有栖に本当に似ている。

有栖と違う所…と言ってしまったら失礼だが、相違点は髪の色…有栖の髪の色は赤みがかかった桃色の髪。

しかし、この少女の髪の色は純粹な黒色の髪だ。

有栖の妹か？

「天空君、態々来てもらってすまないね。」

「いえ、クロノス教諭から来るようにと言われたのでそれでどのようなご用件ですか？」

「それは彼女に…」

鮫島校長が視線を俺から有栖の方へ向ける。

有栖は何と叫びたらいいのか何か戸惑っているようにも見えた。

「有栖。そう言えば、その子は誰なんだ？お前の家族か？」

「うん、ある意味そうなんだけどね。」

ある意味そうである……？

随分と曖昧な返答だが、ある意味そうだとはどういう意味だろうか？

「えーと、この子はね……」

「パパ……！」

有栖の手を握っていた少女は突如、有栖の手を離し、飛び込んでくるように俺の元へ走って来た。

止むを得ず、俺はその少女を受け入れる。しかし、この少女は俺の事をなんて呼んだ？

パパ？……Father？……父親？

何故、俺がそう呼ばれるんだ？

「ちょっと待て、有栖。これはどういう意味だ。」

これはドッキリとか何かの冗談とか悪い夢だと思いたかった。

だが、現実是非情であって、それは本当であつたとしか言えない。

「俺が校長室へ訪れる前にあの子のDNA鑑定を行つたらしい…それで俺と有栖の子供だという事が判明したらしい。」

「それは何とも……」

「おめでたい限りですね。」

ももえ、何をどうしたらそういう結論に達する。

とうとう、十代とジュンコのバカップルが原因で頭が行かれたか？

「有栖、この子はどこから現れたんだ？」

俺は校長室で初めて見たため、最初はてっきり有栖の妹か親戚の子供かと思っていたが、まさか自分と有栖の子供だったとは考えもつかなかった。

やがて、有栖がこの子と出会つた時の事を話し始める。

有栖の話によれば、数日前に朝起きてみると、自分の寝ていたベッドの中にこの子も一緒に眠っていたとの事だ。

その子が目を覚ましたら、突如、「ママ」と呼ばれたらしい。

「なるほどな……」

俄かには信じがたい話だが、違う世界から転生して来た俺が人の事を言える話じゃない。

俺みたいに異世界から転生して来る人間もいれば、未来人がいても不思議ではない。

現に5D'sの未来組もそうであろう、方法は違えど…

「でも、嬉しいな。」

有栖の奴が終始ニヤニヤと笑顔を見せていて、本当に不気味でしかない。

「何をそんなにニヤニヤしているんだ。」

「だって、ボクと優の愛の結晶が現れたんだから、もう嬉しくてしようがないよ。」

俺は正直言つて、頭が痛い。言いなおすが…痛いと言つレベルではない。

誰か、頭痛薬をくれ。

「あなたのお名前は？」

そんな俺を他所に他の連中はその少女の事に関して聞く。

「私の名前は天空有里です！」

「元気があって良い子だな。パパとママのお名前は？」

「パパの名前は天空優、ママの名前は天空有栖です！」

確定だな。

この子は完全に俺と有栖の子供だな。

寧ろ、有栖は天空の姓になったのか。実家があんなに豪華で跡取りの一人娘だろうに……

「じゃあ、パパはどんな人だい？」

「パパはとても優しく、デュエルが強い私の自慢のパパです。」

「…だつてさ。」

「五月蠅い……」

吹雪さんは半ばからかう様に俺を見る。

「じゃあ、ママはどんな人？」

「ママもパパと同じで優しく、パパの事が凄く大好きなママです。」

「そうなんだ、良かったね。有栖。」

「えへへへ……」

また有栖の奴が嬉しそうにしている。まあ、気にしないでおう。

「じゃあ、デュエルしようぜ。」

「え？」

「アニキ、何言ってるんスカ!？」

「それにお前、デュエル好きって顔してるだろ。」

「うん、デュエルは好きだけど。パパから聞いたんだけど、十代おじさんって強いって聞いたんだ。」

「お、おじさん……」

十代が凹んじまった。

それはそうだろうな、未成年でおじさんなんて呼ばれたらそりゃ凹むか。

十代をフォローするようにジュンコと翔が十代に駆け寄って行く。

「あ、アニキー……!」

「十代、仕方ないんだから元気出して。」

「くくくく、10歳におじさん呼ばわりされるとはな哀れだな十代。」

「

「でも、万丈目サンダーおじさんも翔おじさんや吹雪おじさんも強
いって知ってるよ。」

グサツ！グサツ！グサツ！

何かが刺さるような音がしたと思えば、今度はサンダーも翔も吹雪
さんもノックダウンしてしまった。

「翔さん！しっかりしてください！」

「兄さん！しっかりして！」

十代に時間差でノックダウンした翔の元へももえが、吹雪さんの元
へ明日香が駆け寄る。

しかし、サンダーには誰も駆け寄って行かない。

サンダー哀れ……

「どうするんだ？4人ともこんな状態だぞ。」

「……我が子ながら恐ろしいな。あっさりと言っただから。」

「じゃあ、ボクとする？有里。」

「ママと？……うん！」

言い出しっぺの十代ではなく、有栖と有里……ある意味、親子対決
と言う形でデュエルが開始される。

十代、翔、サンダーは精神的ダメージが大きかったのか部屋で休息
中。

俺、大地、明日香、鏡、ジュンコ、ももえが観戦と言う形になる。

「じゃあ、行くよ。有里。」

「うん！ママ！」

「デュエル！！」

有栖

LP：4000

有里

LP：4000

「先行は、キミにあげるよ。」

「じゃあ、私のターン、ドロロー！」

有里

手札：6

「私は、マシンナーズ・ギアフレームを召喚！このカードの召喚に成功したことでデッキからこのカード以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスターを手札に加える。私に加えるのはマシンナーズ・フォートレス。」

マシンナーズ・ギアフレーム

ATK 1800

有里

モンスター：1

「マシンナーズ・ギアフレーム!？」

「流石、神？君の子供だけあつて、機械族が主体か。」

有栖はマシンガジエ、有里はマシンナーズか？

そうなれば、ある種のミラーマッチになるか。

「私はこれでターンエンド。ママのターンだよ。」

「マシナーズか…ボクのターン、ドロー！」

有栖

手札：6

「ボクはマシナーズ・ギアフレームを召喚！効果はキミも使ったから良いよね。ボクはその効果でマシナーズ・フォートレスを加えるよ。」

マシナーズ・ギアフレーム

ATK 1800

有栖

モンスター：1

「更にボクは手札から永続魔法、機甲部隊の最前線を発動。」

有栖

手札：5

魔法・罫：1

「バトル！マシナーズ・ギアフレームでマシナーズ・ギアフレームを攻撃！」

マシナーズ・ギアフレーム

ATK 1800

マシナーズ・ギアフレーム

ATK 1800

有栖

モンスター：0

有里

モンスター：0

「ボクのモンスターが戦闘で破壊されたため、永続魔法、機甲部隊の最前線の効果発動！1ターンに1度、機械族モンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力の低い、同属性の機械族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。ボクはデッキからグリーン・ガジェットを特殊召喚！」

グリーン・ガジェット

ATK 1400

有栖

モンスター：1

「更にグリーン・ガジェットの効果発動、このカードが召喚・特殊

召喚された時、デッキからレッド・ガジェットを手札に加える事が出来るよ。」

有栖

手札：6

「グリーン・ガジェットでダイレクトアタック！」

グリーン・ガジェット

ATK 1400

有里

LP：4000 2600

「うっうっ」

「ボクは、これでターンエンドだよ。」

「私のターン、ドロー!!」

有里

手札：6

「魔法カード、調律を発動！デッキからシンクロンと名のついたチューナー1体を手札に加える。私が加えるのはアンノウン・シンク

ロン！その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。」

シンクロン！？

マシンナーズにシンクロン……？？

確かにシンクロンには機械族チューナーが数多く存在するが、シナジーするのか？

有里のデッキはマシンナーズとシンクロンの混合デッキ差し詰め、マシンナーズシンクロンか？

「私はチューナーモンスター、アンノウン・シンクロンを特殊召喚！このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚する事ができるんだよ。でも、デュエル中に1度しか使えないけど。」

アンノウン・シンクロン

ATK 0

有里

手札：5

モンスター：1

「更に手札のレベル7のマシンナーズ・フォートレスとレベル1のチューニング・サポーターを墓地に送って、マシンナーズ・フォートレスを墓地から特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス
ATK 2500

有里

手札：3

モンスター：2

「レベル7のマシンナーズ・フォートレスにレベル1のアンノウンのシンクロンをチューニング！」

アンノウンのシンクロンは1つの輪となり、マシンナーズ・フォートレスがその輪へ入り込む。

7 + 1 = 8

「8の星が集う時、全てを破壊する魔龍が放たれる！シンクロ召喚、全てを薙ぎ払って！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

有里

モンスター：1

レッド・デーモンズ・ドラゴン……恐らく、未来の俺がプレゼント
か何かで渡したのか？

手に入れた経歴はともかく、あのような手段でシンクロするとは中
々、面白いデツキだ。

シンクロンだからな……まさか。

「行くよ、ママ！レッド・デーモンズ・ドラゴンでグリーン・ガジ
エットを攻撃！アブソリュート・パワーフォース！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

グリーン・ガジエット

ATK 1400

有栖

LP:4000 2400

モンスター:0

「くっ……やるね。でも、機甲部隊の最前線の効果発動！その効果
で今度は、デツキからレッド・ガジエットを特殊召喚するよ。」

レッド・ガジエット

ATK 1300

有栖

モンスター：1

「そして、レッド・ガジェットが特殊召喚に成功したことでデッキからイエロー・ガジェットを手札に加えるよ。」

有栖

手札：7

「私はターンエンド。」

「ボクのターン、ドロー！」

有栖

手札：8

Side Change

有栖 Side

有栖 Side

ううう、不味い。

一族の結束が来ないよ…

ガジェットを2体を墓地に送って、フォートレスで自爆特攻して、道を抉じ開けるしかないよね。

流石、ボクと優の子供だけあるよ。

ボクの機械族と優のシンクロ召喚の特徴を引き継いでいるデッキだね。

Side Change 優 Side

優 Side

思ったりもいい勝負をしているが、若干有栖の方が不利か。

普通なら守りを固める所だが、レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果で一掃されてしまったら元も子もない。

それに機甲部隊の最前線の効果も効果破壊には対応していない。

「結構いい勝負にはなっているな。」

「戦い方を見ても、優と有栖の子供って感じね。優のシンクロ召喚を有栖の機械族デッキに組み込んだデッキみたいだし。」

「ボクは手札のレッド・ガジェットとマシンナーズ・フォートレスを墓地へ送り、墓地からマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚。」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

有栖

手札：6

モンスター：2

「更にイエロー・ガジェットを召喚。」

イエロー・ガジェット

ATK 1200

有栖

手札：5

モンスター：3

「イエロー・ガジェットが召喚に成功した時、デッキからグリーン・ガジェットを手札に加えるよ。」

有栖

手札：6

これがマシンガジェの強みだな。

召喚すれば、効果でフォートレスのコストを確保できる。

ライオウとかが出ていない限り、とても安定しているデッキだ。

「マシナーズ・フォートレスでレッド・デーモンズ・ドラゴンへ攻撃！」

「え！？レッド・デーモンズ・ドラゴンの方が攻撃力は上だよ？マ
マ。」

「マシナーズ・フォートレスの効果を忘れたのかい？」

「あつ……」

マシナーズ・フォートレス

ATK 2500

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

有栖

LP：2400 1900

モンスター：2

「うっ……でも、これでマシンナイズ・フォートレスの効果が発動！戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。その効果でレッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊。」

有里

モンスター：0

「更にレッド・ガジェットとイエロー・ガジェットでダイレクトアタック。」

レッド・ガジェット

ATK 1300

イエロー・ガジェット

ATK 1200

「手札から速攻のかかしの効果発動、相手モンスターのダイレクトアタックして来た時、このカードを手札から捨てる事でその攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了するよ。」

「む、うまく行ったと思ったんだけどね。そう簡単にはいかないか。流石はボクと優の子供だね。ボクは、これでターンエンド。」

「私のターン、ドロー！」

有里

手札：4

「私はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚。」

ジャンク・シンクロン

ATK 1300

有里

手札：3

モンスター：1

「ジャンク・シンクロンが召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。でも、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化されるよ。墓地からチューニング・サポータを特殊召喚！」

チューニング・サポータ

DEF 300

有里

モンスター：2

チューニング・サポータを特殊召喚……まさかな。

「更にチューニング・サポーターの特殊召喚にチェインして、地獄の暴走召喚を発動！相手フィールドに表側表示でモンスターが存在し、自分フィールドに攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができるよ。その特殊召喚したモンスターと同名カードを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。」

やっぱりか……確実に3枚のハンド・アドバンテージと3枚のフィールドアドバンテージが得られるわけか。

「私はチューニング・サポーターをデッキから2体特殊召喚するよ。ママも好きなモンスターを可能な限り特殊召喚していいよ。」

「じゃあ、ボクはデッキと墓地からそれぞれレッド・ガジェットを特殊召喚するよ。」

チューニング・サポーター

ATK 100

レッド・ガジェット

ATK 1300

有里

手札：2

モンスター：4

有栖

モンスター：4

「更に地獄の暴走召喚で特殊召喚されたチューニング・サポーターの効果発動、このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができるよ。」

「（レベルを変える効果があるんだ…随分と特殊なモンスターだね。）」

「レベル2のチューニング・サポーター2体とレベル1のチューニング・サポーターにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 2 + 1 + 3 = 8

ジャンク・シンクロンが3つの輪へと姿を変えて、3体のチューニング・サポーターが1体につき1つの輪へ入る。

「8の星が集う時、全てを破壊する破壊神が飛来する。シンクロ召喚！来て、ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤー

ATK 2600

有栖

手札：2

モンスター：1

「じゃ、ジャンク・デストロイヤー!？」

「これで有栖の場は壊滅だな。」

「どう言う意味だ?」

「今にわかる。」

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動、このカードがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができるよ。」

「う、嘘?!？」

「私は、レッド・ガジェットを3枚破壊するよ!タイダル・エナジー!」

有栖

モンスター：1

「モンスターが一気に減ったな。」

「優はあの子が使っていたデッキを使っていたの？知っていたって事は。」

「いや、似ているデッキを使っていたから知っていたただけだ。」

そのデッキは、ジャンクかデブリでサポーターを蘇生し、暴走で複数展開して、ジャンクならデストロイヤーかスターダスト、デブリだったらトリシューラ。

それで自分はハンド+3、相手はボード-3か、フィールド・ハンド・墓地が-1のアドを稼ぐデッキだったから覚えている。

「更にシンクロ召喚の素材となったチューニング・サポーターの効果発動、このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分はデッキからカードを1枚ドロースるよ。私が素材にしたチューニング・サポーターの数は3体。よって、3枚のカードをドロースるよ。」

「え？ちよつと待つてよ、ジャンク・シンクロンで呼び出されたチューニング・サポーターの効果は無効化されているんじゃないの？」

「えーと…」

今一、覚えていないらしいな……

しょうがない、俺が変わりに説明してやるか。

「ジャンク・シンクロンが無効にする効果はフィールド上で発動する効果まででフィールドを離れる事で発動する効果は無効化されない。だからチューニング・サポーターのドロー効果は適用される。」
「なるほどなるほど。」

「パパ、説明ありがとう。」

「流石は優だね。もう、使うカードの効果ぐらいちゃんと把握してないと駄目だよ?」

「はい、ごめんなさい。」

「あのお2人を見てみると親子って感じですね。」

「一応、血は繋がっているから親子なんだろうな。」

「でも、姉妹にも見ええないわよね?」

「それじゃあ、改めてチューニング・サポーターの効果でデッキからカードを3枚ドロー。」

有里
手札：5

「ジャンク・デストロイヤーでイエロー・ガジェットを攻撃！デストロイ・ナツクル！」

ジャンク・デストロイヤー
ATK 2600

イエロー・ガジェット
ATK 1200

有栖
LP：1900 500
モンスター：0

「私はカード2枚伏せて、これでターンエンドだよ。」

有里
手札：3
魔法・罫：2

「ボクのターン、ドロー！」

有栖

手札：7

「ボクは永続魔法、一族の結束を発動！自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップ！ボクの墓地には機械族のみが存在する。」

有栖

手札：6

魔法・罠：1

「更に手札からグリーン・ガジェットとマシンナーズ・フォートレスを墓地へ送り、墓地からマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

有栖

手札：4

モンスター：1

「更に手札のグリーン・ガジェットとイエロー・ガジェットを墓地に送って、墓地からマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス
ATK 2500

有栖

手札：2

モンスター：2

「そして、手札のマシンナーズ・フォートレスとマシンナーズ・ギ
アフレームを墓地に送って、マシンナーズ・フォートレスを特殊召
喚！」

マシンナーズ・フォートレス
ATK 2500

有栖

手札：0

モンスター：3

「更に一族の結束の効果で攻撃力800ポイントアップ！」

マシンナーズ・フォートレス
ATK 2500 3300

「攻撃力3300が3体……」

「これがママの本気だよ？」

「ぞくっ……………」

「どうした？神楽坂。」

「顔が凄く青いようですが、何処か具合でも悪いのですか？」

「ち、違う。…………前にあいつとデュエルした時の事を思い出していた。」

「あれは、あの子の…有栖の逆鱗に触れたあなたが悪いわ。」

ああ、あの時か…………（詳しくは「第1章 学園編」の「第17話

初代デュエルキングのデツキ盗難事件！？」を参照。）

確かに3000越えが4体で自分の場には何も無い状態だったから
な…………

それに加えて、あの時の有栖を見れば、下手をすればトラウマにも
なるか。

ひょっとして、鏡の奴は、あれがトラウマにでもなったのか？

「行くよ、1体のマシンナーズ・フォートレスでジャンク・デスト
ロイヤーを攻撃！」

マシンナーズ・フォートレス
ATK 3300

ジャンク・デストロイヤー

ATK 2600

有里

LP:2600 1900

モンスター:0

「ううう……」

「2体目のマシンナーズ・フォートレスでダイレクトアタック！」

「リバーズカードオープン！永続罫、リビングゲデッドの呼び声！自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚。蘇つて、レッド・デーモンズ・ドラゴン！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

有里

モンスター:1

「そのまま、レッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！」

マシンナーズ・フォートレス
ATK 3300

レッド・デーモンズ・ドラゴン
ATK 3000

有里

LP:1900 1600

モンスター:0

魔法・罠:1

「うつ……」

「今度こそ、終わりにするよ。3体目のマシンナーズ・フォートレスでダイレクトアタック。」

「まだだよ！ママ、リバースカードオープン！永続罠、ウィキッド・リポーン！永続罠800ライフポイントを払って、自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このターン攻撃宣言をする事ができない。もう1度お願い、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン
ATK 3000

有里

LP：1600 800

モンスター：1

「しつこいよ。マシンナーズ・フォートレスでレッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 3300

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

有里

LP：800 500

モンスター：0

魔法・罠：0

「ボクはこれでターンエンドだよ。」

「す」……」

「あの3体の攻撃を凌ぎ切るなんて……」

「凄いと言っか…流石と言っか……」

「私のターン、ドロー！」

有里

手札：4

「！…私は魔法カード、死者蘇生を発動！墓地に存在するモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚！私は自分の墓地からレッド・デーモンズ・ドラゴンを特殊召喚！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

有里

手札：3

モンスター：1

娘えええええつつ！！！！

もうやめてやれ、レッド・デーモンズ・ドラゴンがもう過労死寸前だ。

「お気に入りなのかい？そのカード。」

「うん…このカードはパパが誕生日に初めてくれたカードの1枚で私がデュエルを始めるきっかけにもなったカードだから……」

「なるべく墓地には置きたくない訳だね。」

「やっぱりか……」

「優しいパパなんだな、優。」

「正式には俺ではないけどな。」

「パパと慕われてる時点であんたは立派なあの子のパパよ。」

「そういうものなのかな。」

恐らくは未来の俺が本当のあの子の父親なんだけどな。

あの子を見ていてわかるが本当に良い子で優しい子に育てられたんだろう。未来の俺と有栖の手によって…

「私はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！その効果で墓地からアンノウン・シンクロンを守備表示で特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン

ATK 1300

アンノウン・シンクロン

DEF 0

有里

手札：2

モンスター：3

「チューナーを特殊召喚？」

「優、チューナーとチューナーではシンクロ召喚は出来ない筈だよな？」

「ああ、基本的には……だが、例外はある。」

「例外？」

「（チューナーを出したから新しくシンクロ召喚をと思ったけど違った……？）」

「ママ！これが私の全力だよ、レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル3のジャンク・シンクロンとレベル1のアンノウン・シンクロンの2体のチューナーモンスターをダブルチューニング！」

「な……」

「……やっぱりあれを出すのか。」

8 + 3 + 1 = 12

ジャンク・シンクロンとアンノウン・シンクロンが輪へと変わるが、その輪は普段のシンクロ召喚の時の輪とは異なり、灼熱の炎を思わせるような炎の輪へと姿を変え、

レッド・デーモンズ・ドラゴンがその輪へと入っていく。

「魔龍と邪神。その姿を一つに！業火の中からその姿を見せて！シンクロ召喚、燃え盛って！スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK 3500

有里

モンスター：1

やっぱり出したか……

それは良いけど……あのシンクロ口上、完全に親父である未来の俺

に影響されたな。

俺のシンクロ口上と諸に被ってるよ。魔龍と邪神とか……

と言つよりも8の星が集う時とか言っている時点で気づくべきだった。

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果発動！自分の墓地に存在するチューナーモンスターの数×500ポイントアップ。私の墓地には、ジャンク・シンクロンが2体とアンノウン・シンクロン……よって、1500ポイントアップするよ！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK 3500 5000

「こ、攻撃力5000!?!」

「行くよ、ママ！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンでマシンナーズ・フォートレスを攻撃！バーニング・ソウル!!」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK 5000

マシンナーズ・フォートレス
ATK 3300

有栖

LP:500

- 1200

WIN:有里

「やったあああ！！勝った！！」

「うーん、ボクの負けか。流石はボクと優の娘だね。」

本当に良い勝負ではあった。

まさか、逆転勝ちするとはな……

「パパ、私勝ったよ！見てくれた？」

「あ、ああ……よく頑張ったな。」

有里が寄って来たため、とりあえず。その頭を優しく撫でる。

嬉しかったのか、とても嬉しそうな表情を向ける。

「でも、有栖。その子はどうするのよ？」

「面倒を見るつもりだよ。未来と言う言葉が付くけど、ボクと優の子供なんだからね。ねえ、優？」

「これは責任重大ですねえ、天空さん。」

「男ならば、責任を取らなければなりませんなあ？」

「神楽坂、悪乗りは止める。」

もうこれは面倒を見るしかなさそうだな。

昼間とはかく、寝床は一応、母親である有栖がいるオベリスク・ブルー女子寮になるんだろうな。

「……………何でお前はその子を連れて、ここに来た？」

しかし、その考えは本当に甘かったと昼間の自分に言ってやりたい。その日の夕食が終了した後、俺の部屋へ有栖が有里を連れてやって来た。

手には、何やら荷物を持ちながら……………

「この子が「パパとママと一緒に居たい」って言うから、ボクも今日からこの部屋へ住む事になったから。」

「いや、ちょっと待て。そんな事がアカデミア側に知られたら……………」

「大丈夫、鮎川先生にはここに来る前に話したら快くOKしてくれ

て、「末永くお幸せに」って言って、送り出してくれたよ。」

ちよっと待て、何処の嫁入りだ。

「大丈夫だよ、お風呂だけは女子寮に戻って入るから。」

「ああ、そうかい……」

「パパ、大丈夫？元氣ないの？」

色々突っ込む気力とか色々失せてしまっただけ半ば投槍になった俺に有里が近づいて来る。

俺の事が心配なのか、心配そうな表情を見せる。

「ああ、俺なら大丈夫だよ。」

一応、娘である以上。心配は書けるわけにはいかない。

「じゃあ、優。これからもよろしくお願いします。」

もう勝手にしてくれ。

そんなこんなで未来からやって来た俺と有栖の子供の登場が引き金で俺しか住んでいなかった3人部屋に一気に3人が住むと言う事態になってしまふ。

これが有栖のご家族に知られたら…

手を出してないのに子供がいたなんてことになれば……

と言う事で今回はお気に入り100件登録記念の番外編です。

優「と言うのが見てみると既に150件超えているよな……何気に」

こ（有里）「こんな駄作に登録して下さった皆様、本当にありがとうございます（ペコリ）」

言おうとしたのに言われた（涙目）

有栖「有里はこれからこの駄作者のアシスタントとして登場するか
らよろしくね。もし、嫌だと言ったらどうなるかわかってるよね
？」（黒笑）

優ちゃん、有栖ちゃんが怖いです。

優「諦める、それで次回は？」

次回からはセブンスターズ編に入ります。アニメで言うところの第2ク
ール突入でアニメだったらOPとEDも変化する感じですよ。

第22話 七星門との戦いの幕開け

ノース校との交流試合が終わり、万丈目基サンダーは嫌々ながらもオシリス・レッドの所屬となる。

それからしばし、平穏な日が続くが、それはあまり続かないだろう。何故なら、ここからが今年最大の難所とも言える戦いが始まるのだから……

「十代君、万丈目君。それから三沢君に明日香さん、天空君。ちょっと校長室へ行って欲しいのじゃ。」

ある日の午前中の講義が終了し、教室にいた生徒達が昼食をとろうと席を離れていった時、

俺、十代、サンダー、大地、明日香は大徳寺教諭に呼び止められる。

このメンバーが校長室という事はいよいよか…

「何で呼ばれたのさ……」

「さあな、それは呼び出した鮫島校長に聞くしかないだろう。」

俺達は、校長室への道歩いて行く。

十代達は何故呼ばれたのかを理解していない。

やがて、校長室の前まで来ると反対側からやって来た、カイザーとクロノスと鉢合わせになる。

「そうそうたる顔ぶれなノーネ、あなた達も校長に呼ばれたのですか？」

大方この二人も同じく呼ばれたのだろうな。

「テイラミスふウーミ。これは間違いさがしでスーノ？二人だけ仲間外れが……」

「あ？」

「……黙るノーネ、暴力反対なノーネ。」

「……………」

少し度のかけた声を上げ、指の関節を軽く数回慣らすとクロノスは即座に黙り込む。

そんな些細なやり取りが多数あった後に俺達は校長室へ入って行く。

その部屋の奥に置かれたデスクの前でこの部屋の主でもある鮫島校長が待っていた。

「三幻魔のカード？」

「そうです。この島に封印されている古より伝わる3枚のカード。」

「あれ？この学園ってそんなに昔からあったのか？」

「五月蠅い。黙って聞け。」

声を上げる十代をサンダーが咎める。

「そもそもこの学園はそのカードが封印された場所の上に建っているのです。」

『ええええつつ！！？』

鮫島校長の言葉に十代達は驚きを隠せないようだ。

カイザーも声は上げていないが、驚いたような表情を見せる。

「この学園の地下深くに三幻魔のカードは眠っています。」

鮫島校長は話を進め始める。

「島の伝説によると、そのカードが地上に放たれる時、世界は魔に包まれ、混沌が全てを覆い、人々に巢食う闇が解放され……やがて、世界は破滅し、無へと帰す。……それほど危険なカードだと伝えられております。」

「……………」

「破滅。」

「……………」

「なんか良く分かんないけど、凄そうなカードだな。」

「黙っているノーネ！」

十代らしいと言えば、らしいかも知れないが…本当に緊張感の欠片もない奴だ。

「そのカードの封印を解こうと、挑戦して来た者達が現われたのです。」

「一体…誰が？」

「七星門…セブンスターズと呼ばれる7人のデュエリスト達です。全く謎に包まれた7人ですが、そのメンバーが既にこの島に来ているとの事です…」

「何ですって？」

「でも、どうやって封印を解こうと……………」

「三幻魔のカードはこの学園の地下の遺跡に封印され、七星門という7つの巨大な石柱がそのカードを守っています。その7つの石柱は7つの鍵によって開かれる。これがその7つの鍵です。」

鮫島校長は俺達の前に何かが入った箱を出す。

『……………』

「じゃあ、セブンスターズはこの鍵を奪いに…」

「そこであなた達はこの鍵を守って頂きたい。」

「守ると言っても、一体どうやって?」

「勿論、デュエルです。」

「デュエル!?!」

ここまで来ると本当にデュエル脳としか言いようがない。

流石はデュエルアカデミアと言った所か。

「七星門の鍵を奪うには、デュエルによって勝たなければならない。これも古よりこの島に伝わる約束事……だからこそ、学園内でも屈指のデュエリストでもあるあなた方に集まって貰ったのです。」

鮫島校長は俺達を見回しながら告げる。

「一部だけ数合わせに呼んだ者もいますが……………」

「あなた達の事でスーノ。」

「ふん…」

「…それはあんだらる？お河童似非教諭。」

少々ムカついて来たから軽く古傷を抉ってやる事にした。

「な、何ですート！？ドロップアウトの癖に生意気なノーネ。」

「…だったら、その言葉そっくり返してやる。入学試験では教師の癖にたかが、受験生相手に本気のデッキを使って負けた挙句に「14500ポイントのオーバーキル」を喰らったのはどこの実技最高責任者だ？」

俺は「」の部分を強調して喋る。

「……………」

「それに俺達がいなければ、あんたは今頃、首が吹っ飛んでいた筈なんだけどな…余計な事をしたかな…」

「……………」

クロノスは俺の言葉で完全に沈黙する。

古傷を抉りに抉った後に校長の咳き込む声が出たのでそこまでにしてやる事にした。

クロノスの言葉で拗ねていた十代を見てみると、機嫌が直ったらしく、満面の笑みでこっちを見ていた。

こちらも軽く頷き、アイコンタクトで返す。

「この7つの鍵を持つデュエリストに彼らは挑んで来ます。あなた方にセブンスターズと戦う覚悟を持って頂けるならどうか、この鍵を受け取って欲しい。」

そう言うと鮫島校長は閉じられていた箱を開く。

その中にはそれぞれ形の異なる鍵が7つ入っていた。

「……………」

他の面々は鍵を受け取るのを躊躇っているような仕草をする。

「へ…面白そうじゃなか。やってやるぜ。」

と十代がいち早く鍵を受け取る。

それから間もなく俺も鍵を受け取った。

「ふっ……………」

その次にカイザーも鍵を受け取った。

大地、明日香、サンダー、クロノスの順番に受け取り、その後、解散となる。

「天空君。君は残って欲しいのだが…。」

そして、校長室は俺と鮫島校長以外は全員退出し、俺と鮫島校長の2人だけとなった。

しかし、鮫島校長が俺個人に話とは一体なんだ？

「鮫島校長。私に何か？」

「君のいた世界では、私達の世界は二次元…言わば空想上の世界だったのだね？」

「ええ……そうですが…」

何となく、予想はついた。

恐らくは結末の事を知りたいのだろうと俺は読む。

「君が知る限りではセブンスターズの戦いは…」

「はい。このアカデミア島を舞台にセブンスターズとの鍵を巡る戦いは確かに起こります。鮫島校長が選んだメンバーも殆ど同じです。」

「では、君が持つはずの鍵は誰が持っていたのかね？」

俺が持つはずの鍵……

本来ならば俺ではない人物が持っている。

しかし、この世界では俺と言う不規則な要因が介入したことでそのポジションが変わってしまった。
イレギュラー

「本来ならば私の持つ鍵は、大徳寺教諭が持っている筈でした。」

「なるほど……そして、もう一つ。やはり、七星門の扉は……」

鮫島校長は途中で口籠ってしまふ。

恐らく、最悪の事を考えているのだろう。

「……言いたくはありませんが……最終的には七星門の扉は開いて
しまいます。……セブンスターズの七人との戦いが集結した後に
何処かのブルーと何処かの黒い制服を着た馬鹿が原因で……」

「どつという意味かね？」

「いえ……こつちの話です。それに私と言う不規則イレギュラーな要因が入った
事で本来とは違つかもしれません。」

「違つとは……？」

「……セブンスターズの黒幕の正体です。」

「君が知っているセブンスターズの黒幕とは……」

しかし、これを鮫島校長に言っているのいいのだろうか？

だが、それからどのような結末が迎えるか分からない。

案外、俺が言っても余り変化はない気がしないでもない……

「……………影丸理事長です。」

「な……………」

流石の鮫島校長も驚きを隠せないか。

確かに彼の気持ちも分からない訳でもない。だが、実際に見知った人間が事件を裏で糸を引いていた黒幕だったなんて結構あるからな。

「信じられないかもしれませんが、私が知っているセブンスターズとの戦いの黒幕は彼です。」

「しかし、何故……………」

「若さ……………らしいです。」

「若さ？」

「ええ……………彼は若い人間達が羨ましかつたらしく、三幻魔の力を使って若さを取り戻したい……………と私が知っている結末ではそう話していました。」

「なるほど……………」

「……………ご用件は他にありますか？」

「いや、態々すまない。」

「……………いえ、私なんかでよろしいのであれば、出来る事であればご協力は惜しまないつもりです。」

俺は鮫島校長にそう告げると、校長室を後にした。

「そういう訳でその1人に選ばれてしまったわけだ。」

「へえ〜。」

その日の講義が終了した放課後、俺の所に有栖と鏡がやって来て、何で呼ばれたのが気になったらしい。

「凄いね。優。」

「でも、俺は鮫島校長の言っていた、その三幻魔ってカードが気になるんだよな。どんなカードなんだろうな。」

「三と着くから、案外、三幻神に匹敵する能力を持っているんじゃないのか？」

「か、神のカードに匹敵する能力!？」

「そんなのが相手だったらかなりヤバイと思うよ!？」

鏡と有栖は本当と思っているのか恐ろしい物を見たような顔をする。

「ただ、実際の三幻魔はあまりぱっとしない効果なんだよな。」

「起動効果の優先権ルール裁定変更後のウリアと来たら……ご愁傷様としかない。」

原作効果の魔法・罫の耐性があるのだと本当に強いと言っるのは分かる。

「本気にするなよ…試で言っただけだ。」

「冗談も程ほどにしてよ……」

「そうじゃないにしても、そんなに嚴重に封印されているってことはかなり凄いカードなんだろうな。」

そんな雑談じみた会話を暫く交わした後に俺達はそれぞれの寮へ戻る。

「……………」

寮の食事が済んだ後、俺は部屋で一人考えていた。

これからの流れの事に関して……

このまま、原作通りの流れで行けば、今晚には十代の元へ襲撃がある筈……

まあ、十代なら負ける心配はないだろう。

とりあえず、忠告だけはして置くか……………

俺はベッドから降り、隣の部屋にいる十代達の部屋を訪れる。

部屋の扉が開き、俺の対応に出て来たのは翔だった。

「優君、どうかしたの？」

「翔、十代は？」

俺が十代の事を尋ねると翔は視線を部屋のベッドの方へ移す。

「アニキだったらもう寝ちゃったよ。何か訳の分かんない事を言つてて、起こそうか？」

「いや、起こす程の用事でもないから構わない。邪魔して悪かったな。」

「大丈夫だよ。じゃあ、また明日ね。お休み。」

「ああ、お休み。」

翔と軽く挨拶を交わすと俺は部屋へと戻った。

「！」

部屋へ戻ると机の上に置きっ放しだったPDAの呼び出し音が鳴っ

ていたのに気付く。

急いでPDAを手に取り、開いて見てみるとその相手は有栖である。

こんな時間に一体何の用事だ？

「有栖？一体、こんな時間に一体何の用事だ？」

『……………』

「有栖……………？」

『フッフ……………』

「!？」

聞こえたのは連絡してきたPDAの持ち主である筈の有栖の声ではなく、別の声だった。

PDA越しから聞こえてきた声は、女性の声であるのは分かった。

「誰だ？お前は」

『そうね……………セブンスターズと言えば、分かるかしら？』

「何？」

『あなたの可愛いガールフレンドは預かっているわ。』

「!」

この一言で分かった。

有栖はセブンスターの面子に襲われて捕まってしまったのだと……

「……………要求はなんだ？」

『返して欲しかったら。閉鎖された特待生のブルー寮の地下デュエル場へ一人で来なさい。間違えても仲間なんて呼んだり、連れて来たらあなたの可愛いガールフレンドが死んじゃうかもしれないわよ？』

相手の女の言葉はそれを最後に途絶えてしまう。

……………行くしかないようだな。

有栖が狙われたのは俺が七星門の鍵を持っている一人だからと言う理由だろう。

だったら、有栖は俺のせいで巻き込まれた……………という事になる。

俺はデッキとディスクを鞆に入れ、それを持ってレッド寮から飛び出して行く。

行く宛はもちろん、呼び出し場所にもなっており、嘗て入った事で退学騒動にも発展した特待生のブルー寮だ。

「ここか……」

俺は指定された通り、特待生のブルー寮へと入って行く。

そして、以前と同じ道を通って行く。

奥へ……更に奥へと進んで行った。

「またここに来ることになるとは……」

ここは嘗て、明日香と有栖を人質に取ったタイタンがデュエルを挑んで来た場所でもある。

さっきの女はここを呼び出し場所を選んだ。

「フフフフフ……よく来たわね。」

「誰だ……」

突如、発生した闇の霧の中から一人の人間が姿を現した。

恐らく、あれが先ほどの連絡の主なのであろう。

よく見ると、その服装はデュエル・アカデミアの女子オベリスク・ブルーの制服だった。

「私の名前は、虹之咲にじのみさ永久とわ…分かりやすく言えば、セブンスターズの一人。」

「……………」

この女…普通じゃない。

女の身体からどす黒いオーラのようなものが普通に滲み出ている。

この女とのデュエルは真正正銘、闇のデュエルになるだろう……

「有栖は何処だ？」

「フフフフフ……………そんなに怖い顔しなくてもちゃんというわよ。」

女…虹之咲はパチンと指を鳴らすと少し離れた所に闇の霧で出来た檻のような物が現われ、有栖はその中にいた。

「有栖！」

「優……！」

俺は視線を有栖が囚われていた檻から有栖をさらった張本人へと視線を向ける。

「…有栖を解放しろ。彼女はセブンスターズとの戦いに何の関係もない人間の筈だ。」

「違うわね。天空優。あの子はあなたを誘き出すための最高の餌でもあるのよ。そして、あなたの最期を見届けてくれる唯一の人でもあるわ。」

「俺の最期だと……？」

「そう…あなたは私との闇のデュエルに負け、七星門の鍵を奪われて、その身を闇へと飲み込まれて行くのよ。良かったわね。可愛いガールフレンドがあなたの最期を見届けてくれるなんて、本当に幸せだと思わない？」

「勝手な事ばかり言うな！！！！」

突如、有栖が女を睨みつけるように見ながら叫び声をあげる。

「！！」

「優はあなたなんかには負けないよ！優、ボクはキミが勝つと信じているからね。」

有栖は俺を揺るがない視線を向けて来る。まるで俺を信じきっているかのよう……

ならば、俺もその期待に答えなければならぬか。

「だったら、目の前で信じているボーイフレンドが叩きのめされて敗北する姿をその目に焼き付けると良いわ。」

「！！！！」

「安心しなさい。彼が逝ったらあなたも同じ所へ送ってあげるわ。永遠の闇の世界にねえ、アツハツハツハツハツハツハツハ！！！」
この女、相当な下種だろうな……

見ている、本当に胸糞悪くなつて来る。

「有栖。必ずお前を助け出す。だから少し我慢してほしい。」

「……うん。」

「ちっ……目の前で魅せつけてくれちゃって……気に入らないわね。」

「……お前が言いたい事はそれだけか？」

「何ですって？」

「有栖を巻き込んで俺に喧嘩を吹つかるとどうなるか教えてやる。」

「「デュエル！！」」

優

LP：4000

虹之咲

LP：4000

「私のターン。ドロ！」

虹之咲

手札：6

「モンスターをセット。」

虹之咲

手札：5

モンスター：1

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

虹之咲

手札：4

魔法・罫：1

「俺のターン、ドロ！」

優

手札：6

「俺は巨大ネズミを攻撃表示で召喚。」

巨大ネズミ

ATK 1400

優

手札：5

モンスター：1

少々、気になるが……残しておいても上級モンスターへの布石になるだけか。

倒しておくしかない。

「巨大ネズミで伏せモンスターを攻撃！」

巨大ネズミ

ATK 1400

伏せモンスター

キラー・トマト

キラー・トマト

DEF 1100

虹之咲

モンスター：0

キラリー・トマト……闇属性のリクルーターか。

セオリー通りならば、同名モンスターを特殊召喚して来る筈：

「キラリー・トマトが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスターを特殊召喚するわ。私はDTデス・サブマリン（Darkchuriner）を特殊召喚するわ。」

Darkchuriner
DTデス・サブマリン（TFオリジナル）

効果モンスター

レベル9 闇属性 機械族・Darkchuriner ATK 0 DE
F 300

効果：自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。

「DTデス・サブマリン」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

このカードをシンクロ素材とする場合、Darkシンクロモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

Darkchuriner
DTデス・サブマリン

ATK 0

虹之咲

モンスター：1

「な……」

ダークチューナーだと……？

まさか……奴のデッキは……ダークシンクロに特化されたデッキか？

「フフフフ……分かったようね。私のデッキが……」

「……っカードを1枚伏せて、ターンエンド。」

優

手札：4

魔法・罨：1

「私のターン、ドロー！」

虹之咲

手札：5

「私は手札からダーク・グレファアを通常召喚。」

ダーク・グレファア

ATK 1700

虹之咲

手札：4

モンスター：2

ダーク・グレファアー…手札の闇属性を切って、デッキからも闇属性を落とすカード。

狙いは墓地に闇属性モンスターを溜める事か？

「ダーク・グレファアーの効果発動、1ターンに1度、手札の闇属性モンスターを捨てる事でデッキから闇属性モンスターを墓地へ送るわ。私は手札からレベル・ステイラーを墓地へ送る事でデッキからダーク・クリエイターを墓地へ送るわ。」

どういうつもりだ？ダーク・クリエイターは蘇生制限を満たさなければ蘇生も帰還もできない。

一体、何を狙ってる……それとも墓地から回収するつもりか？

虹之咲

手札：3

「フフフフ…デュエル中だけど、あなたに質問よ。」

「？」

質問だと……何を企んでいる？

俺を動揺させるつもりだとでも言うのか…

「質問の内容はとっても簡単。あなたから見て、今の時点で私の墓地にいる闇属性モンスターは何体でしょう？」

墓地の闇属性モンスターの数？

戦闘で破壊されたキラー・トマト。さっきのダーク・グレファアの効果発動のコストになったレベル・ステイラー。そして、効果で墓地へ落とされたダーク・クリエーター…3体だ。

！……墓地に闇属性モンスターが3体……

「…3体……まさか……」

「ふふふ、そのまさかよ。現れなさい！ダーク・アームド・ドラゴン！」

ダーク・アームド・ドラゴン

ATK 2800

虹之咲

モンスター：3

手札：2

「このカードは通常召喚できないけど。墓地に闇属性モンスターが3体の場合のみ手札から特殊召喚が可能よ。」

「……………」

この女………いったい何者だ？

アカデミアの制服を着ていて、セブンスターズを名乗る。

更にTFオリジナルとも言える、ダークチューナー……それにレベル・ステイラー、ダーク・アームド・ドラゴンを初めとしたダーク・モンスターまで持っている。

どれもまだこの世界では発売されていないカードの筈……………

考えられる答えがあるとすれば、たった一つ……………この女は俺転生者と同じである可能性が高い。

「まだよ。まだ私のターンは続いているわ。レベル4のダーク・グレファアーにレベル9のDTダークチューナーデス・サブマリンをダークチューニング
！！」

4 - 9 || - 5

デス・サブマリンが9つの星に姿を変え、ダーク・グレファアーの周りを周回し、その星は全てダーク・グレファアーの体内へ入り込んでいく。

「闇の星が重なる時、世は闇へと包まれる。闇が支配する魔の世界へ！！ダークシンクロ、現れなさい！氷結のフィッツジェラルド！」

氷結のフィッツジェラルド（ダークシンクロ版）

ダークシンクロモンスター

レベル - 5 水属性 悪魔族 ATK 2500 DEF 2500

シンクロ素材：チューナー以外のモンスター1体・ダークチューナー

効果：このカードはシンクロ素材となるチューナー以外のレベルからダークチューナーのレベルを引き、その数値が - 5 に等しい場合のみシンクロ召喚することができる。

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫カードを発動する事ができない。

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時に自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、このターン「氷結のフィッツジェラルド」を攻撃したモンスターをバトルフェイズ終了時に全て破壊する。

氷結のフィッツジェラルド

ATK 2500

虹之咲

モンスター：2

「な、何？そのモンスター……優のシンクロモンスターと何か違う

の？」

「ダークシンクロはチューナー以外のモンスターのレベルからダークチューナーのレベルをした数字と同じレベルのダークシンクロモンスターをシンクロ召喚できるわ。」

有栖の疑問に対して、女が答える。

ダークシンクロ版のダークシンクロモンスターはどれも処理が面倒なカードばかりと来た。

「更に魔法カード、苦渋の選択。自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せ、相手はそこから1枚を選択。相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードを墓地へ捨てるわ。私が選ぶのはこの5枚よ。」

そう言つて、虹之咲が見せて来たのは闇の誘惑、ダーク・ホルス・ドラゴン、ファントム・オブ・カオス、D・D・R、闇の公爵ベリアルの5枚だ。

消去法で行くと闇の誘惑、D・D・R、ファントム・オブ・カオスは除外だ。これ以上ドロージャ展開させる訳にはいかない。ここは……

「俺は、ダーク・ホルス・ドラゴンを選択。」

「OK、じゃあ残りの4枚は墓地へ送るわ。」

だが、この選択も正しいとは言えない……

「更に魔法カード、トレード・インを発動。手札のレベル8のモンスターを捨てて、デッキからカードを2枚ドロー。私はダーク・ホルス・ドラゴンを捨ててデッキから2枚ドローするわ。」

最上級を手札で腐らせようと考えてはいたが、それも裏目に出たか。

この状況は非常に拙い……墓地が肥やされ続けている。

「私は、ダーク・アームド・ドラゴンの効果発動、墓地の闇属性を除外する事でフィールド上のカードを1枚破壊するわ。私は墓地のキラーク・トマトを除外して、その伏せカードを破壊するわ。」

「……リバーズカードオープン！永続罠、デモンズ・チエーン！フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択。選択したモンスターは攻撃する事ができず、効果は無効化される。俺はダーク・アームド・ドラゴンを選択！よって、その効果は不発だ。」

このターンは凌げるが、それも何処まで持つか分からない。

「ふん……まあ、良いわ。バトル！氷結のフィッツジェラルドで巨大ネズミを攻撃！！」

氷結のフィッツジェラルド

ATK 2500

巨大ネズミ

ATK 1400

優

LP：4000

2900

「ぬ…………ぐう…………」

ちっ…今の痛みと衝撃は今までデュエルで受けた衝撃とは桁が違う。

これが闇のデュエルの痛みか……

「優っ！！」

「フフフフフ…痛いでしょう？それが本当に闇のデュエルの痛みよ。」

「……………巨大ネズミの効果発動、デッキから攻撃力1500以下の地属性モンスターを特殊召喚する！俺は2体目の巨大ネズミを特殊召喚する！更にそれにチェインして、自分のフィールドのモンスターが戦闘で破壊されて、墓地に送られたことで手札からこのモンスターを特殊召喚する！極星獣タングニョースト！」

極星獣タングニョースト

DEF 1100

巨大ネズミ

ATK 1400

優

手札：3

モンスター：2

「私はカードを1枚伏せ、ターンエンドよ。」

虹之咲

手札：1

魔法・罨：1

このデュエル……絶対に負ける訳には行かない。

七星門の鍵がかかっている事もあるが、俺が負けてしまったら、俺だけでなく有栖までもが闇に飲まれてしまう。

それだけは絶対にさせない。

経過がどうであれ、有栖を巻き込んでしまった責任は取らなければならぬ。

「俺のターンッ!」

今回の最強カード

優「今回の最強カードはダーク・アームド・ドラゴン。」

ダーク・アームド・ドラゴン

効果モンスター

レベル7 闇属性 ドラゴン族 ATK 2800 DEF 1000

効果：このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する闇属性モンスターが3体の場合のみ、このカードを特殊召喚する事ができる。

自分のメインフェイズ時に自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

主な収録パック：「PHANTOM DARKNESS」

優「闇属性・ドラゴン族の特殊召喚モンスター。」

有栖「墓地に闇属性モンスターが3体という召喚条件と墓地の闇属性モンスターを除外してフィールド上のカードを破壊する起動効果を持っているよ。」

優「一見、出しにくそうに見えるかもしれないが、墓地のモンスターを調整できるような構築になれば、簡単に特殊召喚できる。その簡易な召喚条件でありながら、莫大なアドバンテージを稼げる強力なカードであり、闇属性関連のデッキでは切り札にもなる。」

有栖「闇属性だから闇の誘惑にも対応しているから無駄がないね。見た目はアームド・ドラゴン Lv7がダークモンスター化した姿だね。」

優「レアリティと効果はオリジナルとは全く別物だ。余談だが、このカードはダムドと略されることがあるが、この英単語は訳すと「地獄行きを宣告された」「酷い」「忌々しい」等とこのカードを使用された側の人の嘆きを表しているとも言えるから恐ろしい偶然だ。」

第22話 七星門との戦いの幕開け（後書き）

間が開いてしまいました。今回から第2章「セブンスターズ編」となります。

有里「パパとママは大丈夫だよね？」

大丈夫だよ……多分。

有里「パパ！あの変なおばさんをやっつけて、ママを助けて！私は何もできないけど、応援は出来るから。パパ！頑張つて、皆さんもパパを応援して下さい！（ペコリ）」

第23話 有栖を救え！闇を撃ち抜け、極神皇ロキ（前書き）

前回からのデュエル状況

優

LP：2900

手札：3

モンスター：2

魔法・罫：1（表側1（デモンズ・チェーン））

巨大ネズミ

ATK 1400

極星獣タングニョースト

DEF 1100

虹之咲

LP：4000

手札：1

モンスター：2

魔法・罫：1（伏せ1）

氷結のフィッツジェラルド

ATK 2500

ダーク・アームド・ドラゴン（デモンズ・チェーンで効果無効化及び攻撃不可）

A
T
K

2
8
0
0

第23話 有栖を救え！闇を撃ち抜け、極神皇口キ

「俺のターンッ！！」

優

手札：4

どうするか…氷結のフィッツジェラルドは戦闘で破壊され墓地に送られた時に自分のフィールドにモンスターが存在しない場合、守備表示で蘇生される。

そして、エンドフェイズに攻撃したモンスターを破壊する効果が内蔵されてる。

先に攻撃するか、そうすればフィッツジェラルドは蘇生しない……

だが、ダーク・アームド・ドラゴンを残して相手ターンを迎えさせるわけにはいかない。

今はデモンズ・チェーンでどうにか場を繋いでいるが、それを破られたら終わりだ。

俺の場には巨大ネズミとタングニョースト…タングニョーストの効果でグルファクシを特殊召喚し、ブラック・ローズ・ドラゴンをシークロ召喚して、一気に場を空にするか……

だが、それもその場凌ぎでしかない。

奴の墓地にあるDTデス・サブマリンは自分の場にモンスターがない場合、墓地から特殊召喚できる効果を持つ。

その効果を使われて、もう1度ダークシンクロ召喚をされたら対抗手段がなくなる。

ちっ……これが苦渋の選択って奴か。

「……………」

今の俺の手札は4枚。

今ドロートしたのは、マジック・プランター…せめて、レスキュー・キャットが来てくれれば、状況は引っくり返せたが、そう物事は簡単にはいかないか…

仕方ない。危険な綱渡りみたいで余り使いたくはないがドロートしてから考えるか。

「魔法カード、マジック・プランターを発動。自分フィールド上に表側表示で存在する永续罫カード1枚を墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロートする。俺はデモンズ・チェーンを墓地へ送り2枚ドロート！」

「あらあら、折角ダーク・アームド・ドラゴンの効果と攻撃を封じたのに無駄に発動したようね。」

「…デッキからカードを2枚ドロート。」

優

手札：5

魔法・罫：0

「！…更に魔法カード、強欲な壺を発動。デッキから2枚ドロースる。」

優

手札：6

「！…（この手札なら何とかなるか。）俺は魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札からモンスター1体を墓地へ送り、手札またはデッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する。俺は手札のゾンビ・キャリアを墓地へ送り、デッキからチューナーモンスター、グローアップ・バルブを特殊召喚！」

グローアップ・バルブ

ATK 100

優

手札：4

モンスター：3

「レベル4、巨大ネズミにレベル1、グローアップ・バルブをチューニング。」

4 + 1 = 5

グローアップ・バルブと巨大ネズミは天へと舞い上がり、グローアップ・バルブは1つの輪へと変わり、巨大ネズミと交じり合う。

「5つの星々が揃う時、偽善の光を滅する使者が全てを破壊する。シンクロ召喚。全てを殲滅せよ、A・O・J カタストル！」

A・O・J カタストル
ATK 2200

優

モンスター：2

「更に極星獣タングニョーストを守備表示から攻撃表示に変更。」

極星獣タングニョースト
DEF 1100 ATK 800

「そして、極星獣タングニョーストの効果が発動、このカードが守備表示から攻撃表示へ表示変更がされた時、デッキからこのカード以外の極星獣と名のついたモンスターを1体を表側守備表示で特殊

召喚する。俺は極星獣タンギリスニを特殊召喚！」

極星獣タンギリスニ

DEF 800

優

モンスター：4

「更に手札からチューナーモンスター、極星天ヴァナデイスを召喚！」

極星天ヴァナデイス

ATK 1200

優

手札：3

モンスター：5

「極星天ヴァナデイスは極星天チューナーだが、このカードは極星と名のついたチューナーとして代用出来る。しかし、その代わり、チューナー以外の素材は全て極星と名のつくモンスターでなければならぬ。レベル3、極星獣タンギリスニとレベル3、極星獣タンギリスニにレベル4、極星天ヴァナデイスをチューニング！」

3 + 3 + 4 || 10

ヴァナデイスが手に持っている鎌を四振りすると、周囲に四つの輪が現れる。

その四つの輪にタンゲリスとタンゲニョーストが吸い込まれて行くように入っていく。

「10の星々が揃う時、星界より気まぐれなる神が舞い降りる。その知恵と共に全てを射抜け！シンクロ召喚！出でよ、星界の三極神の1体、極神皇ロキ！」

極神皇ロキ

ATK 3300

優

モンスター：2

「A・O・J カタストルで氷結のフィッツジェラルドを攻撃。」

「ちょっと待ってよ、優！そんな事したら…」

有栖の言いたい事は分かる。

カタストルの攻撃力はフィッツジェラルドに比べると300ポイント劣る。

負けると言う意味で言っているんだろう…

「大丈夫だ。心配するな。」

A・O・J カタストル

ATK 2200

氷結のフィッツジェラルド

ATK 2500

カタストルとフィッツジェラルドが戦闘を行う。

本来ならば攻撃力の低いカタストルが破壊される。

しかし、破壊されたのはフィッツジェラルドの方だ。

「え？何で？」

「あなた……いったい、何をしたと言うの……？」

虹之咲も有栖も目の前で何が起こったのかわかり切っていない様子だ……

それもそうか、攻撃力では劣る筈のカタストルが破壊されずに場に残り、攻撃力が上の筈氷結のフィッツジェラルドが破壊されている訳だからな……

「そして、A・O・J カタストルの効果が発動した。ただそれだけだ。」

「効果……？」

「このモンスターは闇属性以外のモンスターと戦闘を行った場合、ダメージ計算を行わずにそのモンスターを破壊する。破壊された氷結のフィッツジエラルドの属性は水属性。よって効果が発動。氷結のフィッツジエラルドは破壊された。」

虹之咲

モンスター：1

「氷結のフィッツジエラルドが蘇生できるのは戦闘で破壊された場合のみ。だったら戦闘破壊以外の方法で処理するだけだ。」

「くっ……」

「更に極神皇ロキでダーク・アームド・ドラゴンを攻撃、撃ち抜け。ヴァニティバレット！」

極神皇ロキ

ATK 3300

ダーク・アームド・ドラゴン

ATK 2800

虹之咲

LP：4000 3500

モンスター：0

「っ……」

戦闘ダメージは与えたが、同じ条件ならそれ相応の衝撃と痛みが襲う筈だが……

「ふん。この程度の衝撃、蚊に刺されたみたいで痒い位ね。」

なるほど……あの程度のダメージでは微動だにしないという事が……

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

優

手札：2

魔法・罫：1

「私のターン！ドロー！」

虹之咲

手札：3

「墓地のDT^{ダーク・チューナー}デス・サブマリンの効果発動。自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このモンスターを墓地から特殊召喚するわ。でも、この効果はデュエル中1度しか使えないわ。」

ダイク・チューナー

DTデス・サブマリン

ATK 0

虹之咲

モンスター：1

「……………」

「レベル9のモンスターを無条件で特殊召喚！？そんなのあり?!」

有栖……………」

機械をレベル8以上に切るだけで何度も蘇生できる2500の大型モンスターを複数特殊召喚して来るお前が言うな……………って、あのカードを渡したのは俺か。

後、ちよつと違つけどその台詞は止める。

「フフフフフ……………これが闇と黄泉の力の成せる業よ。更にリバーカードオープン！永続罫、リミット・リバーズ！このカードは攻撃力1000以下のモンスターを墓地から特殊召喚するわ。私は墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚。」

レベル・ステイラー

ATK 600

虹之咲

モンスター：2

「覚悟はいいかしら？私はレベル1、レベル・ステイラーにレベル9のDT^{ダーク・チューナー}デス・サブマリンをダークチューニング！！」

1 - 9 || - 8

デス・サブマリンが9つの星に姿を変え、レベル・ステイラーの周りを周回し、その星は全てレベル・ステイラーの体内へ入り込んでいく。

そして、レベル・ステイラーの星を飲み込むと8つの黒い星へと変わって行く。

「深き闇夜の底から百の紅き瞳が開く時、無限の闇が世を蹂躪する！ダーク・シンクロ！！現れなさい、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン（ダークシンクロ版）

ダークシンクロモンスター

レベル - 8 闇属性 ドラゴン族 ATK 3000 DEF 2500

シンクロ素材：チューナー以外のモンスター1体 - ダークチューナー効果：このカードはシンクロ素材とするチューナー以外のモンスター1体のレベルから

ダークチューナーのレベルを引き、その数値が - 8 に等しい場合の

み、シンクロ召喚する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、自分の墓地の闇属性モンスターのモンスター効果を得る。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚選択して手札に加える。

「（やっぱり、こいつか…奴の墓地にはインフェルニティがない…となれば、闇属性の効果を得る方の奴か。）」

「ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの効果、自分の墓地の闇属性モンスターの効果を得るわ。私は墓地のダーク・クリエイターの効果を得るわ。1ターンに1度、自分の墓地の闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、自分の墓地の闇属性モンスター1体を特殊召喚するわ。私は墓地のダーク・クリエイターを除外して、ダーク・ホルス・ドラゴンを特殊召喚！」

ダーク・ホルス・ドラゴン

ATK 3000

虹之咲

モンスター：2

「更に私はファントム・オブ・カオスを通常召喚。」

ファントム・オブ・カオス

ATK 0

虹之咲

手札：1

モンスター：3

「攻撃力0！？そんなモンスターで何を……」

「墓地のモンスター効果を使うつもりか……」

「フフフフフ、その通り。このモンスターは1ターンに1度。自分の墓地の効果モンスター1体を選択し、ゲームから除外する事ができるわ。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名カードとなり、選択したモンスターと同じ攻撃力とモンスター効果を得るわ。私は、墓地のダーク・アームド・ドラゴンを除外して、その名とモンスター効果と攻撃力を得るわ。」

ファントム・オブ・カオス ダーク・アームド・ドラゴン（フ
アントム・オブ・カオス）

ATK 0 ATK 2800

黒い靄だけの姿をしていたファントム・オブ・カオスはその姿をダーク・アームド・ドラゴンへと姿を変えた。

「そして、ダーク・アームド・ドラゴンとなったファントム・オブ・カオスの効果を発動するわ。墓地の自分の墓地に存在する闇属性モ

ンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊するわ。私は墓地のダーク・グレファアダーク・チューナー、DTデス・サブマリン、レベル・ステイラーを除外して、あなたの場のカードを全て破壊するわ。」

「なっ……………」

「消し飛びなさい!!ダーク・ジェノサイド・カッター!」

「優っ!!!」

「ただでやられてたまるか!リバースカードオープン!!!罠発動!デストラクト・ポーション!自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、発動。選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のLPを回復。俺は極神皇口キを破壊して、この攻撃力分:3300ポイントを俺のLPに上乗せする!」

677

優

LP:2900

6200

モンスター:1

魔法・罠:0

「ふん…………でも、A・O・J カタストルも破壊して貰うわよ。」

「……………」

優

モンスター：0

「バトルよ。ダーク・ホルス・ドラゴンでダイレクトアタック！ダイクネス・ザ・メガフレイルムっっ！！」

ダーク・ホルス・ドラゴン

ATK 3000

優

LP：6200 3200

「ぐわあああああああああっっっっ！！！！！！」

「優っっ！！！！」

くっ………これほどの痛みは………

さっきの痛みとは比べ物にならない位大きい。

こんなの立て続けに喰らったら………

これが闇の力………

「フフフフフフ、アッハッハッハッハッハ！！最高の悲鳴ね。けど、まだ私のモンスターは残っているわよ？ワンハンドレッド・ア

イ・ドラゴンでダイレクトアタック！インフィニティ・サイト・ス
トリーム！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン

ATK 3000

優

LP:3200 200

「ぐわあああああああああああああつっ！！！！ぐああ
ああ……」

「嫌あああつっ！！！！もう……もう止めてええええつっ！！こ
れ以上、もう優を傷つけないでっ！！！！」

「フフフフフ、良い悲鳴ね。これで終わり……と言いたい所だけ
ど。ファントム・オブ・カオスは幻……このカードの攻撃ではダメー
ジを与えられないわ。でも、痛みだけでも与えてあげるわ。ダーク・
アームド・ドラゴンとなったファントム・オブ・カオスでダイレク
トアタック！ダーク・アームド・ヴァニッシャー！」

ダーク・アームド・ドラゴン（ファントム・オブ・カオス）

ATK 2800

優

LP:200 200

「がはあっ！！！」

「優……！！嫌だ……もう見ていられないよ……」

「フフフフフ、最初の元気は何処へ行ったのかしらねえ？あなたの大切なボーイフレンドをズタズタにされた感想はどう？どんな気持ち？私も知りたいわねえ。アツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハ！！！」

「……」

勝手なことを抜かしやがって……

何の権利があつて、俺達の命を弄ぶつもりだ。

この女だけは絶対に許さない。

俺だけを狙うならまだしも、この鍵の戦いとは何の関係もない有栖を巻き込んだ。

こいつだけは生かして置かない。何が何でも闇の底へと叩き落とすてやる！！！！

「まだだっ！！！」

「優……」

「へえ、まだ立ち上がる気力があるのね。落ち零れのオシリス・レツドから選ばれただけの事はあると言った所かしらね。差し詰め、ゴキブリ並の精神力と言った所かしら？」

「何とでも……言いやがれ。……俺は……まだ、諦めないっ！……例え……この身がズタズタに……されようとも……っ！！」

身がよろけそうになるが、俺は何とか立ち直り、足を踏み締める。

「くっ……LPと……デッ……キが残っている限り、俺は諦めない……てめえのLPを0にし……てめえを闇に葬って有栖を助け出すっ！！」

「しびといわね。次のターンで葬ってあげるわ。カードを1枚伏せて、ターンエンド。このエンドフェイズにファントム・オブ・カオスは元の姿へと戻るわ。（さあ、攻撃して来なさい。この伏せカードはヘイト・バスター。次のターンにファントム・オブ・カオスを攻撃を仕掛けて来る筈だからその時に発動して、その効果ダメージで終わりよ。）」

ダーク・アームド・ドラゴン（ファントム・オブ・カオス）
ファントム・オブ・カオス

ATK 2800 ATK 0

虹之咲

手札：0

魔法・罨：1

「……俺の……ターン。」

優

手札：3

これ以上は俺の身体が持たない……

今にも倒れそうだ……

このターンで絶対奴を……倒す！！

「魔法カード、…貪欲な壺を発動…墓地から5体を戻す…俺は極星獣タンゲニヨースト、A・O・J カタストル、極星天ヴァナデイス、巨大ネズミ、極星獣タンゲリスニをデッキに戻し…シャッフルし、その後…2枚ドロ！」

優

手札：4

「俺は……チューナーモンスター…極星天ヴァルキュリア……を召喚。」

極星天ヴァルキュリア

ATK 400

優

手札：3
モンスター：1

「極星天ヴァルキュリアの効果：召喚に成功した時：相手フィールド上にモンスターが存在し……自分フィールド上にこのカード以外のカードが存在しない時、手札の……極星と名のついたモンスター2体をゲームから除外して……自分フィールド上にエインヘリアル・トークン2体を……守備表示で特殊召喚する。俺は手札から極星獣グルフアクシと極星獣タングリスニを除外して……エインヘリアル・トークン2体を特殊召喚。」

エインヘリアル・トークン
DEF 1000

優

手札：1
モンスター：3

「レベル4、エインヘリアル・トークン2体にレベル2、極星天ヴァルキュリアをチューニング……」

4 + 4 + 2 || 10

ヴァルキュリアが手に持っている剣を二振りすると、周囲に2つの輪が現れる。

その2つの輪へ2体のエインヘリアル・トークンが吸い込まれて行くように入っていく。

「10の星々が揃う時…星界の神々を束ねし王よ。今こそ…その全知全能なる力を示せ！シンクロ召喚！出でよ……星界の三極神を束ねる最高神！極神聖帝オーデイン！！」

極神聖帝オーデイン

ATK 4000

優

モンスター：1

「なっ……攻撃力4000!？」

「更に魔法カード、死者蘇生を発動……墓地からモンスター1体を特殊召喚、俺は墓地から極神皇口キを特殊召喚。蘇れ…極神皇口キ！」

極神皇口キ

ATK 3300

優

手札：0

モンスター：2

「バトル…極神聖帝オーデインでダーク・ホルス・ドラゴンを攻撃
……貫け。ヘブンス・ジャツジメント！」

極神聖帝オーデイン

ATK 4000

ダーク・ホルス・ドラゴン

ATK 3000

虹之咲

LP : 3500 2500

「くうううう……こ、この程度。」

「続けて…極神皇ロキでファントム・オブ・カオスを攻撃……撃ち
抜け。ヴァニティバレット！」

極神皇ロキ

ATK 3300

ファントム・オブ・カオス

ATK 0

「フフフフフ、かかったわね。リバースカードオープン！畏発

動、ヘイト・バスター！自分フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができるわ。相手の攻撃モンスター1体と攻撃対象となった自分モンスター1体を破壊するわ。残念だったわね！これで終わりよ。」

「優っ！……！」

「……それは……どうかな？」

「何ですって……？」

「極神皇ロキの効果発動：1ターンに1度：自分のバトルフェイズ中に相手が魔法・罫カードを発動した時：その発動を無効にし破壊する事ができる。……その効果でヘイト・バスターを無効にして破壊する！」

「なっ……そんな……そんな事が……」

虹之咲

魔法・罫：0

「闇の落ちるのは……てめえの方だ！！虹之咲っっ！！ヴァニテイバレットオオオオッ！」

「きゃああああああっっっっ！！……！！……！！」

極神皇ロキ

ATK 3300

ファントム・オブ・カオス

ATK 0

虹之咲

LP: 2500 - 800

WIN: 優

「私が負けた……」

「優っ!!!」

勝負の決着がついたのか有栖が囚われていた闇の霧で出来た檻は消滅したようだ。

消滅すると、有栖は俺の方へ駆けてくる。

「嫌……あの中へ戻るの嫌あ……」

見ると虹之咲の身体は徐々に闇へと飲み込まれて行った。

敗者は闇へと飲み込まれる……これが闇のゲームのルールだったな。

その身を闇へと飲み込まれたのは俺ではなく……お前の方だったと言いつ訳か。

「有栖……大丈夫か……?」

俺は虹之咲の身体が闇に飲みこまれたのを確認すると有栖の安否を確認した。

見た所、何処も怪我はなくて良かった……本当に……

「それよりも優……ボクのせいでこんなにボロボロになって……」
「めんね……優。」

「気にするなよ……お前が無事で……本当に良かった……」

不味い……もう立っている事すら限界だ……

瞼が……重い。

「くっ……」

「優！しっかりして、優！死なないで！！」

有栖の声が遠退いて行く……

もう駄目だ……限界だ。

やがて、俺の意識は闇の中へと沈んで行った。

今回の最強カード

有栖「今回の最強カードは……」

有里「極神皇ロキだよ。」

極神皇ロキ

シンクロモンスター

| | | | | | | | |
|-----|----|-----|-------|-----|------|-----|---|
| レベル | 10 | 閻属性 | 魔法使い族 | ATK | 3300 | DEF | 3 |
| 000 | | | | | | | |

シンクロ素材：「極星霊」と名のついたチューナー+チューナー以

外のモンスター2体以上

効果：1ターンに1度、自分のバトルフェイズ中に相手が魔法・罫カードを発動した時、その発動を無効にし破壊する事ができる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する

「極星霊」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する罫カード1枚を選択して手札に加える事ができる。

主な収録パック：「STORM OF RAGNAROK」

有栖「レベル10のシンクロモンスターで星界の三極神と呼ばれるモンスターの1体だよ。」

有里「自分のバトルフェイズ中に相手の魔法・罫の発動を無効にする効果と墓地の極星霊と名のついたチューナーを除外して墓地から特殊召喚する効果と自身の効果で特殊召喚された時に墓地の罫カードを回収できる効果があるよ。」

有栖「一度だけでも相手の攻撃反応型の罫全般を無効にできるのは強力だね。」

有里「唯一の欠点としてあげるのはツールやオーディンに比べて、専用チューナーが上級モンスターと言う点だけど、パパみたいにそれを補えれば簡単に召喚できるよ。」

有栖「攻撃名は、ヴァニティバレットだよ。」

第23話 有栖を救え！闇を撃ち抜け、極神皇ロキ（後書き）

やっとこさ。セブンスターズ1人目戦終了。

有里「随分かったね。」

有栖「と言うよりも、何で優をあそこまでスタボロにするのかな？」

（黒笑）

あゝ……えーとそれは。

有里「そうだよな？いくら演出上でもパパをあそこまでボロボロするのはちよつとね……」（黒笑）

……え？ちよ、有里ちゃんまで！？

有栖「覚悟はいいかな？」（背後にマシンナーズ・フォートレス×3）

有里「ママ、こつちも準備できたよ。」（同じく背後にスカーレット・ノヴァ・ドラゴン、マシンナーズ・フォートレス×3、各シンクロン系統シンクロモンスター）

ちよ、ちよつと待つて（ry

第24話 イレギュラー（前書き）

やっぱり、デュエルがない話になるとどうしても短くなってしまっ
な。

どうにかしたい……でも、どうにもならないのが現状だ。

第24話 イレギュラー

「……………ここは……………」

気が付くと俺はベッドの上で眠っていた。

部屋には清潔感を漂わせると同時に薬品の匂いもする。

窓の方はカーテンが開いており、そこから太陽の日差しが差し込んでいた。

時間帯で言う所では朝か、その辺りか？

「天空君、気が付いたのね。」

声がる方を向くとそこにはオベリスク・ブルー女子寮の寮長でもあり、体育・保険の担当教諭でもあり、本校の保険医でもある鮎川教諭の姿があった。

「鮎川教諭？……………自分はいっただい？」

「神楽坂君達があなただを運んで来てくれたのよ。」

鏡達が……………？何故だ。あのデュエルの事を知っているのは俺と有栖だけの筈。

有栖が連絡してくれたのだろうか。

後で礼を言って置かないと駄目か。

「ここまで眠っていたと考えると危険と見ても良いようね……闇のデュエルは。」

「!？」

何故、鮎川教諭が闇のデュエルの事を？

「鮎川教諭…何故、あなたが闇のデュエルの事を？」

「もう回復したけど、十代君と明日香さんもあなたと同じようにセブンスターズから闇のデュエルを受けていたのよ。2人ともそのデュエルで傷を負ったけど、2人の怪我は浅かったからすぐに回復して普通の生活に戻っているわ。」

「……」

十代と明日香が闇のデュエルを受けた？

相手は恐らく、ダークネスか……ちょっと待て、そうすると2対1で戦ったという事か？

明日香はともかく、十代がいる以上、そこまで苦戦する相手でもない筈だ。

鮎川教諭は2人はもう回復したと言っていたが、俺はあの女とのデュエルからいったいどれほどの期間が過ぎているんだ？

「どつかしたの？」

「鮎川教諭、一つお尋ねしても良いですか？」

「良いわよ、何かしら？」

「自分は一体、どれほどの日数を眠っていたんですか？」

「……14日間……丸2週間よ。その間、あなたはまるで死んでいるみたいに眠り続けていたわ。」

「14日!？」

随分と長い期間眠っていたと思ったが、まさか2週間もの間眠っていたみたいだな……

後、鮎川教諭。仮にも保険医である以上、死んだなどと言う言葉は軽々しく口にしない方がよろしいのでは？

「……」

「それにあなたはまだ病み上がりなんだから無理はしない方が良いわ。」

「ええ、そのつもりです。」

「それとベッドにいるその子にも後でお礼を言った方が良いわよ？」

「?」

見ると、俺の眠っていたベッドの傍らで有栖が腕を枕代わりにして眠っていた。

なんで有栖がここに……？

「あなたが眠っている間、夜も寝ないで、授業にも出席しないでずっとあなたの看病をしていたのよ？」「ボクのせいで優がこうなったんだからボクが看病します。」「って言うて聞かなかったのよ？」

「そうでしたか……」

寧ろ、謝らなければならないのは俺の方だ。

俺が七星門の鍵を守っているせいで、俺の親しい人間でもある有栖はセブンスターズに狙われてしまった。

でも、有栖が無事で本当に良かった。

グウ~~~~……

と俺の腹部から緊張感が抜けきるような情けない音が聞こえた。

今気が付いたが、異常な位に空腹感が身体から訴えられている。

「……………」

「あらあら、良いお返事ね。でも、仕方ないわ。10日間以上も眠っていて何も食べてないんだから。」

「それよりも鮎川教諭、自分はどうすれば良いんですか？」

「検査とかがあるからそれまでもう少し安静にしているもらえるかしら。」

「分かりました。」

それから鮎川教諭は用事があると言いだして保健室を出て行く。

保健室には俺と眠ったままの有栖の2人だけである。

「……………」

俺はそつと、有栖の頭を撫でる。

彼女のトレードマークでもある赤みのかかった桃色の髪を撫でる。

その髪はとてもサラツとしていて触っていても悪い気がしない。

「……………」

俺は有栖を……………彼女の事をどう思っているのだろうか。

「気になる異性であるか？」と聞かれたらそれはYesと答えられる。

彼女は俺を好きだと言ってくれている。

それは恥ずかしいが、嬉しく思う。

「……………」

だが、俺の「秘密」を知っても、彼女がその気持ちのまままでいくれるのかと思うとその一歩が踏み出せない俺がいる。

元々、俺はこの世界の住人ではない。寧ろ、不本意があつたとは言え…元「死人」だ。

俺はこの世界からしたら異端…イレギュラー不規則な要因とも言える存在だ。

俺の存在は「この世界」を純粋な池に例えるならば、十代達がその池に住む魚達だが、俺は外部から人為的にその純粋な池に放流された外来魚…言わば、「異物」とも言えるだろう。

そんな異物を受け入れる場所が何処にあるだろうか……答えはNOだ。

異端は必ず排除される。それが自然の摂理でもあり、常識とも言える。

俺は今あるこの状況を壊したくない。

そんな恐怖から周りには自分の事は何一つ言いだせないでいる。

この世界で出来た居場所やかけがえのない友人に自分なんかに好意を向けてくれる人を失いたくない。

臆病者と後ろ指を指されてもそれは否定できない。

それが事実である事は絶対に覆らない。

「……………ん……………」

俺の意識が思考の底へ沈んでる間、有栖の髪をずっと撫でている事に気づかずにはいた。

彼女の発する僅かばかりの声に反応して、俺の意識は覚醒し、パッと手を放すが、既に遅かっただろう。

「……………ん……………優……………」

「起きたか。」

まだ半分寝ぼけているのか。

ボーっとしているような表情を見せる有栖。

やがて、表情は普段見慣れているような表情へ戻って行き。

「優っ！！」

と凄いい勢いで抱き着かれる。

まだ病み上がりな事もあり、彼女の勢いを受け止め切れずにベッドへ沈む。

傍から見れば、俺は有栖に押し倒されているような構図に見えるだろう。

「おい、有……！」

引きはがそうとしたが、有栖の様子が変であることに気付く。

「……っ……良かった……良かったよ……優が起きてくれて……っ……
っ……優がもう2度と目覚めなかつたらと思うと……ボク……ボク……
……」

見ると有栖が泣いていた。彼女の赤い瞳から幾つもの滴が流れ落ちていた。

いつも無駄に元気がある彼女が泣くのも珍しいと思った。

泣いている女の子を慰める方法なんて俺には分からないからどうしようと思った。

とりあえず、優しく頭を撫でる。

「優………？」

「有栖、泣くなよ。」

「優……ごめんなさい……ごめんなさい……ボクのせいで……優がこんなに傷ついて……」

どうやら責任を感じているようである。

だが、俺からしてみたら、彼女の方には、全く非はない。

寧ろ、非があるのは俺の方だ。

「お前が謝る必要はない……寧ろ、謝るのは俺の方だ。」

「……え？なんで……優は何も悪くは……」

「いや、俺のせいで鍵の戦いには無関係のお前を巻き込んでしまった……怖い思いをさせて、本当に悪かった。」

俺は有栖に深く頭を下げる。

「謝らないでよお……優……」

「俺は生きている……お前はそれで良いだろう。」

「でも……あんな危険なデュエル……ボクはもう見たくないよ……」

「大丈夫だ、セブンスターズの戦いが終われば恐らくはそんな事は起こらないだろ」

グウ~~~~……

と俺の言葉を遮るように緊張感の欠片もない音がまた部屋に響く。

頼むから自重してくれ、俺の腹。

「……………」

「……あははは、優のお腹が鳴ったね。」

「笑うな……………」

「ごめんごめん。ボクが悪かったから機嫌直してよ。」

やっと、いつもの有栖に戻ったか。

正直に言つと、暗い顔や泣いている顔は彼女には似合わない。

普段みたいにコロコロと表情が変わる表裏もない表情をしている彼女の方が彼女らしい。

「優、お腹空いたよね？」

「ああ、腹ペコだ…丸々2週間も寝っ放しで飲まず食わずだったからな。」

「じゃあ、ちょっと待っててね。」

すると有栖は保健室に備え付けてある冷蔵庫の中を開ける。

と言つよりも鮎川教諭の許可なしに開けていいのか？

「はい、お待たせ。」

有栖が冷蔵庫から持って来たのはティラミスとレモンの蜂蜜漬けだ。

両方とも作るのは結構手間がかかる記憶があっただが、有栖の手作りか？

「どうしたんだ？それ……」

「何かね。え〜と、何日か前にボクの部屋の冷蔵庫に入っていたんだ。誰が入れてくれたのか分からなかったけど、折角だから優が起きたら一緒に食べようと思って保健室の冷蔵庫に入れて置いたんだ。」

「鮎川教諭には許可を取ったのか？」

「うん、話したら大丈夫だって言ってくれたよ。」

「それなら良いが……」

「優、あーんして。」

有栖はティラミスをフォークで切り分けるとその一切れをフォークで刺し、それを俺の口元へと持って来る。

こう言うのは見ていると微笑ましく思うが、されると本当に恥ずか

しい。

「いや…俺一人でも食べられるから……」

「駄目だよ。優は病人なんだから。ほら、あーんして。」

有栖は何が何でも自分が食べさせるつもりらしい……

これ以上、抵抗しても埒が明かないのは目に見えている。

俺の空腹も限界に近い為、止むを得ず。有栖に成すがままにされるように口を開ける。

ティラミスは俺の口に入るとフォークから離れ、俺の口に入って行く。

口の中には甘過ぎない甘みと程よい苦みが口中に広がって行った。

お世辞なしでとても美味しい。

「美味しい？」

「ああ……」

その後、ティラミスとレモンの蜂蜜漬けを有栖の「あーん」で全部、俺の胃の中に納まった。

レモンの蜂蜜漬けだが、こちらも美味しかった。どちらも作ってく

れた人に感謝したい限りだ。

それから有栖と雑談じみた話をしていた。

時計を見るともう直ぐ第一講義が始まる頃だ。

「講義に出たらどうだ？俺はもう大丈夫だ。」

「でも、ボクは優が心配だよ。」

「心配してくれるのは嬉しいけど。鮎川教諭から聞いたんだが、有栖。俺の看病に付きっ切りで講義に出席していないって本当か？」

「だって、優が心配で授業の内容が頭に入らないよ。」

「講義の内容が入る入らないは兎も角、お前はオベリスク・ブルーなんだから必要以上に欠席すると進級できなくなるぞ？」

図星だったのか。有栖は「うっ」とばつが悪そうな表情をする。

「優だってそうじゃなかったっけ？」

「オシリス・レッドの進級には出席日数はいらない。だから十代はしよっちゅう講義をサボっているからな。」

「良いな、鮎川先生に頼んでボクもオシリス・レッドに入れて貰おうかな……そうすれば、優と一緒に居られる時間も増えるし、一石二鳥だね。」

「アカデミア全体が首を縦に振る筈がないだろう。オシリス・レッ

ドに女子寮が出来れば話は別かも知れないが……」

後半、妙な事を口走った気がするが、スルーしておこう。

「とりあえず、講義には出る。これ以上欠席して、教諭達に必要な上に目をつけられても俺は知らないぞ。」

「優がそこまで言うなら、授業に出るよ。」

有栖は何かとぶつくさ言いながら出て行く。

彼女と入れ違いのように鮎川教諭が入って来た。

「あの子、何かぶつぶつ言っていたけど。何か言ったの？」

「ええ、必要以上に欠席すると進級できないと釘を刺しただけです。それに礼もちゃんと言いましたよ。彼女には随分迷惑をかけてしまったようですし……」

それから昼までの時間帯をかけて、精密検査が行われる。

夕方にはその検査の結果を聞かされた。

検査の結果は日常の生活を送る分には問題はないとの事だ。

病み上がりの身であるため、体調が安定するまで運動は厳禁と言われる、講義の方も体育とデュエル実技の講義は欠席との事である。

デュエル実技の講義に関しては休む必要はないと思うが、鮎川教諭

が言うにはソリッド・ヴィジョンから発生する衝撃は身体に十分な負担をかけてしまうらしい。

「では、鮎川教諭。自分は寮に戻っても大丈夫ですか？」

「ええ。でも、さっきも言ったけど。運動全般と実技関係の授業は休むようにしてね。私の方からアカデミアには申請を出しておくわ。」

「すみません……」

「良いのよ。あなたは生徒なんだから。」

それから俺は保健室を後にし、アカデミア公舎からレッド寮へ足を運んで行く。

正直しばらく動いていなかった事もあってか、身体が妙に重い。

病み上がりと言う事もあるのだろうか。

レッド寮に戻ると、寮の前では十代や大地を初めとした。普段の一緒にいるメンバーが集まっていて俺を出迎えてくれた。

「優！もう身体は大丈夫なのか？」

「ああ、出歩く分にはな……」

「優君、心配したんだよ！？」

「無事で何よりなんだな。」

「すげえ怪我だったんだぞ!？」

「…鏡。お前にも迷惑をかけたみたいで悪かったな。」

「謝んなよ。俺は気にしちやいないんだからよ。でも、お前の意識が戻って良かったぜ。」

「しかし、お前ともあるう奴が丸2週間も眠っていたとなれば、随分とやられた様だな。」

「まあな……十代、サンダー、大地、明日香。俺が眠っている間にセブンスターズとの戦いはどうなってる？」

「あなた……いきなり、それ？」

「それは俺も分かっている。鮎川教諭から聞いた話では十代と明日香も闇のデュエルを受けたらしいな。」

「ああ……」

それから俺は十代達から情報を受け取る事にした。

話を聞くと俺が眠っている間に現れたセブンスターズは4人。

まずはダークネスと名乗る2人組の仮面の男

2人はタッグデュエルと言う形で十代と明日香へ闇のデュエルで挑

んで来たらしい。

十代と明日香にデュエルを強要させるために奴らは翔、隼人、ジュンコ、ももえを人質にとったとのことだ。

戦いはどうにか十代と明日香が勝って事無き事を得た。

その闇のデュエルの後に分かった事だが、その2人組の正体は以前、特待生のブルー寮で行方不明となっていた生徒、明日香の兄、天上院吹雪とその友人、藤原優介。

吹雪さんは兎も角、藤原までもがセブンスターズになっていたとは

……

原作ではダークネスと同化していた筈…これも俺がと言う不規則な要因ライが介入したことが原因になっているのか……？

明日香から聞かされたが、その2人はまだ保健室でずっと眠り続けている。

……

情けない話だが、俺は同じ部屋に居た筈なのに全く気付かなかった

3人目は、カミューラと名乗る女。

その正体はヴァンパイア一族の生き残りであったという事実。

その戦いでクロノスとカイザーが敗れて、鍵は2つ奪われる事になってしまったが、連敗は十代の手によって阻止された。

4人目はタニアと名乗る女。

アカデミアの郊外にコロシウムを建設していたらしい。

建設するさいにクロノスや多くのアカデミアの生徒達を連れ去って、作り上げたという事だ。

そのタニアには大地が挑み。辛くも勝利を収めて、七星門の鍵を守り切った。

十代達から情報を受け取った後に俺も十代達にセブンスターズの一人と名乗る。虹之咲の存在を話す。

有栖を人質に取られて、特待生のブルー寮へと呼び出されて、その地下デュエル場にて、闇のデュエルが行われ、どうにか勝利を収めた事を告げる。

「セブンスターズの奴ら。関係ない人間を人質にとってデュエルを挑んで来るなんてそんなに鍵が欲しいのかよ。」

「だけど。これでセブンスターズは優が倒したのも含めれば、7人中5人…残りは2人だ。」

「そろそろ奴らも焦り始めて居るだろう。」

「どつという事ツスか？」

「奴らが俺達から奪えた鍵は2つ。対するセブンスターズは既に7人中5人が敗北している…奴らもこれ以上の敗北は許されない筈だ。」

「だが、優。貴様はそんな身体で闇のデュエルを受けられるのか？
鮎川先生から聞いたが、ドクターストップがかかっているんだろう。
セブンスターズは待つてはくれんぞ。」

「そうなると主力の優が戦線離脱。俺達4人で残る5つの鍵を守り
切らなければならぬか。」

「……すまん。迷惑をかける。」

「悪いと思うならそんな怪我を負うな、全く……俺達は怪我人を背
負って戦わなければならぬとは……」

「優、気にするなつて、万丈目は口ではああ言ってるけど。十分分
かってるんだからさ。」

「サンダー!!!」

こんな時でもみんなは相変わらずか……

だけど……それもいつまで続くのか分からない。

俺の真実を知ったらみんなはどうなってしまうのだろうか？

きっとみんな、俺から離れて行ってしまふのだろう。

この世界で初めてできた友人、居場所。それらが全部無くなってし
まう。

十代も…翔も…大地も…鏡も…そして、有栖も……

優 Side 終了

Side Change 有栖 Side

有栖 Side

優の意識が戻ってよかった……本当に……よかった。

もし、あのまま意識が戻らなかったと思うと本当に辛かった。

もう……あんな危険なデュエルを優がもう2度としないしてほしいと思う。

優が死んでしまうと少し思ってしまっただけでも心が引き裂かれそうだったり、押し潰されそうな思いだった。

ボクのためにあんなにボロボロになってもキミは立って、ボクを助けてくれたよね。

キミはボクを守るために戦ってくれたよね……？

だから、今度はボクがキミを守るから…この身体がボロボロになっても構わない。

絶対に優を傷つけさせない。優しいキミは嫌だろうけど…ボクは心から愛しているキミが傷つく位ならボクが傷ついた方がマシだ。

「優……キミはボクが守るよ。」

第24話 イレギュラー（後書き）

優「しかし、随分と飛ばしたな。3話目で既に5人退場とは……」
有栖「しかもかなり前倒しで某人物が登場（名前だけ）してるよね。

「
考えてみた結果、彼は前倒しで出てもあんまり変化がないと踏んで
そうになりました。

有里「パパをいじめて楽しい？」（黒笑）

いや、だからこれは物語上……

有栖「仕方ないと言っ言い訳は無しだよ？」（黒笑）

優ちゃん、助けて……

優「無理だ、諦める。」

つて、そn(ry

第25話 黒蠍盗掘団と天上の機械天使（前書き）

有栖「優はボクの嫁、ボクの婿。異論は認めない。」

優「お前はいつたい何を言っているんだ。」

有栖「え？永遠の愛を誓う言葉じゃないの？」

優「（多分、何か変なのに影響されたな。）」

第25話 黒蠍盗掘団と天上の機械天使

俺の意識が回復して、幾日かが経過した。

その間に俺はレッド寮の寮生や鮫島校長を初めとした教諭陣に心配をかけてしまった事を詫びながらお礼巡りをする事となる。

クロノスの所へ行くと、「セニョール天空。あなたの意識が戻って何よりナノーネ。」と普段の彼の口から出るとは思えない言葉が出て驚いた。

更に「何かあったら、私で良ければ協力するノーネ。この学園の存亡はあなた達にかかっているノーネ」等と協力すると言っ言葉も出て来た…… いったい、俺が寝込んでいる間に何があった？

大徳寺教諭にもお礼を言わなければならないが、肝心の大徳寺教諭の姿が何処にも見当たらなかった。恐らく、セブンスターズ側に行ったという事だろう。

また俺と同じように保健室で眠っていた吹雪さんと藤原も意識を取り戻したが、出歩けるようにはなったものも両者ともに記憶を失っていて何も喋らないと言う状態が続く。

「鮫島校長の話って何だろうな。」

「恐らく、七星門の鍵に関する理由だろう。」

現在。俺、十代、大地、サンダー、明日香は校長室へ招集をかけられ、校長室へ向かう途中だ。

校長室へ入ると、そこには鮫島校長と右目を怪しい眼帯で隠した男が待っていた。

その服装は見る限り、シャーロックホームズのような格好をしている。

とうとう次の刺客が来たか……黒蠍盗掘団。

「鮫島校長。お呼びでしょうか？」

「来てくれて申し訳ないね。」

「こんにちは。少年少女の皆さん。警部の真暮まぐれです。」

「警部？」

「君達も知っての通り、七つある七星門の鍵のうち二つはセブンスターズに奪われてしまった。」

警部の自己紹介を終えると鮫島校長が口を開き喋り出す。

「そこで教員会議で話し合った結果、警部の彼に警備を依頼する事にした。」

「所で皆さんは鍵をどの様に所持していますか？」

鮫島校長が喋り終わると今度は真暮警部が口を開いて喋り出す。

さて、どうやって連中の化けの皮を剥いでやるとしようか。

それも良いが、ここは原作タイトル通りに炙り出しはサンダーに任せても大丈夫だな。

「私は、首にかけているわ。」

「俺もだ。」

「俺も同じく。」

「俺も3人と同じだ。」

明日香、サンダー、十代、大地が答える。

真暮警部が最後に俺に視線を向けてきた。

「ではあなたは？」

「俺はデッキと一緒に腰のデッキホルダーに入っている。大事なものは一か所に纏めて保管している性分なので。」

「成程、確かに大事な物は身に着けている事は一見安全に思える。」

しかし、それは同時に相手にその場所を教えている事にもなるのです。」

「それで彼の提案で鍵を補完する事になったのだよ。」

話し合いの後、各自に以下の場所に鍵を保管する事となる。

サンダーは流しの下。大地はベッドの下。明日香は自分の宝石箱の中。十代は机の引き出しの中。

隠す途中で前もって学園内へ予め、忍び込んでいた他の黒蠍のメンバー・ゴージュ、ミーネ、クリフ、チックと出くわす。

そして、俺の隠し場所だが……

「この中で……」

それは生前の世界から持って来たカードが沢山入ったダンボール箱の中に置く事にする。

「むむむむ……た、確かにこのカードの山の中からなら盗み出すのも一苦労する筈ですね。」

そこから間もなく、俺達は解散する。

俺達は各部屋に、真暮警部は宿直室へ戻って行った。

さて、俺も部屋で張り込んで来るのを待つとするか。

ガチャガチャ……

「！」

深夜、ドアノブを動かすような音がする。

来たな……俺はベッドから出て、侵入者を待っていた。

そして、カチャンとドアの鍵が開錠される音がする。

闇夜で姿は見えないが、月明かりのシルエットから小柄な男の姿が見えた。

小柄な体格から、恐らく、逃げ足のチックだろうな……

「よう。こんな夜分遅くに態々、鍵を盗みにご苦労さん。黒蠍盗掘

団。」

「なっ……」

「お前達が鍵を盗みに来ることなんて最初からお見通しだったんだよ。」

「ちっ!」

不味いと分かったのかそそくさに逃げて行ってしまっ。

名前の通り、逃げ足だけは速いか。

まあ、鍵はこれ1つ奪われなかっただけ幸いか……

「優っ!」

安心したのも束の間で今度は十代、翔、サンダーが部屋を訪れて来た。

大方鍵を盗まれたのだろうな……

「優、鍵は！？」

「騒ぐなよ。鍵はある。」

俺は山のようにカードが入ったダンボール箱の中を探り、鍵を取り出す。

「お前のは無事か。」

「やられたのか？」

「ああ、こっちは部屋の扉を壊された。」

「俺達の部屋には壁に穴が空いていたし……」

「とりあえず、大地と明日香にも連絡をして集めよう。」

狭い部屋に家具が色々入っているサンダーの部屋に俺達は集まる。

「何故、自分の部屋なんだ」と愚痴るサンダーを他所に集まったメンバーは

俺、十代、翔、隼人、大地、サンダー、明日香、有栖。

「それで何でお前まで居る？」

「何か不安だったんだ。何かあると思っただけ……」

「まあ、良いけど。大地と明日香は？」

「宝石箱ごと盗まれてしまったわ。」

「俺も盗まれてしまった。」

「無事なのは、優が持っている鍵だけか。」

「皆さん、大変な事になりましたなあ。」

サンダーの部屋へ真暮警部が変装した他の黒蠍のメンバーを連れて入って来る。

「後ろの方々は？」

「私が呼んだのです。事情聴取をしようと思っただけ……」

「それもそうね。」

「では皆さん。別室で……」

「ちょっと待った!!!全員、その場から1mmも動くなっ!」

とサンダーが声を上げる。

と言うよりもサンダー。言っている事が無茶苦茶だぞ、1μmも動くなつて……

そこから名探偵(？) 万丈目サンダーの名推理(？) かどうかは分からないが、

彼の手によつて、真暮警部基首領・ザルーグら黒蠍盗掘団の炙り出しに成功する。

その時に気付いたが、既におジャマ・グリーン、ブラックや他のローレベルモンスターカードを持っていた。

という事は万丈目兄達によるアカデミア買収問題は既に起きていたという事が……

彼らの持つ4つの鍵と俺の持つ1つの鍵をかけて、デュエルが行われるが……

「優、お前。その体で満足にデュエルが出来るのか？」

サンダーに引き止められる。

実際、普通のデュエルすら碌にできない俺の今の身体では無理だろう……

「できないだろう。だが、他の鍵は連中の手中……この鍵を持っている俺が出るしかないだろう。」

「無茶苦茶だ。そんな身体で……」

「十代の言う通りだ、ここはお」「そのデュエル、ボクがでるよ。」
「な…か、神？君！？」

俺と十代とサンダーの会話に割って入るように有栖が名乗り出て来る。

しかし、本気が…自分がでると言ったが……

「あ、有栖。あなた本気なの！？」

「明日香。ボクは本気だよ。…ボクが優に変わってデュエルをするよ。」

「止める、相手はセブンスターだ。そうならば……」

「ボクだって分かっているさっ！……！」

有栖が声を上げる。まるで怒鳴るように叫ぶ。

普段の彼女からは想像もつかなかった。

「ボクは、嫌なんだよ……もう優が…優が傷つく姿を見るのは……」

「神？君……」

「好きな人を守るためならボクは何でもするよ。たとえ、それが無謀な事でも……」

「分かった……俺の鍵をお前の託す。」

俺は有栖に俺の持つ七星門の鍵を渡し、有栖はそれを受け取ると鍵を首にかけ、首領・ザルীগと対峙する。

「（優：キミの事はボクが必ず守ってみせる。）お前の相手はボクだ！！黒蠍盗掘団。」

「元気なお嬢さんだ。言って置くが、お嬢さんが相手でも手加減はせん。では……」

「デュエル！！」

有栖

LP：4000

首領・ザルীগ

LP：4000

「私の先行！ドロー！」

首領・ザルীগ

手札：6

「私はキラー・トマトを守備表示で召喚。」

キラー・トマト

DEF 1100

首領・ザルグ

手札：5

モンスター：1

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「ボクのターン、ドロー！」

有栖

手札：6

「ボクはマシンナース・ギアフレームを召喚！」

マシンナース・ギアフレーム

ATK 1800

有栖

手札：5

モンスター：1

「マシンナーズ・ギアフレームが通常召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ」と名のついたモンスターを手札に加える！ボクはデッキからマシンナーズ・フォートレスを手札に加える！」

有栖

手札：6

「更に手札のマシンナーズ・フォートレスとイエロー・ガジェットを墓地へ送り、墓地からマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

有栖

手札：4

モンスター：2

「バトル！マシンナーズ・ギアフレームでキラー・トマトを攻撃！」

マシンナーズ・ギアフレーム

ATK 1800

キラー・トマト

DEF 1100

首領・ザルグ
モンスター：0

「ぐ…しかし、この瞬間、キラ・トマトの特殊効果発動、このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力1500以下の閻属性モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚することができる。私はキラ・トマトを特殊召喚！」

キラ・トマト
ATK 1400

首領・ザルグ
モンスター：1

「続けて、マシンナズ・フォートレスでキラ・トマトを攻撃っ
！！」

マシンナズ・フォートレス
ATK 2500

キラ・トマト
ATK 1400

首領・ザルグ
LP：4000 2900

モンスター：0

「ぐうつ……」

「お頭っ!!」

「うるたえるな、キラー・トマトの効果で今度は私自身のカード、
首領・ザルグを特殊召喚する！」

「!?!」

「だが、ここは折角なのでバトルの場には我々自身が参上する！」

首領・ザルグ

ATK 1400

首領・ザルグ

モンスター：1

「な、何だ？」

「もしかして……」

「アイツら、カードの精霊か？」

「恐らくはそうだろうな。」

出て来たか。奴らのデッキのメインカードが……

奴らは攻撃力こそ低いが効果は発動されると面倒なカードばかりだ。

「ボクは、これでターンエンド。」

「なるほど、良いモンスターを持っている。私のターンだ。ドロ―
！」

首領・ザル―グ

手札：6

「手札から魔法カード、黒蠍団召集を発動！自分フィールド上に首領・ザル―グが表側表示で存在する時に発動する事ができる。手札から「黒蠍」という名のついたモンスターカードを全て特殊召喚する事ができる。なお、この効果で特殊召喚できる同名モンスターは1体のみ。集まれ野郎共！お勤めだ！！」

「黒蠍一の力持ち、強力のゴーグ！」

「黒蠍の紅一点、茨のミーネ！」

「どんな罠でも朝飯前、罠外しのクリフ！」

「お宝頂きゃ、後はとんずら！逃げ足のチック！」

「「「「「我ら、黒蠍盗掘団っ！！」「」「」「」

黒蠍 - 強力のゴーグ
ATK 1800

黒蠍 - 棘のミーネ
ATK 1000

黒蠍 - 罨はずしのクリフ
ATK 1200

黒蠍 - 逃げ足のチツク
ATK 1000

首領・ザルグ

手札：1

モンスター：5

「くっ……（だけど、どれも攻撃力が低いモンスターばかり、ギアフレームが破壊されてもそれ程の事じゃない。ボクの場合には2500のフォートレスがいる。」

「罨発動！必殺！黒蠍コンビネーション！自分フィールド上に黒蠍団が勢ぞろいしている時に発動する事ができる。黒蠍団は罨発動タインのみ相手プレイヤーに直接攻撃をする事ができる。その場合、相手プレイヤーに与える戦闘ダメージはそれぞれ400ポイントになる。」

「なっ……」

「行くぜ！野郎共！必殺！黒蠍コンビネーション！！」

「喰らえ、茨の鞭！」

「ダブルリボルバー！」

「トラップナイフ！」

「元氣槌！」

「ごつりきハンマー！」

有栖

LP：4000 2000

「うう……………（な、何？今の痛みは……………普通のダメージに比べて、痛みが大きい。）」

「有栖のLPが一気に半分に……………」

「LPだけではない。」

「何？」

「既にお前は我々の効果も受けている。」

「え…………？」

「貴様のフィールドのモンスターはデッキの1番上に戻り。」

有栖

モンスター：1

「フィールドのカードも手札に戻り。」

有栖

手札：5

「更に相手のデッキの上から2枚を墓地へ送る。」

「くっ……」

「手札も1枚消滅する。」

有栖

手札：4

「そして、墓地から黒蠍と名のつくカードを加える。」

「私は墓地から必殺！黒蠍コンビネーション！を加える。これが俺達の必殺コンボ。黒蠍コンビネーション！」

首領・ザルグ

手札：2

「だけど、この時、お前達が戻した。マシンナーズ・フォートレスの効果も発動するよ。このカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。さあ、確認させて貰うよ。」

「おのれ……我々の効果を逆手に取るとは……」

「増援にさっき加えた、必殺！黒蠍コンビネーション！か……なら、必殺！黒蠍コンビネーション！を捨てて貰うよ。」

「ちっ……」

首領・ザルグ

手札：1

「連撃は阻止できたが、その代償は大きすぎる。」

「有栖さん、大丈夫かな……」

「こんな攻撃受けて無事でいられる訳が……」

場を見ても、フィールドとLPのアドバンテージがあり過ぎる。

手札アドバンテージはどうかになっているがそれでも厳しいだろう。

有栖の手札に機械族モンスターがなければ……彼女は負ける。

「その通り、普通の相手ならば我らのコンボで手札もフィールドもデッキもボロボロになる。私はこれでターンエンド。」

Side Change 有栖 Side

有栖 Side

ボクの手札は4枚……この中に機械族モンスターはない……

ボクは負けてしまう……

優が傷つくのが嫌だと言ってこのデュエルを受けたけど。

この痛みは辛い……優はこんな痛みを……今、ボクが受けた以上の痛みをあのデュエルで受けていたと言っただろうか。

そうだったとしても、ボクは何でこんなに弱いんだ。優を守るって約束したのに……

ボクは優を愛していると同時に優みたいない強いデュエリストになる

事を目標にして来たのに……

優の強さ……優しさ……それだけじゃない。彼の持っているモノ全てにボクは、出会った後に惹かれていた。

ボクは優を……守りたい……優だけを守りたいんだっつ……!!

【汝……力を望むか？】

!

声……誰の声なんだ？

キミは何処から……

【我、汝の心に呼びかけている。我、汝の願いに応えよう。汝、力を望むか……汝が力を望むならば、必要ありし時、我、その力を与えよ。】

力……

【汝は望んだのであろう？……力を……愛する者を守る力を……ならば受け取るが良い。……悪しきの光の力を滅する力……破滅の光の力を！！】

破滅の……光？

S i d e C h a n g e

優
S i d e

優
S i d e

有栖。一体、どうしたんだ？

ポーっとしているようだが……

「どうした！？貴様のターンだ、まさか。勝負を諦めたか？ならば、大人しく鍵を……」

「嫌だね。少しポーっとしていたくらいで勝ったと思うのは早いよ。ボクのターン、ドロー！！」

有栖

手札：5

「ボクは場にカードを1枚伏せ、手札から魔法カード、天よりの宝札！お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにデッキからカードをドローする。ボクの手札は3枚。よって、3枚ドロー。」

「私の手札は1枚。よって、5枚ドロー！」

原作効果版の天よりの宝札か。

有栖の様子が変だ……… いったい、何かあったのか？

鏡の時みたいにキレたと言う訳ではなさそうだが……

「明日香、有栖の様子が変だと思わないか。」

「あなたも？私も何か、雰囲気が変わったと言うか色々、変わった

気がする。」

やはり、俺だけではなく、明日香とかも感じているようだな。

有栖の豹変を……

有栖

手札：6

魔法・罫：1

首領・ザルグ

手札：6

「更にさっき、天よりの宝札を発動する前に伏せたりバースカードオープン。魔法カード、手札抹殺を発動！お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、デッキから捨てた枚数分、ドロウする。」

「ちっ……（この小娘、途中で様子が変わった？）」

有栖

魔法・罫：0

「ボクは手札からトライデント・ウォリアーを召喚！」

トライデント・ウォリアー
ATK 1800

有栖

手札：5

モンスター：1

トライデント・ウォリアー！？

馬鹿な、有栖のデッキは結束軸でマシンナーズとガジェットを搭載した純機械族デッキだったはず……何故だ？

「トライデント・ウォリアーの召喚に成功した時、手札のレベル3のモンスターを特殊召喚する。ボクは手札からチューナーモンスター、ヴァイロン・キューブを特殊召喚。」

ヴァイロン・キューブ
ATK 800

有栖

手札：4

モンスター：2

チューナーだと！？しかも、ヴァイロン・キューブ……

「優、あのモンスターって……」

「ああ……間違いなくチューナーだ。だとすれば、有栖は……シンク

口を使う気か？」

「レベル4のトライデント・ウォリアーにレベル3のヴァイロン・キューブをチューニング。」

「何だと?!」

ヴァイロン・キューブはトライデント・ウォリアーの頭上上がり、3つの輪へと姿を変え、トライデント・ウォリアーを覆う様に降下していく。

4 + 3 = 7

「光と光の調整者重なりし時、天より機械の鎧を纏いし、天使が舞い降りる。シンクロ召喚！降臨せよ、ヴァイロン・シグマ!!」

ヴァイロン・シグマ

ATK 1800

有栖

モンスター：1

ヴァイロン・キューブで予想は出来たがやはりヴァイロン・シグマか。

「優、有栖が今召喚したモンスターって……」

「ああ、ヴァイロンシリーズのシンクロモンスターの1体、ヴァイロン・シグマだ。」

「シンクロ召喚に使用されたヴァイロン・キューブの効果発動。このカードが光属性モンスターでシンクロ召喚に使用された時、デッキから装備魔法カード1枚を選択し、手札に加える事ができる。ボクが選択するのは魔導師の力だ。」

有栖

手札：5

「更に装備魔法カード、魔導師の力をヴァイロン・シグマに装備。攻撃力を500ポイントアップさせる。」

ヴァイロン・シグマ
ATK 1800 2300

「更に場に3枚のリバースカードを伏せる。そして、魔導師の力によって、1枚につき500ポイントアップ。」

ヴァイロン・シグマ
ATK 2300 3800

有栖

手札：1
魔法・畏：4

「こ、攻撃力3800だと!?!」

「バトル、ヴァイロン・シグマで……首領・ザルীগ！お前を殺してやる!?!」

「な……（私の攻撃力1400…奴の攻撃力3800……差し引いてもLPは500ポイント残る。）」

「更にヴァイロン・シグマの効果発動、自分フィールドにこのカード以外のモンスターが存在しない場合、このカードの攻撃宣言時にデッキから装備魔法カード1枚を選択し、このカードに装備する。ボクがデッキからこのカードに装備するのは巨大化！巨大化は自分のLPが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。よって、ヴァイロン・シグマの攻撃力は……」

ヴァイロン・シグマ
ATK 1800 3600 6100

有栖

魔法・畏：5

「攻撃力6100だとおっ!?!」

「お前達だけは……セブンスターズだけは許せないんだ！！ボクの友達を人質に取って、ボクの大事な友達や大切な人を傷つけたお前達は絶対に許さないっ！！殺してやるっ！！消し去ってやるっ！！」
有栖……

やっぱり、何か変だ。らしくない。

彼女の紅い瞳からは怒り、憎しみ……それらが普通に滲み出ている。

「ヴァイロン・シグマ！そいつに裁きの一撃を喰らわせろっ！！」

ヴァイロン・シグマ

ATK 6100

首領・ザルグ

ATK 1400

首領・ザルグ

LP:2900 - 1800

WIN:有栖

「っっ」

「有栖っ！！」

デュエルが終了すると有栖は糸が切れた人形のように倒れて行く。

俺は急いで駆け寄り有栖を抱き止める。

「有栖、有栖？しっかりしろ。」

俺は抱き止めたまま、有栖に呼びかけるが有栖は眠ったように瞼を深く閉じたままである。

だが、息はしているため、大丈夫だろう。

だけど、さっきのデュエルの最後に見せた有栖の表情は少し怖かった。

俺は有栖を抱えたまま、首領・ザルグと向き合う。

「約束通り、お前達が奪った4つの鍵は返して貰うぞ。」

「良いだろう……受け取るがいい。」

首領・ザルグは持っていた4つの鍵を俺の方へ放り投げて来る。

鍵は4つとも弧を描き、俺はそれを受け取る。

「確かに受け取った。」

「す、すまぬ……みんな。」

「……お頭……！！！！」

首領・ザルグと他の黒蠍の連中は闇に飲みこまれて消えて行った。

やはり、闇のゲームだったか……

しかし、有栖……一体、何があつたんだ？

今回の最強カード

優「今回の最強カードは、ヴァイロン・シグマ」

ヴァイロン・シグマ

レベル7 光属性 天使族 ATK 1800 DEF 1000
シンクロモンスター
シンクロ素材：光属性チューナー+チューナー以外の光属性モンスター1体以上

効果：自分フィールド上にこのカード以外のモンスターが存在しない場合、このカードの攻撃宣言時に発動する事ができる。

自分のデッキから装備魔法カード1枚を選択し、このカードに装備する。

主な収録パック：「DUEL TERMINAL -ヴァイロン降臨!-」

優「光属性のシンクロモンスターだ。シンクロ素材は光属性のチューナーとチューナー以外の光属性モンスターだ。」

有里「レベル7の割には攻撃力が低いけど、このカードが攻撃宣言するとき、このカード以外にモンスターがいなければ、デッキから装備魔法を装備できる効果を持つよ。」

優「なお、閃光の双剣・トリスやアームド・チェンジャー等、コストが必要な装備カードを装備した場合は、コストを踏み倒せるので覚えて置こう。」

第25話 黒蠍盗掘団と天上の機械天使（後書き）

セブンスターズ6人目も終了です。

優「それで今度は有栖が入れ替わりでぶっ倒れたわけか……」

有里「作者、パパとママを虐めて楽しいの？」

いや、そういう訳ではない。色々試練を乗り越えた後の幸せって最高じゃない？

優「知らん……」

後、セブンスターズ編も大詰め……かな？

優「俺をぶっ倒れさせたせいで話が簡略し過ぎて、クレームが飛んできて知らないぞ。」

第26話 謎

黒蠍盗掘団と有栖のデュエルは有栖の勝利で幕を閉じ、奪われた4つの鍵も取り戻す。

しかし、そのデュエルが終了後、有栖は気を失ってしまふ。

黒蠍盗掘団との戦いから数日が経過。

俺は現在、アカデミアの保健室にいた。

訪れた理由としては有栖の見舞いである。

肝心の有栖は保健室のベッドで眠っていて、未だに眼が覚めない状態がずっと続く。

俺が倒れていた時には有栖が見舞い（鮎川教諭曰く「看病」）に来てくれたのでその礼を兼ねてだ。

鮎川教諭の診断では俺の時よりは遥かに軽傷だからそろそろ、目が覚めても良い頃だろうとの事だ。

なお、俺の体調は、この数日で殆ど回復しきっており、今ではデュエルの実技や体育の講義にも参加している。

俺自身もここまで回復が早いとは思わなかった。俺はもっと長い日数を要するのかと思った。

それはそれで何の問題もない。

だが、早く回復できるのは嬉しい限りと思っている。

「……………」

俺は枕元に置いてあった有栖のデッキを手にとって、その中身を見た。

彼女は黒蠍盗掘団とのデュエルの途中でもっている筈のない、ヴァイロンシリーズを使用していた。

「……………!？」

中身を見てみると、デッキのカードは普段から有栖が使っている各種ガジェットとマシナーズを軸にしたデッキであり、

彼女が黒蠍盗掘団とのデュエルの途中から使用したヴァイロン関係のカードが1枚たりともなかった。

「……………」

どういう事だ？有栖は確かに黒蠍盗掘団とのデュエルでヴァイロン関連のカードを使用した。

そのカードが1枚もない…謎は益々深まって行った。

だが、仮に持っていた場合、有栖はどのような手段であれらのカードを入手したか…それが1番の謎だ。

それに明日香も言っていたが、ヴァイロンシリーズを使用した時の有栖の様子が変わった。

意識を取り戻したら、有栖に色々と聞いてみる必要がある。

「優、ちょっと良いか？」

色々考えていた俺の所へ十代が入って来た。一体、何事だろうか。

「ちょっと校長室へ集まってくれないか。吹雪さんと優介さんの事で。」

「分かった……鮎川教諭。ちょっとお願いします。」

有栖の事を鮎川教諭に任せると俺は十代と共に校長室へ向かう。

俺達が校長室へつくところには鮫島校長、吹雪さん、藤原、大地、明日香、サンダー、カイザー、クロノス。

ここまでは鍵の関係者。その他には翔、隼人、ジュンコ、ももえま

で揃っている状態だ。

「天空君、君にも集まって貰ってすまないね。」

「セニョール天空、シニョーラ神？の容態はどうなノーネ？」

「彼女はまだ眠り続けている状態です。」

「わかったノーネ……」

オベリスク・ブルー・鼻眞の教師として、心配なんだろう。

そして、全員の視線が吹雪さんと藤原へ向けられる。

「明日香、亮……僕らは思い出した。」

「全て……？」

「では、シニョール吹雪、シニョール優介。詳しく話して欲しいノーネ。」

「分かりました。」

そこから吹雪さんと藤原が口を開き喋りはじめる。

「僕や吹雪を初めとした。あの寮にいた生徒達は特別授業を受けていたんだ。」

「だが、そんなある日の事だ。」

「地下のデュエル場に呼び出された僕達は…その場で行われたテストデュエルの途中で闇の世界に取り込まれてしまった。」

「そして、僕と優介は「ダークネス」と言う存在に肉体と意識を乗っ取られてしまった。」

「僕達に取り込まれてしまった闇の世界は本当に地獄…悪夢…そうとしか言えないような世界だった。」

藤原は途中で恐怖におびえるように身体を震わせる仕草をする。

余程、恐ろしい目にあっていた…と言う訳か。

「そして、その世界でこの世のものとは思えないようなデュエルの修業を続けていた。セブンスターズのダークネスとして、十代君と明日香に敗れるまで……」

「兄さん……」

「では、誰がお前達を呼び出して、そのような世界に……」

「僕達も分からないその部分を思い出そうとしても、思い出せない。」

「だけど…僕らがあんな世界へ引きずり込まれる原因とも言える場所へ呼び出して、テストデュエルを行ったのは……」

「……大徳寺先生だった。」

「!？」

その場にいたみんなが信じられないような顔をしていた。

やはりか。

こうなるとこの世界でも7人目は大徳寺教諭か。

「大徳寺先生が……まさか……そんな。」

「本人に聞けば、真実が見えるかもしれないが肝心の大徳寺先生は行方不明……」

「正に八方塞りか。」

「……………」

校長室には重い空気が立ち込めている。

誰もが口を固く閉ざしていた。

それから鮫島校長からは「襲撃に要注意して欲しい」と告げられ、その場は解散となる。

十代は翔、隼人、大地、サンダーと共に「大徳寺先生を探しに行く」と言って、校長室の入り口で別れた。

俺も誘われたが、有栖の容態が気になるのでその誘いを断る。

保健室へ再び入室すると、眠り続けていた有栖だけの姿があって、鮎川教諭は席を外している様子だった。

俺も椅子に座って、有栖の傍にいる。

「……うう……うん……」

「！」

突然、有栖が声を上げ、彼女の顔を覗き込むと、閉じられていた瞼がゆっくりと開いた。

どうやら、意識を取り戻した様子だ。

「優………?」

「有栖、気が付いたか。」

見ると、起きたばかりで頭に血が回ってないのかボロっとしているような顔だ。

「あれ……ボクは……」

「黒蠍盗掘団の連中とのデュエルが終わった後に倒れた。覚えてないのか？」

「うん……デュエルに勝ったのは覚えているよ。凄く長い間眠っていた気がするよ。」

そう思っても仕方ないだろう。なんせ数日間は何りっぱなしだったからな。

それからしばらくして、鮎川教諭へ保健室へ戻って来ていた。

鮎川教諭は有栖の様子を見ると……

「天空君、しばらく席を外して貰えるかしら？ちょっと精密検査とかをしなければならぬから。」

彼女の事は鮎川教諭に任せて、俺は保健室を後にする。

デッキについて聞こうと思っていたが、あのような状態ではまともに答えられるかどうかも怪しいな。

それは後で聞くとして、今俺がする事は、現在行方不明になっている大徳寺教諭の行方か……

彼の行方を探すのは十代達に任せるとして、俺は大徳寺教諭の履歴を調べる事にする。

「とは言ったものも……こんな場所に置いてある訳ないか……」

俺は現在、デュエル・アカデミアの資料室に訪れていた。

ここならば、何か手がかりになるようなものがあるのではないかと踏んだが……結果は空振りに終わる。

考えても見てみれば、学園の教諭の履歴がそう簡単に分かる訳がないか……

この手は使いたくはないが、仕方ない。

俺は資料室を後にし、ある場所へと向かう。

アカデミアの資料室から俺は現在、オベリスク・ブルー男子寮に来ていた。

正直に言えば、俺だってこんな醜い場所に来たくもなかった。

だが、この問題を頼める人間がこの寮の責任者である以上仕方ないと割り切る事にした。

コンコンコン……っと俺は数回ノックする。

「空いているから入っても構わないノーネ。」

とある部屋の中から声がした。

俺は「失礼します。」と一言つげ、その部屋へ入って行く。そう、ある人物とはクロノスの事であった。

「優!？」

「天空さんもいらしたんですか？」

「アンタがこんな所に来るなんて珍しいわね。」

「……………」

部屋に入るとクロノスだけでなく、ブルーの生徒であるカイザー、ジュンコ、ももえ。更にイエローである筈の鏡までこの部屋に集まっていた。

意外なところに意外なメンバーが集まっていたな。

「シニョール天空、いったいどうしたノーネ？」

「いえ、それは兎も角、何故、鏡達がここに集まっているのかと思つて……」

「俺達でも何か出来る事がないかって、クロノス先生とカイザーを交えて話していたんだ。優達がかんばっているのに俺達だけ手を拱いて見ている訳にも行かねえだろ。」

「それはともかく、アンタは何でこんな所に来た訳？」

「実はクロノス教諭に頼みたい事があつてここに来た。」

「私に頼みたい事？一体なんなノーネ？」

「シニヨール大徳寺の履歴？何でそんなものを調べる必要があるノ
ーネ？」

クロノスは俺の言葉を聞くと驚いたような表情をする。

「大徳寺教諭はセブンスターズとの戦いの途中で突然、行方不明に
なつてしまった。」

「枕田達や神？の時みたいに人質として扱われただけじゃないのか
？」

「例えそうだったとしても、ケースが異なるだろう。有栖の時は俺、
ジュンコ達の時は十代と明日香、とそれぞれ特定の人物を指定して、
狙つて来ていた。」

「確かに考えてみて見れば、その通りだ。大徳寺先生はただの教師
である。それに鍵を持っている訳でもない。」

カイザーの言葉に俺は小さくながら頷く。

「それに例の特待生の2人の証言も合わせると今の大徳寺教諭には何かしら、裏があると読んでも良いと思う。あの人の担当はオシリス・レッドである以上特待生のブルーの2人を呼び出す理由が見つからない。普通ならば特待生寮の責任者である担当教諭が呼び出したと言ふ事ならば、辻褄が合うが……」

「確かにその点は不自然過ぎるな……」

俺だけでなく、カイザーも疑問に思っていたらしい。

「セニョール天空はどう思っているノーネ。」

「これは俺の推測の域ですが、大徳寺教諭はセブンスターズと何らかの繋がりがある……俺はそう考えています。」

「あの大徳寺先生がなあ……」

鏡は恐らく、大徳寺先生の顔を浮かべているのだろう。

俺も原作を見ていた時は、悪い事をしそうな人間には見えなかった。なので彼の気持ちも分からなくない。

「分かったノーネ、私で分かる範囲で調べてみるノーネ。」

「お手数かけます……」

「それはこっちの台詞ノーネ。こんな危険な戦いを生徒であるあなた達に任せてしまうなんて教育者として本当に情けないノーネ。」

本当に一体どういふ風の吹き回しだ？あんなに十代や俺を「ドロツ

「アウトボーイ」とか罵倒していたクロノスからこんな言葉が出るなんて明日は雨が、空から槍でも降って来るのか？

それとも季節外れの猛吹雪か台風…それとも本土各地に被害を及ぼす大地震とかはたまたこの世の終わりの予兆とも言える程の天変地異や怪奇現象でも起こってしまうのか…これは。

「……………」

急にクロノスが黙り込んでしまう。今度はどうしたんだ？

「クロノス先生、どうかしたんですか？」

「今、誰かにとても失礼なことを言われたような気がするノーネ。」

……………

口に出さなくて良かったかもしれない。そうだとしたら、何を言いつけ出すかわからないので……

「俺が頼みたい事はそれだけです。では、失礼します。」

「あなたも奴らからの襲撃には気を付けて欲しいノーネ。」

「分かりました。後、ジユンコ、ももえ。有栖の意識が戻ったから後で見舞いにも行ってやれよ。」

「有栖の意識が戻ったの!？」

「分かりましたわ。後でお見舞いに行かせて貰います。」

そして、俺はクロノス…教諭の部屋を退室するとそそくさとオベリスク・ブルー男子寮を後にする。

理由として、オシリス・レッドの俺がこんな所をうろついていたら、連中に絡まれて、無駄に時間を消費するだけだからな。

その翌日、十代達は先日引き続き大徳寺教諭の行方を捜索のため、講義を休んでおり、姿が見えない。

心配なのは分かるが、俺もどつちなのか怪しく思う。大徳寺教諭は本来ならばセブンスターの最後の1人・アムナエルだ。

本来の歴史どおりなのか、それともただのアカデミアの教師なのか。仮に後者だったとしても吹雪さんと藤原の証言がある以上何かしらと絡んでいるのは間違えないだろう。

「優、大徳寺先生どうしちゃったんだろうね。」

俺の隣では心配そうな表情を浮かべる有栖の姿がある。

「ああ。…それでお前はもう出歩いてても大丈夫なのか？」

「うん。少しの間は安静って言われたけどね。後でジュンコとももえに怒られちゃったよ。」

「本当に心配してくれる人間がいるとのは良い事だと思うぞ。」

その日の夕方：俺はクロノス教諭に呼び出されて、先日と同じ彼の部屋を訪れていた。

「優、クロノス先生に何で呼ばれていたの？」

「ちよつとな…」

俺だけ筈だが、何故か有栖も「ボクも一緒に行く」と行って聞かなかった。

病み上がりなのに無茶は控えて欲しい。

クロノス教諭の部屋へ入ると、この部屋の主であるクロノス教諭の他にカイザー、ジュンコ、ももえ、鏡もいた。

先日、俺が訪れた時と同じメンバーか…：有栖を覗いては…

「待っていたノーネ、シニョール天空。」

「って、有栖。アンタも一緒なの!？」

「何さ、ボクが一緒じゃ不味い事でもあるの?それにボクだって、キミ達と一緒に優達のサポートをするつもりだからだよ。」

「別に不味いって訳じゃないわよ。アンタは病み上がりなのになって思っただけよ。」

ジュンコは友人として、有栖の事を心配しているのだろう。

「大徳寺先生の経歴が不明!？」

第一声で鏡が驚いたように声を上げる。

外に聞こえてなければ良いが……

「そうなのーネ。」

「不明?…不明とは一体どういう事ですか?クロノス教諭。」

カイザーも彼の返答に疑問を抱いていたのか。クロノス教諭へ視線を向ける。

「昨日、シニョール天空に頼まれた通りにシニョール大徳寺の経歴を調べていたノーネ。勿論、校長も交えてなのーネ。」

「それは分かりますが、何で大徳寺先生の経歴が不明と言うのですか？」

「アカデミア内のメインコンピュターで調べたのですが、彼の……シニョール大徳寺の詳細データが全く無いノーネ。後で校長にも聞きましたーが、調べてみると何者かに消されていた後だという事が分かったノーネ。」

「……………！！！！！！……………」

俺達は誰もが驚きを隠せなかった。先手を打たれてしまったか。

何てこった……消されていたとなれば……後は……

「びびるの？」

「これでは八方塞だな……………」

「無いって訳でもないが……こればかりは最終手段としか言えないが……………」

「シニョール天空、何か名案でもあるノーネ？」

「……………特待生のブルー寮……あそこに入り込んで調べる以外方法が無い。仮に入ったところで何かしらの情報が得られるかどうかも怪しいところですが……………」

「……………」

その部屋にいる誰もが黙り込んでしまう。

あの場所は学園内では立ち入り禁止空域に指定されている。

「ただ、駄目なノーネ！幾ら情報がないとは言え。そんな危険な事はダメなノーネ。」

クロノス教諭の反応は当然と言えば当然の反応だ。

「ですが、教諭。このまま、ジツとしていても真実が分かる訳ではありません。彼の言う通り、特待生のブルー寮に入って調べる以外、方法はないと思われず。」

「……………」

カイザーの言葉にクロノス教諭は黙り込む。

「……………分かったノーネ。特待生のブルー寮の立ち入りを特別に許可するノーネ。」

長い沈黙の果てにクロノス教諭が重い口を開く。

「クロノス先生……」

「ただし、何かあったらすぐに戻って来て欲しいノーネ。」

「……分かりました。」

俺、鏡、カイザー、有栖、ジュンコ、ももえはクロノス教諭の部屋を後にし、特待生のブルー寮へと足を運ぶ。

気が付いていなかったが、クロノス教諭の部屋で話していた時間が思っていたよりも長かったのか外はもう暗くなっていた。

ブルー寮から特待生のブルー寮へ向かう道中……

「！」

「な、何？地震!？」

突然、島全体に響いているであろう地震と思える揺れが襲ってくる。

「一体、何が起こってるのよ!？」

「揺れが収まるまでじっとしていた方が良さだろう。」

俺達はカイザーの言う通りにし、揺れが収まるまでその場に留まる事にする。

それから暫くして、揺れは完全に収まった。

「一体、何が起こったのよ。」

「ただの地震にしては不自然ですわ。」

「みんな！空を見る！！」

「な……………」

鏡に言われ、島の空を見上げる。

空を見上げて、目に写ったのは海から空へ向け、6つの光の柱がこ
のアカデミア島を取り囲む光景だった。

第26話 謎（後書き）

やっとこさ、更新できた……

優「随分とかかったな。」

有栖「ボクは仮復活したけどね。」

優「有栖のヴァイロンはどうなるんだ？」

まあ、後の布石って奴かな……

優「次回は、アムナエルとの戦いか？」

まあ、とりあえずはそうなるかな。

第27話 7人目の刺客・アムナエル

大徳寺教諭の謎を探るため、俺達は現在は閉鎖され、立ち入り禁止ともなっている特待生のブルー寮へと向かっていた。

移動中に島全体にまで響く程の大きな揺れで足止めをくらっている。

その揺れが収まると今度は海から空へ向け、6つの光の柱がこのアカデミア島を取り囲む光景が眼に映る。

「いったい、何が起こってるのよ？」

「見た所、6本の光の柱がこの島を取り囲んでいるようだな……」

6本！？……まさか……

だけど、それしか考えられない。

「七星門の鍵が……開いたのか？」

「そんな事は……」

「認めたくねえけど。それだったら優の言っている事も説明がつく、こんな怪奇現象は普通じゃ考えられねえ。」

鏡は苦虫をかみつぶしたような表情を見せる。

「そうだとしたら残っていた鍵は優、十代、万丈目、明日香、三沢の持っている5本…そのうち4本が開いたという事は…」

「天空さん以外の人達はみんな全滅したという事ですか？」

「恐らくは…」

俺としては、十代達が心配だ。鍵を奪われている以上にあいつらの身が心配だ。

そして、今からどうするか……

このまま、特待生のブルー寮へ行くか…それとも一度、状況を整理するために引き返すか。

「優、どうする？このまま、特待生のブルー寮へ向かうか？それともクロノス先生にこの状況を聞いておくか……」

「ボクは戻った方が良いと思うよ。もし、優の持っている鍵まで奪われたら何が起るかわからないよ。本当に三幻魔と言うカードが復活して、この島が沈むかも知れないよ！」

確かに危険のはもつともだ。だけど、七星門の鍵を巡る戦いにかかわった以上、危険は避けられない。

「…俺達とセブンスターズとの戦いは決して避けられるものじゃない。どっちにしろ、次の戦いが真正銘。俺達・七星門の鍵を護る者と奪う者・セブンスターズの最後の戦いになるだろうな。」

「……………」

「…………あら？」

「どつした？浜口。」

「皆さん、あれを…………」

ももえが指を差す先には黄緑色に不気味に光る紋章が宙に浮かぶように映っていた。

「あれは…アムナエルのマーク。」

「アムナエルのマーク？」

「錬金術の代表的なマーク…って、大徳寺教諭が担当の錬金術の講義で習っただろう。」

「え？あれ、そうだったけ？ボク、あの授業だけはチンプンカンプンで全然わからないよ。」

有栖には呆れて物も言えない…………アムナエルのマークは最初、俺達の近くで浮かび、徐々に離れて行く。

やがて、俺達とある程度の距離を取ると止まって点滅するかのよう
に光ったり消えたりしている。

「…なんだかあのマーク、「こっちへ来い」って言っているみたいね。」

「どつする？優。」

「態々、道案内してくれるなら……その誘いに乗るだけだ。例え、罠だとしても。」

俺達はそのマークを追うべく、移動を開始する。

「……あれは……」

マークを追いかけている途中で地面に座り込んでいた2つの人影を見つける。

あれは……翔と隼人！？

「翔！」

「隼人！」

「お兄さん……優君。」

見ると翔は今にも泣きだしそうな表情をしていた。

隼人は腕にフアラオを抱えて、何やら辛そうな表情をしている。

「翔、隼人。一体何があつた？」

「十代が……」

「アニキがセブンスターズの奴に負けちゃったんだ……」

「！！！！」

「嘘でしょ……十代が？」

「それで十代は？」

「それがセブンスターズの奴が持っていた変な本に吸い込まれちゃったんだ……」

「！！！！」

これは相当、不味い事になったな……十代まで負けるのは本当に計算外だ。となると……

「翔、一緒に行動していたサンダーや大地は？」

「万丈目君と三沢君もやられちゃったんだ。」

「何てこつた……」

「優君、アニキ達を……アニキ達を助けてよ!!」

勿論、そのつもりである。

俺達は途中で合流した翔と隼人も加えて、マークを追いかけに行く。

その肝心のマークは俺達が向かおうとしていた特待生のブルー寮へ入って行った。

ビンゴだったか……

「案の定、当たりか……」

俺達も追うように特待生のブルー寮へと足を踏み入れる。

それを最後にマークが消えてしまった。

「マークが消えたな。」

「どつするのよ?これから……」

「片っ端から部屋を調べるか?」

「それも良いが……心当たりがある場所を調べてからの方が良いだろう。」

俺の言う心当たりのある場所……

それは1度目はタイタンと2度目は虹之咲とか言う女と戦った場所
でもある地下デュエル場。

「！」

地下場への道の途中……ある場所の壁が壊れているのを見つける。

変だな……以前、来た時はここは壊れていなかった筈……ここが妙
に当たりっばいな。

「どうした？」

「いや、前に来た時はここの壁は壊れていなかった筈だ。」

「でも、この壊れた壁の先も通路になっていますわ。」

「いよいよか……」

壊れた壁が入り口になっている通路を通った先に待っていたのは暗
くて、広い部屋に出る。

その部屋には妙な機械が沢山配置されていた。

「何なの、この部屋。」

「変な機械が沢山あるな。」

「見た所だと、何かの実験室のようだな。」

「ああ……」

「酒でも造っていたのかな？」

「え、こんな所で？」

「あの釜は蒸留釜なんだな。」

隼人は部屋の隅に置いてある奇妙な形をした釜を説明する。

さすがは実家が酒屋なことはあって、そういう知識は俺達より上かも知れないな。

「そ、それよりもボクは気になって仕方ないんだけど……」

「あ、あれって……な、何かな？」

有栖と翔は俺達とは違う方向に視線と持っていた懐中電灯を向けていた。

その先には長方形の大きな箱が見える。大きさに考えれば、人が入る大きさだろう。

「何って、棺桶だろう。」

「そんなの見れば分かるわよ。何でこんな所に置いてあるのかって事よ。」

「ひょっとして、またヴァンパイアなのでしょうっか？」

「ミイラかも……」

俺は静かに近づいて行く。

「優、危ないよ！」

「優君！」

「鏡、隼人！開けるの手伝ってくれ。」

「あ、開けるのかよ……」

「いや〜…俺はそういうのは苦手なんだな。」

「や、止めようよ。」

「俺だって嫌だよ……ったく。」

俺は力任せに棺桶の蓋を押し、蓋はドスンと言う音を立てて、地面に落ちる。

棺桶を覗いてみると、棺桶の中にあっただのは干乾びたミイラである。

「ミイラだ。」

「くくくひい〜!!」「くくく」

翔、隼人、有栖、ジュンコ、ももえは怯えるような声を上げる。

「でも、何でこんな所にミイラの入った棺桶があるんだよ？」

「ずっと、この寮にあっただと考えるも良いだろう……！翔、少し懐中電灯を貸してくれ。」

俺の左右に立っているカイザーと鏡は奇妙な感じでそのミイラを見ていた。

「どうしたの？お兄さん。」

カイザーは翔から懐中電灯を借りるとそのミイラを良く見てみる。

「！……やはりか。」

「カイザー、やはりってどういう事だ？」

「……このミイラは大徳寺教諭だ。」

……さて、そろそろ「奴」が出て来る頃合いか？

『!!!!?????』

「ま、マジかよ!？」

「幾ら大徳寺先生が行方不明って言ってもこんな早くミイラ状態になる訳がないんだな。」

「どついつ事なのよ?あの先生、そもそも謎が多すぎるわよ!！」

「ようこそ、私の実験室へ…転生者・天空優。」

突如、暗くなっていた部屋に明かりがつき、声が聞こえて来る。

それよりもあの男は今、何て言った?

「何処にいるんだ!？」

「フフフフ…私は逃げも隠れもしない。」

俺達の前に現れたのは衣に身を包み、顔には仮面を被った男が現れる。

その姿を見るな否や、翔が叫ぶ。

「あ、あいつだ！！アニキや万丈目君達をやったのは！！」

「そう、私こそが7番目のセブンスターズ…アムナエルだ。」

「アムナエル……」

「あなたが十代や明日香さん達を……！！」

「確かにお前達の仲間は私が預かっている。彼らは皆、類稀なる才能を持つデュエリスト達だった…しかし、いずれも私の期待を超える事は出来なかった。」

本当に計算外だ。あの十代が負けたのが、今でも信じられない。

「大徳寺先生をあのような姿にしたのもお前か!？」

「残念だが、それは違う。そのミイラはこの実験室に置かれていたものだ。」

「どういう事?じゃあ、ボク達が今まで見て来た先生は……」

「下にあるものは上にあるものの如く、上にあるものは下にあるものの如し…優、遊城十代を初めとした仲間達を返して欲しければ、この世界の真実がつづられたエメラルドタブレットの前で私の闇のデュエルを受けるがいい。」

「下にあるものは上にあるものの如く、上にあるものは下にあるものの如し…?」

「それにエメラルド・タブレットって……」

「このエメラルド・タブレットこそが最高の錬金術師が持つ究極のアイテム…転生者、天空優。私が最後の試練だ。」

「どういう経歴で知ったかは知らないが…」

大徳寺教諭…アムナエルは少なくとも俺が転生者である事を知っているようだな。」

だとすれば、彼を送り込んだあの男も知っている可能性があるか……

「錬金術!?!」

「大徳寺先生と同じ……」

「それよりもあいつは優の事を転生者って言ったな……一体何のことだ?」

……俺の秘密を隠し通せる時間も残り少ないかも知れないな。

だとしたら、俺がこの島に居られる時間も少ない。

「望む所だ。アムナエル。」

「フフフフ……これがお前達鍵を護る者達と我ら、セブンスターズの最後の戦いになるだろう。」

「……………」

少なくとも最後のけじめだけはつける。

この学園を三幻魔から守り抜くと言っけじめをな……

「デュエルツツ！！！！」

「優君！負けるな！！」

「優！頑張って！」

優

LP：4000

アムナエル

LP：4000

「俺のターン、ドロー！」

優

手札：6

「俺はモンスターをセット。」

優

手札：5

モンスター：1

「カードを2枚伏せて、ターンエンド。」

優

手札：3

魔法・罠：2

「私のターン、ドロー！」

アムナエル

手札：6

「私は異次元の女戦士を召喚！」

異次元の女戦士

ATK 1500

アムナエル

手札：5

モンスター：1

異次元の女戦士……バトル後に自身とバトルを行った相手モンスターを任意で除外する効果を持ったカードか。

俺の知るアムナエルは除外ギミックを軸にしたデッキ…【次元斬】の使い手

はたして俺の読み通りか？……そうだとしたらかなり厳しい戦いになる。

「異次元の女戦士で伏せモンスターを攻撃！」

異次元の女戦士

ATK 1500

伏せモンスター

素早いビッグハムスター

素早いビツクハムスター

DEF 1800

「伏せモンスターは素早いビツクハムスター、守備力は1800。異次元の女戦士の攻撃力は1500…300ポイントの反射ダメージを受けて貰う。」

「くっ……」

アマナエル

LP：4000

3700

「更に素早いビッグハムスターのリバース効果が発動、デッキからレベル3以下の獣族モンスター1体を裏側守備表示で特殊召喚する。俺はデッキからレベル2のエレファンを裏守備表示で特殊召喚する。」

優

モンスター：2

「だが、この時、異次元の女戦士の効果を発動！このカードが相手モンスターと戦闘を行った時、そのモンスターとこのカードをゲームから除外する事ができる。私は異次元の女戦士と素早いビッグハムスターをゲームから除外する。」

優

モンスター：1

アマナエル

モンスター：0

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

アムナエル

手札：4

魔法・罫：1

「俺のターン、ドロー！」

優

手札：4

「魔法カード、強欲な壺を発動。デッキから2枚ドロー。」

優

手札：5

「巨大ネズミを召喚。」

巨大ネズミ

ATK 1400

優

手札：4

モンスター：2

ここでレベル6のシンクロモンスターをシンクロ召喚ができる。

それに巨大ネズミもエレファンも地属性：よって、チューナーと素材に属性指定があるナチュル・パルキオンをシンクロ召喚できる。

そうすれば、【次元斬】のキーカード、マクロコスモスの発動を無効にしてデュエルを有利に進められる。

しかし、いくら強力と言っても魔法やモンスター効果には対処しきれない。

それにシンクロ召喚して効果を使用しても墓地には余りカードが溜まっていない。

下手をすれば、返しのターンでならず者傭兵部隊の効果や異次元の戦士などでダメージ覚悟の自爆特攻で除去されたら、俺の状況はさらに悪くなってしまう。

【次元斬】は若干運任せだが、あのデッキの一番恐ろしい所は一度回り出してしまうと確実に手が付けられなくなってしまう。

ここは後の事を考えて、様子見を兼ねて、慎重に行くしかない…

「巨大ネズミでダイレクトアタック！」

「ぐづぐづ……」

アマナエル

LP：3700

2300

「ターンエンド。」

「優君、シンクロ召喚しないの？折角、チューナーとチューナー以外のモンスターがあるのに……」

「恐らくは相手の行動を考えてデュエルしているんだろう……素早いビッグハムスターが除外されたことで優の予想も大きく狂ったのかも知れない。」

「優……」

「私のターン、ドロー！」

アマナエル

手札：5

「手札から永續魔法、次元の裂け目を発動！このカードが表側表示で存在する限り、お互いの墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。」

アムナエル

手札：4

魔法・畏：2

「!！」

不味い…このまま、発動を許したら後に面倒な事になる。

マクロコスモス用に残して置きたかったが四の五の言っている場合ではない。

「リバーズカードオープン、速攻魔法！サイクロンを発動、場の魔法・畏カードを1枚破壊する。俺は次元の裂け目を破壊する。」

優

魔法・畏：1

アムナエル

魔法・畏：1

「なるほど……だが、お前がそれを破壊して来る事など最初からお見通しだ！リバーズカードオープン！永続畏、マクロコスモス!!！」

「!！」

しまった……

奴のフィールドには既にマクロコスモスがセットされていた……裂け目は俺にサイクロンを使わせるための罠……

「このカードがフィールド上に存在する限り、墓地へ送られるカードは墓地へは行かずゲームから除外される。更にデッキ・手札から原始太陽ヘリオスを1体を特殊召喚する事ができる。私はデッキから原始太陽ヘリオス特殊召喚！」

原始太陽ヘリオス

ATK ?

アムナエル

モンスター：1

「攻撃力が決まってる？」

「原始太陽ヘリオスの攻撃力は除外された全てのモンスターの数×100ポイントになる……だったな？」

「その通り、現在除外されているモンスターは私とお前のモンスターが1体ずつ。合計2体……よって、攻撃力は200ポイント。」

原始太陽ヘリオス

ATK ? 200

「たったの200ポイントだったら安心ですわね。」

「いや、この後のアムナエルの戦術次第ではあの攻撃力はとんでもない数値にまで上がる。」

「私は更に魔法カード、強欲な壺を発動。デッキからカードを2枚ドロ―！」

アムナエル

手札：5

「更に魔法カード、天使の施し。デッキからカードを3枚ドロ―し、その後手札を2枚選択して捨てる。マクロコスモスが発動により捨てられた2枚は除外される。因みに私が天使の施しで捨てたのは異次元の生還者と異次元の偵察機。除外されたモンスターが増えた事で更に攻撃力が200ポイントアップ。」

原始太陽ヘリオス

ATK 200 400

「更に魔法カード、手札抹殺。お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドロ―する。だが、先ほども言ったが墓地へは送られずに除外される。私の手札は4枚。」

「俺は3枚。」

その時の手札はクリッター、グローアップ・バルブ、ライトニング・ボルテックス：モンスターカードは2枚。

「先ほどの手札抹殺で手札から除外した私のモンスターカードは4枚だ。」

「俺は2枚だ。」

「更に増えて、ヘリオスの攻撃力も増加。」

原始太陽ヘリオス

ATK 400 1000

「攻撃力が上がった!？」

「それでも攻撃力は1000、巨大ネズミよりしたなら大丈夫よ。」

「それはどうかな?私は、原始太陽ヘリオスを生贄にヘリオス・デュオ・メギストスを特殊召喚!」

ヘリオス・デュオ・メギストス

ATK ?

アマナエル

手札：3

「このカードは自分フィールド上の原始太陽ヘリオス1体を生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力と守備力は、原始太陽ヘリオス同様にゲームから除外されているモンスターカードの数×200ポイントになる。除外されているモンスターは原始太陽ヘリオスが増えた事で11体：よって攻撃力は……」

ヘリオス・デュオ・メギストス

ATK ? 2200

「攻撃力2200!？」

「優の巨大ネズミを上回った!」

「更に魔法カード、苦渋の選択を発動。自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せる。相手はそこから1枚を選択。相手が選択したカード1枚を手札に加え、残りのカードを墓地へ捨てる。私が選択するのはこの5枚だ。」

アマナエルが見せたのは異次元の戦士と光の追放者が1枚ずつとネクロ・フェイス3枚。

ちつ……ネクロ・フェイスは、除外されたらお互いのデッキから5

枚：3体で15枚ものカードを除外する。

被害を最小に抑えるためにもネクロ・フェイスを選ぶしかない。

それに奴はネクロ・フェイスを召喚して来ることはないだろう。効果で除外したカードがデッキに戻る以上は……

「……俺はネクロ・フェイスを選択する。」

「良いだろう、そして、残りは捨てる……が、マクロコスモスの効果で除外される。そして、この瞬間、除外されたネクロ・フェイスの効果発動！このカードがゲームから除外された時、お互いのプレイヤーはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する。私が除外したのは2枚。よって、お互いデッキの上から10枚のカードを除外する。」

「ちっ……」

俺のデッキの上から除外されたカードはハリケーン、聖なるバリア・ミラーフォース、ゾンビ・キャリア、奈落の落とし穴、神の桎梏グレイプニル、異次元からの埋葬、激流葬、極星獣グルファクシ、神の宣告、リビングデッドの呼び声。

モンスターカードは2枚か……更に逆転の糸口になるカードが多数除外された。これは不味いと言いたいようがない。

「俺の除外されたモンスターカードは2枚。」

「私の除外されたモンスターカードは2枚……よって、ヘリオス・デユオ・メギストスの攻撃力は800ポイントアップ！」

ヘリオス・デュオ・メギストス
ATK 2200 3000

「攻撃力3000!？」

「これはかなり不味いぜ。」

「かなりじゃないよ。無茶苦茶不味いよ。」

「まだ終わりではない。私はヘリオス・デュオ・メギストスを生贄にヘリオス・トリス・メギストスを特殊召喚！」

ヘリオス・トリス・メギストス
ATK ?

アムナエル
手札：2

「このカードはこのカードは自分フィールド上のヘリオス・デュオ・メギストスを生け贄に捧げる事で手札から特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力と守備力は、ゲームから除外されているモンスターカードの数×300ポイントになる。除外されているモンスターは16枚…よって、その攻撃力は…」

ヘリオス・トリス・メギストス
ATK ? 4800

「攻撃力4800!？」

「ヘリオス・トリス・メギストスでセットモンスターを攻撃、フェニックス・プロミネンス!!」

ヘリオス・トリス・メギストス
ATK 4800

伏せモンスター エレファン

エレファン
DEF 300

「くっ……!!」

「除外されたモンスターが増えた事でヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力がアップ!」

ヘリオス・トリス・メギストス
ATK 4800 5100

「更に相手フィールド上にモンスターが存在する場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。」

「！」

「続けて、巨大ネズミを攻撃！フェニックス・プロミネンス！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5100

巨大ネズミ

ATK 1400

優

LP:4000

300

第27話 7人目の刺客・アムナエル（後書き）

いよいよ、セブンスターズもクライマックスになって来ましたね。
優「また俺はズタボロになるのか……？」

有栖「優をまた傷つけるとはいい度胸だね。ヴァイロン軍団！」
有里「スカーレット・ノヴァ・ドラゴン……！」

「この駄作者を殺っちゃえっつ……！」
え、ちよつとま（ry

第28話 未来を切り開く一撃、次元を貫く黒光の槍

前回からのデュエル状況

優

LP:300

手札:3

モンスター:1

魔法・罫:伏せ1

巨大ネズミ

ATK 1400

アムナエル

LP:2300

手札:3

モンスター:1

魔法・罫:1(表側1(マクロコスモス))

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5100

「ヘリオス・トリス・メギストスで巨大ネズミを攻撃！フェニックス・プロミネンス！！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5100

巨大ネズミ

ATK 1400

優

LP:4000

300

「ぐわあああああっっ！！！！」

痛い……体が焼けるように熱い。

「「「優っっ！！！！」」」

「優君っ！！」

「不味いですよ、天空さんのフィールドはガラ空き。」

「戦闘破壊された巨大ネズミは除外され、ヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力は更に300ポイントアップ。」

ヘリオス・トリス・メギストス
ATK 5100 5400

「私はこれでターンエンドだ。」

「くっ…俺のターン、ドロー！」

優

手札：4

攻撃力5400まで高められたヘリオス・トリス・メギストスを倒すのは容易じゃない…

あれを突破するには除外されているモンスターの数を減らして攻撃力を下げる…或いは効果による除去。

だが、今の俺の手札ではどちらも不可能。対抗手段がない以上…ここは耐えるしかないか。

「モンスターを裏守備表示で召喚、更にカードを1枚伏せる。」

優

手札：2

モンスター：1

魔法・罨：2

「俺はこれでターンエンド。」

「私のターン、ドロー！」

アムナエル

手札：4

「ヘリオス・トリス・メギストスで伏せモンスターを攻撃、フェニックス・プロミネンス！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5400

伏せモンスター マイン・モール

マイン・モール

DEF 1200

「伏せモンスターはマイン・モール。このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。」

「ヘリオス・トリス・メギストスの効果を忘れたか。このカードは相手フィールド上にモンスターが存在する場合、もう1度だけ続け

て攻撃を行う事ができる。再び、マイン・モールを攻撃だ。フェニックス・プロミネンス!!」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5400

マイン・モール

DEF 1200

優

モンスター：0

「マクロコスモスの効果で墓地に行くカードは全て除外される。そして、除外されたモンスターが増えた事でヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力がアップ!」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5400 5700

「私はこれでターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロ―!」

優

手札：3

「……俺はこれでターンエンドだ。」

次のターンはあのカードで耐えられる。勝負をかけるのは次のターン以降か……

「モンスターを召喚しなかった……モンスターを引けなかったのか？」

「これじゃあ、次のアイツのターンで優のLPが0に……」

「私のターン、ドロー！」

アムナエル

手札：5

「ヘリオス・トリス・メギストスでダイレクトアタック、フェニックス・プロミネンス！！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5700

「不味いんだな。これが通れば、優のLPは尽きてしまっんだな！」

「優君！！」

「天空さん！！」

「「「優！！！！」」」

「いやああああああああっ！！！！」

ヘリオス・トリス・メギストスの攻撃がすぐ目の前にまで迫ってきていた。

「所詮、こんなものか……」

だが、俺は負けるつもりはない。

「まだまだ！！」

「！！？」

「まだ終わりじゃない！手札からバトルフェーダーを特殊召喚！」

バトルフェーダー

DEF 0

優

手札：2

モンスター：1

「このカードは相手モンスターのダイレクトアタック宣言時に発動する事ができる。このカードを手札から特殊召喚する。」

「だが、守備力0ではヘリオス・トリス・メギストスの攻撃を防ぐ事できない！」

「それだけじゃない！このカードが自身の効果で特殊召喚に成功した時、バトルフェイズを強制終了させる！」

バトルフェーダーがヘリオス・トリス・メギストスの攻撃を止め、俺への攻撃を遮断する。

「危なかった。」

「首の皮一枚の所で繋がったんだな。」

「寿命が縮まりそうな思いだったぜ。」

「優……良かった。」

「往生際が悪い…私はこれでターンエンドだ。」

「俺はつけるべきけじめをつけ終わるまで負ける訳にはいかない。
俺のターン、ドロー！」

優

手札：3

「俺はモンスターを裏守備表示で召喚し、ターンエンド。」

これが最初で最後の逆転をかけたチャンスだ。もし次のターンに伏せモンスターを最初に狙われたら俺に勝ち目はない

優

手札：2

モンスター：2

「私のターン、ドロー！」

アムナエル

手札：6

「（効果で除外過ぎたせいか…ここまで下級モンスターが来ないと
は…苦渋の選択の際で下級を5枚選んだのは失敗だったかもしれないな

いな。かと言ってネクロ・フェイスを召喚するわけにはいかない。除外したカードが全てデッキに戻ってしまうからな……」

「……」

あれだけターンを費やして、モンスターがヘリオス・トリス・メギストス以外が出て来ない。

モンスターが来ないのか？それとも出す必要がないと思っているのか？もし、後者だとすれば俺にとっては願ってもない状態だ。

「（どちらを攻撃する…本来ならば伏せモンスターと言いたいが…奴のデュエルではデュエルモンスターの常識は通用しない。奴のシンクロ召喚はこれまでのデュエルモンスターの常識を覆す。恐らく、レベルが低いモンスターがいるだけでも十分、出すモンスターのレベルの調整が可能になるはず。）」

「……」

どっちだ？どっちを狙ってくる。

「ヘリオス・トリス・メギストスでバトルフェーダーを攻撃、フェニックス・プロミネンス！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5700

バトルフェーダー

DEF 0

優

モンスター：1

「自身の効果で特殊召喚されたバトルフェーダーはフィールドを離れる時、ゲームから除外される。」

「除外されたモンスターが増えた事でヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力もアップ！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 5700 6000

「とうとう、攻撃力が6000になった…！」

「ヘリオス・トリス・メギストスの効果。このカードは相手フィールド上にモンスターが存在する場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。今度は伏せモンスターを攻撃、フェニックス・プロミネンス…！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 6000

伏せモンスター

素早いビッグハムスター

素早いビッグハムスター

DEF 1800

優

モンスター：0

「素早いビッグハムスターのリバース効果、このモンスターがリバースした時、デッキからレベル3以下の獣族モンスターを裏守備表示で特殊召喚する！俺はレベル3の極星獣タンゲニョーストを裏守備表示で特殊召喚！」

優

モンスター：1

「除外されたモンスターが増えた事でヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力も更にあがる！」

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 6000 6300

「私はこれでターンエンドだ。（さて、この状況をどう突破する天空優…私の勘が正しければ、君こそが……）」

「俺のターン、ドロー！」

優

手札：3

これで俺の勝つ為の布石は全て整った。

「裏守備表示になっている極星獣タングニョーストを表側攻撃表示に表示変更！」

伏せモンスター

極星獣タングニョースト

極星獣タングニョースト

ATK 800

「極星獣タングニョーストの効果が発動、このカードが守備表示から攻撃表示へ表示変更がされた時、デッキからこのカード以外の極星獣と名のついたモンスターを1体、表側守備表示で特殊召喚する。俺は極星獣タングリスニを特殊召喚！」

極星獣タングリスニ

DEF 800

優

モンスター：2

「リバースカードオープン！永続異、DNA移植手術！このカードの発動時に1種類の属性を宣言。このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、フィールド上の全ての表側表示モンスターは自分が宣言した属性になる。俺が宣言するのは…水属性。よって、俺とあんたのフィールドのモンスターは全て水属性へ変化する。」

極星獣タンゲニヨースト

地属性 水属性

極星獣タンゲリスニ

地属性 水属性

ヘリオス・トリス・メギストス

光属性 水属性

「属性だけを変更するカード？」

「種族を変更する改造手術とは違って、使い勝手が本当に難しいカードをどうして……」

あのカードを出すには属性だけを変えれば十分だ。

「これでヘリオス・トリス・メギストスを倒す条件は全て揃った。」
「何!?!」

「俺はレベル3の極星獣タンギリスニと極星獣タンゲニヨーストを
オーバーレイ!!!」

タンギリスニとタンゲニヨーストはDNA移植手術の効果で水属性
に変化したため、水色の光となって、地面に渦を描く様に吸い込ま
れていく。

この世界で最初にシンクロを行った時に原作と同じ仕様だったから
予想はしていたが、こちらの演出も変わらないか……

『オーバーレイ!?!』

「オーバーレイだと……」

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築! エクシ
ーズ召喚! 現れる、ブラック・レイ・ランサー!」

ブラック・レイ・ランサー

ATK 2100

ORU:2

優

モンスター：1

「な、何だ！？あのモンスターは…」

「シンクロ召喚とは違う方法で召喚されたモンスターなのか？」

「そ、そのモンスターは…」

「自分フィールド上に同じレベルのモンスターが2体以上存在するとき、それらのモンスターを素材にし、そのレベルと等しいランクのモンスターを特殊召喚する…それがエクシーズ召喚だ。」

815

「エクシーズ召喚…」

「俺達の知らない。未知なる召喚方法で呼び出されたモンスター。」

「シンクロモンスターとは違って、黒のカードですね。」

「だが、その2体も特殊召喚モンスターの素材である以上、フィールドを離れる筈…」

「エクシーズ召喚に使用された素材モンスターは、融合召喚や儀式召喚やシンクロ召喚とは異なり、フィールドを離れずにオーバーレイ・ユニットとなって、召喚したエクシーズモンスターをサポートする。」

ブラック・レイ・ランサーの周りには2つの球体が周回しているのが見える。

「でもさ…それなら何でDNA移植手術を発動して、態々属性を変えられるような事をしたのさ？」

有栖が疑問に思っていたのか、質問を投げかけて来た。

確かに召喚条件を知らなければ、そう思うのは自然だな。

「ブラック・レイ・ランサーのエクシーズ召喚を行うにはレベル3の水属性モンスター2体でなければならない。だから俺はDNA移植手術で属性を変更した。」

「なるほどな……」

「幾ら未知なるモンスターを呼んだ所でそれでも攻撃力は2100、攻撃力6300のヘリオス・トリス・メギストスの敵ではない！」

「それはどうかな？…ブラック・レイ・ランサーの効果発動。1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使用する事でフィールド

ド上のモンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にする。」

「何だと!?!」

「オーバーレイ・ユニットになった極性獣タングニョーストを取り除き、ヘリオス・トリス・メギストスの効果をエンドフェイズまで無効にする!パラライズ・ランス!」

ブラック・レイ・ランサーの周りを周回していた2つの球体のうち、1つの球体がブラック・レイ・ランサーの胸部のコアに吸い込まれて行く。

その後、ブラック・レイ・ランサーの翼部から赤い竜巻がヘリオス・トリス・メギストスへ放たれた。

ブラック・レイ・ランサー

ORU : 1

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 6300 0

「ヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力が……」

「6300から一気に0に下がった!」

「ヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力が上がるのはあくまで効果だ。ならば、効果を無効化すれば攻撃力は0だ。」

「…だが、それでも私のLPを削り切るには攻撃力が足りないな。仮に除外されても、私の手札にはお前が苦渋の選択で手札に加えさせて貰ったネクロ・フェイスがある。次のターンでお前は確実に終わる。」

「ならば、このターンで決着をつけるだけだ。もう1枚のリバーScardオープン！罠カード、幻獣の角！このカードは発動後、自分フィールド上に存在する獣族・獣戦士族モンスター1体の装備カードとなる。そして、装備モンスターの攻撃力を800ポイントアップさせる。俺はブラック・レイ・ランサーに装備。」

ブラック・レイ・ランサー

ATK 2100 2900

ブラック・レイ・ランサーの持っている槍の先端が光りだし、槍の先端がユニコーンなどにみられる角に変化する。

……ちよつと待て、何でそこに付く？

角と言うからには頭部に付くのが普通じゃないのか！？

だけど、生前時。トールにこれを装備して、無双をしていた記憶がうる覚えであるが、トールの頭に角が生えた姿は想像できない。

寧ろ、そんな事になったら笑ってしまいデュエルどころじゃない気がする……

「ブラック・レイ・ランサーでヘリオス・トリス・メギストスを攻撃！貫け、ブラック・スピア！！」

ブラック・レイ・ランサー

ATK 2900

ヘリオス・トリス・メギストス

ATK 0

アムナエル

LP:2300 - 600

WIN:優

「ぐわあああああっ……ああ……」

「……………！」

アムナエルとのデュエルが終了すると再び、地震なのか地面が揺れ始める。

「ま、また地震！？」

「もう勘弁してくれよ。」

その地震も暫くして徐々に小さくなり、やがて収まって行く。

「…アムナエル。」

「優、試験は…最終試験は見事合格だ。今頃、遊城十代を初めとした預かっていた仲間達は解放されているだろう。」

アムナエルはつけていた仮面を外して、その素顔を明らかにする。

「!?!」

「なっ……………」

「う、嘘でしょ!?!」

「そんな……………」

アムナエルの正体に俺以外の面々が驚いていた。

そう、アムナエルの正体は…

「だ、大徳寺先生!?!」

そう、セブンスターズとの戦いが始まってから行方が分からなくなっていた大徳寺教諭だ。

普通ではありえないが、その顔には所々、ヒビが入っている。

「どうして、大徳寺先生が…」

「それならあの棺桶に入っていたミイラは……」

「あのミイラも紛れもなく、私自身だ。」

「…大徳寺教諭。あなたは一体…」

「私は錬金術によつて、死の世界から蘇り。魂はこの仮の肉体に宿っている。」

『!!--!』

そこから大徳寺教諭によつて、彼の真実が語られる。

彼は「ある人物」の命を受け、錬金術師が求める伝説の宝石・賢者の石の研究をしていたと聞かされる。……彼の言う「ある人物」と言うのは恐らくは、影山理事長であろう。

だが、彼の肉体は長きに渡る旅による無理が祟ってしまい。不治の病に侵されていた。

余命がほとんどない彼がとつた行動とは、人造生命体・ホムンクル

スに魂を託すという言う事である。

だが、その肉体は紛い物の肉体で、彼の寿命は殆ど無いに等しいとの事。

それでも彼は研究を支えてくれた人のために究極の精霊を操る力を手にしなければならぬと告げられた。…その究極の精霊とは恐らく、三幻魔の事だろう。

そして、三幻魔の力があれば、賢者の石を作る事も出来る。……確かに三幻魔の力を使えば、可能だろう。

しかし、あの力は人の手には有り余るものだ。普通ならば、人が絶対に触れてはいけないモノである。

「だが、その計画も君と言う存在のおかげで遮られた。優。」

「……大徳寺教諭、俺からも聞きたい事がある。何故、俺を転生者と呼んだ。」

「私の研究を支えてくれた人から告げられたのだ。そして、君は私の計画の最大の障害になり得るとも告げられた。」

「……」

どうやって、知ったかは知らないが…影山理事長は俺が転生者であることを知っていたようだな。

この事実を知っているのは、鮫島校長と海馬社長にペガサス会長…

…俺と別れた時にも外部に漏らさないで欲しいと念入りに言っている。

口の堅いあの三人がバラすとは思えない。一体どうやって、知ったと言っただ？

「君には錬金術師としての素質もある。低レベルのモンスター達をより強いモンスターへと変化させるシンクロ召喚や私とのデュエルで見たエクシーズ召喚…貴金属を金へと変える錬金術…これらは同じでもある。」

「優はデュエルだけじゃなくて、錬金術師としての素質もあつたって事なのか…」

「そして、君とのデュエルは最強の錬金術師を決める戦いでもあつた。…だが、それにも敗れた…だから、勝者である君に告げておきたい。」

伝える事？原作だと、この状況は十代の筈なんだがな……

「…錬金術が全てを金に変えると言っるのは表面の減少でしか過ぎない。」

つまりは、見せ掛けだけで中身はまるつきり違うという事か。錬金術の専門用語を言われても余りわからないぞ。

こんな事なら生前時に「鋼の錬金術師」をしつかり読んでおくんだつたな…

「その真意は人の心をより純粹で高貴なものに変えるものなのだ。君はその真実を知った。これで…私の望みは達する事が出来た。私の研究を支えてくれた人は強大な力を手に入れようとし、その心をいつの間にか曇らせてしまった。」

力の誘惑に惑わされて、それに溺れたという事が……

「何れ、この島にはこれまでにない災いが降りかかる。私にはその災いからこの島を…このデュエル・アカデミアを守り抜ける力を育てる必要があつた。」

「それで俺達はあなたの望み通り…この島を守りぬけるような力になれたのでしょうか？」

「ああ……君と君の仲間達ならば…この島を災いから守り切れると信じている。これを受け取れ。」

大徳寺教諭は手に持っていたエメラルド・タブレットを俺に渡して来る。

俺はエメラルド・タブレットを受け取り、大徳寺教諭に誓う。

「大徳寺教諭…この島を守ろうとしたあなたの意志は俺達が受け継ぐ…必ず、その災いからこの島を守り抜いて見せる。」

「ありがとう…これで私も……」

それを最期に大徳寺教諭の肉体は土と砂になってしまう。

「大徳寺先生っつ！！！」

そして、音を立てて、棺桶の中に入っていた大徳寺教諭のミイラも土と砂になって消滅する。

「まさか、大徳寺先生がセブンスターズだったなんて……」

「正直、驚いているんだな。」

「でも、あの人は最後には、この学園の事を思って行動をしてくれただけに分かる。」

「セブンスターズは全員倒れました。これで学園に平和が戻る筈ですよね。」

「それは分らんな。大徳寺教諭はこの島にもっと大きな災いが起きると言っていた。」

「俺達に出来る事は彼の意志を無駄にしない事だ。」

俺達の視線の隅では光大徳寺教諭の魂の球を飲み込んでいたファラオの姿があった。

「優、一つだけいいか。」

特待生ブルー寮の入口へ戻る道を進んでいた途中で鏡が突然、口を

開く。

「鏡？」

「大徳寺先生はお前の事を「転生者」と言っていたが…あれは一体どういう意味だ？」

鏡の眼は明らかに真剣だった。

鏡だけじゃない、有栖、カイザー、翔や隼人。それにジュンコやももえまで真剣な表情をしていた。

「お前は何か心当たりがあるんだろ？違うのか。」

「あるにはある。だけど、今は言う事はできない……全ての戦いに決着がついたら話す。それまで待っていて欲しい。」

「……分かったよ。何か、納得いかねえけど。ちゃんと話してくれるならそれでいいけどよ。」

しかし、本当に何で影山理事長は俺が転生者であることを知っている？

謎が深まるばかりだ。

俺の秘密を話す時…それは彼らとの別れの時だろう。

今回の最強カード

優「今回の最強カードはブラック・レイ・ランサー」

ブラック・レイ・ランサー

エクシーズモンスター

| | | | | | | |
|------------------------|-----|------|-----|------|-----|-----|
| ランク3 | 闇属性 | 獣戦士族 | ATK | 2100 | DEF | 600 |
| エクシーズ素材：水属性レベル3モンスター×2 | | | | | | |

効果：1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

主な収録パック：「PHOTON SHOCKWAVE」

優「ランク3の闇属性、獣戦士族のエクシースモンスター。」

有栖「エクシース素材を1つ取り除くことでエンドフェイズまでしてしたモンスターの効果を無効にする効果があるよ。」

優「攻撃力が低いのとエクシース素材が水属性指定であるというのが欠点でもある。効果無効に関しては、効果によって、攻守が上がる相手やBF・アーマード・ウイングと言った戦闘耐性モンスターに神獣王バルバロスといった妥協召喚モンスターに使用するのが効果的だ。」

有里「召喚するときにはDNA移植手術みたいな属性変更カードで補助すると出しやすいかもしれないよ。」

有栖「攻撃名はブラック・スピア。効果名はパラライズ・ランスだよ。」

第28話 未来を切り開く一撃、次元を貫く黒光の槍（後書き）

やっぱり、感想を貰えるとモチベーションが上がって書く気力が増して行きますな。

優「感想をくれた人たちの期待に応えられるようにしないとな。」
ら、ラジャーッス……

今回もここまで読んでくれた皆さん。
本当にありがとうございます。

第29話 奪われた七星門の鍵！？（前書き）

え〜）

今回はヒロインがちょっと暴走し、さらに言えば
妙にネタに走ってます（え？）

第29話 奪われた七星門の鍵！？

有栖 Side

優と7人目のセブンスターズ・アムナエルの闇のデュエルは優が勝った事で、行方不明になっていた十代君、三沢君、万丈目君、明日香が解放され、4人とも無事で本当に良かった。

その後に明かされたアムナエルの正体は行方不明になっていた大徳寺先生だった。これにはボク達はみんなショックを隠し切れなかった。

その大徳寺先生は最後には砂になって消えてしまった。まさか、大徳寺先生がセブンスターズだったなんて今でも信じられないでいる。

セブンスターズの方も7人全員が倒されて、アカデミアの方も平和になるって、みんなは言っていた。

だけど、大徳寺先生は「この島にはもつと大きな災いが起きる。」
って言っていたけど。本当にそうなのかなと思う。

ボクには一つだけ引かかる事がある。それは……大徳寺先生は優の事を「転生者」と呼んでいた。

この事に関してはボクだけじゃなくて、神楽坂君や丸藤先輩。解放された人達の中からは三沢君が優が何らか引かかる事があると思っっている。

優は「全ての戦いに決着がついたら話す。」とは言っていたけど……
全ての戦いってまだ、これから何かが起ころうとしているのかい？

ボクも勘でとしか言えないけど……優はボク達に何か、秘密を隠している。

それに今まで疑問に思わなかったけど。優は何処で彼が使っている
シンクロモンスターや

この前の大徳寺先生との闇のデュエルで使ったエクシーズモンスター
……あれを一体、何処で手に入れたんだろう？

優……キミはいつたい何者なんだ？ボク達の知らない秘密をどれだ
け隠しているんだ？

その秘密はボクにも言えない事なのか？……でも、ボクはキミの事が
知りたい……キミの全てを知って尚且つ、ボクはキミの全てを受け
入れたい。

そのためなら、ボクは手段を選ばないよ。そんな事ができる位、ボ
クはキミの事を……

有栖 Side 終了

Side Change

優 Side

優 Side

大徳寺教諭との戦いが集結し、セブンスターズとの戦いは終結した
…否、正しくは、一時的に終結する。

まだこの戦いを引き起こした「あの男」が残っている。

あの男の下らない我儘のせいでデュエルモンスターズやこの世界は
滅茶苦茶になったという事を嫌と言う程教えてやらなければならん
な。

「優、そろそろ行こうぜ！」

ある日の朝、朝食を取り終わると十代が共に行こうと誘われる。

言われれば、そろそろレッド寮を出ないと講義に遅刻しかねないか。

「ああ、今行く。」

俺は十代、翔、隼人と共にレッド寮からアカデミア公舎へと向かう。

「…またかよ。」

アカデミア公舎の正面玄関前の通路を見て、俺は落胆する。

こんな事が続くと、正直に嫌になる。

『すげえな、遊城十代に天空優。』

『ついにセブンスターズを蹴散らしたんだってな。』

『どっちもオシリス・レッドにして置くのは勿体ないぜ。』

目の前には幾多のアカデミアの生徒達が待ち構えていた。まるで有名な人を見るかのように……

正直に言うと、ここまで広まっているとは思わなかったな。

十代は隣で「ありがとう、そんな大したもんじゃないから」とか言いつつ、笑いながら手を振っている。

「へえ」。七星門との戦いの事、みんな知っているんだ。」

「こんな狭い島で派手に戦っていたんだもんさ。」

「現にこの島にいるのはこの学園の生徒と教諭位だからな、広まるのも無理はないだろう。」

その日の放課後…

本日の講義が全て終了し、生徒達は購買なり、デュエル場なり、それぞれの寮へ戻っていたりと各人行動は異なっている。

俺も十代達と共にアカデミア公舎からレッド寮へ戻って行く。

「でもな、俺。ショックだったな…」

「大徳寺教諭の事か？」

原作通り、やっぱり十代が一番、ショックだったみたいだな…

「ああ…大徳寺先生、俺が納豆好きだって知っていて、良く納豆くられたんだよな…」

十代…それは彼がただ、納豆が嫌いだったからお前に押し付けただけだと思っぞ。

現に俺も翔やサンダーも同じような被害にあっていたからな…翔は牛乳、サンダーは人参。

俺は煮干しを押し付けられたからな……。

その理由としては…

『優君はいつも、イライラしているような顔をしているのにゃ。だから煮干しを沢山食べて、イライラしないデュエリストになって欲しいのにゃ。』

とか言われて、押し付けられたからな……俺は普通のつもりなんだがな。

そもそも、イライラしないデュエリストってどんなデュエリストだ？

あの人。良い歳して、好き嫌い多すぎるんじゃないのか。寧ろ、ホムンクルスに歳も何もないか。

836

次の日の早朝。

朝食をとっていた俺達の所に連絡が舞い込んで来た。

その連絡の内容は「七星門の鍵が盗まれた」という事である。

大急ぎで俺達は七星門の鍵を盗んだ犯人が待っているとされる場所へ向かう。

途中で明日香、ももえ、ジュンコ、カイザー、藤原、大地、鏡と合流する。

「聞いたか!？」

「ああ!七星門の鍵が……」

「全く、何考えてんだ!？」

そして、鍵を盗んだ犯人が待っているとされている場所で待っていたのは……

「万丈目君!？」

「……」

「どういっつもりだ、万丈目!」

「万丈目君、鍵を返しなさい!」

「嫌だ。それに僕が持っている鍵は4つだ。」

「4つ!？」

確かに彼の言っている事は間違えではない。サンダーの首にかけられていた七星門の鍵は4つ。

あれ？妙だぞ、原作ではサンダーが7つ首に下げていたはずだ。

「だったら、後の3つは何処に……」

「その鍵ならボクが持つてるよ！」

声ができる方を振り向くとそこにいたのは有栖だ。

首にはサンダーが持っていない3つの七星門の鍵がかけられていた。

「有栖まで……どうして、こんな真似を？」

「それは…天上院君、君とデュエルをするためだ。」

「ボクも万丈目君と同じで、優。キミとデュエルをするためだよ。」

「デュエル？」

「んなの普通にやれば良いじゃんかよ。」

十代の言う通り、普通のデュエルならばな……

「だから、普通じゃダメなんだ！これは七星門の鍵と天上院君との

デートを賭けた。Loveデュエルなんだ!!」

『Loveデュエル!?!』

みんな、サンダーの言葉に声が裏返ったような声を上げる。

サンダーの理由がこれだから、有栖の理由も、碌でもない理由な気がするから聞きたくない。

だが、聞かなければと話が進まないで聞かざる負えない。

「有栖、お前はどうしてだ。」

「七星門の鍵と…優、キミの全てを知る権利を賭けたデュエルだ!」

「……はあ?」

俺の全てが知りたい?…一体、どういう事だ?言っている意味がさっぱり分からない。

「万丈目君!有栖!馬鹿な事は……」

「何が馬鹿だ、明日香!」

声ができる方を見ると、ボートに乗り、ウクレレを弾きながら南国風の格好をした吹雪さんが現れる。

何が馬鹿だって……これは馬鹿としか言いようがないんですが?

「兄さん!？」

「吹雪、お前……」

「吹雪、君はそんな恰好をして何やっているの!？」

「万丈目君と有栖ちゃんはそれぞれ。男と女の純情をかけて、明日香!そして、優君!君達に勝負を挑んでいるんだ。明日香!優君、君達も女と男の純情を賭けて、答えてあげないか!」

本人はいたって真面目なのだろうが、本当に馬鹿らしくでしょうがない。

「吹雪さんって…こんな人だったの?」

「聞いてないぞ…」

「人は見かけによらないとは言いが…」

「これはよらなすぎだろ…これは」

「あたしの中で吹雪先輩のイメージが諸崩れしてるんだけど…」

上から翔、十代、大地、鏡、ジュンコの順番にコメントしている。

ジュンコが吹雪さんの事を先輩って呼んでいるな…これも十代に惚れた影響か?

「（これって、もしかして兄さんの差し金？）」

「また、吹雪の悪い癖が……」

「悪い癖！？」

「これは悪いなんてレベルじゃないよ。僕も亮も吹雪の奇行には散々振り回されているんだ。」

カイザーと藤原が頭を抱えるような仕草をする。

……確かにあんな問題を引っ張ってくるような人間と友人になった事が運のつきだ。…としか言えない。

「天上院君。」

「優。」

サンダーは明日香を、有栖は俺を直視するような眼でこちらを見ていた。

俺は小声で、明日香に話しかける。

「（明日香、やっぱりやるしかないのか？）」

「（そうね。万丈目君は話して分かるような眼をしていないし…それにあの子は一度決めたら、絶対に曲げないから。）」

「(やっぱりか。)」

「(ええ、あなたにも迷惑をかけるわ。)」

「(気にするな。お前も大変だな。)」

「(それはお互い様でしょ。)」

小声で明日香と話した結果、このデュエルはどうしても受けなければならぬと決断する。

「明日香！優君！」

「分かったわ、そのデュエル…受けましょう。」

「売られた喧嘩は買うのが俺の流儀だからな。」

俺と明日香は「デュエルを受ける」と返す。

「やった！」

「優…」

「良く言った、2人とも。」

「言つて置くけど、私とデートなんかしたって何の意味もないわよ？」

「そんな事はなあああああああい！！きつと楽しい筈だ。購買部で買い物をして、火山でピクニック。憧れの灯台で語らい、僕の思いを君に……」

『……………』

サンダー。盛り上がっている所を悪いが、吹雪さんと有栖以外は引いているぞ？

「なんだかまどろっこしいわね。言いたいことがあるなら、デュエルで語りなさい！」

「ああ、嫌つて言う程！」

明日香みたいなタイプには下手な小細工無しの真っ向から言った方が良いのかもしれないぞ。サンダー。

明日香とサンダーはデュエルスタンバイモードに入ったな。

俺も有栖が何で俺の全てを知りたいのか、その理由が分からない……

「俺の全てと言つが……何処までだ？」

「全部だよ。キミが隠している秘密も含めて……」

全部……つまり、俺が転生者である事とかも含めてだろうな。

「そうかい……明日香と同じような事を言うが、俺の全てを知っても何の得にもならないぞ?」

「それでもキミの事が何もわからないよりはマシだよ。」

俺は有栖と対峙する形になる。

「優、デュエルをする前に約束してほしい。ボクが勝ったらキミの秘密を全て話して欲しい。」

「約束である以上は負けたら、全て洗い浚い喋ってやる。」

「……そしてっ!!!」

……そして?まだ何かあるのか?

「ボ、ボクと……ボクと結婚を前提とした交際ではなく、それを通り越してボクと……ボクと結婚してくれ……いや、ボクの事を
お嫁に貰ってくれ……!」

……は?

彼女の言葉に誰もが耳を疑う。

「な、ななな……」

「何だと……!?!?!?!?!」

「お、お嫁ええ!!??」

「婚姻届も既に用意してあるよ!後はここにキミのサインをするだけだよ!

それからボクの家で準備してある結婚衣装で、キミは真紅のタキシードを…ボクは真紅

のウェディングドレスを身に纏い!結婚式場でボクとキミは永遠の愛を誓い、お互いに

夫婦として末永く愛し合うと誓って、その証として愛の口付けを……」

見ると、有栖の手には何やら紙が握られていた。よく見るとその紙は確かに婚姻届だ。

そんな事よりも誰か、こいつを止めてくれ……

このまま、放って置いたら何を言いだすか分かったもんじゃない。見ると、先ほど引いていたメンバーが更にドン引きしていた。

その中には明日香、サンダー、吹雪さんまでがドン引きしている。

「結婚式が終わった後は、多くの人々に見守られてボクらは新婚旅行：ハネムーンへ出か

けるんだよ。

そして、ハネムーンから帰って来た後にはデュエル・アカデミアで学生夫婦として、³

年間を過ごして、夫婦揃って卒業して、ボク等はいつまでも一緒だよ。死が2人を別

つまで……」

ちょっと待て、結婚って18歳以上にならないとだめではなかったか？

転生前だったらともかく、今の俺はまだ16歳……とても結婚できる年齢ではない。

「俺達は未成年だぞ？そんなの法律が許すわけないだろう。」

「そんなもの！！ボクとキミの愛があれば、何だって乗り越えられるさ。」

いや、法律位は守れよ。

「吹雪……あれもお前の差し金か？」

「い、いや……彼女が優君に恋しているのは分かっていたけど……まさか、結婚まで持ち出して来るとは思わなかったよ。」

「か、神崎君……僕は君の行動に対して、尊敬に値するよ。」

「あ、有栖……あんた、一体何言ってるのよ……」

「これが噂に聞く、逆プロポーズですね。」

「なあ、翔、三沢、ジュンコ。お嫁ってなんだ？」

十代の言葉にドゥシャー……と派手にこけるギャラリィ組。

あいつの思考はある意味、DBの悟空並みだな……

「じ、十代。お嫁って言うのはな……」

大地が「お嫁」と言う言葉を分かりやすく、十代に説明し出した。

それを聞き終わり、理解すると……

「ええええ、じゃあ、優は有栖と結婚するのか!？」

「まだ決まって無いッスよ! そうなるかどうかは、優君と有栖さんのデュエルで決まるッスよ。」

何か、妙な勘違いをしそうになったが、翔の言葉でどうにか留まる。

ナイスだ。翔。

「優、受け入れてくれるかい？」

「……………」

正直、俺はこいつの考えを侮っていた。

前の如く、フラッグファイター某ハムの台詞を言うのかと思ったら…………

しかし、それは外れた………… しかも悪い意味で…………

今度はプロポーズか………… よりによって、逆プロポーズ…………

恋人通り越して結婚って、どういう事だよ。

だが、敗者は勝者に従うのは世の摂理。

「良いだろう……お前が俺を勝つたらお前の望み通り、結婚する。負けた人間にはとやかく意見する権利はないからな。」

「やったー！ー！ー！！！！ボクはやったよ！お父様、お母様、お爺様、お婆様。」

「盛り上がっている所を悪いが、喜ぶのは俺を倒してからにしろ。」

「ボクは勝つよ。そして、キミと永遠の愛を誓い合っただ！！！」

「デュエル！！！！」

負けられない……このデュエルは本当に負けられない。

ある意味、この戦いはセブンスターズの戦いよりも重要な戦いになるだろう。

この戦いは俺の色々な物がかかっている。しかも、俺の今後の人生までかかっている。

優

LP：4000

有栖

LP：4000

「先行は貰うぞ。」

「良いよ。優のためなら先行でもボクの純潔でも何でもあげるよ。」
最後の方は聞かなかったことにするか。

「……俺のターン、ドロー！」

優

手札：6

「俺はLPを10000支払い。魔法カード、簡易融合を発動。融合デッキからレベル5以下の融合モンスターを特殊召喚する。俺はその効果でドラゴンに乗るワイバーンを特殊召喚。」

優

LP：4000

3000

ドラゴンに乗るワイバーン

ATK 1700

優

手札：5

モンスター：1

「この効果で呼び出した融合モンスターは融合召喚として扱われるが、攻撃できずにこのターンのエンドフェイズに墓地へ送られる。」

「（優がデメリットの塊じゃないカードを態々、使う筈はないよね……となれば……）」

「更にチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを通常召喚。」

ダーク・リゾネーター

ATK 1300

優

手札：4

モンスター：2

「レベル5、ドラゴンに乗るワイバーンにレベル3、ダーク・リゾネーターをチューニング。」

ダーク・リゾネーターが3つの輪へと姿を変え、ドラゴンに乗るワイバーンを包む。

5 + 3 = 8

「 8つの星々が集う時、全ての破壊を無に帰す龍がその地へ優しき翼と共に舞い降りる。シンクロ召喚！舞い降りよ、スターダスト・ドラゴン！」

第30話 全て滅せよ、Sin トウルース・ドラゴン

前回からのデュエル状況

優

LP:3000

手札:4

モンスター:1

魔法・罫:0

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

有栖

LP:4000

手札:5

モンスター:0

魔法・罫:0

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

優

モンスター:1

「スターダスト・ドラゴン……」

「更に俺はフィールド魔法、Sin Worldを発動。」

「Sin World…?」

優

手札：3

フィールド：無 Sin World

フィールドは砂浜から景色の色が反転した不気味な世界に変わる。

「優！僕と天上院君のデュエルでせっかく良い所なのに、お前が変なフィールド魔法を発動したせいで折角の雰囲気台無しだ！責任を取れ……！」

サンダーが何かを叫んでいるがあえて無視する事にした。

どのみち、お前は最終的にはフラれる（？）訳だからこればかりは俺でもフォローのしようがない。

「…更にカードを1枚伏せ、俺はターンエンドだ。」

優

手札：2

魔法・罫：1

「ボクのターン、ドロー！」

有栖

手札：6

「ボクはマシンナース・ギアフレームを召喚！」

マシンナース・ギアフレーム

ATK 1800

有栖

手札：5

モンスター：1

「マシンナーズ・ギアフレームの効果、召喚に成功した時、デッキからこのカード以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスターを1体、手札に加えるよ。ボクはマシンナーズ・フォートレスを手札に加えるよ。」

有栖

手札：6

「このフィールド魔法が気になるけど……ボクは、手札のレッド・ガジェットとマシンナーズ・フォートレスを墓地に送って、墓地からマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚。」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

有栖

手札：4

モンスター：2

もう出て来たか。流石にマシンガジェだ。展開のスピードが速い。

「マシンナーズ・フォートレスでスターダスト・ドラゴンを攻撃、優！ボクはキミが欲しいーーーーー！！！」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

「もう少し、まともなアプローチをしたらどうなんだ？スターダスト・ドラゴンを生贄に捧げる！」

「スターダスト・ドラゴンを生贄に!？」

「リバーズカードオープン!畏カード、バスター・モードを発動！」

「バスター・モード!?!?!」

「このカードはフィールド上のシンクロモンスターを生贄に捧げて発動する。生贄に捧げたシンクロモンスターのカード名が含まれる「ノバスター」と名のついたモンスター1体を自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚。俺が生贄に捧げたのは、スターダスト・ドラゴン!よって、デッキからスターダスト・ドラゴンノバスターを攻撃表示で特殊召喚！」

スターダスト・ドラゴンノバスター

ATK 3000

優

魔法・畏:0

「攻撃力がマシンナーズ・フォートレスを上回った…」

「どうする？攻撃を撤回するなら、今のうちだ。」

「撤回はしないよ。優！ボクの想いを受け取ってくれー！ー！！！」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

スターダスト・ドラゴンノバスター

ATK 3000

有栖の奴、攻撃するたびに叫ぶつもりか？

逆に叫び過ぎて、喉が枯れなければ良いが…

有栖

LP：4000 3500

モンスター：1

「くうう…ボクは、マシンナーズ・フォートレスの効果を発動、このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。スターダスト・ドラゴンノバスターを破壊する。」

「無駄だ！スターダスト・ドラゴンノバスターの効果発動、魔法・罨・効果モンスターの効果が発動した時、このカードを生け贄に捧げる事でその発動を無効にし破壊する。」

優

モンスター：0

「え……ちょっと待って…最終的には破壊されるのに何で効果を…」

「教えては置くが……スターダスト・ドラゴンノバスターは自身の効果で生け贄に捧げられて、墓地へ行ったターンのエンドフェイズに墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。」

「そ、そんなのあり!？」

傍から見れば、スターダスト・ドラゴンノバスターは無敵と言う印象があるが、フィールドでは無敵のこのカードも墓地では無防備状態のため、

転生の予言やD・D・クロウなど墓地から移動させたり、単純火力で戦闘破壊したりと弱点は腐るほどある。

それに無効にできるのは魔法・罨・モンスター効果でカウンター罨までは無効に出来ず、効果発動がトリガーで発動する天罰を撃たれたらそれでこそ一瞬で終わる。

「それでお前のバトルフェイズ中だが、どうするんだ？」

「勿論、攻撃するよ。マシンナーズ・ギアフレームで優にダイレクタアタック。優、ボクはキミを抱きしめたいよー！ー！！！」

マシンナーズ・ギアフレーム

ATK 1800

優

LP:3000 1200

「ぐっ……」

LP4000なのに軽い感覚で簡易融合を使ったツケがここに来たか。LPが1200しか残っていない……

やっぱり、LPが4000だと、たかが1000ポイントでも軽いとは言えないな。

「メインフェイズ2にボクは永続魔法、一族の結束を2枚発動。自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップ！ボクの墓地には機械族のみが存在する。よって、ボクの場の機械族モンスターは攻撃力を800ポイントアップする。ボクが発動したのは2枚。よって、1600ポイントアップ！！！」

無効化されてしまうのが分かっているのか。場にスターダスト・ド

ラゴンノバスターがない隙に使えるものは使つと言つ訳か…

有栖

手札：3

魔法・罫：1

マシンナーズ・ギアフレーム

ATK 1800 3400

感心する前にこの状況をどうするかな……これ以上、布陣を敷かれると手が付けられなくなる。

「更に手札のイエロー・ガジェットとグリーン・ガジェットを墓地へ送り、墓地からマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚。」

862

有栖

手札：1

モンスター：2

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

「更に2枚の一族の結束の効果で攻撃力が1600ポイントアップ。」

┌

マシンナーズ・フォートレス
ATK 2500 4100

「ボクはターンエンドだ。さあ、今度はキミの想いをボクにぶつけてくれ!!」

有栖

手札：0

魔法・罠：2

「有栖：一つ聞いていいか。何で俺と結婚をすると言っ話を持ちかけて来る?」

サンダーの明日香とのデートを申し込むデュエルなら分かる。

が、色々通り越して結婚はどうかと思う。

「そんなの決まっているじゃないか…ボクはキミと一緒にになりたい。」

「本当にそうなのか?交際辺りならまだしも、結婚は両者がお互いに好きと言っ意思表示と合意があつて、ようやく成立するものではないのか?」

「……」

「俺は馬鹿だから余り難しい事は言えないけど。お前はいつも、自分だけの意志を俺にぶつけているだけじゃないのか？」

「!?!」

「前に俺はお前に言ったな。…「異性」と言う概念で見たらどうなるかと言う時点で少々戸惑っている……と。」

俺の言葉に有栖は小さく頷いて返してくれる。

彼女も理解してくれた上で俺も話を進める。

「そして、「俺に考える時間を欲しい」と言った。お前も「無理意地はさせたくない」と言い、俺が俺自身で納得の行く答えが出るまで待っている……それで収まった筈ではなかったのか？」

「あの時は……」

有栖が口を開き、喋りはじめる。

俺は黙り込んで彼女の言葉を聞く事にした。

「あの時は納得はしたよ。でも…セブンスターズとの戦いが始まり、

ボクのせいでキミがボロボロになって、2週間も眠り続けていた……2週間だよ！？その間、ずっとキミを看病していたボクの気持ち……がキミに分かるか！？」

……

見ると、有栖の瞳からは僅かながら涙が流れ落ちていた。

お前は泣いているのか……？

「ボクは……キミが眠り続けている間、とても辛かったよ。とても悲しかったよ……もう眼が覚めないんじゃないかって思った日が何日もあったよ。」

……

「キミが傷つく姿を見て、とても苦しかったよ。辛かったよ……そんな思いがこの後も続くくらいならボクはもう我慢できない。いや、我慢したくない……だから！ボクはデュエルでキミを倒して、キミと結婚……いや、キミを奪ってみせる……！」

有栖の言っている事が途中から無茶苦茶になっているぞ。

心配かけてしまったのは悪いとは思ってはいた。…しかし、それが原因で彼女をここまで追い詰めていたとは思ってもよらなかった。

元をたどってしまえば、元凶は俺にあると言われても反論は出来ない。

それを告げてしまうと、有栖はまた何かを言いだすのは眼に見えている。

後、今の彼女に何を言っても、話を聞いては貰えないだろう。下手をすれば、逆効果になりかねなくなり、最悪の場合、彼女を逆上させてしまうだけかも知れない。

文字通り、火に油を注ぐ行為でしかない。その果てにあの馬鹿師弟の騒動に協力してしまう結果だ。

彼女をここまで追い詰めた原因を作った俺が、有栖にできる事はデュエルで彼女に勝つ。後の事はその時に考える。まずは眼の前の事に集中だ。

生前時に両親……特に母親から「先の事を考える前にまずは眼の前の事を考えなさい」とよく、口を酸っぱくして言われた事を思い出す。

「……デュエルを続ける。エンドフェイズ、自身の効果で墓地に行つたスターダスト・ドラゴン\バスターを特殊召喚する。」

「（いくら優でも、この布陣は突破出来ない筈：状況は絶対にボクに有利だ。）」

スターダスト・ドラゴン\バスター

ATK 3000

優

モンスター：1

「俺のターン。ドローフェイズ時にフィールド魔法、Sin Worldの効果が発動する。このカードがフィールド上に存在する限り、自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに発動する事ができる。自分のデッキから「Sin」と名のついたカード3枚を選択し、相手はその中からランダムに1枚選択する。俺が選択するのは、Sin パラレルギアが2枚、Sin トウルース・ドラゴンが1枚：さあ、選んで貰おうか。」

俺は3枚をシャッフルし、俺も含めて、誰にもわからないように伏せたまま、有栖の方へ見せる。

「（ドローを封じて、特定のカードをサーチするフィールド魔法：）なら、ボクは真ん中のカードを選ぶ。」

「分かった：その後、相手が選択したカード1枚を自分の手札に加えて、残りのカードをデッキに戻してシャッフルする。」

俺は選ばれなかった2枚のカードをデッキに戻して、シャッフルする。

シャッフル後、デッキをディスクのデッキホルダーへ戻す。

優

手札：3

「チューナーモンスター、Sin パラレルギアを召喚。」

Sin パラレルギア

ATK 0

優

手札：2

モンスター：2

「Sin パラレルギアはシンクロ素材とする場合、このカード以外のシンクロ素材モンスターは手札の「Sin」と名のついたモンスター1体でなければならない。」

「手札のモンスターとシンクロ!?!」

「俺は手札のSin スターダスト・ドラゴンをシンクロ素材とす

る。レベル8、Sin スターダスト・ドラゴンにレベル2、Sin
n パラレルギアをチューニング。」

手札から現れた、所々に黒い鎧を身に纏ったスターダスト・ドラ
ン：Sin スターダスト・ドラゴンとSin パラレルギアは天
へ上がる。

通常のシンクロ召喚とは異なるのか、Sin パラレルギアは黒い
2つの輪へと姿を変える。

8 + 2 = 10

「次元の狭間で蠢く龍よ。その絶大なる力を持ち、世を無に帰せ。
シンクロ召喚！その姿は逆説かSin パラドクス・ドラゴン！」

Sin パラドクス・ドラゴン
ATK 4000

優

手札：1

「攻撃力4000…！」

「Sin パラドクス・ドラゴンの効果発動。このカードがシンク
ロ召喚に成功した時、自分か相手の墓地に存在する蘇生制限を満た

したシンクロモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。」

「蘇生制限…って何？」

「…蘇生制限は正規の手順でフィールドに召喚したモンスターの事だ。シンクロモンスターの場合はシンクロ召喚を行っていれば、気にする必要はない。蘇れ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

優

モンスター：3

「更に魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地からモンスター5体を選択して、デッキに戻す。戻すのはSin パラレルギア、Sin スターダスト・ドラゴン、ドラゴンに乗るワイバーン、ダーク・リゾネーター。ドラゴンに乗るワイバーンは融合モンスターのため、融合デッキに戻る。」

選択したカードをデッキに戻し その後、カードを2枚ドロ―。

優

手札：2

「魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札からモンスターカ

カードを墓地へ送る事で発動、デッキ・手札からレベル1モンスター1体を特殊召喚、デッキからグロリアップ・バルブを特殊召喚。」

グロリアップ・バルブ

ATK 100

優

手札：0

モンスター：4

「そして、今。墓地に送ったレベル・ステイラーの効果が発動。このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル5以上のモンスター1体を選択して発動、選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。俺はスターダスト・ドラゴン\バスターのレベルを下げて、墓地より特殊召喚。」

レベル・ステイラー

ATK 600

スターダスト・ドラゴン\バスター

レベル10 9

優

モンスター：5

「レベル1、レベル・ステイラーにレベル1、グローアップ・バルブをチューニング。」

レベル・ステイラーとグローアップ・バルブが天へ上り、グローアップ・バルブは1つの輪へと変化した。

1 + 1 = 2

「2つの星々が混じり合う時、更なる希望が舞い降りる…シンクロ召喚！来い、シンクロチューナー！フォーミュラ・シンクロン！」

フォーミュラ・シンクロン

ATK 200

優

モンスター：4

「フォーミュラ・シンクロンがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする。」

優

手札：1

「…これで決める。レベル8、シンクロモンスタースターダスト・ドラゴンにレベル2、シンクロチューナーフォーミュラ・シンクロンをチューニング!」

フォーミュラ・シンクロンが2つの輪となってスターダストと共に星になる。

2 + 8 = 10

「星屑の竜よ。光を超えた速さを得て、更なる限界の境地へ達せよ。シンクロ召喚! 生来せよ、シューティング・スター・ドラゴン!」

シューティング・スター・ドラゴン

ATK 3300

優

モンスター：3

俺の場には、スターダスト・ドラゴン、バスター、Sin パラドクス・ドラゴン、シューティング・スター・ドラゴンが並んだ。

俺自身もここまで回るとは思わなかった…手札が死者蘇生ではないのが残念だ。

「……………」

「铮々たるモンスター達だね…来なよ。優、ボクはそのドラゴン軍団を乗り越えて行き、キミを迎えに行く！」

「なら……俺は真つ向からお前を倒す。」

「バトルフェイズ、Sin パラドクス・ドラゴンでマシンナーズ・フォートレスを攻撃。」

「!？」

Sin パラドクス・ドラゴン

ATK 4000

マシンナーズ・フォートレス

ATK 4100

優

LP:1200 1100

モンスター:2

「っ……………」

「どういっつもりだい？折角出したモンスターを自爆特攻で破壊す

るなんて……自棄にでもなった？」

「俺はいつでも平常心を保っている。自棄になった訳じゃない。」

S i n パラドクス・ドラゴンが破壊されたことで勝つ布石は整った。

「…俺はS i n パラドクス・ドラゴンの破壊にチェーンして、手札からモンスター効果を発動する。このカードは通常召喚できないが、「S i n」と名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊された場合、LPを半分払う事でのみこのカードを手札または墓地から特殊召喚できる。現れる、S i n トウルス・ドラゴン！」

S i n トウルス・ドラゴン

A T K 5000

優

L P : 1100 550

手札 : 0

モンスター : 3

「攻撃力5000……」

「S i n トウルス・ドラゴンでマシンナーズ・ギアフレームを攻撃。」

Sin トウルース・ドラゴン
ATK 5000

マシンナーズ・ギアフレーム
ATK 3400

有栖

LP:3500 1900

モンスター:1

「くっ……だけど、その2体ではマシンナーズ・フォートレスには手出しは出来ないよね。」

「Sin トウルース・ドラゴンの効果発動。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。」

「え……」

有栖

モンスター:0

「シューティング・スター・ドラゴン、スターダスト・ドラゴン、バスターでダイレクトアタック。スターダスト・ミラージュ!アサルト・ソニックバーン!」

シューティング・スター・ドラゴン
ATK 3300

スターダスト・ドラゴン、バスター
ATK 3000

有栖

LP : 1900 - 4300

WIN : 優

俺と有栖のデュエルに決着が着き。サンダーと明日香のデュエルを見ると、サイバー・エンジェル - 弁天 - を儀式召喚して、サンダーに引導を渡す姿が見えた。

どうやら、あちらも決着が着いたか。

あっちの方は明日香に任せるとして……

「負けた。ボクは……」

負けたのがショックだったのか、有栖は座り込んでしまう。

俺は有栖に一步一步、近づいて行き。

「…」

「!?!」

「優君!?!」

「優!?!」

「おおおおお!?!」

「だ、大胆ですわ……」

「優君もなかなか、やり手だねえ。」

俺は有栖を抱きしめる。壊れ物を扱うように優しく、そっと……

その直後、後ろの方から何やら声が聞こえるが、俺は無視する事にした。

「有栖…何も言わずにただ、聞いてほしい。これから話す事は俺が今まで思っていた事だ。」

「…う、うん。」

ここまで来てしまったら、洗い浚い話すしかない。

もし、有栖が俺を拒絶するような事であるのなら俺はもう、この学園にすらいられない……

そう、思ってしまう。

「俺は怖かった。もし、有栖が俺の秘密を知って、俺から離れて行ってしまっんじゃないかと言う恐怖からお前の想いを受け入れられずにいた。」

「！」

「お前から向けられた好意は正直な話、嬉しかった……誰かに「気になる異性か？」と聞かれたら間違いない、頷いていると思う。」

「……！」

「こういう経験は今までなかったから言えないけど。お前の事は……本当に大切だと思っている。」

「優……！」

「しかし、最初に言ったが、恐怖に怯えていた臆病者だったんだ俺

は…向けられている好意を上手く誤魔化している最低な人間だ。更に好意を向けて来る人に愚行とも言える行動させるにまで追い詰めた最低最悪な人間だ。」

「優……ボクもキミに伝えたい事があるんだ。キミの顔を見て。」

有栖は今まで密着していた身体を離し、俺と見詰め合うような状態となった。

「キミに何らかの秘密があるのは分かっていた。それが原因でキミが苦しんでいるのに気付けなかった。」

……

「でも……大丈夫だよ。ボクはキミにどんな秘密があっても全部受け入れる。それ位、ボクはキミの事が好きなんだ。」

！！！！

「だから、ボクに教えて欲しい……キミの秘密を全部。」

その言葉を最後にお互いが沈黙し、有栖は優しい微笑みを俺に向けたまま、こちらを直視している。

本当に受け入れてくれるのだろうか……仮にそうだとしても、シヨックを受けてしまうかもしれない。

「聞いても後悔しないって……約束してくれるか？」

「後悔なんかしないよ。ボクはキミの全てを受け入れるつもりだから。だから話して欲しいんだ。」

「……分かった。」

俺は覚悟を決めて、話すことにした。

「!？」

「な、何？」

話そうとした時。突如、島全体を揺るがすような地震が発生する。

今回の最強カード

優「今回の最強カードはSin トウルース・ドラゴン」

Sin トウルース・ドラゴン
効果モンスター

レベル12 闇属性 ドラゴン族 ATK 5000 DEF 5000

効果：このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「Sin トウルース・ドラゴン」以外の「Sin」と名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊された場合、ライフポイントを半分払う事でのみこのカードを手札または墓地から特殊召喚できる。

「Sin」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

主な収録パック：「Vジャンプ書籍付属カード」

優「レベル12の特殊召喚モンスター。」

有栖「このカード以外の「Sin」と名のつくモンスターが破壊された時にLPを半分支払う事で得召喚できる効果と戦闘で相手モンスターを破壊すると相手フィールド上の表側表示モンスターをすべて破壊する効果を持っているよ。」

優「召喚条件に関してはあらかじめ、このカードをおろかな埋葬や竜の渓谷等で墓地に送って置くの良いかもしれない。出す上で相性がいいカードとなると、デッキを選ばないSin スターダスト・ドラゴンやSin サイバー・エンド・ドラゴンがお勧めだ。」

有栖「チェイン2以降で「Sin」のモンスターが破壊されたときも、チェイン処理後に新たにチェインを組むことでタイミングを逃さないで特殊召喚できる裁定になっているよ。」

優「LPを半分支払わなければならないが：裏を返せば、LPがあれば必ず召喚できる利点がある。」

有栖「召喚するとき払うコストは巨大化と組み合わせれば、10000になるから1ターンキルも夢じゃないよ。」

優「このカードの破壊効果に関してだが、これはダメージステップに発動するため。我が身を盾に等を発動されなくなる。更にリクルターを倒したとしても、リクルターの効果処理してからこのモンスターの効果処理になるため、リクルート先のモンスターも問答無用で効果破壊できるので覚えておこう。」

第30話 全て滅せよ、Sin トウルース・ドラゴン（後書き）

作：自身の不慮の事故（？）により、暫くは更新が停滞してしまうかも知れないので宜しくお願いします。

優「何があつたんだ？」

有栖「どうせ、また碌な事じゃないんでしょ？」

作：足が化膿しました。（「本気と書いて、マジと読む」位マジです。）

天空夫婦「は！？」

有里「…何でそうなったの？」

作：原因が分からないからこつちが聞きたいです。数日前に足が痛いつて思つて放つておいたけど。痛みは増す一方だったので「これはただ事じゃないな」と思い。病院に行きました。

優「痛いなら素直に病院に行け。」

作：医者には「化膿してるね。」とか言われる始末で毎日、点滴を打ちに行かなければならない状態です。治りしだい続きを書けるように努力は致します。今話は中途半端だったので、足痛いのを堪えて、仕上げました。

優「何やっているんだ？」

有栖「日頃の行いが悪いからじゃないの？」

作：ひ、酷い……（ガビーン！）

俺が有栖に俺の持つ秘密を話そうとした時、突如、島全体を揺るがすような地響きが発生する。

「な、何？」

「ま、また地震?!」

この地響きは大徳寺教諭との戦う前に起こった地震の比ではない。

……認めたくないが、最悪の結果になってしまった。

なるべくならば、この結果だけは何が何でも避けたいと思っていた。

だが、恐らくはもう手遅れだろう。

「え、何？何が起こるの？」

地響きは収まる所か、更に揺れを増している。

「な、何だありゃ!？」

見ると、森林地帯がある方向から7本の先端が鋭利に尖った柱が方

向は無茶苦茶だが、森林の中から顔を出すように突き出ていた。地響きはその7本の柱が出現すると収まる。

「え……な、何？」

「し、七星門の鍵が……」

森林地帯の方に見える光景に呆然としている俺達は有栖とサンダーの声で我に帰る。

有栖とサンダーの首に下げられていた合計7つの七星門の鍵が光を帯びていた。これは……

「有栖！サンダー！その鍵を首から外すんだ！早く！」

「え？う、うん。」

「優、どういう……」

有栖はすぐに外してくれたが、サンダーは外さなかったため、鍵に引き摺られるるように森林の方へ入って行った。

有栖の手に握られていた3つの鍵も有栖の手から離れて、森林の方へ入って行ってしまふ。

「ああ……か、鍵が！」

「ま、万丈目君!？」

「お、おい! 万丈目!？」

サンダーは「サンダーー!!」と言う声を響かせながら、森林の奥の方へ入って行き、俺達もその後を追う。

森林内を追跡中にサンダーの身体は鍵に釣り上げられるように宙に浮き、森林内の樹の一本に直撃。

その拍子に、サンダーと鍵を繋いでいた紐は引き千切れ、サンダーの身体はそのまま、地へ落下。

皆はサンダーをスルーし、森林の奥へと進んで行く、ある程度奥へ進むと森林内には大きなクレーターができあがっていた。

「あれは……」

見ると、1本の柱に対して、1つの七星門の鍵が吸い込まれて行った。

7本の柱全部に7つの鍵が吸い込まれてしまう。

予想が当たってしまった。

「もしかして、七星門が……」

「開くのか……!?」

背後からサンダーの間の抜けた声が聞こえ、みんなはその声に呆れかえってしまふ。

「みなさん!!」

「何事ナノーネ!」

異変に気付いたのか、その場に鮫島校長とクロノス教諭が駆けつけて来る。

「一体全体どうなっているノーネ?」

「それが七星門の鍵が……」

『サンダーのせいだ!』

「ああ、そうか!七星門は俺の愛の力のせいだ。」

俺とカイザー以外の生徒全員がサンダーを指さして言う。

サンダー本人は全く悪そびれる様子がなくて、その様にみんなは再

び、呆れかえってしまふ。

それから間もなく。再び、地響きが発生する。

クレーターの方を見ると、地響きとともにクレーターの中央部から何やら機械が現われる。

機械の中から3枚のカードが出現する。とうとう、出てきてしまったか。

「あれが……」

「三幻魔のカード……！」

十代達はそのカードのある、装置に近付いて来こうとする。

【そのカードを貴様らにやる訳には行かん。】

突如、何処からともなく声が聞こえて来る。声は年老いたような声で地声ではなく、拡声機で喋っているような感じであった。

それと同時に空から一機の航空機が上空を通過し、通り間際に後部ハッチから何かを投下して来る。

投下された物体は3つのパラシュートで減速しながら、ゆっくりと地上に落下して来た。

そのパラシュートは地表にある程度近づくと自動的に外れ、投下物は支えを失い。地上へ落下。

落下地点には砂煙が舞った。

「な、何……？」

砂煙が収まるとその中からは4本の脚と2本のアームがついたロボットとも言えるような存在が現われた。

「な、何だ？あのロボットは……」

【ぐふふふふ……鮫島校長、私の声を忘れたのかね？】

ロボットから先ほど聞こえて来た声と同じ声が聞こえて来た。

「その声は……影丸理事長！？」

「影丸…理事長？」

やっぱり、現れたか……この戦いの黒幕。

これは俺の推測だが、大徳寺教諭は恐らく、彼の手によってデュエル・アカデミアに送り込まれた。

彼の履歴データも恐らくは影丸理事長の手によって消去された可能性もある。

【時は満ちた。今、ここに三幻魔復活の儀式を行う。】

「三幻魔復活の儀式……」

「どういう事だ！？何故、七星門が勝手に開く！？」

サンダーの疑問は誰もが最もだったのか。影丸理事長は三幻魔をこの地へ封印し、7つの鍵を鮫島校長へ託したのは彼自身だという事を話し出す。

その7つの鍵はこの島に俺達とセブンスターズにデュエリストの闘志を蔓延させる道具に過ぎなかったとも告げられる。

三幻魔の力を覚醒させるために必要なデュエリストの闘志に満ちた空間を作り上げるためにこの学園を設立したと告白する。

この男……本当に歪んでいるな。大徳寺教諭の言う通りだ。こうなってしまった原因があるとすれば、それは三幻魔にあるのだろう……

影丸理事長から発せられた事実に対して、この学園に様々な希望を抱いて入学して来た翔達は激怒し、反論する。

彼らは影丸理事長の思惑道理にはならず、未来は自分たちの手で切り開いていくものだと言われ、影丸理事長に反感する。

彼らの言う通り、未来は俺達の手にある。それは誰にも阻害されない事実。

「ならば、お前達の野望を打ち砕くため、俺が相手をしよう。…オベリスク・ブルーのカイザー、丸藤亮がっ！！」

「いや、このデュエルだけはー！十！百！千！万丈目サンダーが受けて立つー！！」

「いや、この未来を賭けたデュエルはラー・イエローのWエースである。俺、三沢大地と…」

「俺、神楽坂鏡がてめえの野望を打ち砕いてやるー！！」

「いーや、このデュエル。デュエル・アカデミアのブリザード・プリンスである。この天上院吹雪がお相手しよう！」

次から次にと名乗り出て来る。

大地と鏡に関しては、「ラー・イエローのWエースだったのか？」と思われるだろう。

実際にこの二人は他のラー・イエロー生徒のデュエルでも殆ど負けなしである以上、それは正しいとも言える。

【いや、駄目だ。私の相手は遊城十代。お前だ。】

「俺が…」

【ふふふふふ……そう、精霊の力を最も強く持つお前でなければ意味はない。】

刹那 7本の柱は柱同士を繋ぐように稲妻のようなもので俺達のいる場所を覆い尽くしてしまう。

これで俺達の逃げ場は無くなってしまったか。

【私の挑戦を断るのであれば、ここから出られぬまま、この島ごと海に沈むことになる。】

「なんだって!?!」

影丸理事長の乗っていたロボットが変形し、アームが三幻魔のカードを掴み取ってしまう。

【さあ、戦え。遊城十代。……そして…】

影丸理事長は視線を十代から移す。

【転生者・天空優。貴様は私の長年の計画の成就の前に立ちふさが
る最大の障害だ。】

.....

やっぱりか。

だが、彼は本当にどうやって、俺が転生者である事を知っている？

指名されてしまった以上、俺も戦うしかないのは明確だ。

「良いだろう。」

俺は影丸理事長と対峙する十代の隣へ行こうとする。

「優…行かないで。」

いざ、行こうとする時に有栖が俺の右手を掴み、離さない状態だ。

「有栖、俺を行かせてくれ。」

しかし、有栖は首を横に2度、3度と振り。拒むような仕草をする。

「嫌だよ……ボクはこれ以上、キミが……キミが闇のデュエルで傷ついて行く姿を見たくない……」

こんな時でも俺を心配してくれているなんてな。

だけど、この言葉を聞くのも恐らく……これが最後になるだろう。

それでも……!!

「大丈夫。」

有栖を優しく抱きしめ、彼女と視線を交じ合わせる。

「俺は負けない。勝って、お前がいるこの島を…お前が生きているこの世界を守り抜いて見せる。俺の命に代えても…」

「!?!」

「有栖……俺は不器用だから、こんな気休めな事しか言えないけど……俺を信じてくれ。」

胸元から大徳寺教諭から受け取ったエメラルド・タブレットを取り出す。

大徳寺教諭……あなたの意志は俺達が受け継ぎ、必ず彼を止めてみせる……？

エメラルド・タブレットのページの間からある2枚のカードが出て来る。1枚目は三幻魔を倒すために必要とも言える、「賢者の石・サバティエル」のカード。

「このカードは……」

しかし、問題なのは2枚目のカード。何だ？このカードは……白い枠からして、シンクロモンスターのカードか？

だが、カード名どころか。イラスト・テキスト・属性・レベルも何一つ書かれていない。

「賢者の石・サバティエル」のカードをデッキに加えて、シャッフルし、ディスクのデッキホルダーへ装着する。

謎のカードはエクストラデッキに入れて置く事にする。

「影丸！三幻魔との決着は俺と優がつけるぜ！」

【2対1の変則デュエル。お前達、2人のLPはそれぞれ4000、私はその2倍、8000のLPと手札10枚で開始。お互いの最初のターンは攻撃は出来ん。異存は無いな？】

「ああ。」

「さあ、始めようぜ！金魚鉢！」

【闇のデュエルでこの世界から跡形もなく、葬り去ってくれわ。
イレギュラー不規則者が。】

【「デュエル！」「」】

優

LP：4000

十代

LP：4000

影丸

LP：8000

「優、俺から行くぜ。」

「分かった。」

「俺のターン、ドロー！」

十代

手札：6

「E・HERO フォレストマンを守備表示で召喚！」

E・HERO フォレストマン

DEF 2000

十代

手札：5

モンスター：1

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ。さあ、来やがれ！三幻魔。」

┌

十代

手札：4

魔法・罫：1

「俺のターン、ドロ。」

優

手札：6

「THE トリックを特殊召喚。」

THE トリック

ATK 2000

優

手札：4

モンスター：1

「このカードは手札のカードを1枚捨てる事で手札から特殊召喚できる。更にチューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを通常召喚。」

トラスト・ガーディアン

ATK 0

優

手札：3

モンスター：2

「レベル5、THE トリツキーにレベル3、トラスト・ガーディアンをチューニング！」

THE トリツキーとトラスト・ガーディアンは天へ上がり、トラスト・ガーディアンは3つの輪へと姿を変える。

5 + 3 = 8

「8つの星々が集う時、全ての破壊を無に帰す龍がその地へ優しき翼と共に舞い降りる。シンクロ召喚！舞い降りよ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

優

モンスター：1

「更にTHE トリツキーの効果のコストで墓地に送った、スターダスト・シャオロンの効果発動。このカードは自分が「スターダスト・ドラゴン」のシンクロ召喚に成功した時、墓地から攻撃表示で特殊召喚する事ができる。」

スターダスト・シャオロン

ATK 1000

優

モンスター：2

「俺はこれでターンエンド。」

問題は三幻魔の召喚条件がどちらかだ。OCG効果か…それとも原作効果か。

OCGならまだ対処は出来るかもしれないが……

【私のターン。ドロー。】

影丸

手札：11

【私は、場にカードを3枚伏せる。】

影丸

手札：8

魔法・罫：3

【手札から速攻魔法、スケープ・ゴートを発動。自分フィールド上

に羊トークンを4体、守備表示で特殊召喚する。】

羊トークン

DEF 0

影丸

手札：7

モンスター：4

【なお、このカードを発動する場合、私は召喚・特殊召喚が行えない。更に永続魔法、暗黒の扉を発動。このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーはバトルフェイズにモンスター1体でしか攻撃する事ができない。】

影丸

手札：6

魔法・罨：4

【更に永続魔法、平和の使者を発動。フィールド上に表側表示で存在する攻撃力1500以上のモンスターは攻撃宣言をする事ができない。このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に1000ライフポイントを払う。払わなかった場合、このカードを破壊する。】

影丸

手札：5
魔法・罨：5

完全な口ツクを敷いて来たな。

初手で手札が11枚もあつてこそか。

【私はこれでターンエンドだ。】

「俺のターン、ドロー！」

十代
手札：5

「スタンバイフェイズ、E・HERO フォレストマンの効果、その効果でデッキが墓地から融合を加える。俺はデッキから融合を加える。」

十代
手札：6

「永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動！」

十代

手札：5

魔法・罫：2

「自分の融合デッキから融合モンスターを選択して、その融合モンスターの融合素材をデッキから墓地へ送り、2ターン目の自分のスタンバイフェイズに融合モンスターを特殊召喚する。俺は闇を司るHERO、E・HERO エスクリダオを選択。デッキから融合素材である闇属性モンスター、ネクロ・ガードナーとE・HEROと名のつくモンスター、E・HERO ネクロ・ダークマンを墓地へ送る。」

良い選択だ。ネクロ・ダークマンとネクロ・ガードナーは両方とも墓地で発動するカード……

「手札からE・HERO エアーマンを召喚！」

E・HERO エアーマン

ATK 1800

十代

手札：4

モンスター：2

「E・HERO エアーマンが召喚に成功した時、2つの効果を選択して発動。俺は自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在

する魔法または罫カードを破壊する事ができる効果を発動、俺のフィールドにはE・HERO フォレストマンがいる。その効果で俺は平和の使者を破壊する。」

影丸

魔法・罫：4

【小癪な真似を…】

「バトル！E・HERO エアーマンで羊トークンを攻撃！エアースhoot！！」

E・HERO エアーマン

ATK 1800

羊トークン

DEF 0

影丸

モンスター：3

「俺はこれでターンエンド。」

「俺のターン、ドロー。」

優

手札：4

「俺はスターダスト・ファントムを守備表示で召喚。」

スターダスト・ファントム

DEF 0

優

手札：3

モンスター：3

「更にスターダスト・シャオロンを攻撃表示から守備表示にする。」

スターダスト・シャオロン

ATK 100 DEF 100

俺の予想が正しければ、次の影丸理事長のターンで三幻魔が出てくる。

影丸理事長の伏せと手札次第では三幻魔が3体とも出てくる可能性もある。

「スターダスト・ドラゴンで羊トークンを攻撃、シューティング・

ソニック！」

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

羊トークン

DEF 0

【貴様の攻撃など通しはせん。リバースカードオープン。永続罫、光の護封壁を発動。発動時、1000の倍数のライフポイントを払う。このカードがフィールド上に存在する限り、払った数値以下の攻撃力を持つ相手モンスターは攻撃をする事ができない。私は発動コストに4000のLPを支払う。】

影丸

LP：8000 4000

【よって、お前たちは攻撃力4000以下のモンスターでは攻撃宣言が行えなくなった。】

攻撃抑制カード……スターダスト・ドラゴンの攻撃力は2500…
よって攻撃は行えない。

手札にも攻撃力増加のカードはない。4000も払ったという事は
何が何でも俺達の攻撃宣言を封じたいつもりか。

その間に影丸理事長は三幻魔召喚の体制を整えるつもりか？

「……ターン、エンド。」

【私のターン。ドロー。】

影丸

手札：6

【リバースカードオープン。永続罫、DNA改造手術を発動。発動時に種族を1つ宣言して発動する。このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターは宣言した種族になる。私が宣言するのは悪魔族。よって、私とお前達のフィールドのモンスターは全て悪魔族となる。】

羊トークン

獣族 悪魔族

E・HERO フォレストマン

戦士族 悪魔族

E・HERO エアーマン

戦士族 悪魔族

スターダスト・ドラゴン

ドラゴン族 悪魔族

スターダスト・シヤオロン
ドラゴン族 悪魔族

スターダスト・ファントム
魔法使い族 悪魔族

種族を悪魔族に変更：影丸理事長の場には、カードの効果で悪魔族となった羊トークンが3体。

その条件となると効果はOCG仕様か？

【グフフフフ…十代よ。そんなに三幻魔が拝みたいのなら、その姿を見せてやる。】

「何!?!」

【私は悪魔族となった、羊トークン3体を生贄に捧げ…】

3体の羊トークンが天より飛来した蒼い雷に飲み込まれて行く。来るか……

【いでよ! 第1の幻魔、幻魔皇ラビエル!】

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

影丸

手札：5
モンスター：1

「あれが三幻魔の1体……」

とうとう、出て来たか。

【更にリバースカードオープン。永続罠、スピリットバリアを発動。自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。】

今、影丸理事長の場には3枚の永続罠カード。まさか……

【これで第2の幻魔を呼ぶ条件は全て揃った。】

「何!？」

【その眼に解くと焼き付けるがいい。私は場の永続罠を3枚墓地へ送る。】

影丸理事長の場に表側になっていた。光の護風壁、DNA改造手術、スピリットバリアの3枚が消滅。

それと同時に俺達の眼には天へ上る高さの火柱が現れる。

【いでよ、第2の幻魔。 神炎皇ウリア!!】

神炎皇ウリア

ATK ?

影丸

手札：4

モンスター：2

魔法・罾：1

召喚条件もOCG仕様：それならばまだ対処の仕様がある。

【神炎皇ウリアの攻撃力は墓地に眠る永續罾の枚数×1000ポイントとなる。よって、現在のウリアの攻撃力は3000。】

神炎皇ウリア

ATK 3000

「だが、DNA改造手術がフィールドを離れた事で俺達の場のモンスターの種類は本来の種類に戻る。」

E・HERO フォレストマン

悪魔族 戦士族

E・HERO エアーマン

悪魔族 戦士族

スターダスト・ドラゴン

悪魔族 ドラゴン族

スターダスト・シャオロン

悪魔族 ドラゴン族

スターダスト・ファントム

悪魔族 魔法使い族

【神炎皇ウリアのモンスター効果発動。1ターンに1度だけ、相手がフィールド上にセットされている魔法・罫カード1枚を破壊する事ができる。この効果の発動に対して魔法・罫カードを発動する事はできない。トラップ・ディストラクション！】

十代の伏せカードを破壊するつもりか……

「そうは行かない！スターダスト・ドラゴンのモンスター効果発動！フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、このカードを生け贄に捧げる事でその発動を無効にし破壊する。ヴィクテム・サンクチュアリ！」

優

モンスター：2

影丸

モンスター：1

【おのれ…何処までも邪魔立てしおって、幻魔皇ラビエルよ。不^{イレ}規則者の雑魚モンスターを粉碎せよ！天界蹂躞拳！】

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

スターダスト・ファントム

DEF 0

優

モンスター：1

「リバーズカードオープン！畏発動、ヒーロー・シグナル！自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札、またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。俺はデッキからE・HERO プリズマーを特殊召喚する。」

E・HERO プリズマー

ATK 1700

十代

モンスター：3

魔法・罫：1

「更に破壊された、スターダスト・ファントムの効果発動。この力

カードが相手のコントロールするカードによって破壊され、墓地に送られた時。墓地に存在する、スターダスト・ドラゴンを守備表示で特殊召喚する。蘇れ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン

DEF 2000

優

モンスター：2

【ふん、ならば。私のターンのエンドフェイズ。墓地の神炎皇ウリアの効果を発動。このカードが墓地に存在する時、手札の永続罫力カードを墓地に送ることで墓地のこのカードを特殊召喚することができる。この効果を使用するターン。自分フィールド上に他のモンスターが存在する場合、このカードは攻撃をすることができない。私は手札から神の恵みを墓地に送る。蘇れ、神炎皇ウリア！】

神炎皇ウリア

ATK 4000

影丸

手札：3

OCG効果に蘇生効果はない筈。だが、現にウリアは蘇生されている。

どちらにしても早く何とかしない事には変わりはない。

「な、何だこりゃ!?!」

「ど、どういふ事?」

「これは……」

「どうなってるの?」

すると、鏡達は何やら騒ぎ始めていた。いったい、どうしたと言っ
のだろうか?

【今頃、気付いたか。今、闇のデュエルを行っている十代と天空優
以外…既に幻魔がフィールドに現れた時からお前達のモンスターの
生気を吸い上げている。】

「そうか。幻魔とは他のモンスターの生気を吸い上げ、力を発揮す
るモンスター。」

「マンマミリア……」

「だから、封印されたカードって訳か。」

やはり、あれらのカードは人の手に余る存在であったと言う事だ。

【だが、私の幻魔を操る力は不完全。十代、お前に宿る精霊を操る力が必要なのだ。】

「精霊を操る力……」

【私が闇のデュエルに勝利し、お前の精霊を操る力を吸収する。その時、三幻魔はここから飛び出し、世界中のデュエルモンスターズの精霊を喰らい尽くすのだ。】

「三幻魔がカードの精霊を……」

【そして、三幻魔は私に永遠の命を与え、私はこの地上で神となるのだ。】

「そして、神になって何をするつもりだ？」「この世界を支配する」とでも言いたいのか？」

ああいうセリフを吐く奴の考えは揃いも揃って同じだから。大方予想がつく。

【貴様の知れた事ではない。その時に貴様はこの世界から肉体も魂も消えているのだからな。】

「何？」

【十代を倒し、力を吸収する前に三幻魔の力でこの世界から「貴様」と言う存在を塵一つ残さずに消滅させてくれるわ。不規則者・天^{イレギュラー}空優！！】

三幻魔の効果に関して

効果はOCG効果ですが、それではあまりにも弱い気がしたのでOCGの効果に以下の効果を付加させる仕様になりました。

神炎皇ウリア：エンドフェイズにこのカードが墓地に存在する時、手札の永續罫カードを墓地に送ることで墓地のこのカードを特殊召喚することができる。

この効果は相手ターンにも使用する事ができる。

降雷皇ハモン：エンドフェイズにこのカードが墓地に存在する時、手札の永續魔法カードを墓地に送ることで墓地のこのカードを特殊召喚することができる。

この効果は相手ターンにも使用する事ができる。

幻魔皇ラビエル：エンドフェイズにこのカードが墓地に存在する時、手札の悪魔族モンスターを墓地に送ることで墓地のこのカードを特殊召喚することができる。

この効果は相手ターンにも使用する事ができる。

第32話 優&十代VS影丸(中編)

優の真実

前回からのデュエル状況

優

LP:4000

手札:3

モンスター:2

魔法・罫:0

スターダスト・ドラゴン

DEF 2000

スターダスト・シャオロン

DEF 100

十代

LP:4000

手札:4

モンスター:3

魔法・罫:1(表側1(未来融合・フューチャー・フュージョン))
0ターン))

E・HERO エアーマン

ATK 1800

E・HERO フォレストマン

DEF 2000

E・HERO プリズマー

ATK 1700

影丸

LP:4000

手札:3

モンスター:2

魔法・罫:1(表側1(暗黒の扉))

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

神炎皇ウリア

ATK 4000

【十代を倒し、力を吸収する前に三幻魔の力でこの世界から「貴様」と言う存在を塵一つ残さずに消滅させてくれるわ。不規則者・天空イレギュラー優!】

……不規則者イレギュラーか。それは強ち、間違いではないか。

影丸理事長の言葉に俺と鮫島校長以外の人間は困惑し始めていた。

「優が不規則者だと？どういう意味だ。」

「不規則者……不規則。または変則と言う意味だが……それはどう
いう意味だ？」

「あの爺さんも大徳寺先生と同じで優の事を転生者と呼んでいた。」

「優。……キミはいつたい……」

影丸理事長の言葉で鏡達も薄々気づき始めているか。

【まだ分からぬか。ならば、教えてやろう！そこにいる天空優は元々、この世界に存在している人間ではない。】

……終わるか。バレてしまった以上……もう言い逃れは出来ない。

「な、何だと!？」

「優がこの世界に存在している人間じゃない？」

「ど、どういう意味なんツスカ!？」

「優!どういう意味か、ちゃんと説明しなさいよ!!!」

上からサンダー、明日香、翔、ジュンコが騒ぎ出す。

有栖や鏡達の方を見ると。皆、動揺を隠せないような表情をしていた。それにはあのカイザーも例外ではなかった。

こうなってしまうとは、俺も覚悟を決めて洗い浚い話すしかない…
…か。

「……影丸理事長の言葉通りの意味だ。俺はこの時代……この世界の人間じゃない。……元々、住んでいた世界で命を失い。この世界へ「転生」と言う形でやって来た。」

『!!!!!!!』

視線をみんなに向けてみると、みんな信じられないような表情をしていた。

「そ、そんなオカルトみたいな話なんて信じられないノーネー！」
クロノス教諭の言葉が最もな意見だ。しかし、現実には非情でしかない。

「この世界ではまだ一般には出回っていない。シンクロ召喚やそれの鍵ともなるチューナーモンスター…それがその証拠だ。」

『……………』

その言葉にみんな黙り込んでしまう。分からないでもないか。

今まで一緒にいた奴が実は死人で別の世界の人間だって聞かされたらな……

923

「……………うして……………」

…鏡？

「どうして、そんな事を俺達に黙っていたんだよっ！俺達は友達じゃなかったのかよっ！！」

……………

「何とか言ってみるおっ！優！」

「神楽坂……」

何故か……

胸の内を明かすと同時に覚悟を決める事にした。

これを聞いたらみんなは拒絶するだろうな……その覚悟も決めるか。

「俺は怖かったんだろうな。」

「怖かった？」

「俺の真実を知ったらみんなはどうなってしまうのだろうか？と思つて、怖くて言いだす事ができなかった。」

正直言えば、言わずに済んだらどれだけ楽だっただろうとも思った。

だけど、世の中はそこまで甘くはないのは分かってはいた。

「そして、話してしまつたら…この世界で初めてできた友人や居場所。それらが全部無くなつてしまう。……そんな恐怖心に駆られて言いだせなかつた。」

「優……………」

暫く沈黙が続き、声を上げたのは影丸理事長である。

【くくくく、笑わせてくれる。不規則者が…この世界の神となる私が断言してやる。この世界に貴様の居場所など最初から存在しないのだ。】

！！！

そうなのか…やっぱり、この学園に…

いや、この世界には俺の居場所は……ない。

俺は異端…だから消えて行く定めだったのか。

やはり……この世界に来るべきではなかったのか？俺は…

【だが、恐れるな…イレギュラー不規則者よ。三幻魔の力を解き放った時、手始めにその恐怖心事、貴様を消し去って】

「消させない！絶対に消させない！」

……十…代……？

「イレギュラー優は不規則者なんかじゃねえ！優は俺の……いや、俺達の大事な仲間で友達だ！！」

……！！！！

【まだわからぬか。そいつは……】

「ゴチャゴチャとうるせえんだよ！理事長だかなんだか知らねえが、
てめえに優の事をどうこう言う権利なんかねえんだよ！このくたば
り損の糞爺があっ！」

鏡……！！

「優！お前が俺の新しいデッキを作ると決めた時、お前は自分の事
のように真剣に考えてくれたよな。」

……

「それでお前は俺を友達だと言ってくれたよな？……あの時、本当
に嬉しかったんだ。」

……！！

「優！お前が違う世界から来て人間だからって、俺達はお前との付
き合い方を変えたりしねえっ！！」

！！！！

「優、お前が俺達に負い目を感じているなら。もっと俺達の事を頼
つてくれ。」

大地……

「もし、アニキや優君と出会えなかったら、今の僕は無かったかも
しれないんだ。」

翔……

「優と友達になれて、俺。色々と変わる事ができたんだな。その思
いを無駄にしたくないんだな。優、気張ってくれ！」

隼人……

「最初は俺を散々、馬鹿にしてくれた借りを返すまでは消えさせん
ぞ？優。」

サンダー……

「優、あなたには謎が多すぎるのよ。だから、話して楽になりな
さいよ。話しちゃえば、色々とスッキリするわよ？」

明日香……

「一応、アンタには感謝してんのよ？十代を助けてくれた事とかさ。」

ジュンコ……

「天空さん。どんな事があっても天空さんは天空さんですよ。」

ももえ……

「優。君とのデュエルを通して、俺は君が偽る事ができない正直で他人を思いやれる優しい人間だと分かった。何より君には一度負けている。そのリベンジをしなければならない。」

カイザー……

「シニョール天空。あなたは自分の居場所はないと思っているようですが、あなたはこの学園の生徒ナノネ。生徒である以上、そこがあなたの居場所になるノーネ。」

クロノス教諭……

「優…ボクは正直、色々と戸惑っている。キミの秘密のスケールがあまりにも大きすぎて……」

「でも、ボクはそんな理由でキミを嫌いになんかなれないよ。…だから、このデュエル。絶対に勝って！キミのためにも……」

有栖……

【馬鹿な……何故、そこまでそやつの事を信じられる。そやつはこの世界を混乱に導きかねない。文字通り、不規則者イレギュラーになりえるとも言えるのに……】

「糞爺！てめえに優の何が分かる。てめえの勝手な理屈で決めつけてんじゃねえっ！！」

「例え、そうだったとしても、優君はそんな事をするような人間じゃないんだ！」

「これでわかつたろ？影丸。優は俺達の仲間だ。不規則者イレギュラーなんかじゃない！そんな事、俺達が絶対に認めない！」

……

この時、つくづく俺は本当に視野が狭い人間だと思い知らされた。

自分の事で頭が一杯で全然気付いていなかったが、俺の周りにはこんなに頼れる友人達がいた事を……

そして、真実を知ってなお、受け入れ。愛してくれる人がいた事を

……

だからこそ、俺は負けられない。

「デュエル続行だ……十代、お前のターンだ。」

「おう。俺のターン、ドロー！」

十代

手札：5

未来融合 - フューチャー・フュージョン（1ターン目）

「スタンバイフェイズにフォレストマンの効果を発動、デッキから2枚目の融合を手札に加える。」

十代

手札：6

「手札から魔法カード、融合を発動。場のE・HERO エアーマンとE・HERO フォレストマンを融合！来い、俺と優の絆を示すカードの1枚、風のHERO！E・HERO Great TORNADO！」

E・HERO Great TORNADO
ATK 2800

十代

モンスター：2

手札：5

【だが、所詮。三幻魔の敵ではない。次の私のターンで消し飛ばしてくれるわ。絆の雑魚カードをな。】

「E・HERO Great TORNADOの効果発動、このカードが融合召喚に成功した時に相手フィールド上に存在する全モンスターの攻撃力と守備力を半分にする。タウン・バースト！」

【なんだと…！？】

幻魔皇ラビエル

ATK 4000 2000

神炎皇ウリア

ATK 4000 2000

「E・HERO Great TORNADOで幻魔皇ラビエルを
攻撃！スーパースェル！」

E・HERO Great TORNADO

ATK 2800

幻魔皇ラビエル

ATK 2000

影丸

LP:4000 3200

影丸理事長のLPが半分を切った。

こちらのLPはまだ無傷のまま、流れは僅かながらではあるが俺達
に向けて来ている。

【ぐぬう……】

「俺はこれでターンエンド。」

【エンドフェイズ、墓地に存在する。幻魔皇ラビエルの効果発動、

エンドフェイズにこのカードが墓地に存在する時、手札の悪魔族モンスターを墓地に送ることで墓地のこのカードを特殊召喚することができる。私は手札の幻銃士を墓地に送り、蘇れ！幻魔皇ラビエル！」

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

影丸

手札：2

こつちも蘇生効果持ちか…正に不死身か。

「そんな、折角倒した三幻魔が復活しちゃった……」

「だが、三幻魔が復活するには蘇生コストカードを墓地に送らなければならぬ。」

「それが続くなら手札の消耗も激しくなる。そして、やがては手札がなくなればそれもできない。」

「戦いが長引けば、2人に勝機があるか…」

大地、明日香、サンダーの言う通り。

復活のコストに対応するカードが切れれば、復活は出来ない。

何度も復活するならば、俺達はそれをその度に倒すだけ。

「……十代。」

声をかけると、彼は軽く視線をこちらへ向けてくれた。

「このデュエル。絶対に勝つぞ。」

「おうー！」

十代は力強く返事をしてくれた。

俺は一人で戦っているんじゃない。十代と……

いや、俺を仲間…友達と言ってくれた友と共に一緒に戦っている。

「俺のターン、ドロー！」

なら、俺は俺を受け入れてくれた人達を護るためにも力を出し惜しむつもりはない。

手札を使い切る勢いで行く！

優

手札：4

「俺は魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札からモンスターカードを墓地へ送る事で発動、デッキ・手札からレベル1モンスター1体を特殊召喚、デッキからバリア・リゾネーターを特殊召喚！」

バリア・リゾネーター

ATK 300

優

手札：2

モンスター：3

「レベル1、スターダスト・シャオロンにレベル1、バリア・リゾネーターをチューニング。」

スターダスト・シャオロンとバリア・リゾネーターが天へ上り、バリア・リゾネーターは1つの輪へと変化した。

1 + 1 = 2

「2つの星々が混じり合う時、更なる希望が舞い降りる…シンクロ召喚！来い、シンクロチューナー！フォーミュラ・シンクロン！」

フォーミュラ・シンクロン

ATK 200

優

モンスター：2

「フォーミュラ・シンクロンがシンクロ召喚に成功したため、デッキからカードを1枚ドローする！」

優

手札：3

この手札なら……行ける！！

「レベル8、シンクロモンスタースターダスト・ドラゴンにレベル2、シンクロチューナーフォーミュラ・シンクロンをチューニング

「！」

フォーミュラ・シンクロンが2つの輪となってスターダストと共に星になる。

2 + 8 = 10

「星屑の竜よ。光を超えた速さを得て、更なる限界の境地へ達せよ。シンクロ召喚！生来せよ、シューティング・スター・ドラゴン！」

シューティング・スター・ドラゴン

ATK 3300

優

モンスター：1

「魔法カード、星屑のきらめきを発動。自分の墓地のドラゴン族シンクロモンスター1体を選択。そのモンスターと同じレベルになるように選択したモンスター以外の自分の墓地に存在するモンスターをゲームから除外し、選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。俺は墓地のレベル8のスターダスト・ドラゴンを選択、その効果で墓地のレベル5、THE トリツキーとレベル3、トラスト・ガイデียนをゲームから除外！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン

ATK 2500

優

手札：2

モンスター：2

「更に魔法カード、シンクロ・チェンジを発動。自分フィールド上のシンクロモンスター1体を除外し、除外したモンスターと同レベルのシンクロモンスターを効果を無効化にして、エクストラデッキから特殊召喚する！俺はスターダスト・ドラゴンを除外！除外したスターダスト・ドラゴンのレベルは8。よって、エクストラデッキからレベル8のシンクロモンスター、レッド・デーモンズ・ドラゴンを特殊召喚する。いでよ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴンは突如出現した穴に吸い込まれ、その吸い込まれた穴から入れ替わるようにレッド・デーモンズ・ドラゴンが現われる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

優

手札：1

「俺はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを通常召喚！」

ジャンク・シンクロン

ATK 1300

優

手札：0

モンスター：3

「ジャンク・シンクロンの召喚に成功した時、自分の墓地からレベル2以下のモンスターを表側守備表示で特殊召喚。墓地からバリア・リゾネーターを特殊召喚！」

バリア・リゾネーター

DEF 800

優

モンスター：4

【いくら雑魚モンスターを並べようと三幻魔の敵ではないわ。幻魔皇ラビエルの効果。相手がモンスターを召喚する度に自分フィールド上に幻魔トークンを1体特殊召喚する。いでよ、幻魔トークン。】

幻魔トークン

DEF 1000

影丸

モンスター：3

「これを見ても、それが言えるか？レベル8、レッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル3、ジャンク・シンクロンとレベル1、バリア・リゾネーターの2体のチューナーモンスターをダブル・チューニング！」

【何…】

「……………ダブル・チューニングッ！！??」「……………」

8 + 3 + 1 = 12

ジャンク・シンクロンとバリア・リゾネーターが灼熱の炎を思わせるような炎の輪へと姿を変え、

レッド・デーモンズ・ドラゴンがその輪へと入っていく。

「魔龍と邪神。今こそ、その魂を一つに！紅き灼熱の業火よりその姿を真に表せ。シンクロ召喚！いでよ、紅星龍！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンー！！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK 3500

モンスター：2

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴン…攻撃力3500。」

「最上級レベルクラスのモンスターを2体を1ターンで並べるとは…」

【だが、3500ではラビエルには及ばんぞ？】

「それはどうかな？」

【何？】

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは攻撃力を墓地に眠るチューナーモンスターの数×500ポイントアップさせる。俺の墓地に眠るチューナーはジャンク・シンクロン、フォーミュラ・シンクロン、

バリア・リゾネーターの3体。よって、1500ポイントアップ。」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK 3500 5000

【攻撃力5000だと？】

「良いぞ、優。これでラビエルも倒せるぜ！」

だが、どれを攻撃するかだ。2体を出しても、暗黒の扉で攻撃できるのは1体だけだ。

ダメージ優先を考えるならばウリア。だが、次の影丸理事長のターンで攻撃力5000で蘇生される。

こういう場合は攻撃せずに場にとどめて置いた方が良い。万が一、ダイレクトアタックを受けてもその数値は2000…被害は最小限で抑えられる筈。

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで幻魔皇ラビエルを攻撃。燃やし尽くせ！業火の魂、バーニング・ソウル！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK 5000

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

影丸

LP：3200 2200

モンスター：2

【ぬうううう……】

「俺はこれでターンエンド。」

Side Change

有栖 Side

有栖 Side

影丸が場を支配していたフィールドは十代君と優のターンが終わり、状況は逆転された。

優の場には攻撃力3000以上の大型シンクロモンスターが2体……シューティング・スター・ドラゴンとスカーレット・ノヴァ・ド

ラゴン。

ボク等はその光景に眼を奪われている。

「何てデュエルをするのよ、あいつ。」

「あの状況を引っくり返すなんて……」

「あれが優の本当の力なのか……」

「そうだよ、ボクには分かる……優だから出来る事なんだと思うよ。」

「有栖さん？」

優：キミは本当に辛かったんだよね。……ごめんね、そこまで苦しんでいたのに分かっていなくて……

これじゃ、キミにはボクの言葉は薄っぺらい言葉にしか聞こえなかったよね？

神楽坂君が言ったように、キミが異世界の人間だったという事実だとしてもボクのこの胸の内に秘めている。キミへの愛の想いは変わらないよ。

勝って、無事に帰って来たら抱きしめてあげたい。もう無理をしなくてもいいと伝えたい。

そして、泣きたかったら泣かせてあげたい。ボクが全部、受け止め

てあげるから……

だから、絶対に勝って。

有栖 Side 終了

Side Change 優 Side

優 Side

【だが、エンドフェイズに手札から悪魔族モンスター・クリッターを墓地に送り、墓地から特殊召喚する。】

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

影丸

手札：1

モンスター：3

【私のターン、ドロー。】

影丸

手札：2

【手札から強欲な壺を発動。その効果でデッキからカードを2枚ドローする。】

影丸

手札：3

【更にフィールド魔法、失楽園を発動。】

失楽園（TFオリジナルカード）

フィールド魔法

フィールド上に「神炎皇ウリア」「降雷皇ハモン」「幻魔皇ラビエル」の内1体以上が存在している場合、そのカードのコントローラーは1ターンに1度だけデッキからカードを2枚ドローできる。

フィールド：無

失楽園

影丸

手札：2

場は薄暗い暗闇の空間に包まれて行く。

まずい、三幻魔専用のサポートフィールド魔法が現われた。

【フィールド魔法、失樂園はフィールド上に三幻魔が一体以上存在している場合、1ターンに1度、デッキからカードを2枚ドローできる。その効果で私はカードを2枚ドロー。】

影丸

手札：4

【永続魔法、軽量化を発動。1ターンに1度。手札からレベル7以上のモンスター1体をデッキに加えてシャッフルした後、カードを1枚ドローするが、私はこの効果は発動しない。】

影丸

手札：3

魔法・罫：2

【更に永続魔法、カードトレーダーを発動。自分のスタンバイフェイズ時に手札を1枚デッキに戻す事で、自分のデッキからカードを1枚ドローする。】

影丸

手札：2

魔法・罫：3

永続魔法が3枚……

【私は場に存在する永続魔法を3枚を墓地へ送る。】

！！……来る。

影丸

魔法・罫：0

【いでよ。そして、その姿を現せ！3体目の幻魔。降雷皇八モン！】

地の底から氷の柱が現れ、それが砕けた中から3体目の幻魔：降雷皇八モンが現われる。

ついに三幻魔が3体とも召喚されてしまった。

降雷皇八モン

ATK 4000

影丸

モンスター：4

手札：1

「出た……」

「ついに三幻魔が3体召喚されてしまった……」

【おおおおおお……漲る……漲るぞ。力がああああ!!!】

見ると、液体に満ちたカプセルの中に入っていた影丸理事長の肉体が徐々に若返る姿が見える。

【ぬおおおおお……!!!】

やがて、カプセルが爆発し、中に入っていた液体が飛び散った。

「俺は幻魔皇ラビエルの効果発動。1ターンに1度、自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げ、エンドフェイズまでこのカードの攻撃力は生け贄に捧げたモンスターの元々の攻撃力分アップする。俺は幻魔トークンを生贄にささげる。幻魔トークンの攻撃力は1000…よって、幻魔皇ラビエルの攻撃力は1000ポイントアップ。」

幻魔皇ラビエル

ATK 4000 5000

影丸

モンスター：3

攻撃力5000…スカーレット・ノヴァ・ドラゴンと並んだ。

「行け、幻魔皇ラビエル！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを捻り潰せ、天界蹂躞拳！」

幻魔皇ラビエル

ATK 5000

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK 5000

やはり、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを攻撃して来たか……なら。

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果発動。相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外する。」

優

モンスター：1

「何？」

「その後、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。ディメンション・ザ・ガード……！」

「小癩な真似を……ならば、降雷皇ハモンでシューティング・スター・ドラゴンを攻撃。失楽の霹靂！」

降雷皇ハモン

ATK 4000

シューティング・スター・ドラゴン

ATK 3300

「シューティング・スター・ドラゴンの効果発動。このカードも相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。デイメンション・ザ・ガード！」

優

モンスター：0

「小賢しい……が、貴様の場はガラ空きだ。行け、神炎皇ウリア！
イレギュラー
不規則者へダイレクトアタック！その身も魂ごと焼き尽くせ、ハイパー・ブレイズ！」

神炎皇ウリア

ATK 2000

神炎皇ウリアから放たれた炎が一直線に俺へ向かっていた。

「墓地のネクロ」

「使いな、十代！！」

十代は恐らく、墓地に眠る、ネクロ・ガードナーの効果を使ってもりだったのだろう。

だが、それは本当に必要な時に使えばいい。

十代の己自身の守りのために……

優

LP:4000

2000

「ぐうあああああああ！……！！……く、く……」

俺の身体は立っていらなくなり、地面で倒れ込んでしまう。

くっ………これまでも何回か闇のデュエルを受けていたが、この痛みはその比じゃない……！！！！

これが覚醒した三幻魔の本当の力だと言うのか……？

「優、大丈夫か！優！！」

「優っ！！！！」

十代が俺に声をかけてはくれるが、声が出ない。

しかも、身体に力が入らない……

そして、有栖が声を上げて、こちらへ駆けて来るのが分かった。

「嘘だよ……優。……お願いだから……お願いだから眼を開けてよ。死んじやいやだよ……!」

有栖が俺の身体を揺すっているのか、身体が揺れているような感覚があった。

だけど、俺の意識がだんだんと暗闇の中へ沈んで行き、

俺を呼ぶ有栖の声さえも徐々に聞こえなくなってきた。

それと同時に俺の意識も薄らいでいき、耐えられずに俺の意識は失った。

有栖……ごめん。

優 Side 終了

Side Change

3人称 Side

3人称 Side

意識を失った優に気を取られて、誰も気が付いていなかった。

優のデュエルディスク……正式には彼のデュエルディスク内のエクストラデッキにある1枚のカードが鈍い光を放っていた事を……

第32話 優&十代VS影丸（中編） 優の真実（後書き）

あるえ〜（・・・）？

本来だったら、2編で終わる筈だったのに3編になってしまいました。

まあ、第2章のメインでもあるセブンスターズとの戦いを省略してしまっただのd

有栖・有里「作者？（ニッコリ）」
な、何でございましょう……？

有栖「また性懲りもなく、優を傷つけてくれたよね？（超黒笑）」

有里「内容は駄作なのは仕方ないけど、パパを傷つけるのは」

いや、だから……その……話の成り行き上仕方なくありますね……？

有里「言い残すことは聞かないよ。（超黒笑）」

有栖・有里「さあ……懺悔の時間だよ。（超黒笑×2）」

あぎゃああああああつっ！！！！（チーン）

第33話 優&十代VS影丸(後編) 輝く流星 シューティング・ブレイザー

訂正した方が良いと言う指摘がありましたので修正いたしました。

第33話 優&十代VS影丸(後編)輝く流星 シューティング・ブレイザー

前回からのデュエル状況

フィールド：失楽園

優

LP：2000

手札：0

モンスター：2

魔法・罫：0

シューティング・スター・ドラゴン(自身の効果で除外されている)

ATK 3300

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン(自身の効果で除外されている)

ATK 5000

十代

LP：4000

手札：5

モンスター：2

魔法・罫：1(表側1(未来融合・フューチャー・フュージョン)
1ターン))

E・HERO E・HERO Great TORNADO

ATK 2800

E・HERO プリズマー
ATK 1700

影丸

LP:2200

手札:1

モンスター:3

魔法・罫:0

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

神炎皇ウリア

ATK 2000

降雷皇ハモン

ATK 4000

俺が次に意識を取り戻すと、そこには何もない空間で辺りには白色に満ちた世界が広がっていた。

「ここは……いったい、何処なんだ？」

俺はどうして、こんな所にいる？

確か、俺は十代と共に影丸理事長の計画を阻止するために彼とデュエルして居た筈…

そして……

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「行け、神炎皇ウリア！不規則者<sup>イレギュラー</sup>へダイレクトアタック！その身を灰になるまで魂ごと焼き尽くせ、ハイパー・ブレイズ！」

「ぐづあああああああ！……く、くう……」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

俺は三幻魔の攻撃を受けて、立って居られなくなり、倒れて意識を失った。

そうでなくとも、デュエルはまだ続いていた筈……

あの時、影丸理事長の神炎皇ウリアからの攻撃で受けた戦闘ダメージは2000。

俺のLPは開始時からまだ無傷の4000……それを差し引いても残りLPは2000……まだ負けてはいない。

……いや、途中でデュエルが行えなくなってしまうたという事は負けという事に等しい。つまり……

「俺は負けたのか……」

《いや、デュエルはまだ戦いは終わってはいません。天空優。》

！！……今の声は……

耳に聞こえて来た訳ではなく、俺の頭の中に直接響いて来た。

まるでテレパシーのように……

「誰だ！？何処から話している？」

《そう、騒がずとも目の前に現れます。》

そう言うと俺の目の前に粒子のようなものが沢山集まり、それはある一つの存在へと形作る。

！！

粒子が集結して、俺の前に現れたのは1体の龍であった。

その龍はスターダスト・ドラゴン、シューティング・スター・ドラゴン、シューティング・クエーサー・ドラゴン…その3体のいずれにも似ような面影を持っていた。

「お前か？俺に呼びかけたのは…」

《その通りです。天空優。》

どうやら、その通りのようだ。

そもそも、何故…この龍は俺の目の前に現れたんだ。

「質問が多いかも知れないが…何故、俺を呼んだ？そもそも、ここは何処だ？」

《それよりも天空優、汝はそれで良いのですか……》

「…どういう意味だ？」

俺はこの龍の言っている意味が分からないでいた。

それで良いのか…だと？

《このまま、何もせずに汝は消滅の時を待つのですか？》

「……………」

立ち上がりたい……だが、もう身体が動かない。

《汝には聞こえないのですか？汝の名を呼ぶ者の声が……》

俺の名前を呼ぶ者の声……？

『優。お願いだから……お願いだから眼を開けてよ……！……ボクはただキミに聞きたい事、話したい事が沢山あるんだ。』

有栖……

《天空優、汝はどうしたいのですか？汝の答えを聞かせて下さい。》

俺はどうしたい……？

《汝が今、心から望んでいる事を曝け出す…ただ、それだけの事です。》

俺が今、心から望んでいる事……

俺が心から望んでいる事はずっと一緒にいた彼女をこの手で護りたい。
い。

そして、これからもずっと一緒に居たい。

だが、俺の秘密を知って、彼女が俺の元から離れて行ってしまおうと言う恐怖から正直に言えずに誤魔化していた。

でも、彼女はそれを受け入れてくれた。

俺は……

『初めまして、ボクは神？
有栖。所属はオベリスク・ブルーの1

年生だよ。』

すると、何が引き金かは、分からないが…頭の中に初めて有栖と出会った時の事を思い出していた。

まるで走馬灯のように彼女の言葉を1つ…また1つと思い出していく……

『ボクはキミの存在に心奪われた女だよ！この気持ち、まさしく愛だよ！』

『ボクはキミと出会えた事に運命を感じずにはいられないよ。やはり、ボクとキミは運命の赤い糸で結ばれていたみたいだね。』

『つまり、ボクはキミが好きなんだ！ボクと付き合ってくれ！』

『簡単に言つと一目惚れだよ。ボクはキミを見た瞬間！電撃のようなモノが体中を駆け巡った。その思いはキミを見れば見るほど日に強くなっていた。』

『ボクとて、そう簡単にキミをモノにできるとは思っていない。だけど、ボクはこれで諦めたりはしないよ。キミを絶対にボクだけのモノにしてみせる！！』

全てはこの出会いが切っ掛けだった。

そこから有栖との関係事が思い出されて行く…

冬期休暇中に彼女の実家へ遊びに行き、彼女のご家族から勝手に婿候補にされてしまった事…

某テニス部部长をシューティング・クエーサー・ドラゴンを召喚して、公開処刑をした事…

鏡が武藤遊戯のデッキを盗み。彼女が鏡とデュエルし、その途中が彼女が怒りだしてしまい、凄まじいオーバーキルで決着をつけた事…

セブンスターズの1人・虹之咲と名のる女が彼女を人質にとり、危機一髪のところまで彼女を救い出せた事…

その戦いの反動で2週間もの間眠り続けて、彼女に本当に心配をかけてしまった事…

彼女が病み上がりでデュエルもまともにできない自分に変わって黒蠍盗掘団とのデュエルを受けた事…

自分が原因で彼女を追い詰めてしまい、彼女と七星門の鍵をかけて戦った事…

『キミに何らかの秘密があるのは分かっていた。それが原因でキミが苦しんでいるのに気付けなかった。』

『大丈夫だよ。ボクはキミにどんな秘密があっても全部受け入れる。それ位、ボクはキミの事が好きなんだ。』

『ボクに教えて欲しい……キミの秘密を全部。』

『後悔なんかしないよ。ボクはキミの全てを受け入れるつもりだから。だから話して欲しいんだ。』

影丸理事長との戦いが始まる直後、俺を引き止めた時…

『嫌だよ……ボクはこれ以上、キミが……キミが闇のデュエルで傷ついて行く姿を見たくない。』

そして、彼の口から言われた俺の真実…

『優…ボクは正直、色々と戸惑っている。キミの秘密のスケールがあまりにも大きすぎて……』

『でも、ボクはそんな理由でキミを嫌いになんかなれないよ。』

今まであった光景を1つ1つ思い出すたびに彼女への想いが強くなっている事に気が付かされる。

そうか……そういう事だったのか。

その答えはとても簡単に見つかった。何も難しい事じゃなかった。

それにしても、ここまで時間をかけて、回り道をしていながら、彼女によく飽きられなかったなと正直に思う。

《その顔だと答えは見つかったようですな…》

答えを求めて来る龍の声が再び聞こえて来る。

俺はその龍の姿を見つつ、肯定するように小さく頷く。

《ならば…言ってみせてもらいなさい。》

俺は軽く深呼吸をし、一度眼を閉じる。

それから数秒後、もう一度眼を開き、答えを求める龍と向き合う。

「俺は有栖が…俺は有栖の事が好きだから…太陽のように笑う彼女の笑顔を護りたい。有栖だけじゃない、俺と言う存在を受け入れてくれたかけがえのない友達のためにもあの世界を護りたい。」

《……………》

その龍は何も言わずに少しの時間が流れる。

……………

《見事です。 天空優……………あなたを我が主として認めます。》

再び、龍の声が聞こえて来たが、それは驚くべき内容であった。

「俺がお前の主だと……………？それはどういう意味だ？」

《主、デュエル前に白紙のカードをあなたは手に入れましたね。》

白紙のカード……………？

大徳寺教諭のエメラルド・タブレットの中に入っていたあのカードか……………！

《あの白紙のカードは、我が身の依り代となっています。》

あのカードがこの龍の依り代だと……………？

それじゃ、一体何のために俺をこの空間に……

《それはあなたと直接出会い、我を従える主として、相応しいか否かを確かめるでもありません。》

！！

《そして、あなたの愛する者を護ろうと言う強き意志……見させて貰いました。》

……

《私の力が必要になれば、我をお呼び下さい。我はいつでもあなたの声に答えます。我が主、優。》

その龍は再び、粒子となり、俺の身体を包んで行った。

「……………！！！」

気が付くと俺は地面に倒れていた……戻って来られたのか。

視線を向けると三幻魔を従える影丸理事長とそれに対峙する十代の姿があった。

どうやら、まだデュエルは終わっていないなかったか。

「何……!?!」

「優……!」

俺が起き上がった事に気付いたのか、十代と影丸理事長がこちらを見ている。

「優!大丈夫か?」

「ああ、悪かったな。少しばかり気を失っていた。」

「お前が無事で良かったぜ。」

デュエルの状況を確認してみると、十代のLPは残り800。なんとか持ち堪えてくれていたか。

デュエルのターンは現在、十代のターンで十代のフィールドにはハネクリボーが守備表示で召喚されているだけであり、魔法・罠カー

ドと手札は共に0枚と言う危機的状況であった。

俺達が対峙する影丸理事長の場には三幻魔が3体とも健在で更に幻魔トークンが2体特殊召喚されている。更に手札は6枚で魔法・罫カードはない。

更にウリアの攻撃力は気を失う前は2000の攻撃力も6000に上がっている。

これでは俺が入っても余り優勢とは言い難いだろう。俺も手札と魔法・罫カードはなし。頼みの綱と言えば、シューティング・スター・ドラゴンとスカーレット・ノヴァ・ドラゴンのみ。

状況を整理すると、俺達が不利な状況になっている事は変わらない。

974

途中経過のデュエル状況

フィールド：失樂園

優

LP：2000

手札：0

モンスター：2

魔法・罫：0

シューティング・スター・ドラゴン（自身の効果で除外されている）
ATK 3300

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（自身の効果で除外されている）
ATK 5000

十代

LP：800

手札：0

モンスター：1

魔法・罫：0

ハネクリボー

DEF 200

影丸

LP：2200

手札：6

モンスター：5

魔法・罫：0

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

神炎皇ウリア

ATK 6000

降雷皇八モン

ATK 4000

幻魔トークン

DEF 1000

幻魔トークン

DEF 1000

「優：ありがとうな。」

「？」

突然、十代に礼を言われるが…生憎、俺は十代に礼を言われるような事はしていない筈…

寧ろ、礼を言うのは俺の方だ。俺と言う「存在」を認めてくれてありがとう…と。

「あの時、優がネクロ・ガードナーの効果を使っただけで言ってくれなかったらさ。俺、負けていたかも知れない。」

なるほど…ネクロ・ガードナーを俺が気を失っている間に三幻魔の攻撃を凌ぐために使ったわけか。

そうならば、あの時の俺の判断は少なくとも間違っていないかった…
という事が。

「…気にするな。お前は俺の「存在」を認めてくれた。それだけで俺は十分だ。」

「優っつ！！！！」

呼ばれたため、振り返ると有栖が突進してくるように俺に飛びついて来る。

「馬鹿…馬鹿馬鹿馬鹿……優の馬鹿あああ！！！」

確かに俺は馬鹿だという事を俺自身も分かっているから何回も言うな…

…

「馬鹿……ボクがどれだけ、心配したと思ってるの？」

彼女にどれだけ心配をかけてしまったのか、分からない。俺は本当に不器用だからこんな事しかできない。

有栖を抱きしめ…

「有栖、何度も心配かけて悪いと思っている。…お前の身は俺が絶対を守る。ここから離れてくれ、俺は必ず勝つから。」

と俺は有栖にしか聞こえない位小さな声で彼女に囁く。

「……………うん。約束をしたんだから、絶対に守ってね。……………ボクだけの王子様。」

「……………!!」

有栖は俺のところから離れて行き、翔達のところへ戻って行くのを見届ける。

俺は視線を有栖から影丸理事長へ向ける。

「ここから俺もデュエルに復帰する。」

「ちつ……………くたばり損イレギュラーの不規則者が…十代と共に今度こそ、消し去ってくれる。」

「俺はターンエンドだ。」

「俺が気を失って。ターンが経過しているが、自身の効果で除外されたシューティング・スター・ドラゴンとスカーレット・ノヴァ・ドラゴンは自身の効果で除外された場合、エンドフェイズに俺のフィールドに特殊召喚する。」

シューティング・スター・ドラゴン
ATK 3300

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK 5000

優

モンスター：2

「俺のターン、ドロー……!!」

このカードは…

優

手札：1

ドローしたカードはあの時、大徳寺教諭から受け取った、エメラルド・タブレットの中に入っていたカード：「賢者の石・サバティエル」のカード。

~~~~~  
~~~~~


《主、あの男は完全に三幻魔の力に取り込まれています。》

再び、あの龍が俺の脳裏に語りかけて来た。

その言葉が本当ならば、彼を解放する手段を知っているかも知れない……

「（どうすれば、彼を解放できる？）」

《まず、我を召喚してください。我の力で三幻魔を3体とも倒して、デュエルに勝利すれば解放されるでしょう。》

どうやら、行き成りこの龍の力を借りなければならないようだ……

「（だが、俺はお前を召喚する方法を知らない。）」

《今、あなたの頭の中に我の召喚手段とその力を送り込みます。》

その言葉を最後にあの龍の召喚方法と持っているモンスター効果が流れて来た。

「何だと？」

十代が声を上げる。

「手駒だとふざけるな！ボク達はお前の手駒なんかじゃない。」

「何の権利があつて、俺達をそんな風に扱う権利がある！」

十代だけじゃなく、他の皆の怒りはもつともだ。何の権利があつて、こんな人物の手駒だと言われればな。

「文句があるなら、聞いてやる。……ただし、このデュエルで俺に勝てればなあ。」

ならば、その言葉をそっくり返してやる。

「……言いたい事はそれだけか？」

「何？」

「……あなたが最後に言い残す言葉はそれだけかと聞いているんだ。この俺のターンで三幻魔を倒す。」

「ふ、何を馬鹿な事を…貴様の雑魚モンスター達ですら、俺の三幻魔を倒す事など、不可能だ。」

「自分の野望のために関係ない人達を手駒扱いし…：…デュエルモンスターズを悪用し、俺の友達を…俺の大切な人^{有栖}を危険な目に遭わせた罪を教えてやる！！魔法カード、賢者の石・サバティエルを発動！」

賢者の石・サバティエル（TFオリジナル）
通常魔法

自分フィールド上の「ハネクリボー」が破壊された時、デッキからこのカードを手札に加える事ができる。

LPを半分払い、自分のデッキ、墓地にあるカード1枚を手札に加え、このカードをデッキに入れシャッフルする。

この効果を3回使用した後、このカードは次の効果になる。

自分フィールド上の表側表示モンスター1体の攻撃力を、ターン終了時まで相手フィールド上にいるモンスターの数だけ倍化する。

「LPを半分支払い、自分のデッキ及び墓地にあるカードをこのカードをデッキに加えて、シャッフルする。俺はデッキから天よりの宝札を手札に加える。」

優

LP：2000

1000

「更に天よりの宝札を発動、お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする。俺はこのカードを発動する事によって、0枚。」

「俺も0枚だ。」

「俺は6枚だ。よって、ドローはない。」

優

手札：6

十代

手札：6

「魔法カード、調律を発動。デッキからシンクロンと名のついたチユイナーを手札に加える。俺が加えるのは2枚目のジャンク・シンクロン！その後、デッキの一番上のカードを墓地へ送る。」

落ちたのは、簡易融合…このLPでは、死に札当然であるので落ちてくれたのは好都合だ。

「更に魔法カード、天使の施しを発動！デッキから3枚ドローし、その後、2枚を墓地へ捨てる。」

墓地に捨てたカードは、太陽の神官2枚：この状況では先ほどの簡易融合同様に死に札状態だ。

「俺はさっきのドローで引いた。賢者の石・サバティエルを再び発動する！LPを半分支払い、今度はデッキからミラクルシンクロフュージョンを手札に加える。」

優

LP：1000 500

必要なカードは手札に揃った。……後は。

「魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動。自分のフィールド・墓地からモンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚する。俺は墓地からシンクロチューナーモンスター、フォーミュラ・シンクロンとバリア・リゾネーターをゲームから除外。融合召喚。融合チューナー、フュージョン・シンクロン」

フュージョン・シンクロン（オリジナルカード）

融合モンスター・チューナー

レベル2 光属性 機械族 ATK 300 DEF 700

融合素材：シンクロモンスターのチューナー+チューナー

効果：このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功した時、自分の手札を任意の枚数、墓地に捨てて発動することができる。捨てた枚数分だけ、除外されたモンスターを墓地へ戻す。

1ターンの1度、自分の墓地に存在するモンスター1体を除外し、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のレベルをエンドフェイズ時まで除外したモンスターのレベルを同じにする。

フュージョン・シンクロン

DEF 700

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK 5000 DEF 4000

優

手札：5

モンスター：3

「融合モンスターのチューナー……？」

「優はいつたい何をするつもりなんだ？」

「フュージョン・シンクロンが融合召喚に成功した時、自分の手札を任意の枚数、墓地に捨てて発動することができる。捨てた枚数分だけ、ゲームから除外されているモンスターを墓地へ戻す。俺は手札を4枚捨て、フォーミュラ・シンクロン、バリア・リゾネーター、スターダスト・ドラゴン、トラスト・ガーディアンを墓地へ戻す。」

優

手札：1

「墓地のチューナーの数が増えた事でスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力がアップ。」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK 4000 5500

「更に魔法カード、強欲な壺を発動。デッキからカードを2枚ドロ―する。」

優

手札：2

「！！……手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを通常召喚！」

ジャンク・シンクロン
ATK 1300

優

手札：1
モンスター：4

「ジャンク・シンクロンが召喚に成功したことで墓地からレベル2以下のモンスターのモンスター効果を無効化にして、表守備表示で特殊召喚。来い、フォーミュラ・シンクロン！」

フォーミュラ・シンクロン

DEF 1500

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK 5500 DEF 5000

優

モンスター：5

「更にフュージョン・シンクロンの効果発動。1ターンに1度、自分の墓地のモンスター1体を除外し、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のレベルをエンドフェイズ時まで除外したモンスターのレベルと同じにする。俺は墓地から太陽の神官を除外し、シューティング・スター・ドラゴンのレベルを5にする。」

シューティング・スター・ドラゴン

レベル10 DEF 5

《主。今こそ、我を呼ぶ時でその条件は全て揃いました。》

「レベル5、シンクロモンスター、シューティング・スター・ドラゴンにレベル2、融合チューナー、フュージョン・シンクロンとレベル2、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンとレベル3、ジャンク・シンクロンの3体のチューナーモンスターを…デルタ・チューニング!!」

「何!?!」

『デルタ・チューニング!?!』

5 + 2 + 2 + 3 || 1 2

シューティング・スター・ドラゴン、フュージョン・シンクロン、フォーミュラ・シンクロン、ジャンク・シンクロンは天へと上り、シューティング・スター・ドラゴン以外は7つの水色の輪へと姿を変え、シューティング・スター・ドラゴンを覆いつくして行く。

「いったい…何が起ころうとしているんだ?」

「優……」

「信じよるしかない、あいつを……」

「な、何だ…何だこれは！！！！」

突然、影丸理事長が騒ぎ始めていた。見ると、三幻魔に変化が現れる。

「い、一体、何が起きているんだ！？」

「ペペロンチーノ！カルボナーラ！ミートソース！アラビアータ！
プッタネスカ！！！！いたい、どうなっているノーネ！？天変地異ナ
ノーネ！！」

「クロノス先生、落ち着いて下さい。」

「教師であるあなたが暴走したら俺達はどうなるんですか？」

「そ、そうだったノーネ。しかし、こんな非現実的な実際に起こる
なんてどうなっているノーネ。」

暴走しかけていたクロノス教諭はサンダー達の言葉でどうにか正気
を取り戻していた。

そう、三幻魔達の身体から水色の粒子が水色の渦で覆い尽くされた
シューティング・スター・ドラゴンへと延びて行く姿が見えた。

《三幻魔！全ての精霊達の命を奪う貴様達の呪われた力、根こそぎ

奪い、無に還してくれろ！主よ、今こそ…我の名をお呼び下さい！《

その龍の言葉と共にそのモンスターの名前が浮かんで来た。

シューティング……

ブレイザー……

ドラゴン……

それがお前の名前か。

「流星よ。光を超え：次元を超え：更なる高みへ上り、その輝きで世界を照らせ！シンクロ召喚！！舞い降りよ、シューティング・ブレイザー・ドラゴン！」

シューティング・ブレイザー・ドラゴン（オリジナルカード）
シンクロモンスター

レベル12 風属性 ドラゴン族 ATK 5000 DEF 4000

シンクロ素材：融合モンスターのチューナー1体＋シンクロモンスターのチューナー1体＋チューナー1体＋「シューティング・スター・ドラゴン」

効果：このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果の発動を無効にし、破壊する。

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のフィールドまたは墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスターを除外する事で1体につき、攻撃力を300ポイントアップする。

更に除外したモンスターのモンスター効果を得る。

このカードがフィールドから離れた時、「セイヴァー・スター・ドラゴン」1体をモンスター効果を無効化にして、エクストラデッキから特殊召喚する。

俺の言葉とともに水色の渦は音を立てながら破裂し、粒子となり、雪のように辺りへ降り注いで行く。

そして、その中から俺がああ空間で見た龍の姿が舞い降りてきた。

シューティング・ブレイザー・ドラゴン

ATK 5000

優

モンスター：2

「これが優の新たなるエースモンスター……」

「「「綺麗……」」」

「これは……」

「ああ、とても暖かくて優しい光だ。」

「ええ、それにそれと同じような風も感じます……そう、まるで彼優のような」

「そうナノーネ。」

遠くでみんなが何かを言っているが、小さい声で喋っているため、よく聞こえなかった。

《主、私の依り代となっているあのカードを……》

促されるように俺はデュエル前にエクストラデッキに加えた1枚の白紙のカードを見た。

俺が手に取るとその白紙のカードはカード名、絵柄、効果名が浮かび上がって来た。

《それがあなたの新たなる力です。そして、我が名はシューティン

グ・ブレイザー・ドラゴン…この生命^{いのち}、尽きるまであなたと戦う運命を共にする龍です。》

「だが、攻撃力は所詮、5000止まりだ、神炎皇ウリアには叶わん！」

「シューティング・ブレイザー・ドラゴンの効果発動。このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のフィールドまたは墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスターを全て除外。1体につき、攻撃力を300ポイントアップ。俺はフィールド上からスカーレット・ノヴァ・ドラゴン、墓地からスターダスト・ドラゴン、レッド・デーモンズ・ドラゴン、シューティング・スター・ドラゴンを除外し、攻撃力を1200ポイントアップ！」

優

モンスター：1

シューティング・ブレイザー・ドラゴン

ATK 5000 6200

「更に除外したモンスターのモンスター効果も同時に得る！除外したスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果で墓地のチューナー1体につき、攻撃力を500ポイントアップする！俺の墓地にはジャンク・シンクロンが2体とフォーミュラ・シンクロン、バリア・リゾネーター、トラスト・ガーディアン、フュージョン・シンクロンの

合計6体：よって、更に3000ポイントアップする。」

シューティング・ブレイザー・ドラゴン

ATK 6200 9200

「攻撃力9200だと!?!」

「更に効果で除外したシューティング・スター・ドラゴンの効果発動。シューティング・スター・ドラゴンの効果は自分のデッキの上からカードを5枚めくり、このターン、このカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。」

「複数回攻撃だと!?!」

「馬鹿な、下手をすれば攻撃できずに終わってしまうかもしれないんだぞ!?!」

「優君!そんな無謀とも言える行動は止めて欲しいッス!」

彼らの言葉が聞こえるがその意見は最もだ。だが、このターンで三幻魔を3体とも倒すにはこの方法しかない。

正直、チューナーがデッキに残り、何枚あるか何て俺には分からない。下手をすれば、1枚も捲れないで終わるかも知れない……

しかし、俺は影丸理事長を何としてでも救わなければならない。

だけど、俺は負けられない。有栖との約束を果たすためにも……！

……

「……………」

「……………」

「……………」

1枚目のカードをめくる。

「1枚目。チューナーモンスター、ジャンク・シンクロン。」

3枚目のジャンク・シンクロン……2枚目のカードをめくる。

「2枚目。罨カード、スカーレット・カーペット。」

2枚目は罨カード……リゾネーターのチューナーを展開する罨カード。3枚目をめくる。

「3枚目。チューナーモンスター、クリエイト・リゾネーター。」

ジャンク・シンクロン同様にこのデッキには複数投入されているチューナー。これで2回……4枚目のカードをめくる。

「4枚目。効果モンスターカード、THE トリツキー。」

2枚目のTHE トリツキー……場にモンスターがいても展開できるのが強み。これで最後の5枚目のカードをめくる。

「5枚目。チューナーモンスター、グローアップ・バルブ。」

3枚目のチューナー……ゾンビ・キャリアと同等の汎用性を誇るチューナー。

効果で出たチューナーは3枚……三幻魔を3体倒すにはギリギリであるが条件は揃った。

「チューナーは3枚……よって、3回の攻撃が可能となる。」

「何!?!」

「そして、魔法カード。賢者の石・サバティエルを再び発動! LPを半分支払い、デッキからジャンク・シンクロンを手札へ加える。」

優

LP:500

250

「そして、この効果を3回使用した後、このカードは自分フィールド上の表側表示モンスター1体の攻撃力を、ターン終了時まで相手フィールド上にいるモンスターの数だけ倍化する効果へと変わる。」

「何、俺の場のモンスターは……」

「そう、5体…よって、賢者の石・サバティエルの効果でシューティング・ブレイザー・ドラゴンの攻撃力が倍加される数値は……5倍だ。」

《うおおおおおおお!!! 荒ぶる!!! 荒ぶります!!! 我の肉体が…我の魂があああ!!!》

シューティング・ブレイザー・ドラゴン
ATK 9200 46000

「こ、攻撃力46000……だと!!!?」

「シューティング・ブレイザー・ドラゴン!三幻魔に攻撃。悠久の風と無垢なる輝き、シャイニング・ブレイズ・ストライカーツツ!」

《これで終わりです。三幻魔よ。今再び、この地へと封印されなさい!!!》

シューティング・ブレイザー・ドラゴン
ATK 46000

幻魔皇ラビエル

ATK 4000

神炎皇ウリア

ATK 6000

降雷皇ハモン

ATK 4000

影丸

LP: 2200

- 121800

WIN: 優&十代

「ぐわあああああつつつ!!!!ば、馬鹿な……三幻魔が敗れただと!?!」

影丸理事長はショックだったのか、膝をついてしまう。

「やったな、優。」

「ああ……」

十代が近くに寄って来たので軽くハイタッチをする。

「ぬ、ぬあああああ……」

「!?!」

見ると、影丸理事長の肉体から沢山の光が次から次へと様々な方向へ放たれて行く。

あれは恐らく、三幻魔を経由して、奪い取っていたデュエルモンスターの生気だろうな……

「優！カードが……」

見ると、賢者の石・サバティエルのカードが粒子になりながら、消滅して行き、粒子はやがて、天へと昇って行った。

大徳寺教諭……ありがとうございました。あなたのカードがなければ、俺は勝つ事は出来なかったかもしれない。

《私の力だけでは勝つ事で出来なかったかも知れません。》

だが、あのカードもエメラルド・タブレッドの中にあったカードの筈なのに何故、消滅しないのだろうか？

「（……それならば、お前は消滅しないでその存在を留まっていたら……）」

《我と私の依り代は既にあなたのカードとなりました、いわばあなたの肉体の一部になったとも言えます。》

このカードが俺の肉体の一部になった？どういう意味だ、さっぱり

意味が分からない。

「（悪い、もう少し分かりやすく説明してくれ。）」

《分かりやすく言うとなたと共に戦ったあの少年は、最終的には精霊と魂を一つになるのでしたね？》

シューティング・ブレイザー・ドラゴンは十代の方を見ながら訪ねて来た、確かに彼は最終的にはユベルと魂を一つにする。

「（その通りだが…それと原理は同じか？）」

《はい。そう考えていただいて結構です。》

なるほどな…何となくであるが分かった。

「ぐ…ぐああああああ…！！！！！！」

見ると、影丸理事長の肉体から蒼い光が放たれて行く。

「影丸！」

「理事長…！！」

『「ぐ、これは…？」』

見ると、影丸理事長の肉体は若き肉体から一気に老弱な肉体…元の姿へと戻る。

《三幻魔が与えていた力が完全に抜け切り、元の姿へと戻ったようですね。》

「…ふおふおふお…これが私の本当の姿じゃ。儂は若返りたかった…特にお前達のような若者を見ていたら、どうしても、もう一度青春を取り戻したくなっただ。」

「爺さん……」

「影丸理事長……」

彼の気持ちは分からないでもない。年を取った人間は必ず若い人間を羨ましがる。

そして、それと同時に子供の中には大人を羨ましがる子供もいる。

《人間というのはどうも分かりにくいですね。》

シューティング・ブレイザー・ドラゴンの言っている事は間違いではない。人間というのは不完全である生き物である。

だが、それで良い。完璧だと逆に不気味でしかない。

「僕は幻魔の力さえなければ、立つ事さえできん……」

「何言っているんだよ、爺さんはまだ元気だよ。立てないなんて、弱気な事を言うなよ。自分の力で頑張ってみるよ。」

十代の励ましにより、影丸理事長は僅かながらであるが自分の足で立てるようになった。

直後に十代が彼に飛びついて、それが原因で影丸理事長の肉体から何やらゴキゴキとか嫌な音を立てていたが……大丈夫だろうか？

その後、影丸理事長はへりで本土の医療施設へと輸送されて行き。

それを見守る中、サンダーや吹雪さんが何やら不吉な事を呟いているのを耳にする。

影丸理事長に変わり、鮫島校長が三幻魔のカードを管理する事になった。

「これで本当に三幻魔の脅威は去ったんだよね？」

「ああ。」

俺の知る限りでは黒幕である影丸理事長を倒した。これで三幻魔の戦いには終止符が打たれたとも言える。

「後は来週の進級試験ナノーネ。」

「進級試験!!?」

そういえば、そんなのもあったな。一年を締めくくる大事な事でもあるが…

「すっかり忘れてた〜〜……」

十代はすっかり頂垂れていた。こいつから見れば、そっちの方が脅威になっているのかも知れないな。

「とぅしよぅ〜〜〜!!!」

十代の声がショックなのか声に変な状態になっていた。

「もう十代。試験までの間、私が色々教えてあげるからほら。シヤキツとしなさいよ。それにそれが終われば、学園祭なんだから頑張りなさいよ。」

「お、おう……」

「この島を救った英雄ヒーローがそんなんでどうするのよ。」

ジュンコが十代を励ますように十代の隣に立つ。

やっぱり、この光景はこっちに来てから相変わらずだが、微笑ましい。

「ジユンコ、島を救ったのは十代君だけじゃなくて、優なんだよ。優こそがこの島を救った救世主なんだよ。」

救世主^{メシア}ってそんな大層なものではない気がする。

「何よ、そいつは途中のんきに気絶していて、最後に良いところを持って行っただけじゃない!」

彼女の言っている事は強ち間違いではない。それは事実である以上否定はしない。

「何さ!優が復帰するまで防戦一方だったじゃないか!」

「何ですって!?!」

「何さ!?!」

「「めきおきおきおきおきお!?!?!」」

と最後に有栖とジユンコが下らない理由で取っ組み合いになりかけていたのは別のお話という事にしておこう。

第33話 優&十代VS影丸（後編）輝く流星 シューティング・ブレイザー

今回でやっと二章のメインイベント、三幻魔編が完結です。

優「おい、オリカは使わないんじゃないのか？」

ごめんなさい。でも、コブラ、霸王、ユベル憑依ヨハンみたいな大ボス級や斎王やユベルとかダークネスとか超大ボス級の相手にしか使わないようにするつもりです。

後、スーパーフルボツコタイムとかが展開した時くらいですね。

有栖「あの効果はちよつとチート過ぎないかい？」

いろいろ反省はしています。OCG風に調整はしたつもりです。

優「チート過ぎだと言われても、俺達は知らんぞ。」

第34話 優と有栖（前書き）

燃える燃えるおお！！リア充決闘者共を燃やし尽くしてやるぜえええ！マグマックスウウウツツ！！！！

有栖「優…作者はどうなっちゃったの？」

優「…作者は遊馬編を3箱買い。3箱ともヴォルカザウルスだったと言うハイテンションが未だに続き、あの状態だ。要するに壊れた。」

伏せモンスターなんぞ出してんじゃねええ！墓地の風と闇を除外して、ダーク・シムルグを特殊召喚！燃やし尽くしてやる！
さあ、非リア充の皆さんも一緒に……せーの…

マグマックスウウウウウツツツツツ！！！！！！

優「お見苦しい所をお見せして申し訳ありませんでした……それで34話始まります。」

第34話 優と有栖

七星門の鍵を巡る戦いが終結して約10日が経とうとしている。

5日前に地獄の（十代にとっては）進級試験が終了し、試験前日までに隣の部屋からは連日にかけて、悲鳴声を立て続けに聞こえて来ていた。

因みに俺の方は基本的な事は分かっていた為、試験は余裕で受けられた。

進級試験が終わり、アカデミアの各寮の生徒達は1日の講義が終わるな否や大急ぎでそれぞれの寮に戻り、ある作業を始めていた。

それは、約3週間後に控えた学園祭へ向けての準備だ。

そのせいか、普段はラー・イエローでありながら、暇な時はレッド寮で集まっているメンバーに大地と鏡の姿がない。

毎年の学園祭で各寮の出し物は以下のとおりである。

オベリスク・ブルーは男子寮が喫茶店を行い。女子寮の方はそれと言った出し物はないとの事だ。

大地や鏡がいるラー・イエローでは焼きそばやたこ焼き、クレープ

と言った出店。

そして、俺達のいるオシリス・レッドはコスプレデュエル大会である。

他の2寮と違い、オシリス・レッドのコスプレデュエル大会に関しては準備が少ない。

出店をやるわけではないので材料や器具の準備が必要ない。

必要なのは、ラインでデュエルフィールドを描き、実況・解説用のテントを設置し、物置からコスプレ用の衣装を用意し、入り口に看板を立て掛ければ完成だ。

それだけの事なので少人数で用意できると言えば、出来てしまう。

俺も手伝おうとしたのだが、会場設置の責任者でもある翔が

「優君とアニキは三幻魔との戦いで疲れているんだから休んでいていいよ。」

と言われてしまい、手伝わせてくれない。……分かりやすく言えば、やる事がなくて、暇を持て余していた。

因みに十代は5日経っていながらも進級試験の反動なのか、部屋で燃え尽きたようにノックダウンしている。

しかし、十代は本当に大丈夫なのだろうか？

普段から準備していないからそのような目に遭うのだから……

影丸理事長が操る三幻魔との戦いの最中に手に入れた新しい力……シューティング・ブレイザー・ドラゴン。

それに合わせた新たにデッキを考えていたが、それも2日間で仮構築が終わり、一昨日と昨日で調整を行い、弄る必要がないデッキに仕上がりにやる事がない……そんな状態である。

《我が主、奥方に思いを告げなくていいのか？》

部屋のベッドの上で寝転んでいると、脳裏にシューティング・ブレイザー・ドラゴンの声が聞こえて来る。

最初の頃は耳ではなく、頭の中に直接聞こえて来るような感覚で慣れない感じがあったが、それも少しずつであるが慣れて来た。

そもそも、誰が奥方だ。俺と有栖はまだそんな関係ではない。

《ですが、主と結ばれる方ならば、そう呼んでもおかしくないのでは？》

この龍は一体、どこからそんな知識を得ているのか怪しい。

《我が主…奥方基有栖殿はあなたからの言葉を待っていられると思います。あなたの想いを告げる。ただそれだけの事ですよ。》

確かにその通りかもしれない。

それに分かっているのに何もしないでじっとしているのは俺の性分じゃない。

………

「……よし。」

俺はPDAを取り出し、通話モードへ切り替え、有栖のPDAの番号へかける。

それから部屋の中はPDAの呼び出し音のみが聞こえる。

『もしもし、優？』

数秒後の呼び出し音が有栖からの返答が聞こえて来る。

「ああ、急に連絡を入れて、悪い。」

『キミだったら、ボクはいつでも大丈夫だよ。それでどうかしたの？』

「……話したい事があるから今晚　夕食が終わってからでいい。灯台の近くに来れるか？」

『?…良いよ。灯台だね。』

「ああ。」

俺は軽い相槌を交わし、PDAの通話機能を切る。

そして、時は流れ、陽はすっかり海の向こうへ沈み。辺りはすっかり暗くなってしまった。

アカデミア島の夜の海を照らす様に灯台の明かりが辺りを照らしている。

「……………」

俺は灯台付近で1人、時間を潰していた。

そう、有栖が来るのを待っていた。

しかし、少し早すぎたような気もするが、深くは気にしなくても大丈夫だろう。

《主、何故。このような場所を選らんですか？》

また、シューティング・ブレイザー・ドラゴンの声が聞こえる。

「（このような場所なんて言うなよ。ここは俺と彼女が初めて出会った場所でもある。）」

《ここが…………》

「ああ……………」

シューティング・ブレイザー・ドラゴンは驚いているような声を上げる。

丁度良いか。有栖が来るまで話しているとするか。

口に出さないとはいえ、話し相手がいるのだから少しは時間つぶし

になるだろう。

それから俺はシューティング・ブレイザー・ドラゴンと有栖と初めて出会った時の話をしていた。

手紙でこの場所に呼ばれ、来てみたら、彼女はこの場所で待っていた。

自己紹介をしたと思ったら、いきなり直球過ぎる告白をされたこと。

そして、俺は彼女がどういう人間かを見極めたいと言っ意味合いを込めて、断ってしまった事を告げる。

それが俺と有栖のファースト・コンタクトだ。

「（こんな所か……）」

《……》

俺が話を終わるとシューティング・ブレイザー・ドラゴンは突如、黙り込んでしまう。

「いったい、どうしたのだろうか？」

「（急に黙り込んでどうした？）」

《いえ、その……奥方の言動が余りにも凄まじかったので……》
なるほどな……

普通の女性だったらそんな告白はしないだろう。

《ところで主、「君様殿」とは一体どのような言葉使いでしょうか？》

「（そんなの逆に俺の方が聞きたいくらいだ。）」
そんな意味不明な言葉使いは俺も使った事もなければ、聞いた事もない。

今の時代GX世界ではなく、遥か未来ZEXAL世界に現れる。某デュエル脳な謎の生命体の言葉を借りれば、「それはどんな効果だ？いつ発動する？」と聞きたいくらいだ。

それは俺の憶測だが、彼女なりに丁重に丁重を込めた言葉だろう……
多分。

《しかし、奥方は随分と凄まじい言葉を主へぶつけているのには驚きました。》

シューティング・ブレイザー・ドラゴンでなくとも、誰だって驚くだろう。

初対面で可愛いらしい女の子（俺から見れば）にいきなり、告白されれば……

更に恥ずかしかる素振りを見せずに真顔で言いだすのだから、自分の言っている事を理解しているのかと疑いたくもなってきた。

《しかも、あつて間もないのに愛を叫んだり、運命の赤い糸で結ばれていた等と言いだす時点で……こつこつを何と言つのでしたか。「キチガイ」と言いましたか？》

「（それとは違つと思う。それに）」

《主。》

俺の言葉を遮るようにシューティング・ブレイザー・ドラゴンが呼ぶ。

どうかしたのだろうか？

《奥方が来たようですので失礼します。》

とそれを最後にシューティング・ブレイザー・ドラゴンの声が消える。

同時に入れ替わるようにこちらに近づいて来ているのか足音が聞こえて来た。

そう…俺が待ち望んでいた人 有栖 の足音であった。

「優、遅くなってごめんね。」

「いや…いきなり呼び出した俺が悪かったんだ。」

有栖も来て役者は揃った。俺は有栖と向き合うように立つ。

「優、話したい事って何？」

「有栖、一度しか言わないから良く聞いてほしい。」

有栖は何も言わずに小さく頷いてくれた。

「俺は馬鹿で不器用でこんな経験は殆どないから回り諄くは言わないではつきりと言う。」

「うん。」

「俺はお前の事が」

「好きだ。」

俺は有栖を直視するように見ながら告げる。

S i d e C h a n g e
有 栖 S i d e

有 栖 S i d e

ボクは優の言葉に耳を疑った。

ボクの聞き間違いでなければ、ボクの事を好きだと言った。

「嘘…じゃないよね。」

「俺が真顔で冗談を言う人間だと思っているのか？」

ボクは彼と会ってから軽く冗談を言う人間じゃないという事は分かっている。

「そうだよな。キミはそういうタイプじゃないのはキミをずっと見ているボクも分かっているよ。」

「……………」

「……………」

ボクと優は見つめ合っている。

「優…やっと……………やっとボクの想いが伝わったんだね……………」

「本当に……………悪かった。」

「謝らないでいいよ…優。」

ボクは優を近付いて行き……

「!」

優を抱きしめる。もう2度と離さない位強く。

「……優、もう無理しなくていいから。」

「有栖……?」

「キミが例え、異世界の人間だったとしてもだよ。ボクがキミの事を好きである事実は変わらないから。」

「!」

「辛い事があつたら、ボクを頼つて?泣きたかつたら泣いていいよ。全部、ボクが受け止めてあげるから……キミの苦しみを……」

「有栖……っ……」

「もし……キミの居場所がないと言うのなら。ボクが作るよ、キミの居場所を……」

それから間もなく、優は声にならない声をあげながら泣きだす。

ボクは何も言わずに抱きしめて、ボクの胸で彼を泣かせてあげる事にした。

本当に辛かったんだね…優。

Side Change

優 Side

優 Side

俺は声を上げ、泣いて暫くした後…

「落ち着いた？」

有栖が訪ねてくる。

この人は…本当に俺には勿体ない人だと思う。

もし、有栖と出会えてなかったら俺はどうなっていたか分からない。

「ありがとう…もう大丈夫。」

「そう、良かった。」

安心したのか、有栖は安心した表情を見せる。

「優……1つだけ、お願いがあるんだけど。聞いてくれるかな？」

お願い？

泣かせてくれた以上、その礼もある。

自分に出来る範囲であるならば、彼女の願いをかなえたい。

「それは俺に出来る事か？」

「うん……キミにしかできない事だよ。」

俺にしかできない事……？

「……キスして欲しいんだ。」

！！

き、キス……？

「駄目かな？記念にしたいんだ……それにボク達、もう恋人同士でしょ？」

確かに間違っではない。

……仕方ない。

「分かった……有栖、目を瞑ってくれ。」

「うん。」

有栖は言われるがままに眼を閉じる。

……

俺と有栖の顔の距離が徐々に近づいて行く。

そして……

俺と有栖は寮へ戻る途中、灯台から離れている。

有栖は自分の腕と俺の腕を絡めていた。その表情はとても嬉しそうに見える。

道中、俺達は色々な事を話している。題目は色々だった。

その道のりは長いようで短く、気が付けば。俺達はオベリスク・ブル―女子寮付近にまでいた。

理由としては、彼女を送って行くのも男の務めだろう。

「もう着いちゃったね。」

「ああ……」

名残惜しそうに有栖と俺は離れ、有栖は女子寮の玄関の方へ向かって行く。

「じゃあね、優。」

「ああ、お休み。」

「それとも妻らしく「あなた」と言った方が良いかな？」

突然、何を言いだすのかと思った。

「今まで通り。優でいい。俺が恥ずかしい。」

それにあなたって、それは夫婦間で使う言葉じゃないのか？良く知らないけど。

「残念だな……でも、それは結婚するまでの我慢だからね。」

もう結婚の話かよ……

強く言えないのは、惚れた故の弱みと言う奴だろう…

それから数回、話を交えると有栖は女子寮の方へ入って行く。

俺もそれを確認すると、レッド寮への道を歩いて行く。

しかし、大徳寺教諭亡き今のレッド寮の寮長はどつなるのだろうか？

S a i d C h a n g e

有栖 S a i d

有栖 S i d e

寮に戻り、部屋へ戻る途中でボクを待っていたのは明日香、ジュン
コ、ももえだった。

「有栖、あなた。一体何処へ行っていたのよ？」

「うん、ちよっとね。」

明日香からの問いにボクは軽く流した。

でも、本当に夢みたいだよ。

だけど、現実なんだよね。まだ唇にあの時の感触が残っているから。

「有栖さん、何やら機嫌がよろしいみたいですが、何かあったのですか？」

あれ、ひょっとして顔に出てるのかな？

「勿論だよ、明日からの学園生活が楽しみだよ。」

「」「」？「」「」

3人は揃って？マークを浮かべる。

「後、ジュンコ。明日からボクも一緒にレッド寮へ行くからね。」

ジュンコは毎日、十代君を起こしに行きレッド寮へ行っているからボクもそれについて行くことを考えていた。

「へ？なんでアンタまで……」

「勿論、ボクの愛する旦那様を起こしに行くためだよ。」

「」「」愛する旦那様あー！？「」「」

「そういう事。それじゃあ、お休み。」

ボクは3人と別れて部屋へ戻って行く。

部屋に入り、制服から部屋着へ着替える。

着替えが終わった後に部屋の明かりを消し、ベッドの中へと入る。

恋人：未来の奥さんになるんだから優の好きな料理とか聞いておかないと。

後、お爺様達に報告しないと。それで家に戻った時にお母様や啓汰さんに花嫁修業として色々教わらない駄目だよね。

明日から大変だけど。ボクは頑張るからね、優。

第34話 優と有栖（後書き）

マグマックスウ！

優「『え〜、今回で優ちゃんと有栖ちゃんをようやくくっつける事になりました。』」

有栖「優、良く翻訳できるね。」

マグマックスウ！

有里「パパ、何て言っているの？」

優「『次回は学園祭編です。その後に隼人とクロノスのデュエル、卒業デュエルとなり、第2章は完結です』と言っている。」

マグマックスウウウツツ！！！！（訳：では、次回もよろしくお願ひします。）

第35話 波乱の学園祭！？（前編） 吹き荒れる嵐 対 光の進撃（前書き）

今回は超力オス会になります。

第35話 波乱の学園祭！？（前編） 吹き荒れる嵐 対 光の進撃

俺と有栖が交際を開始してから彼女とは四六時中一緒にいる。

朝はジュンコと一緒にレッド寮に来る事から始まり…

昼は外で彼女が作った弁当と一緒に食べ…

夕方は解散するまで一緒にいる。

大地達からは呆れられた挙句、「鴛鴦夫婦か。」と言われてしまう始末。

……悲しいが否定が出来ないのも現実だ。

確かに交際が始まってからは彼女と一緒にいる時間が前に比べて確実に増えていると思う。

そんな俺達の日常を他所に日は徐々に経過して行き、気が付けば日付は学園祭まであと3日に迫ったある日の事…

「学園祭当日のコスプレデュエル大会で俺にこの格好をしろと？」

「うん、絶対優に似合うと思ったから寮に戻った後の時間を使って作っただよ。」

その日に行われた講義が終わり、有栖がある衣装を持って現れた。

その衣装の色合いは緑を基調としたものであった。

これを着させるとか本気なのか……？

「……有栖、念のために聞くが……本気で正気の沙汰か？」

「勿論だよ。ボクが優を愛していると同じ位本気と書いて真面目と読むくらい正気だよ。」

はっきり言うとその衣装が普通の人間の眼から見ても絶対に変な格好と言われる格好だ。

1000人中1000人に聞いてもみんなが「変な格好」だと絶対に答ええるだろう。

十代とかまだ登場していないが、ヨハン辺りは「カッコいい」とか言うかもしれないが……

これはセンスが良いか悪いかの範囲^{レベル}を完全に超えている。

何せ、コスプレデュエル大会用の衣装にこのような衣装をチョイスするのだから……

色々、呆れて俺は溜息しか出ない。

そう…有栖が持って来た衣装とはグレートサイヤマンの衣装であった。

「ひょっとして、優はターバンとサングラスよりもヘルメットの方が良かった？」

「違う…でお前は？」

恋人でもあるので面と向かって「センスの悪さが尋常ではない」と口が裂けても言わない。

「ボクもお揃いだよ。」

すると、有栖は俺が今持っている衣装に似た衣装を取り出す。

色は俺とは異なり、色は水色が基調となっていた。

その格好はまさか……

「まさか……それ。お前が着るのか？」

「当然だよ。」

渡された衣装で予想は出来たが…まさか、揃って「あの恰好」をすすめる羽目になるとは……

「思っていたけど……変じゃないか？」

「優は分かってないな、こづいづのはカッコいいって言うんだよ。」

「カッコいいって言うのか……？」

「って、それよりもちょっと待て、何でそんな恰好をする必要がある？」

「そもそも、出るのは学園祭のコスプレデュエル大会だ。」

「コスプレデュエルと言う時点でデュエルモンスターのモンスターの格好をするのが普通ではないのか？」

「その事を有栖に尋ねたら……」

「普通じゃ、面白くないでしょ？逆転の発想で思い切った事をやろうと考えたんだよ。」

「と言う返答のコメントと共に満面の笑顔が帰って来た。」

「こづ答えられてしまったら何も返す言葉がない。」

「俺は一体どうすれば良いんだ？誰か教えてくれ…デッキは俺に何も言っではいけない…」

《主、男ならば諦めて腹を括るという事をするべきでしょう。》

「そんな俺に引導を渡す如く、シューティング・ブレイザー・ドラゴンの声が響いてくる。」

「こづなってしまうと当日、腹を括るしかない。俺は溜息しか出なな」

った。

俺は無事に学園祭を過ごせるかどうか、不安になって来た。

そして、学園祭の当日の朝を迎えた。

早朝から有栖が俺の部屋を訪れて、有栖と共にその日に使う「あの衣装」を纏う。

案の定、オプシオンとして、俺はターバンとサングラス、有栖はヘルメットを被っていた。

一応、念のために俺は衣装の下に制服を着こんでいる。

「やっぱりイメージ通りでカッコいいよ。優。」

「……そうか。」

「でも、ターバンとサングラスをつけちゃうから誰だかわからなくなっちゃうか。」

「……………」

俺としては、頭が非常に痛くてしょうがない。有栖は「この格好」の何処がカッコいいのか分からん。

時刻はコスプレデュエル大会開始時刻が近付いて来たため、部屋から集合場所であるレッド寮の食堂へ移動する。

食堂では明日香、ジュンコ、ももえがハーピー・レディ3姉妹の格好しており、それを見て、テンションが上がっている隼人がいた。確か原作では逃げられたとか言っていたけど、こっちはついて来ているのか。

そんな隼人を見て呆れている十代。

「私、ブラック・マジシャン・ガールの格好が良かったですわ……」

「ブラック・マジシャン・ガールはトメさん専用なんだな。」

「着れば、翔君も喜んだのに残念だったわね。ももえ。」

「ななななななな、何でそこで翔さんの名前が出て来るのですか！？明日香様！！」

翔の名前を出されるとももえは急にテンパリ出す。しかし、そんなに動揺していても説得力0だぞ。

幸いなことに翔は外で準備しているのか、この場にいなかったの
聞いてはいなかった。

十代の格好はE・HERO プリズマーか。

まともな格好で良かった。原作では無茶苦茶な格好だったからな。

「ももえつたら、素直に言っちゃえばいいのにね。翔君にホの字な
んだから。」

翔とももえがな……大方、十代とジュンコの保護者みたいな感じで
一緒に居たら自然と距離が近づいたと言う奴か？

正直に言えば、意外だ。

「「「……………」」」

「だ、誰なんだな？」

「???」

明日香、ジュンコ、ももえ、隼人がこちらを見て誰なのか分からな
いらしい。

十代は？マークを浮かべていた。

「ボクだよ。ボク。」

水色を基調とした衣装と朱色のマントを身に纏った有栖がオプションとして被っていたヘルメットを外す。

「あ、有栖!？」

「という事は…まさか…そちらの人は…」

「…俺だ。」

緑色を基調とした衣装と赤のマントを身に纏った俺はオプションとしてつけていたサングラスとターバンのうち、サングラスを外す。

「天空さん!？」

「優…まさか、アンタもそんな趣味が……」

案の定の反応で明日香、ジュンコ、ももえ、隼人は若干ながら退いていた。

「有栖が本気でこの格好するのかと聞いて、有栖が本気だと言ったから俺もそれに付き合った。」

「あなたも律儀ね。有栖の奇行に付き合うなんて。」

寧ろ、この衣装を持って来た時点で着るのはほぼ確定だった気がする。

「おおお、2人ともカッコいいなあ。俺もそんな恰好したかったな

あ。
」

まさかとは思ったが、十代は本気でそう思っているのか？

「やっぱり、そう思うよね。十代君なら分かってくれると思ったよ。

」

「明日香、ジユンコ、ももえ…有栖のセンスがよく分からない。」

「大丈夫ですわ、私達もよく分からないです。」

「私達も有栖とは中等部からの付き合いだけど。あの子のセンスだけは全く分からないわ。」

十代と有栖が話している場所から少し離れた場所で明日香達と話していたが、明日香達もそれに同意見らしい。

「それにしても優。アンタ、良く付き合うわね。有栖が作ったそんなダサイ格好をするのに…」

「これも恋人の務めだと割り切ってる。それにダサイと言ってやるな。本人曰く「カッコいい」らしいからな……」

恋人じゃなければ、好きでこんな恰好はしない……等。

「断れないのは差し詰め、惚れた弱みと言った所かしら？」

明日香等3人は何やら悪い事を思いついた子供のような表情をす

る。

その言葉に関してだが、それに近い物である以上否定できない。

「…否定はしない。」

「十代様————!!!」

突如、外の方から十代を呼ぶ声が聞こえて来た。

しかも、様付……この声は、まさか。

何事かと思い、外に出てみるとボーイッシュな格好の私服と腰くらいまで伸びた長い青髪が特徴の幼い少女がいた。

その少女の近くには翔とサンダーの姿もあった。

「レイ!?!」

「レイちゃん、どうしてここに?!」

十代と明日香が驚いたような表情をしていた。

そこから少し離れた所で「VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャ

ノン」の格好をしたサンダーが翔と隼人にレイの事を聞いているように見えた。

サンダーの格好は原作では「XYZ・ドラゴン・キャノン」だった筈。それが「VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン」にバージョンアップしていた。

あれはもはや、徹底的にやると言うレベルを超えていると俺は思う。

因みにレイは十代にベタベタしている。

不味い……特にジュンコが目の前にいる前で……

「天空さん、あの子は十代さんのお知り合いですか？」

「知り合いと言う訳でもないんだがな……」

「じゃあ、どついう関係なのよ？」

有栖、ジュンコ、ももえにレイの事を尋ねられた。ジュンコは妙に機嫌が悪そうな声を上げる。

否、確実に機嫌が悪いのだろう……

レイとジュンコは差し詰め、十代を巡る的な意味ではライバル関係だろうか。

それでレイと知り合ったいきさつを話す。

「嘘……小学生なのに編入試験を突破して、アカデミアに編入したのですか？」

「凄いね…編入試験ってただでも難しいのに…」

「で、あの子はカイザー目当てで来たんでしょ？何で十代にベタベタしているのよ？」

俺の勘ではあるが、ジュンコのボルテージが徐々に上がっている気がする。

これは言って良いのか駄目なのか。躊躇う所だ。

下手をすれば、ここで修羅場が勃発しているのは目に見えているが、言わないと鉄拳とか何かが飛んで来そうで怖い。

すまん…十代。臆病者な俺を許してくれ。

「実は……」

俺はレイが十代に惚れていた事をぶっちゃける。

「へえ……」

それを聞いた瞬間、ジュンコの眉が凄まじい形になったのは気のせ

いだ。そう思いたい。

「……有栖、ももえ。ジュンコの眉の形が凄い形になった気がしたのは気のせいか？」

「……気のせいだよ。きっと。」

「……有栖さんの言う通り、気のせいですよ。」

この2人も見て見ぬ振りをする決断をしたか。無難なところだろう。

現実逃避

「あ、あの……」

そんな事を他所にレイが十代に手を引いて貰いながら、俺の所にやって来た。

「俺に何か用か？」

「き、今日はちゃんとお父さんとお母さんに許可を貰ってきましたから。」

それは構わないが……俺に言う理由が見つからない。

「何でそんな事を俺に言う？」

「また優君に怒られたくないからじゃないんツスか？……って、優君はその格好で出るの…？」

案の定、翔からも同じようなコメントを受ける。

俺に怒られたくない……俺はレイに言ったような事を言ったか？

「成行き上な……」

「怒られたくない？この子、優を怒らせるようなことをしたの？」

「実はな……」

十代、隼人、翔、明日香がレイがこの学園に来た時の事を話す。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「じゃあ、てめえの身勝手とも言える行動のおかげで心配しているのは誰だか言ってみろよ！」

「親御さんや友達やてめえの通ってる学校の先生を心配させといて、十分な理由だ！？世の中舐めんのもいい加減にしろや！…この糞餓鬼あー！」

「世の中はな、お花畑やチョコレートみたいに甘っちょろいもんで

出来てんじゃないねえんだよ！！分かってんのか？ゴルアアア！！！！」

「分からねえなら、俺が直々にその身体に世の中の恐ろしさを骨身の底の底まで嫌と言っほほどに染み込ませてやるつか？あああ！！！！？」

~~~~~

………確かに幼い子供にはきつ過ぎたような言葉を言ったかもしれない

「優……小学生を叱るためでも、もうちょっと言葉を選ばっよ。」

「ああ……俺も少々、ヒートアップし過ぎたかも知れない……」

「アンタ、十代の何なのかしら？」

今度はジュンコが明らかに凄まじい表情でレイを見ていた。

その態度は明らかに喧嘩腰にもとれる。

「そついう、あなたこそ。私の十代様の何なの？」

「質問を質問で返さないって学校で教わらなかった？（十代から離れなさいよ、この糞餓鬼。）」

「すみませんね…まだ教わってないんですよ。（十代様の事を着や
すく呼ばないでくれる？おばさん）」

「……………（誰がおばさんですって、このペ
ツタンコのチビが…）」

「……………（そっちこそ、下心丸出しで十代
様に近付いている癖に…）」

ジュンコとレイ…両者の間に幾閃の稲妻が迸り、背後には燃え盛る
炎が見える錯覚さえも見えるようになっていた。

更にいえば、「バチバチバチ」とか「ドゴゴゴゴゴ」と言う効果音
とか口には出していないが、本音と思わしき言葉が聞こえて来た。

「優…どうしようっ？」

「どうしようと言ってもな…」

あの2人…無駄に勝気な所は似ているからな……

「2人とも、喧嘩すんなって。」

原因でもある十代は能天気である。相変わらずマイペースな奴だ。

「それよりもさ、喧嘩するよりもさ、折角学園祭なんだからよ。デ

ユエルで決着つけたらいいじゃんか。」

「デユエル？」

場所は移り、レッド寮前からコスプレデュエル大会で使用するデュエルフィールドへ変わる。

本来ならば、学園祭で使う筈のデュエルフィールドにジュンコとレイの2人が向かい合うように立っていた。

「ボクと十代様の邪魔をするなら叩き潰してやる!!」

「それはこっちの台詞よ。2度とそんな減らず口が叩けないようにしてやるわ。」

デュエルが始まる前から火花が飛び散っているよ。

「良いんすかね？まだ開始前なのにデュエルフィールドを使って…」

翔は何やら不安げな表情を浮かべていた。

「まあ、良いじゃないか。良いデモンストレーションみたいなものだと思えば。」

「なんか、面白そうな事やってんな。」

背後から声がしたため、振り返ると大地、鏡、カイザーの姿があった。

大地と鏡はイエローの仕事があつた筈だが、大丈夫なのだろうか？

「あ、お兄さん。」

「あれは…レイか？」

「アニキ目当てだけど。来てくれたみたいツスよ。」

「そうか…」

「それよりもよ。優…お前と神？は…」

「言わないでくれ、鏡。俺もそれは分かっている変な格好だと言っ
のは分かっている。」

「やっぱり、神？に頼まれてしているのか？」

俺は返事をせずに返答として、軽く頷く。鏡も変な格好だと思っ
な。

「そうか？味があつて、中々カッコいいじゃないか。」

「カイザーの言う通りだぞ？こんな事なら俺も最初からこっちに居ればよかったな。」

「やっぱり、そう思う？丸藤先輩と三沢君と十代君だけなんだよ。このカッコよさを分かってくれるのって……」

いや、これをカッコいいと言う奴はいないだろうと思つたが、まさか……この2人まで同じ反応をするとは……

「そういえば、お前達の方は大丈夫なのか？抜け出して、こっちに来たりして。」

「俺達の仕事は店用のテント建てと宣伝だけだからな。当日は暇当然なんだよな。」

暇だからって、ここに来ることはないだろうに……

「「デュエル!」!」

ジュンコ

LP:4000

レイ

LP:4000

「ボクのターン、ドロー！」

レイ

手札：6

さて、レイの先行から始まったが、レイはどんなデッキを使ってくるか…

十代とデュエルした時のように恋する乙女でコントロール奪取戦法を取るデッキか？

「デッキの上から3枚を墓地へ送って、魔法カード。光の援軍を発動！デッキからレベル4以下のライトロードと名のついたモンスターを1体、手札に加えるよ。」

「ら、ライトロード!?!」

「ライトロードって何スか？」

「モンスター効果や魔法などで墓地肥やしを行うモンスターのカテゴリーだ。」

レイが【ライトロード】って……あいつも大地みたいにTF仕様か。

「だが、若干ながら運が絡む以上、考えてプレイングを行わないと

あつという間にデッキアウトして負ける可能性もある。」

ライトロード……こつちでもカオス・ソルジャー - 開闢の使者 -
が使える上にこちらではまだ光の援軍はおるか、ライトロード・サ
モナー ルミナスやおろかな埋葬などの構築する上での必須カード
の規制がまだかかっていない。

更に天使の施しや苦渋の選択までもが制限止まりだ。これはデッキ
構築次第では本当に恐ろしいカテゴリーだ。

それに閻属性が混ざれば……色んな意味で終焉だ。

「ボクはライトロード・パラディン ジェインを加えるよ。」

ライトロード・パラディン ジェイン……ライトロードの中では優秀
な下級アタッカーか。

「今、手札に加えた。ライトロード・パラディン ジェインを召喚
！」

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK 1800

レイ

手札：5

モンスター：1

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！エンドフェイズにこのカードが表側表示で存在する時、自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る。……！やった。今、墓地に送られた。ライトロード・ビースト ウォルフの効果発動。このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚するよ。」

ライトロード・ビースト ウォルフ
ATK 2100

レイ

手札：3

魔法・罠：2

モンスター：2

「一気にモンスターが2体展開したね。優はこうなると思う。」

ヘルメットを被りなおした有栖が訪ねてくる。

「…これはスピード勝負になるだろう。」

「レイちゃんだっけ？…あの子はデッキアウトにならないように戦わなければならないけど。ジュンコは防御に徹すれば良いだけじゃないの？」

確かにライトロードは自身のデッキを削るからな…だが、中途半端な防御じゃあっさり突破される。

ライトロードと戦う上で大切なのは相手の墓地のライトロードと名

のついたモンスターの数を確認する事でもある。

「それは間違いだ。ライトロードには恐ろしい怪物がいる。」

「怪物？」

「それが出れば、ジュンコは100%負ける。」

あの怪物の召喚条件の緩さは並じゃない。

「あたしのターン、ドロー!!--」

ジュンコ

手札：6

「あたしはフィールド魔法、ハーピィの狩場を発動!」

ジュンコ

手札：5

フィールド：無 ハーピィの狩場

ジュンコのデッキは【ハーピィ】か。生前では色々な派生があるデッキの1つだ。

【アロマ・コントロール】のギミックを組み込んだ型や同じ鳥獣族

である【BF】を混ぜることでダーク・アームド・ドラゴンやダーク・シムルグ辺りをフィニッシュャーにできる型などがある。

更に風属性だから風霊術 雅 やゴッドバードアタックなどサポート等が豊富だ。

「更にハーピー・レディ1を召喚！」

ハーピー・レディ1

ATK 1300

ジュンコ

手札：4

モンスター：1

「ハーピー・レディ1を召喚が召喚に成功した時、ハーピーの狩場の効果が発動。フィールドにハーピー・レディまたはハーピー・レディ三姉妹がフィールド上に召喚・特殊召喚された時、フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を破壊するわ。」

「だけど、それは1だから効果は使えないよ？」

「勉強不足ね。ハーピー・レディ1は名称をハーピー・レディとして扱う。よって、ハーピーの狩場の効果は適用されるわ。右側のセットカードを破壊する。」

レイ

魔法・罨：1

「うつ……」

レイのセットカードはライトロード・バリア：墓地を肥やしつつ、ライトロードモンスターを戦闘破壊から守り、次のターンにライトロード・エンジェル ケルビム辺りに繋ぐつもりか。

「更にハーピイの狩場はフィールド上に存在する鳥獣族モンスターの攻撃力と守備力を200ポイントアップさせるわ。更にハーピイ・レイ1はフィールド上に表側表示で存在する限り、風属性モンスターの攻撃力は300ポイントアップ。その2つの効果により、ハーピイ・レイ1の攻撃力は500ポイントアップ。」

ハーピイ・レイ1

ATK 1300 1800

DEF 1400 1600

「更に万華鏡 - 華麗なる分身 - を発動、フィールド上にハーピイ・レイが表側表示で存在する場合に発動する事ができるわ。自分の手札・デッキからハーピイ・レイ1かハーピイ・レイ1三姉妹を特殊召喚する。あたしはその効果でデッキからハーピイ・レイ1三姉妹を特殊召喚！」

ハーピイ・レイ1三姉妹

ATK 1950

ジュンコ

手札：3

モンスター：2

「ハーピー・レディ三姉妹が特殊召喚されたことにより、ハーピーの狩場の効果発動、もう1枚のセットカードを破壊するわ。」

「ただでやられる訳には行かないよ！リバーズカードオープン、罠カード！針虫の巣窟！自分のデッキから5枚のカードを墓地へ送るよ。」

「じ、自分で自分のデッキを破壊！？」

レイ

魔法・罠：0

針虫の巣窟とは……随分と珍しいカードを使うな。

まあ、【ライトロード】と相性が悪いわけではないが……

「ハーピー・レディ1とハーピーの狩場の効果で攻撃力が500ポイント、守備力が200ポイントアップするわ。」

ハーピー・レディ三姉妹

ATK 1950
DEF 2100

2450
2300

「バトル、ハーピー・レディ三姉妹でライトロード・ビースト
オルフを攻撃！」

ハーピー・レディ三姉妹

ATK 2450

ライトロード・ビースト ウォルフ

ATK 2100

レイ

LP:4000 3650

モンスター:1

「つうう……まだだよ！」

「(ライトロード・パラディン ジェインとハーピー・レディ1の
攻撃力は同じ1800…相打ちで倒しても追撃できるわけでもない
から攻撃はしなくても問題はないわね。)カードを3枚伏せ、ター
ンエンドよ。」

ジュンコ

手札:0

魔法・罠:2

「ボクのターン、ドロー！」

レイ

手札：4

「ボクはライトロード・ハンター ライコウを捨てて：魔法カード、ソーラー・エクステンジを発動。デッキからカードを2枚ドロ―し、その後デッキの上からカードを2枚墓地に送る。」

ライトロード・ハンター ライコウをコスト？ハーピー・レディ2の召喚を予想して、先に切ってしまう魂胆か？

それともそれしか今、発動できるコストがないのか？

「更に魔法カード、強欲な壺を発動。デッキからカードを2枚ドロ―するよ。」

レイ

手札：5

「更に魔法カード、天使の施しを発動。デッキからカードを3枚ドロ―して、そこから2枚。墓地へ捨てるよ。」

光の援軍で3枚、ライトロード・パラディン ジェインの効果で2枚、針虫の巣窟で5枚、今のソーラー・エクステンジと天使の施

して4枚……合計は14枚の墓地

いや、前のターンで戦闘破壊したライトロード・ビースト ウォルフもいれば、15枚……もう召喚条件を満たしてもおかしくない頃だ。

逆に言えば、怪物が落ちている事もあり得る。

「そして、魔法カード。苦渋の選択を發動するよ。デッキからカードを5枚選択して相手に見せる。相手はそこから1枚を選択。相手が選択したカード1枚を手札に加えて、残りのカードを墓地へ捨てる。ボクが選ぶのはこの5枚だよ。」

レイが選択した5枚は光の召集、クリッター、ネクロ・ガードナー、貪欲な壺、死者転生……

墓地回収が3枚……クリッターとネクロ・ガードナー？2体は闇属性……まさか、カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - が入っているのか？

「（前に優が言っていたわね。墓地にカードを送るのはディスプレイアドバンテージじゃなくて墓地からの方が回収が容易だって……なら1択ね）ネクロ・ガードナーを選ぶわ。」

「……じゃあ、残りは墓地へ送るよ。」

レイが何やら残念そうな顔をしていた所を見ると、ジュンコの選択はある意味適切だろう。

ここで貪欲の壺、死者転生、光の召集の何れかを選んでいたら……あ

の怪物が回収されるのは眼に見えている。

「ライトロード・パラディン ジェインを生贄にライトロード・エンジェル ケルビムを召喚するよ！」

ライトロード・エンジェル ケルビム

ATK 2300

レイ

手札：4

「攻撃力2300…なら、ハーピー・レディ三姉妹は倒されないから大丈夫だよな？」

「いや、ライトロード・エンジェル ケルビムはライトロードモンスターを生贄にして召喚した場合、発動できる効果がある。」

「ライトロード・エンジェル ケルビムの効果発動。このカードがライトロードモンスターを生け贄にして召喚に成功した時、デッキの上からカードを4枚墓地に送る事で相手フィールド上のカードを2枚まで破壊するよ。」

「な、何ですって!?!」

「ボクはデッキからカードを4枚墓地へ送り、ハーピーの狩場とハーピー・レディ1を破壊するよ！」

「あたしだって、十代以外からはやられっ放しなのは性に合わないのよ！ハーピー・レディ1を生贄に捧げ、リバースカードオープン！ゴツドバードアタックを発動！フィールド上に存在するカード2枚を選択して、選択したカードを破壊するわ。ハーピーの狩場とライトロード・エンジェル ケルビムを破壊するわ。」

ジュンコ

モンスター：1

魔法・罠：1

フィールド：ハーピーの狩場 無

上手く、除去を利用して相手のカードも除去したな。

「だけど、これでハーピー・レディ三姉妹の攻撃力が下がったね。」

「（不味いわね。さっきの戦闘で破壊しなかったのがここに来るなんて…）」

ハーピー・レディ三姉妹

ATK 2450 1950

DEF 2300 2100

「ボクは墓地に存在する光属性モンスター、ライトロード・ハンター
ライコウと闇属性モンスター、クリッターをゲームから除外す

るよ。」

「ええ…!?!?」

何だと?…この召喚条件は…

「墓地の光属性と闇属性をゲームから除外?そんな召喚条件のモンスターなんていた?」

「いや、ある。そのうちの1枚は余りの強力さ故に禁止カードともなったモンスター…」

「混沌帝龍 - 終焉の使者 - だな?」

「ああ…あのカードの存在は文字通り、終焉を齎すカードだ。」

「他にはそれほどではないが、カオス・ソーサラー、ライトパルサー・ドラゴン、ダークフレア・ドラゴンと言うカードがあるが、それらではないだろう。」

「じゃあ…何を?」

「混沌帝龍 - 終焉の使者 - と対となるカード…」

「カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - を特殊召喚!」

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -
ATK 3000

レイ

手札：3

モンスター：1

やはり、出て来たか……と言うよりもレイがあのカードを持っている事に驚いているのに驚いている。

万丈目が冥府の使者 ゴーズを所有しているのにも驚いたが、あのカードはこつちの世界でも高値で取引されている筈……

レイの奴、良く手に入れられたものだな……

「カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ……」

「ボクと十代様の邪魔をする奴はこいつに斬られていなくなっちゃえ！カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - でハーピー・レディ三姉妹を攻撃！開闢双破斬！」

「これでハーピー・レディ3姉妹が戦闘で破壊されたらジュンコの負けが確定だ。」

「どづいつ事？」

「カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - には戦闘で相手モンスター

を破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる効果がある。」

「この攻撃に対して、枕田が何らかの行動を取らないと負ける。」

「だったら、ダメージステップにリバースカードオープン！速攻魔法、ハーフ・シャットを発動するわ。フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動して、発動ターンのエンドフェイズまで攻撃力を半分にして、選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されないわ。ハッピー・レディ三姉妹を選択し、このカードは攻撃力を半分にし、エンドフェイズ間で破壊されないわ。」

ハッピー・レディ三姉妹

ATK 1950 975

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -

ATK 3000

ジュンコ

LP:4000 1975

魔法・罫:1

「きゃああああー!!!」

「ジュンコッ!」

「ジュンコさんッ!!」

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだよ。(この伏せカードは光の召集。次のボクのターンで発動して、墓地にある裁きの龍を2枚回収して特殊召喚すれば、ボクの勝ちだ!)」

「このエンドフェイズにハーピー・レディ三姉妹の攻撃力は元に戻るわ。」

ハーピー・レディ三姉妹

ATK 975 1950

「諦めたら？ボクの場合には攻撃力3000のモンスターがいるんだよ?」

「もう勝った気でいるなんていい気なものね。あたしは今まで見ているのよ。こんな絶望的な状況でも最後の最後に一発逆転をしたデュエルをしている奴らをね。」

「!?!」

「そうよ。あたしの実力なんて、そいつらの足元にも及ばないわ。だけど、絶対に逆転して見せるわ!!あたしのターン!ドロー!!」

ジュンコ

手札:1

「魔法カード、強欲な壺を発動！強欲な壺を発動。デッキからカードを2枚ドロウするわ！」

手札：2

「更に魔法カード、苦渋の選択を発動よ！デッキからカードを5枚選択して相手に見せて、相手はそこから1枚を選択。相手が選択したカード1枚を手札に加えて、残りのカードを墓地へ捨てるわ。あたしが選ぶのはこの5枚よ。」

公開したのはハーピー・クイーン、ハーピー・クイーン、ハーピー・クイーン、ハーピー・クイーン、ハーピー・レディ1、ハーピー・レディ1…これは完全に墓地肥やしのためか。

ジュンコの奴、このターンで勝負をかける気か。

「だったら、ハーピー・クイーンを選ぶよ。」

「残りの4枚は墓地へ送られるわ。あたしはこの瞬間を待っていたのよ。墓地にこれだけのハーピー・レディが集まるのをね。」

「どついう意味？」

「手札を1枚捨てて、リバースカードオープン！永続罨、ヒステリック・パーティーを発動！自分の墓地に存在するハーピー・レディを可能な限り特殊召喚する。あたしはハーピー・レディ1を3体、ハーピー・クイーンを2体特殊召喚するわ！ハーピー・クイーンはフィールドか墓地に居る時、ハーピー・レディとして扱えるわ。」

ハーピー・レディ1
ATK 1300

ハーピー・クイーン
ATK 1900

ジュンコ

手札：1

モンスター：5

「ハーピー・レディ1はフィールド上に表側表示で存在する限り、風属性モンスターの攻撃力は300ポイントアップ。あたしの場には3体のハーピー・レディ1がいるわ。よって、攻撃力が900ポイントアップ!」

ハーピー・レディ1

ATK 1300 2200

ハーピー・クイーン

ATK 1900 2800

「悪あがきだね。攻撃力は2800。200ポイント足りないよ?」

「だったら、上げるまでよ。フィールド魔法。ハーピーの狩場を再び発動!」

ジュンコ

手札：0

フィールド：無 ハーピイの狩場

「ハーピイの狩場の効果で風属性モンスターの攻撃力と守備力を200ポイントアップさせるわ。」

ハーピイ・レディ1

ATK 2200 2400

DEF 1400 1600

ハーピイ・クイーン

ATK 2800 3000

DEF 1200 1400

「攻撃力が並んだ。」

「ハーピイ・クイーンでカオス・ソルジャー - 開闢の使者 - を攻撃!」

ハーピイ・クイーン

ATK 3000

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -

ATK 3000

ジュンコ

モンスター：4

レイ
モンスター：0

「そ、そんな……」

「行きなさい、ハーピー・レディ軍団。あの小娘にあたしと十代の邪魔をするとどうなるか教えてやりなさい。ダイレクトアタック！」

「きゃああああああっつつつ！！！！」

レイ

LP：3650 - 6550

WIN：ジュンコ

おおお……見事な大逆転勝利だ。

「やりました！ジュンコさんの逆転勝利です！」

「やったわね。ジュンコ！」

「凄いデュエルだったよ。」

明日香、ももえ、有栖はジュンコの元へ駆け寄って行く。

「明日香さん、ももえ、有栖。ありがとう。」

「ぬうう…負けるなんて……」

両者の表情も正反対だった。ジュンコは嬉しそうに對するレイは悔しそうな表情をしていた。

「あたしの勝ちね。」

「き、今日のところは大人しく引き下がるよ。でも来年ボクが入学するまでの間だからね！」

「入学してもあたしが返り討ちにしてやるわ。」

とデュエルはジュンコの勝利で終わったものもまだ2人は睨み合っていた。

あの2人は本当に似た者同士だな。

相変わらずだな……これでやっとコスプレデュエル大会が……

「やっと見つけましたわよ！！天空優っ！！有栖お嬢様を拐かした不届き者がっっ！！」

ようやく、マグマックス症状が解け始めてきました。

優「何でここまでまでこの格好でいなきゃならない?」(GS1号口ス)

有栖「カッコいいから良いじゃない。」(GS2号口ス)

有里「パパ、ママ。その変な恰好、何?」

有栖「有里にもわかってくれないの!?!」

優「(分からない人間には分からないだろう…寧ろ、俺は有栖のセンスが良くわからない。)」

次回で学園祭が終了し、1年目終了も秒読みに入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7952s/>

遊戯王デュエルモンスターズGX～転生者による転生記～

2011年10月26日01時59分発行